
それは夢か現実か……

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは夢か現実か……

【Nコード】

N4728A

【作者名】

朧月

【あらすじ】

とあるイベントに参加すべく、横浜までやってきた毛利一行と、平次、和葉の五人。賞品を楽しみにしていた彼らだが、事件に巻き込まれ。証拠を掴み犯人に突き飛ばされ重態に陥ったコナンの意識は、異世界へ。果たしてコナンは元に戻るのか！シリアス&コメディな二つの世界、どうぞごゆっくりお楽しみあれ。

其の一：幕開く時

図書館に入ってきてにこやかに受付に挨拶をした彼は、いつも通りぶらぶらと本棚を眺めた。ふと、足を止め、そこに立てられた一冊の本を手取る。

じっと書かれたタイトルを見つめた彼は、それを静かに開いた。

『私が経験した事は、他の人も経験するものかどうかは分からない。だが、私はあれが夢だとは思いたくない。

確かに奇怪な出来事ではあった。けれども、それは確かに現実だった。そう、このことは違うもう一つの世界が、この世には存在しているのだと。

もしかしたらあれは、臨死体験と呼ばれるものなのかもしれない。一般に言われる”三途の川”は有名な話だが……私が体験したことはもっとずっと不思議な事だった。』

と、いう冒頭で始まる話を読み始めた彼は、すっかりその本に熱中した。読み終えて顔を上げると、もう外は薄暗くなっていた。

閉館時刻まで残り僅かである事を告げる放送が、館内に流れる。聞いた彼は、ぱたん、と本を閉じると、口元に静かな笑みを浮かべた。

完全な閉館時刻が訪れるまで、彼は懐かしげにその本を見つめていた。

……そう、あの日はいつものように談話を交わしながら、待ち合わせ場所に向かったのだ。

横浜で開催される、少し太っ腹に感じるイベントに皆で参加するため……。

「蘭ちゃん、おはよう」

待ち合わせた東京駅で待っていた和葉は、珍しく会う親友に笑顔で手を振った。蘭もそれに気付いて、人ごみをかき分けてそこへ向かう。

「おはよう。和葉ちゃん、服部君」

挨拶をした蘭に、和葉の隣で笑みを浮かべていた平次も答える。

「姉ちゃんにボウズ、それからおっさんも、元気しとったか？」

和氣あいあいとこれから行く横浜行きの電車へ乗り込んだ四人は、自然と話が合う同士に分かれた。

蘭と和葉がくつつきあうように隣同士、少し距離を置いて平次とコナン。小五郎は端によりかかり、新聞紙を広げ、イヤホンをつけた。大音量の為、漏れる音からは、競馬のアナウンスが聞こえる。

周りの乗客が僅かに首を捻る構図ではあったが、そんな事は関係ない。

「それにしても、お前よく今回は『工藤』って言わなかったな」

電車が走り出して十分。すっかり落ち着いた頃、コナンは感心を込めた笑みを浮かべ、隣の平次にささやいた。いつも、時と場所を弁えずに工藤工藤と呼ぶ彼が、珍しい。

平次はジト目で軽く睨み、答えた。

「いつまでも同じ失敗を繰り返すほど、俺はアホやないで？」

「……繰り返してたじゃねえか。何回言ってもにわとり頭みてーに。内心諦めかけてたんだぜ？」

強気で切り返して来たコナンに、平次は白けた表情を浮かべた。大げさに溜め息をついた彼は、コナンの耳元に口を近づけ、悪戯っぽい笑みを浮かべてみせる。

「さよけ。ならまた前みたいに『工藤』って呼んだろか」
「う……」

途端、コナンは言葉を詰まらせた。
にやりと笑った平次に対して、苦い顔を向け、ぼそりと口を動かす。

「なんや？ はっきり言うてみい、コナン君？」
「………ったく、人の弱みにつけこみやがって」

小さな声も聞き逃さないのは、平次の嫌味な程凄いの所だ。本当ならば、平次の足を蹴り飛ばしてやる所だろうが、最大の弱みを握られては、これ以上太刀打ちが出来ない。

コナンは下唇をかみ締めた後、心底引きつった笑みを浮かべた。

「……………だからっ、これからも、協力してください。」

悔しさを込めた言葉だが、それを耳にした途端、平次の表情は一転した。勝ち誇ったように笑う様に、むっとする。……くそ、元の姿に戻ったら、絶対今までの復讐してやっからな！

コナンの胸に浮かんだ儚い復讐心が、隣でご機嫌な平次に届くことがあるのか。電車はそれぞれの思惑を乗せ、横浜へ距離を寄せていった。

電車の窓に、横浜の風景が広がる。その頃になると、大阪から来た和葉は観光モード全開になり、窓にへばりついた。

「か、和葉ちゃん……着いたら幾らでも回れるから」

「けどな、あたし横浜って初めてなんや。港も色んな見所あるみたいやし……それにほら！ ランドマークタワーっちゅう所も、眺めええんやろ？ あたしな、高い所やったら通天閣から何度も見たことあるけど、こっちは別の良さがあるやん」

横浜——浮かぶのは、港に中華街、そしてランドマーク。そして、赤レンガ倉庫に観覧車。港からは、ベイブリッジやつばさ橋なども見える。ライトアップされた夜も、晴天時の昼も、とても綺麗だ。そんな景色にも興味があるし、元町にも行ってみたい。と嬉しそうに話す和葉を、コナンもまた横目で聞いていた。

「うん、私は何度か行った事あるけど、結構楽しかったよ」

蘭もまた、にこにこと上機嫌に応えた。着いたら遊びに行こうと指きりする姿に、可愛らしさを感じる。

みなとみらい線に乗れば、横浜港はたっぷり満喫できる。情緒深さに興味があるわけでなくとも、コナンもまたそれをそこそ楽しみにしていた。

そもそも、今回横浜へ行く話になっている発端は、蘭だった。

どこぞの道楽が考えた大規模なイベントの知らせを見た蘭が、ノリノリでコナンや小五郎を誘い、更に平次と和葉の大阪組にも声をかけたのだ。

五く六人のチームでゲームやクイズに勝ち進み、優勝すると賞金と全国共通遊園地ご優待券がもらえる、というなんとも気前のいいイベントだ。

「園子も誘いたかったな。鈴木財閥のパーティーがあるとかって言うってたけど」

「でも、園子姉ちゃん、賞金も優待券も、そんなに必要ないんじゃない？」

口を挟んだコナンだが、蘭のジト目に思わず黙り込んだ。

「で、で……でも、気前いいよね、主催者さん！ 有名なお金持ちの人なの？」

「そやね、えーっと……」

慌てて、何か話題を逸らさねば、と目を泳がせたコナンに、和葉は自身の鞆をあさり、小さなガイドブックを取り出した。

「これや！ パンフレットに顔写真と名前載ってたで。島根順次郎っちゅうおっちゃん！」

一同とも、興味津々と体を乗り出し、和葉の指出す男の写真をまじまじと眺めた。

「けど、ゲームにクイズやて。優勝は貰ったも同然やね。この説明見る限り、あたしら最強チームやもん」

パンフレットとは別に用意された説明ブックを見ながら、和葉は得意げに言った。

ゲームはテレビで見るような障害物レースのようなもの。そして、クイズは推理系から、雑学が必要な問題など様々あるらしい。

顔いっぱいに笑みを浮かべる和葉曰く。

「クイズは、おっちゃんと平次が居れば問題ないし、全員運動神経には自信があるやん。楽勝や」

と、いう事らしい。

確かに、このメンバーならよっぽどの人でも出ない限り、優勝は決定したも同然だと、コナンもまた思っていた。

そう……彼らが、このイベントに予定通りに参加できたらの話である。

しかし、それは誰が予想しただろう。横浜で待ち受ける出来事が、イベントという雰囲気をぶち壊しにする、という事実などを。

クイズは、翌日から行われる。参加者は予め申し込み時に渡されたコードを前日までにエントリーして、用意されたホテルに泊まるのだ。

辿り着いたコナン一行も、すぐにエントリーを済ませた後は自由行動だ。小五郎は一足先にホテルにチェックインを済ませ、若者組は早速観光を始めた。まずは、やってきた電車に乗り込み、みなとみらいまで。

駅から歩いて、丁度ランドマークの前を通り過ぎようとした頃、和葉が平次の服を引っ張った。

「なあ……あたしと蘭ちゃんランドマークタワー行きたいんやけど、ええ？」

「それやったら、二人で行って来てええぞ。俺とボウズも適当に觀光しとるから」

両手をあわせ、上目遣いで言う和葉に、平次はチャンスとばかりにそれを提案した。

彼の判断は間違いではない。色々な買い物で荷物持ちをやらされ、連れ回される一日では心身共にくたびれる。しかも、彼女達が居ないほうが、お互い話しやすいものだ。

和葉は首を傾げたが、そもその望みが叶うのだから、深く詰め寄る必要はない。了解した後、蘭と腕を組み、タワー内へと入って行った。

「なあ、工藤。そういや、組織の事……なんか進展あったか？」

適当にぶらついてた彼らだが、今はちょうど赤レンガ倉庫を通って歩いていた。その道中、ふと尋ねた平次の問いに、溜め息をついたコナンは首を振る。

「組織で進展は何もねーよ。ただ、蘭が……」

「姉ちゃんがどないしてん？」

すかさず身を乗り出す平次に視線を送った後、コナンは手を顎へやった。

「あいつ、変なんだよな、最近」

「……変って何がや？」

「いや、俺の主観に過ぎねーけど、もしかしてあいつ……………」

黙るコナンに、平次の訝しげな視線が降った。しかし、僅か後に顔を上げたコナンは、吹っ切った笑顔で彼に言う。

「今何を言ってもしょうがねーから。なんとしても元に戻って、あいつを安心させるだけだ」

「まあ、ええけど。工藤、もし何かあったら言えよ。お前、一人で敵陣乗り込んでおっ死んだら元も子もないんやからな」

蚊帳の外は何があってもごめんやで、と言いたげな強い意志が伝わり、コナンは苦笑する。

「分かってるよ」

「絶対やぞ？」

「……ああ。俺は何があっても死ぬわけにはいかねーんだよ。アイツ一人待たせる事になっちゃう。だから、蘭の前に帰るまでは、絶

対にな」

ふっと、彼から零れた独特の笑みには、堅く強い決意が込められた。彼は、道から見えるランドマークの頂上に視線を向け、恐らくそこへ居るであろう蘭を想った。

蘭と和葉の二人は、コナン達と別れた後、ランドマークタワーの展望台へ向かった。ショッピングも兼ねてという意図もあったが、電光板に映された視界良好の知らせに、先に訪れたのだ。

大人一人千円というのは少し痛いかも知れないが、折角来た横浜を見ずに終わるのは勿体無い。望遠鏡越しの景色に微笑んだ和葉は、蘭に言った。

「ええ景色やね、蘭ちゃん」

「本当だね。服部君たちも一緒にくれば良かったのに」

そう言って髪をかき上げた蘭も、望遠鏡を覗く。あそこが東京、あそこがベイブリッジ、あっちがトロピカルランド、などと色々言いながら、二人はその場を楽しんだ。

しばらく景色に夢中になっていた。だが、和葉の目に、切なく懐かしげな蘭の笑みが映ると、少し話のトーンが落ちる。

「どないしたん？ ひょっとして、具合でも悪いん？」

「あ、違うの。ちよっとね、昔新一と東京タワーの展望台に行った時の事思い出しててね」

蘭は、新一とのエピソードを、目を細め話した。隣で情景を浮かべながら話を聞く和葉に、蘭の工藤新一への想いがとても強く伝わった。

和葉の知る”工藤新一”は、薄情な事この上ない男だというのに。

「なあ、工藤君……まだ帰ってきてへんの？」

顔を覗き込み尋ねた和葉に、悲壮感のある肯定の返事が返ってくる。

一度京都で、彼は具合が悪そうなのに自分を助けに来てくれた事がある。かたや、蘭を事件という理由のみで冷たく待たせ続けている。

「あたし、工藤君の事が分からないねん。話聞いとると、蘭ちゃんを悲しませてまで、事件優先させるっちゃう冷たい男とは思えへん。けど、実際そうやし……」

ちらり、と蘭に視線を送ると、蘭の顔は僅かにほころんだ。

「新一はね、冷たくないよ。いつでも自分の事はかえりみずに守ってくれるし。……でもね、一度関わったら、中途半端にやめるって出来ないんだと思うの」

微かに紅く染まる蘭の顔は、女の子らしい顔と言うべきか。だが、一旦話を区切った蘭は再び口を開く。

「でもね、一番信じられないのは新一が事件解決するのにこんなに長い時間がかかってるって事かな？ だから私、どうしても思っちゃうの。新一は、もしかしたら………」

蘭の瞳が何処か遠くを見るような細い目に変化していくのを、和葉は首をかしげながら眺めた。言葉を止め、じっと考え込む蘭から、中々次の言葉が出ない。

「……もしかしたら、何やの？」

再度尋ねると、蘭は苦笑しつつも「何でもないの」と慌てて首をふった。触れられたくない内容のようだ。そう察した和葉は、あくまでもトーンの高い声を出した。

「……この話はこれで終わりや！ そろそろお昼食べへん？」

「うん、そだね。美味しいレストラン探してお昼にしようか」

和葉なりの気遣いは、上手く伝わったようだ。昼食をとるレストランについて話し合いながら、二人揃ってエレベーターに乗り込んだ。

さて、少し時間は遡る。これはちょうどまだ蘭達やコナン達が別れるよりも前の事だ。

ホテルにチェックインを済ませた小五郎は一人、部屋に向かった。その豪華さに、戸を開けるなり、彼は呆然と口を開け、目を丸くした。

スイートとまで行かないが、質感のよさそうな分厚いソファやベッド、圧倒的な広さに、ふさふさのカーペット。普通ならば相応の宿泊費がするであろうこの部屋は、イベントの参加者を泊めるに

適しているとは思えない。

「……気前がよすぎねーか？ よっぽどの暇人なんだな。島根なんてらとか言うオヤジは」

呆れ顔で呟いた小五郎だが、ただで泊まる部屋という視点から考えれば悪くない。

独特のひげがご機嫌に持ち上がり、軽快な歩調に変わった彼は、用意されたベッドの上に勢いよく腰掛けた。そこにあったリモコンを手に持ち、時計を見上げる。

「おっ、確かこの時間はヨーコちゃんのライブが……」

ニヤケながらチャンネルを回した小五郎の目に、アップのヨーコが映った。

たちまち、彼のテンションはこれ以上無い程高潮し、年甲斐もなくテレビにラブコールを連発した。

高級感溢れるホテルの雰囲気とは裏腹に、

「ヨーコちゅあーんっ！！」と叫ぶ変態のやかましい騒音が、部屋中に響いていた。

はっとした彼は突然立ち上がり、先ほどフロントの販売機で大量に仕入れたビールを何本も持ちだした。それらを自分の手前に無造作に置き、テレビにエールを送りながら片っ端から飲んで行く。

ごくごく喉を潤す音が、更にまた彼のテンションを上げた。

「かーっ。んめーっっっ」

思い切り泡を拭った彼の口元から、おやじ臭い声が上がる。

同じビールでも、環境が変われば味は全く違う。つくりのいいこのホテルの一室で、テレビの”ヨーコちゃん”を肴に飲む酒は、極上の味だ。

アルコールの影響で、彼は先ほどよりも熱烈なラブコールを送った。

一本、また一本と空になったビール缶がだらしなく転がる。同時に、酔っ払いオヤジぶりも頂点に達した小五郎のお陰で、部屋はハチャメチャに荒れた。

蘭が見ていれば、恐らくは締め出しを食らう行為であろう。

後に、帰宅した蘭はコナン達の話聞き、この惨状を目の当たりにした。当然、缶に埋もれながらベッドに大の字で寝そべる小五郎を、空手技で締め出したというエピソードがあったという。

深夜になり、彼らは夢へ意識を飛ばした。

明日のイベントで、蘭や和葉は遊園地目当て。平次やコナンはイベントそのものが目当て。そして大方小五郎は、賞金の使い道に夢を膨らませながら、幸せな寝言を零す。

明日何が起こるか知らずに、彼らは束の間の観光気分を満喫したのだ。

翌日は、澄み切った青空が広がるすがすがしい朝だった。彼らは朝食を食べて、すぐ会場へと向かう。十五分程の道のりを、やるかには優勝と心に決め、彼らは歩いた。

だが、悲しいかな、平次とコナンが揃ったときのジンクスは計り知れないものがある。

「ぎゃーーーーーーっ!!」

横断歩道を渡った時、それはそこ一帯を震わせるように響き渡った。コナン達にとっては、毎度なじみの悲鳴だ。即座に探偵モードに切り替わり、二人はその場所へ急ぐ。少し遅れながら、小五郎も二人についてゆく。

血まみれで横たわっている男性を発見したのは、車の往来が激しい通りの前だった。その惨劇に彼らは絶句した。率先した平次が死体の首筋に手を当てるが、既に男の命はそこに悟り、首を振った。

「なあ工藤、このおっさん……………」

真面目な表情で耳打ちしてきた平次の言葉に、コナンは深く頷いた。

「ああ。このイベントの……主催者だ」
「何い!?!」

二人の会話に口を挟んだ小五郎が、慌てて鞆をまさぐり、パンフレットを取り出した。コナンはそれを覗き込み、目前で既に冷たくなった男と見比べた。

「間違いないよ、確かに、この主催者のおじさんだ」

そして、全ての根源となる事件は始まったのだ。

「被害者は島根順次郎さん四十八歳。今回行われる筈だったイベントの主催者だそうです。死亡推定時刻は夜中の二時頃で、死因は刺殺。腹部に刺さっているナイフが致命傷ですね」

パトカーは、待たせずにそこに到着した。手帳を真剣に読み上げる部下に、横溝は呆れ顔を浮かべている。

「こんな下らんイベントに大金をかけるような奴なら、金銭関係で相当恨みを買っていてもおかしくないな」

彼は、神奈川県警の横溝重悟警部――毎回おなじみの静岡県警、横溝参悟警部の双子の弟だ。顔は兄と瓜二つだが、性格は全く正反対である。……お人よしで小五郎を慕っている兄とは違い、厳格で、より警察官っぽい雰囲気だ。

主催者死亡によって、イベントは当然だが中止になった。その後、何故かそれが平次のせいになり、和葉と彼はまたも漫才喧嘩をおっ

ばじめた。それは、ここだけの話だ。

「現場の状況を見れば、他殺である事は間違いないな」

「はい！ その線で今、容疑者を洗いだしています」

それが他殺と判断されたのは、彼がカードから下ろしていた一万や、金庫に入れていた三千万程の大金がさっぱり消えていたからである。近くでもみ合った後も見つかり、助けを求め必死で這って来ただろう血の痕も見つかった。

夜中遅くであり車が通ってなかった事と、彼の倒れていた場所が丁度通りからの死角だった事は、彼にとって不幸だった。

後の調べで、島根順次郎の衝撃的事実が判明した。

彼は、既に時効が成立した強盗団の一人である事が判り、強盗団の仲間割れによる殺人という可能性も出てきた。そして、彼が個人的に誘った人物が参加者の中に居る事も、遺留品の日記から明らかになった。

「誘いに乗った奴は無事に登録を済ませたようだ。今晚会う約束をしているが、金はびた一文渡さずに、言いくるめてやる……ねえ」

その日記を読み上げるコナンの呆れ声が、走る車の音に消されて溶けてゆく。

「……こういうんはどうや？ 島根は強盗で稼ぎよった金を、時効まで隠しとく係やつとって。ほんで、時効が来たら仲間と分け合う約束をしとった。けど、島根はそれを裏切りよったんや」

「イベントの為に、その金を使うと言い出した……ってか？」

「せや。でかい事やって有名になるんが最近の島根の夢やったそうやないか。このイベントも、島根の会社が主催で出しとる。売名に

はちようどええんやないか？」

平次が言うには、それを知った犯人が島根に詰め寄ったと。そして、島根は犯人にもイベント参加を促した。分け前は、優勝したら渡してやると。渋々登録した犯人だが、夜彼と何らかの事で口論となり、刺した後現金を奪ったという事だ。

「突発的な犯行って事だな？」

「せや。びた一文やらへんように言いくるめたるっちゅう事は、その仲間と約束しとったんやろ。イベントに参加さす代わりに、その前に何割か渡したるっちゅうような」

「ならやっぱり、参加者名簿の中に書かれた誰かが、犯人ってワケだな」

イベントにエントリーされているのは、五十組、二百六十名もの大人数だ。一見膨大な数だが、不可能なものから除外していけば、そこそこ楽な数まで絞られる。

コナンと平次の助言もあり、あつという間に容疑者は二十四名にまで絞られた。

呼ばれた犯人達は、一先ず容疑が晴れるまではホテルに滞在させられる事となった。犯人は相当焦っていたのだろう。いずれすぐに、自分の犯行がばれる事を直感して……。

後は捜査あるのみだ。コナンと平次は、二手に分かれての捜査に切り替えた。もしもこの時、立場が逆だったならばどうなっていただろう。警察に顔が利く平次は、もっと情報を仕入れるため、神奈川県警へ。そして、コナンはその場に残ったの捜査を始めたのだ。

警察の目を盗んで、刺された島根を調べているうちに、コナンは

ある違和感に気付いた。そして、それがそのまま犯人に直結するものだと、彼は不敵に口角を持ち上げた。

「つまり、犯人はあの人……って事だな」

確信しきった表情で、ポケットの中の携帯電話を取り出す。アドレス機能から、平次の番号を呼び出そうとしたコナンだが、電源を切っているのかまるで繋がらない。

「くそっ……アイツ、肝心な時に繋がらねー！」

コナンは、携帯を再びポケットにしまいなおした。直接会って伝えるしかない状況に小さな溜め息をつく。

見つけた証拠を大事に持ち出し、平次の元へ行くコナンはまるで気付いていなかった。

自分の後ろで、影に隠れて歯を食いしめながら、その様子をまじまじ見つめる男の視線があるという事に。

立ち上がり、神奈川県警へと向かうコナンの後ろから、黒い影が少しずつ近づいていた。

用事を終えるなり、平次は県警を後にした。彼もまた、決定的なものでないにせよ、コナンに情報を教えてやろうと現場へ向かっていたのだ。

立ち止まった彼の目前には、信号や横断歩道のない不便な通りが広がっていた。待っている歩行者に遠慮もなく、車はひゅんひゅんと通ってゆく。それが途絶えるのを待っていた平次は、通りの向こうにコナンの姿を発見した。

「何でこんな所に居んねん、あいつ」

呟きつつも、平次は分かっていた。わざわざここまで来たという事は、何か判ったという事だと。

じっとその姿を眺めていると、コナンもまた此方の存在に気が付いたようで、軽く手を挙げた。何か言いたい事があるらしい。口をぱくぱくと動かし、ふっと笑った彼を見て、平次は確信した。何か、重要な手がかりを掴んだという事実を。

充分伝わったという意味を込めて、にっと笑い返してみせる。今渡るから待ってろ、とジェスチャーした時、平次はそれに気づいた。

その瞳に、信じられない光景が映った。深く帽子を被った怪しい男が、コナンの後ろに近づいてゆくビジョン。平次の頭に警鐘が鳴り響いたが、道路を渡ろうとする人が多すぎて、当のコナンは全くそれに気づいていないようだ。

「く、工藤！　後ろや、後ろ見てみい！　気付かんか、アホ！！」

必死で叫んだが、その声は全て車の音にかき消されてしまい、大通りの向こうに居るコナンまで届かない。コナンもまた雰囲気だけ伝わったのだろう、怪訝な顔で首を傾げている。

「く……くどっ！ー！」

男の手が、コナンの背に伸びた。そこでやっと、コナンも気付い

て後ろを振り向いたが、時既に遅し。コナンが振り向くと同時に、男はコナンの背中を思い切り押していた。

「うわぁ!!」

平次の目には、まるでスローモーションのように捉えられていた。軽い子供の体が、ふっと浮かび、激しく地面に叩きつけられる。一瞬、意識がとんだのかもしれないコナンが起きて、顔を上げたすぐ前に、ブレーキを踏む暇もない車がつっこんだ。

避けるだけの隙なんて彼にはなかった。そして、それは余所見運転をしていた若い運転手も同じ事だ。

「工藤!!!」

平次が血相変えて叫ぶ声が場に響いたのも一瞬の事だ。突き飛ばされたコナンに、車は猛スピードで突進した。

やっとブレーキ音がかかったのは、既に大きく宙に跳ねたその小さな子供の体が、数メートルほど先まで吹っ飛ばされた後だった。地面に激しく叩きつけられた体は、人形のようにされるがままの体制を作り、動かなくなった。

その場に、空間を裂くような悲鳴があがり、道を走る車達は大きく進路を狂わされ、乱れた。

「工藤オ!!!」

平次の叫びが、彼に届いてたかどうかは定かではない。段々と広

がっていく血液は、既に道路を緋に染めていた。

駆け寄ろうとした平次を、二台、三台の車が邪魔した。大勢の人には、それは子供の飛び出しによる悲惨な”事故”にも見えたであろう。

運転手は顔面蒼白の放心状態で、車の中に呆然と座っていた。平次が目をつけていた男は、ほくそ笑むように口元を歪めた後、人ごみの中へ消えていった。

強引に道を渡り、車の合間を取って、平次は倒れているコナンの元へ駆け寄った。今にも再びひかれそうな車道にあるコナンの体を、とりあえず抱き上げた。人の少ない安全な場所へゆっくりと寝かせた後、素早く呼吸や脈拍を確認した。

「工藤！　おい、しっかりせえ！！」

弱弱しくはあるものの、かろうじて心臓が動いているらしい事には胸を撫で下ろしたが、既に瞳は固く閉じられていた。呼びかけても何の反応も示さない所を見ると、意識はほんの僅かすらないらしい。

ぐったりと横たわるコナンは、苦しそうな呼吸だけ弱く繰り返していた。頭や体中から、生暖かな血液が流れている。救急車を呼んだが、それまで持つかすら定かではない。

集まった野次馬は、少しずつ平次とコナンの周りを囲んだ。

救急車が到着して、横浜内の病院へ運ばれたコナンは、すぐに手術室へと運び込まれた。

蘭や和葉や小五郎達は、それから間もなくしてやってきた。一刻を争う危険な状態、と連絡を聞いて、訳も分からず駆けつけただろう。息を切らしてやってきた彼らは、真っ赤なランプを見るなり、力の抜けた顔で、手術室の前に呆然と立ち尽くした。

「どうして……どうしてこんな……」

「コナン君がっ、何でなん？」

目に涙を溜め、震えた声で呟く蘭の隣では、和葉もまた放心して悲痛な声をあげる。

平次の服には、先程まで抱えていたコナンの血が、べっとりとついていた。それが怪我の大きさを物語る。

「どういう事だ？」

押し殺したような低い声で、小五郎は一度呟いた。平次はなんとも言えない思いを感じながら、視線を逸らす。それが、小五郎の苛立ちを更に強めたのであろう。

「おい！ 一体何があったんだ!!」

平次に掴みかかった小五郎は、齒を食いしぼり、必死で訴えかける瞳を向けている。

「お前がついていたのに、何をしていた」とでも、言いたげな表情だった。平次は唇をかみ締め、眉にしわを寄せる。

「……あいつ、車道に突き飛ばされたんや」

傍に居た筈だった自分は、何も出来なかった。後ろから迫ってくる男の存在にも、ずっと最初から気付いていたというのに。そんな思いが、平次の胸を去来する。

男の存在を、コナンに知らせる事が出来ていれば、こんな事にはならなかった筈だ。と、探偵としても、友達としても、悔しくてならない。

「コナンの容態はどうなんだ!？」

「……かなり危険な状態や、って救急車のおっちゃん言うてたわ。俺は事故の時の様子見とったから分かるんやけど……生きてんのが不思議なくらいやった」

立ちあつたのが、自分であつてよかつたと思う。蘭や和葉だったら、間違ひなくトラウマにでもなりそうな光景だった。その状況をほんの僅か和らげて話す言葉にすら、震えるような彼女達だ。

手術室から出て来るまでは、極度の不安との戦いだった。心ここにあらず、という様子で座り、体をちぢ込めて震える蘭を見ると、申し訳ない気持ちばかりが平次の心中に浮かんた。

祈ることしか出来ない自分達が、齒がゆくて悔しかった。

数時間の後、やっとランプが消えた。中から、看護婦が包帯だらけのコナンを横たわるベッドを押して部屋を出る。

何とか、生還したようだ。そう感じて安堵したが、同じように手術室から出てきた医師の顔は、暗かった。

「やれるだけの事はやりました。ですが正直、期待はなさらないで下さい。意識が回復するまでは、命に別状がない状態とは言えませんが。今ぎりぎりでも命がある事自体が、彼の生命力が起こした奇跡としか。覚悟を決められた方がよろしいかと……」

「そ、そんな……でもっ、意識さえ戻れば助かるんですよね!？」

すがりつく蘭は、傍から見ても痛々しかった。医師は、必死でソフトな言葉を選びながらも、現実を偽りなく伝えた。

目を覚ます可能性がほぼゼロに近いという事も、一週間や何ヶ月どころでなく、今日を越えられるかすらかなり危ういという事も。

話を全て聞いた後の蘭は、瞳から止まらない涙を流して、その場に座り込んだ。

部屋に、電子的な音が響く。四人はコナンの眠るベッドの前で、彼をじっと見つめていた。

体中、色々な機械につながれて、包帯やガーゼばかりが目立つ。彼の生傷耐えない所はやっぱり証ではあったが、こんな姿は似合わない。

「コナン君……目、開けて？」

蘭はコナンの頬を優しく撫でたが、やはり反応はなかった。蘭の目からは再び大粒の涙が零れ、彼の頬に着地した。

「……またちゃんと、起きてくれるでしょ？」

新一がいけないという状況で、彼女がああも明るく居られたのは、全てコナンが居たからだ。だが。

「蘭ちゃん……」

じっと見つめていた和葉の目からも、ぼろぼろと涙が零れ落ちた。誰もが、そんなコナンに胸を締め付けられる。

「……ねえ、また『蘭姉ちゃん』って呼んでくれるんでしょう？　そうだね？」

蘭がどれだけ言っても、やはり返って来る反応は何もない。自然と握る手に力がこもる。

「こんな事で死んでしまうなんて、そんなのおかしいでしょ？　らしくないよ！　ねえ」

泣きながら必死で呼びかけるその姿に、やりきれない気持ちを感じる。それでも、頑なに閉じられたままの瞳を見て、平次は強く拳を握りしめた。

工藤！　お前……言うとしたやんけ！！　何があっても死ぬわけにいかへん、て。それなのに、その翌日にこんなアホな事件が原因で、姉ちゃん遺して、逝く気なんか！！？　そんなの、絶対許さへんぞ！　目え開けろや、工藤！！

声に出して言えるわけがない言葉を、平次はずっと心の中で叫び続けた。当然ながら眠ったままのコナンの隣で、ただただ無機質な音だけが室内に響いていた。

彼の命がまだそこに存在している、という気休めばかりの、確かな証が。

だが、コナンの意識は、そこにはなかった。

遠く……遠く……ずっと遠くに行ってしまったのだ。

こうして、この不思議な物語への幕は上がった。

そして、不思議な世界は始まったのである。

其の一：幕開く時（後書き）

☆作者より

皆さん、こんにちはV

今回は、それは夢か現実か……、第一話読んでいただきまして、ありがとうございます^^

改めて、初めまして、朧月です！

さて、それは夢か現実か、リメイクバージョン第一話です^^もし
かしたら、初めましてじゃない方もいらっしゃるかも知れませんが、
もし読んで下さっていた方いらっしゃいましたら、ありがとうございます
います（^^

少しだけ、ところどころ文を付け加えたり、抜いたりさせていただ
いております^^

さて、まずこの出だしを見て、突然こんな展開なのかよ朧月、と思
ったそのあなた（笑）

次回は、もっと奇妙な展開に（笑）

……じゃなくて。（笑）

さて、コナンは一体どうなってしまうのでしょうか^^

次回、どうぞ見捨てずに読んでやって下さいませV

それでは、最後まで末永くお付き合いくださいませ！

其の二：不思議な世界

川原に、少年が倒れていた。まだ、十にも満たないであろう、幼い少年だ。

さわさわと風に短い黒髪を揺らされながら、ちょうど川が流れている真横でぐったりと横たわっている。

生きているのかも死んでいるのかも、遠くから見たら分からない。川で溺れたのかと周りに誤解されそうな風景ではあったが、その少年の身体は全く濡れていなかった。

その場に不相応な身なりで、彼はずっとそこに倒れこんでいた。

少年がそこに現れてから、かなりの時間が経った。

少しずつ覚醒する意識の中で、ザーザーと水が流れる音が耳に届く。彼は不思議に思いながら、ゆっくりとその重い眼を開けた。

あれっ？　ここ、どこだ………？

そう。気がついたら見覚えのない場所にいたのだ。

何があったのだからよく思い出せないが、しきりに頭が痛む。

自分のすぐ隣には何故か川が流れている。

倒れたままの姿勢で横を見ると、林越しに町らしきものが見えてきた。

それは、やはり見慣れない町だった。

着物を着て歩いている人々……男の腰には刀、頭にはちょんまげ。そして、まるで時代劇の撮影でも行っているかのような町並み。

……俺、どうしてこんな所にいるんだ？

どうにも記憶が曖昧で、ぼつりぼつりとしか思い出せない。
上手く体が動かせない為、起きて辺りを探る事も出来ない。

しばらくそのまま倒れていると、突然女の声が聞えてきた。
しかも、その声は自分がよく知っている声。

そして突然目の前に長い髪が現れた。

「坊や、どうしたの？ 大丈夫？」

……坊や？ 何言ってるんだよ。

と、突然体が持ち上げられる。

視線の先に現れた彼女の顔を見て、驚いた。
確かに予想通りの人物ではあったけれども、
十二単を着て、顔には綺麗な化粧をつけて、長い髪には綺麗な髪飾り。

まるで昔の姫のような身なりだった。

彼女は何か言いたそうにぱくぱくと口を動かす少年を不思議そうに見つめ、にっこりと微笑みながら首を傾げた。

「蘭……姉ちゃん？」

ようやく、声が出せた。と同時に身体も動く。

少年がゆっくりと起き上がると、彼女は瞳を大きく開けて彼を見つめた。

そして、不思議そうな顔で彼に尋ねる。

「どうして、私の名を？」

「……え？」

その信じられない言葉に、彼は驚いて彼女を見つめた。
彼女はまたゆっくりと微笑んで見せた。

「確かに、私は毛利蘭といいます。坊やはだれ？ この辺では、見ない顔ですね」

「な……何言ってるの、蘭姉ちゃん？ 僕だよ」

少年の方も、意味が分からず聞き返す。
しかし、彼女は微笑んだまま首を傾げた。

「どこかで、会った事がありますか？」

彼女の言葉に、少年の頭には、過ぎし日のことが思い出された。
彼女が記憶喪失になった時のことが。

しかし、彼女は自分の名前をちゃんと分かっているようだ。
それに、記憶喪失、という雰囲気では全くなく、しっかりしているように見える。

けれども、彼女が自分をからかっているようにも見えない。
彼女は、困惑した少年の姿に申し訳なさそうに悲しい顔で微笑んだ。

「ごめんなさい、一度会った人の事は忘れない筈なのですが……
確かにあなたには、昔どこかで会った事があるような気がします。
名前を聞けば分かるかも知れません。ですから、名を教えてはくれませんか？」

少年は混乱した。

昔どこかで会ったことがあるような気がするも何も……
ずっと一緒に住んでいたではないか。

彼女にとっては、恐らく弟のような存在であつたものだと思う自分。けれど、それをこの彼女は知らないという。混乱して、困惑しながら、何とか唇を動かした。

「僕だよ……コナン、だよ」

「こ……なん？」

彼女は目を細め、しばらく考え込んだ。それでも全く思い当たるところがないため、困ったように瞳を揺らした。

「……江戸川コナンだよ。蘭姉ちゃん？」

少年はもう一度その名を名乗った。すると今度は、彼女は僅かに反応した。

「江戸川……という事は、もしや江戸川様の家の子では？あ、けど、江戸川様の家には女の子しか居なかった筈だなあ……」

彼女はまたもや考え込んだ。

一方、彼は彼女が何を言っているのか全く分からない。江戸川様の家って、どこのことだ？等と余計悩む羽目になった。

「あの……蘭姉ちゃん？ 江戸川様って、どこの江戸川様？」

尋ねると、彼女は柔らかい笑みを浮かべ、答えた。

「……江戸川乱吉様よ。やっぱり、江戸川様の家の子ではないようですね」

「ら………乱吉さま？」

コナンは顔を顰めた。
江戸川乱歩かぶれの知り合いなど、蘭にいただらうか……と必死に
なつて考えた。
いるわけない、そんな知り合いの事を考えても仕方がない事だが。
すると、何やら難しい顔で考えこんでいる少年に、蘭はすつと手を
差し出した。

「ごめんなさい。やっぱりあなたの事はわかりません。
でも、これからはよろしくお願いします。
茶菓子でもさしあげますから、いらっしゃい」

コナンは彼女の後ろについて、そこを歩いていた。
自分が知っているのとは違う景色。困惑した顔で周りをキョロキョ
ロと見回した。
すると、蘭は不思議そうにコナンを見つめた。

「どうしたのです、コナン君？」
「あ……あのさ、蘭姉ちゃん……ここ、どこ？」

コナンは顔を引きつらせながら尋ねた。

ずっと続くとても広い廊下……恐らく20～30位は軽くあるで
あろう部屋。

そして、彼女が通ると深深と頭を下げる人達。
見慣れない光景に、驚くのも無理はない話だ。

しかし、彼女は意外な事を聞かれたという風にきょとして答
えた。

「私のお城です。正確にはお父さまのものなのですが、お父さま

はだらしがないから……

すっかりしていたお母さまが昔お父さまに愛想つかして自分の国に帰ってしまったので、

今は私がここの主みたいなのなのです」

「お城……？ あ……主って………」

何をどう理解して納得していいのか。

すっかり困惑してしまっているコナンを見て、彼女は不思議そうに首を傾げた。

「不思議ですね。あなたは私の事を知っていたのに、私が姫だという事を知らなかったのですか？

私達……一体、どこでどんな風に会ったのです？」

コナンはそんな彼女をじっと見つめた。

彼女は、毛利蘭だと名乗った。けれど、彼女のその身なりと、雰囲気は。

コナンの中で、既に一つの答えが出ていた。

本当は、否定したい馬鹿馬鹿しい事。

けれど信じられない答えでも、今の状況を説明するにはそれしかありえない。

人が縮むなんていう非科学的な事が可能な世の中だ。

自分という存在がある限り、もはや今ある状況を見捨ててまで常識を信じる事は出来ない。

「……………ごめんなさい。きっと、”あなた”は僕には会ってないと思うんだ。

僕が知っている蘭姉ちゃんは、お姫様なんかじゃないし、僕はその蘭姉ちゃんの家にならずと居候してたんだよ」

「……………居候を？　ならば、私はあなたの言う”毛利蘭”ではありませぬ。
けれど、私の名もまた”毛利蘭”なのです。それは一体、どういう事なのでしょう？」

その問いに、コナンも考え込んだ。

こんなに似ていて、名前もまるきり一緒の、別人？

自分と同じ顔の人が三人はいるなんて聞いたことあるけれど。

彼女はそんなレベルじゃない。顔も、名前も、声も同じ別人なんて。

「分からない……分からないけど、

あなたが僕の知っている蘭姉ちゃんと全く関係ないって事はないと思うんだ。

顔だって、どう見ても同じにしか見えないし……境遇だって……」

彼はまだ状況をはっきりとつかめないまま、仮定としての話を話し始めた。

「……境遇？」

蘭姫は首を傾げた。

すると、コナンが答える。

「さっきお姉ちゃん、お母さんがお父さんに愛想をつかして自分の国に帰っちゃったって言ったよね？」

僕が知ってる蘭姉ちゃんも子供の頃にお母さんが家を出て行っちゃったんだ」

「理由は？　まさか……」

彼女の顔が心なしか苦いものになった。
そんな彼女を一瞥して、コナンは話を続ける。

「……えっと、その蘭姉ちゃんのお母さんが凄く料理が下手で、おじさんがまずいって言って食べてくれなかった事が原因で別れたって……」

言いながら、段々と顔が青くなって引きつっていくコナンを見て、彼女はクスクスと笑った。

彼女を見上げると、彼女はおかしそうに笑いながら言った。

「あなたは、その料理を食べた事があるのですね？」

……驚きました。まさか出て行った理由まで一緒とは」

「えっ？　じゃあお姉ちゃんの所も？」

コナンが驚いて聞き返すと、彼女は苦笑して頷いた。
まさかそこまで同じだとは思わなかったコナンは啞然とする。

「両親の名前はとうですか？　私の父は毛利小五郎、母は妃英理」

「……………一緒だよ」

「本当に？　まるで同じ世界が二つあるみたいですね」

おもしろい事のように笑う蘭姫と、それを全く否定できないコナン。
コナンは、一番気になっていた事を尋ねた。

時代劇のような町並み。昔の城のような場所に住む、蘭と名乗る
十二単姿の姫。

聞くのが怖かった。けれど……

「い、今って、何年だったけ？」

「……………1306年だけど、それがどうかしたのですか？」

年数を聞いた途端、コナンが青ざめた。

姫は訳が分からずに、その反応に首を傾げる。

確かに、予感してはいた事だった。

現代では考えられない町……腰にぶら下げた刀や、ちょんまげ。

そして、和風の城に十二単を着た姫。どれもこれも、昔なら納得がいく。

不思議そうな顔で自分を見つめている姫に、コナンは決心してそれを言った。

「お姉ちゃん、僕が住んでた時代はね……2006年だったんだ」

彼女は驚いた顔でコナンを見つめた。

信じられない、700年の差。

コナンが嘘をついているようには見えないし、

こんな子供がそんな嘘をつく理由も思い当たらない。

しかし、それが本当なら目の前にいる少年は未来から来た、という事になる。

「けれど、どうしてその時代に何から何まで私にそっくりな少女がいるのです？」

「……分らない。でも、ただの過去の人にしてはお姉ちゃんは蘭姉ちゃんに似すぎてるんだ」

「そうですね。話で聞いていて、気持ちが悪くなってくる位です。

……じゃあこういう事は考えられませんか？あなたのいう彼女は、私の来世とか」

「……けれど、それにしたって名前も親も境遇も同じだなんて出来すぎてない？」

コナンの言葉に、「それもそうですね」と頷く蘭姫。
そして、彼女は何か思いついたかのようにぱっと明るい顔をした。

「そうだ。知り合いにそういう事が分かりそうな人がいるのです。
隣の国に住んでいて、何でも相談に乗ってくれる気さくな老人な
のですが……」

「………老人？」

「はい」

コナンが首をかしげると、彼女は大きく頷いた。

色々混乱している事もあるだろうと、気を利かせたのか、
今日はとりあえずゆっくり休んで、明日そこへ行ってみようと、彼
女は提案した。

コナンも何処となくその老人に胡散臭さなどを感じながらも、
しかし他にどうする事も出来ずにOKした。

結局、その日は彼女の城に泊まることになった。

蘭姫の話だと、帰れるまではいつまでも住んでいて構わないとい
う事だ。

ここでも”蘭の家”に居候する事になるのか……と
コナンは複雑な気持ちになりながらも、蘭の優しさに感謝した。

部屋の中、向かい合って座りながら、
未来というものに興味を持った彼女に、コナンは色々な事を話した。
その度、彼女は小さな子供のように、嬉しそうにはしゃぐ。

「しょうがつこうに、ちゅうがつこうに、こうこうに、ぶかつ……
楽しそうですね、未来というのは」

「……まあね。楽しくなくはないけど……」

こんな体じゃなあ、と苦笑いしたコナンの表情をどう受け取ったのか、

彼女は明るい声で答える。

「いいえ、きっと楽しいと思いますよ。

私は生まれた頃から国の用事以外では殆ど城から出た事がないのです。

敵国の間者に命を狙われかねませんから。だから、自由に友達を作れる事が羨ましい」

”姫”という立場だ。一人勝手に町中をうろついたりしようものなら、

敵国のかっこうの標的となってしまうだろう。

「……あれ？ でも、僕とあった時は一人だったよね」

思い出して尋ねたコナンに、彼女はにっこりと笑いながら答えた。

「あそこは城からさほど離れていないから安全なのです。

最近では、よっぽど遠い場所ではない限り、城から抜け出す事もよくあるのです。

川原で倒れているあなたを見た時は、溺れて死んでしまっているのかと驚いたのですよ」

「あはは……僕もどうしてあそこに居たのかはわからないよ」

コナンは、渴いた笑みを浮かべて見せた。

未だに、何が原因でここに来たのか分からない。

ここに来る前、何かあっただろうか？

原因を探ろうにも、何故かそこらへんの記憶が曖昧なのである。

「どうしたのですか、コナン君？」

じっと考え込んでいると、蘭姫は心配そうに声を掛けた。
はっとして、コナンは彼女を見つめた。

「ごめんね。ちょっと、考え事」

「でも……」と蘭は心配そうにコナンの顔を覗き込む。

「顔色があまりよくないですよ。気分が悪いのでは？」

そう言って、額に触れてくる。

あっちでもこっちでも、彼女に心配をかけてばかりだ。
自分を氣遣うその言葉や仕草に、コナンは苦笑した。

「大丈夫だよ。色々あって、ちょっと混乱してるだけだから」

そう答えると、彼女は反省した顔で、頭を下げた。

「……ごめんなさい。疲れているのに色々質問をしてしまって……
そうですね、元々この世界の私とは違って、あなたはたった一人
でここに来てしまった。

どうしてなのかも、元に戻る方法も分からない……とても不安で
すよね。

もう、今日はゆっくり休んだ方がいいですね」

彼女はふわりとコナンを持ち上げ、ふかふかの布団に寝かせた。
隣に添い寝して、子守唄を歌う彼女。

本来なら『蘭』が隣に眠ろうものなら気になって寝付けないのだが、
色々なことがあって余程疲れていたせいか、どんどん目を開けてい

るのが辛くなった。

「……何か、今でも、夢のような気がする」

そう呟いたのを最後に、彼はスースーと規則正しい寝息を立てていた。

くすくすと微笑みながら、彼女はその姿をしばらく愛しげに見つめていた。

「まるで、弟が出来たみたいだな」

呟き、彼女もすやすやと寝入った。

翌朝、目を覚ますと、目の前に蘭の寝顔がアップで映った。
寝ぼけていた為、何事か！？と驚いて慌てて後ずさったコナンだが、そこが蘭の家（毛利探偵事務所）ではない事に気付き、眠気が吹っ飛んだ。

「そうだ……あれ、夢じゃなかったのか」

摩訶不思議な出来事を思い出す。

全て現実の事。目が覚めれば、元に戻っているとも思っていたのか、

少しがっかりしながらも、起き上がる。

その音で目が覚めた蘭もむくりと起き上がり、「んっ」と伸びをして、コナンに微笑んだ。

「起きていたのですね。おはよう御座います、コナン君」

「あっ……おはよう。……えっと、ら、ら……蘭姫、さま」

コナンが困った顔で答えると、彼女はにこにこと笑った。

「そんな堅苦しい呼び方をしなくてもよろしいですよ」

「あ、じゃあ姫様……僕に話し掛けるときも、普通の話し方でいいよ」

彼女は、そのあまり変わらない呼び方に苦笑しながらも、聞き返す。

「普通の話し方？」

首を傾げると、コナンはコクリと頷いた。

「姫様ね、昨日僕以外のお城の人には、僕に話す言葉と違う口調で話してたでしょ？」

そっちの方が話しやすいと思うし……敬語だとなんか他人行儀みたいだから」

「ね？」と口元にシニカルな笑みを浮かべながら言ったコナンに、蘭は微笑んだ。

「分かった。では普通の話し方でよいのだな？」

「うん。その方がいいよ」

朝食の時間、小五郎は終始変な目でコナンを見ていたが、

蘭から事情を聞くと、今度はまるで宇宙人でもみるような顔でコナンを見ていた。

そして、「帰る事が出来るその日まで城で住ませてあげてもいいであろ？」と蘭が言うのには、渋々ながらも了承した。

自分の事のように喜ぶ彼女に、コナンは小さく「ありがとう」と呟

いた。

食事を終えてすぐに、二人はその老人の元へと向かった。

周りから変な目で見られないようにと、コナンは着物と下駄を履いて、蘭についていった。

二人で馬に乗ってそこへ向かう……

だがあまりにも自然な蘭の様子に、忘れていた疑問がよみがえった。コナンは、蘭に尋ねた。

「あのさ、城から抜け出す事もあるって言ってたけど、変装とかしないで大丈夫だったの？」

蘭はちらりと後ろを振り向き、答えた。

「わらわももう大きくなったし、何かあれば自分の身くらいは自分で守れる。」

コナン君と会った時も、変装などしてはいなかったであろう？

それに、ここはわらわの国で、隣の国は同盟国。

わざと人通りが多い所を通っているから大丈夫じゃ」

「でも、同盟国って言っても、やっぱり所詮は他国なんですよ？」

「そんなに案ずる事はない。隣の国は同盟国といっても特別なのだ。国民は皆わらわの味方じゃ」

そう言っている蘭の顔がほんの僅かに赤らんでいるのは、

その背中にしがみつくとコナンからは見えなかった。

特別という言葉を不思議に思いながらも、それ以上は何も聞かなかった。

城から出てあまり経たないうちに、二人は老人の家に辿り着いた。思っていたよりも大きな家に驚きながら、コナンは蘭に抱えられて

馬から下ろされる。

蘭がその家の戸をノックすると、中からその『気さくな老人』が姿を見せた。

「……………」

コナンはぼかんと口を開き、目を丸くして驚いた。

その『老人』は、蘭の顔を見るなり、にこにこと出迎えた。

「おっっ!! 蘭君じゃないか。久しぶりじゃのう!! ん? その子は誰じゃ?」

彼は蘭の隣で驚いた顔で自分を見つめている少年に気付き、不思議そうに指差して尋ねた。

驚きのあまり口をぱくぱくとさせていたコナンだが、話を振られてようやく声を出せた。

「あ……阿笠博士!!?」

そう、彼は自分の住んでいた世界でもよく知っている……。

コナンの驚きの意味を知る事はなく、突然大声で自分の名を呼ばれて、

彼は驚いた顔でコナンを見つめた。

そして、しばしの沈黙の後、困った顔で言った。

「確かにわしは阿笠じゃが……君の事は知らんがのう」

蘭は未だ驚きを隠せずにいるコナンに、小声で尋ねた。

「知っているのか？ 阿笠殿のことを……」

「あ……阿笠殿！！？」

聞きなれない呼び方に、コナンは思わず顔を顰め、再び声を張り上げた。

阿笠博士に殿をつけるなんて……に、似合わない。

しかし、まあここは自分の常識が通用する所ではないのだし、こういうものなのだろうと、コナンは苦笑しながら、蘭に言った。

「俺の時代でも居たんだ：阿笠博士っていう発明家が。

本当驚いたよ。着物着てんのは初めて見たけど……顔は全く同じだ」

「そうなのか？ 実は、阿笠殿も色々と便利な物を作っておられるよ」

二人が真剣な顔で話しているのを見た阿笠は、二人を部屋に招き入れた。

「それで。どういう事なんじゃ？ 『俺の時代』とは」

二人を客間に座らせてお茶と和菓子を出した阿笠は、話を切り出した。

コナンは戸惑いながら彼に話し始めた。

「どういう事だか、俺もよく分かってないんだ。突然気がついたらここに居て……」

でも、俺はこの時代の人間じゃない。俺が住んでた時代は、2006年だったんだ。

聞いた話だと、ここは1306年なんだろう？ 未だに信じがたいけ

ど俺は700年時を遡ったってわけだ。

それに、奇妙なことはそれだけじゃなくて……」

「この時代で会う人が知り合いとそっくりなんじゃない？」

「ああ。『毛利蘭』も、『毛利小五郎』も『妃英理』も……それに『阿笠博士』も

皆俺の時代でちゃんと存在してて、俺と知り合いだったんだ」

それを聞いて、阿笠はうーむ……と考え込んだ。

そんな奇妙な話、全く聞いた事がない。

「……………不思議じゃな。こうなった心当たりは全くないのか？」

「ああ、ていうか分からないんだ。何故かその辺りの記憶が曖昧で……」

そう言いながら、コナンは抱えていた袋の中から、

何かあった時のためにと持ってきたキック力増強シューズを取り出して、阿笠に見せた。

阿笠は不思議そうにそれを受け取った。

「それ、俺の時代の『阿笠博士』が俺のために作ったものなんだ。

わきに付いてるダイヤルを回すと、蹴る力を増大してくれるんだ。俺、結構この道具とかその他の道具に助けられて……」

他にもこんなものがあるのだと、変声機や麻醉銃……そして眼鏡などを阿笠に見せて説明した。

元から機嫌が悪かったわけではないのだが、それを見るたび阿笠はどんどん上機嫌になっていき、ハイテンションな声を上げた。

「凄いのう……わしはやはり天才じゃ。こんなに素晴らしいものを作ってしまうとは……！」

コナンはその様子を見て、” ああ、やっぱりこの人は博士だ。” と心の中で呟いた。

そんなコナンに、阿笠は今度はこの時代で自分が作ったものを、自慢げに色々と見せびらかせてその一つ一つに、それはもう長い説明をつけた。

その後しばらく感動に浸っていた阿笠がコナンと再び本題を話し合えるようになるまで、

二時間程の時間がかかった。

話を全て聞き終えた博士は、申し訳なさそうに、殆ど毛がない頭をなでた。

「……すまないのお、わたしには、解決法も何も分からんのじゃ。

でも、もし何か分かったらすぐに連絡しよう」

「おお、そうじゃ！ それから……」

阿笠はふいに立ち上がり、ある書物を持ち出してコナンにそれを渡した。

「それはわしが昔高名なお坊さんに貰ったものなんじゃが……」

コナンはその巻物を開いて読み始めた。真剣な表情で、無言で読み進めていく。

最後まで読み終わり、彼はこれが正に自分が置かれている状況を説明するものだ と確信した。

巻物には、要約すると次のように書かれていた。

『この世には二つの世界がある。

一つは我々が今まさに暮らしている世界。

そして、もう一つは我々が生きる世界とは鏡のように存在する全く別の世界。

これら二つの世界はどちらが真でどちらが虚ということではなく、そのどちらもちゃんと実在する世界なのだ。

私がそれを知ったのは、私が実際に向こう側の世界から来た者だからである。』

巻物は、そこで終わっていた。

よく見ると、裏に『其の壺』と書かれている。

コナンがじっと考え込んでいると、阿笠は苦笑しながら言った。

「わたしには意味が分からなくてのう……じゃが、君の今の状況と関係があるのかも知れん」

コナンは強い瞳で阿笠を見つめ、そして力強く頷いた。

そして、手がかりはそれを渡したというお坊さんしかない事を知る。

「……博士、これを貰った高名なお坊さんって、どこにいるんだ？」

真剣な顔で尋ねると、阿笠は悲しそうに目を伏せた。

「彼はもう死んでしまったよ。病でのお……まだ若くして逝ってしまったんじゃない」

それを聞いてがっかりしたコナンだが、まだ望みは捨てたわけではない。

この巻物には、まだ今の状況の謎を解けるかも知れないヒントがちりばめられている。

「……………なあ、これを書いたのって、そのお坊さんなのか？」

「いや、それはそのお坊さんが友人に解説して欲しいと頼まれても
らったそうじゃ。」

何でも、その友人の祖父が巻物を貰ったそうじゃが、字も上手く
読めんし、

意味も全く分からないから、そのお坊さんに頼んだという事らし
い」

まだ、糸は切れていない。

そして、もう一つの鍵……巻物に書かれた、其の壺の文字。
其の壺があるって事は、当然。

「其の式” っていう巻物は？」

”其の式” は別の人が持っているとっておったぞ。誰かまでは
分からないそうじゃが……」

それを聞いて、彼はため息をついた。

誰が持っているのか分からないならば手がかりは全くないに等しい。
其の式の方が重要な事が書かれている気がしたが、

話を聞く限りは”其の式” が見つかる事を期待するのはかなり難し
い事だ。

「分かった。ありがとう、博士」

コナンは微笑みながら言った。

博士も新しく出来た知人に、嬉しそうに言った。

「いや、いつでも遊びに来てくれ。待っとるぞ」

コナンはもう一度ニツコリ笑って、頷いた。

恐らくこちらでも、子供受けがいい人間なのだろう。

自分を全く子ども扱いすることなく自然に話を聞いていた様子が、それを証明している。

やはり、こちらでも博士はいい協力者になるのかもしれない。

コナンは、隣でじつと話を聞いていた蘭に、「帰ろっか」と声を掛けた。

「少しでも手がかりが見つかってよかったね」と自分の事のように喜びながら、荷物をまとめて、すっと立ち上がった彼女に、「うん」と返事をした。

家を出る前に、二人は博士に一礼して、馬に乗った。

「少し寄りたいところがあるのだが、よいか？」

馬上で、蘭は何気なくコナンに言った。

わざわざここまで世話を掛けているコナンには、断わる理由はない。

「もちろんだよ。」と言うと、彼女はとても嬉しそうな顔をした。

その表情が今までで一番幸せそうだった事を不思議に思ったが、敢えて理由は聞かなかった。

馬上で鼻歌を歌いながらそこへ向かう蘭を、コナンは訝しげに見上げていた。

そして、その後辿り着いた場所にいた人物に、彼は驚きのあまり腰を抜かす事になるのだ。

其の二：不思議な世界（後書き）

どうもこんにちは！朧月です！

それは夢か現実か……第二話となります！

えっと、今回もお読みいただきまして、ありがとうございました^^
さて、前回とは打って変わって明るいムード……でもないか。けど、
前回のシリアスシリアスしたイメージでもないでしょ？

さて、段々と不思議な雰囲気になってまいりました^^
ここでコナンが体験する、様々な不思議な出来事、是非見守って行
ってあげて下さい^^

蘭姫さん、言葉遣いに凄く苦勞しました^^；
どうしよどうしよと悩み、結局この方面に。

それでは、次回も是非見捨てないでやって下さいませV

もしよろしければ、感想などなどただけでしもうと凄く嬉しいで
す^^私は泣いて喜びますV

其の三：出会い①、東の国の王子

”博士”の家から、半刻ほどかけて到着した所は、城だった。

当然の事だが、蘭姫の城ではなく、この国の、城。

蘭姫の国よりも一回り二回り……大分大きなその前で、彼女は馬を止めた。

ここは同盟国だと言っていたから、何か国の事に関する話でもあるのだろうか。と蘭姫を見ると、彼女は、何だかとても嬉しそうだった。いかにも、これから政治うんぬんな話に行く顔ではなく……、むしろ、これから何かとても幸せな事が待ち構えているような、そんな顔で。

訳が分からず首を傾げていると、ふいにこちらを見た蘭姫が言った。

「これから会う人に相談してみると、よいかも知れぬよ」

何やら上機嫌に鼻歌を歌いながら城の中へ入っていく蘭姫の後ろに付いて城へ入る。

城の中で最初に会った人は、蘭姫を見るなり、嬉しそうに挨拶した後、急いで何処かへ走って行った。

その不可解な態度に、何が何だかわからずに、コナンは首を傾げた。しかし、当の彼女は、分かりきった事のようにそれを見送っている。

しばらく後、城の部下達であろう彼らが走っていった先から、突然ばたばたと慌しい足音が聞こえて来て、蘭姫の前にそいつが現れたのだ。

「蘭！ 久しぶりだな。会いに来たのか？」

その人物を見た時、コナンは絶句した。

いや、予想は出来たことだけど、それでも心の準備というか何と言
うか……

立派な着物を着て、下ろしたら恐らく肩よりもあるであろう髪を
高く結い上げて、

いかにも王子らしき格好で目の前に現れたのは……

俺！！！？

その、現れた彼はにこにこ機嫌良さそうに近づいてきて、

コナンの事は眼中ないかのように、真っ先に蘭姫に歩み寄って歓迎
のキスをして、嬉しそうに……

何やら過剰なスキンシップ……というかセクハラにも見える仕草で、
彼女のウエスト付近に軽く触れ、赤い顔の彼女に、「うん、元気そ
うだな」と満足げに言った。

彼女への歓迎が一しきり終わった後、やっとその様子を啞然と見
つめていたコナンに気付き、

きょんとした顔で指差して、彼女に向かって不思議そうに言った。

「誰だ、こいつ？　蘭……お前いつの間に俺との間に子供を作った
んだ？」

蘭は、慌てて答えた。

「つ……作っておらぬ！！　まだわらは十七だぞ？　こんな大きい子が居るわけないであろう！？」

真っ赤になって否定した彼女の言葉も、その前に言った”俺”の言葉も、

何だか色々と爆弾発言のような気もするが、

”俺”が目の前で喋っているという事実で、もう既に頭が真っ白になってしまっているのだ。

他の事に突っ込みを入れるだけの余裕なんて、あるわけがない。

”俺”はそんな蘭の様子をおかしそうに眺めながら、コナンの頭をくしゃりと撫でた。

「分かってるよ、そんな事。でも、ほら。こいつ俺の子供の頃にそっくりじゃねえか」

彼はその顔に不敵な笑みを浮かべ、コナンがつけていた眼鏡をすいっと取り上げた。

その素顔は当然、幼少時代の、工藤新一。

蘭は俺の素顔を見て、驚いた顔で言った。

「本当じゃ！！　あなたにそっくりではないか。

昔どこかで見たことがあるような気がしたのは、そのせいだったのだな」

大きな目を更に大きくさせて、二人を交互に見比べる蘭に、彼はいたずらっぽい笑みを浮かべ、からかい口調で言った。

「言っとくけど、俺の隠し子でもないからな」

「当たり前じゃ!!」

彼はムキになる姿を見て楽しそうに笑いながら、コナンの頭をくしやくしやと撫でまわした。

自分に撫でられてあまりいい気分がしないコナンは、彼をじと目で睨む。

ばしっとその手をはねのけて、不機嫌な顔で少しぼさついた髪を手ぐしで整えた。

すると、まあ当然の事ながら、彼の目も挑戦的なそれに変わった。

「お前、俺に対抗してるのか？ 童^{わっぱ}の癖に、生意気だな」

”生意気”なんて、自分に言われたくねえよ……

心の中で突っ込みながら、コナンはびゅおっといつものように蹴りを繰り出した。

しゃがみ込んでいる彼のその膝に当てるつもりで蹴ったのだが……

「おっ!! 危ねえなあ……いきなり蹴ってくるとは……」

軽く手で受け止められる。

心の底から、悔しさを感じた。……どうやら、『自分』には通用しない攻撃のようだ。

手で受け止めた足を地面に解放しながら、彼はコナンを指差して、その様子をぼかんと見つめていた蘭に言った。

「おい、こいつ生意気だぞ？ どこの童だよ？」

「あなたといい勝負じゃ」

話しかけるなり、クールな声でそう言った蘭を彼は渋い顔で見つめ

る。

その後、彼はコナンの方を振り向き、ジト目でコナンを眺めた。

「俺がこいつといい勝負だったのか？　俺はこんな生意気じゃねえよ」

「よく言うわ。新一は生意気だったであろう？　もうずっと昔っから」

そのまま、慣れた事のように二人はわんわんと言い合いを始めてしまった。

蘭は新一への文句。新一は突然やってきたコナンへの文句……

コナンは、渋い顔でそれを聞いていた。

……何か、どっちもむかつく。

どちらにせよ、自分の事を言われているに相違ないコナンにとって、二人の言い合いを聞いているのは、気分がいいものではない。その言い争いは、一刻ほど続いた。

言い合いが終わると、蘭は思い出したかのようににっこりと笑ってコナンに言った。

「言うのを忘れておったぞ。『これ』は一応この国の王子の工藤新一じゃ」

「……おい、一応って何だよ。『一応』って！！
それに俺は『これ』呼ばわりされる覚えはねえ！！」

新一は不服そうに文句を言ったが、蘭は全く聞く耳持たずである。何やら、”相変わらず”ではあるのだが、コナンは呆れた顔でそれ

を眺めていた。

「知ってるよ」

ふうつとため息をついて、コナンは二人に言った。

蘭は真っ先に反応して、会話の余韻でか、別の意味でか、何故か赤い顔でコナンに尋ねた。

「もしや……コナン君の世界にも……？」

「ああ、いるよ。『工藤新一』の事は、俺が誰よりもよく知ってる」

まあ、本人なのだから、当たり前である。

蘭は嬉しそうな顔をした後に、あごに手を持っていき、「うーん……」と考えこんだ。

「まさか、弟とか……？ いや、そんなわけはないな……姓が違う」

必死でコナンと新一の関係を考える蘭に、コナンは微笑した。

まあ、想像つくはずもなからう。はるかに年も違って見える子供が、実は工藤新一そのものだったなんて。

「弟より……もっと近い存在だよ」

コナンが答えると、蘭は訳が分からない、と言いたげに、怪訝な顔で首をかしげた。

その後、少し考えてはっとして、どんな想像をしたのか赤い顔で、一言。

「ま、ままま、まさかっ！ 別世界での新一の隠し子では……？」

「まさか」

コナンに即答され、「そ、そうか……」と恥ずかしげに小声で返した。

「……?？」

蘭とコナンの話を聞いていた新一は、よく分からないその内容に首を捻った。

そして、当然のごとく怪しく思ったのであろう、警戒した顔で話に入りこんで来る。

「お前等、何の話してるんだ？ こいつが俺の何を知ってるって？」

「全部だよ。『工藤新一』のことで、俺が知らない事はない」

コナンは冷めた顔で答えを返した。

そして、『工藤新一』の着物を自分の方へ引っ張ると、新一の耳元でささやいた。

「ちょっと、話があるんだ。聞いてくれるよな？」

新一はその脅されているような雰囲気だけに怒りを感じた。

コナンを見ると、子供のものとは思えない鋭い目で新一を見据えている。

「……ああ、分かったよ」

彼はそう言って、「城の中で適当に待っていてくれ」と蘭に告げると、コナンを自分の部屋へ連れて行った。

二人きりの空間となった部屋に入るなり、新一は突然威圧感のあ

る目でコナンを見た。
腕組をして壁にもたれかかり、コナンを見下ろす。

「……で？ 何だよ、話って」

話したければ、なんでも話せ。と、態度で伝える新一。

その目は、まるで犯人を追い詰める時にコナン自身が、いつもしていたような目だった。

ただ、この場合は恐らく王子として育った為身についた威圧感だったであろう。

コナンは、何となくむっとしながら、その場にどさっと座った。

「……どこから話していいんだか、分かんねえんだけどな」

「先ずはお前の正体から話せよ。お前何者なんだ？」

新一が警戒した瞳を自分に向ける。

まあ、突然現れた人間が、自分の事を全て知っているというのは、警戒するに値する言動であろう。

コナンはふう……とため息をついた。

「そんな警戒すんなよ。少なくとも俺は敵じゃねえ。……お前の味方だよ」

「自分から私は敵ですなんて名乗りをあげる奴は滅多にいねえだろ」

彼は冷めた目でコナンを見ながら、冷たく言った。

まあ、そりゃそうだ。コナンはそんな『自分』に苦笑する。

「……まあ聞けって。結論から言うと、俺はお前なんだよ」

「……はあ？」

コナンが落ち着いた口調で言った言葉を、新一が普通に聞き流せる筈はなく、
さっきまでの警戒した顔が一気に崩れて、素っ頓狂な声を出した。
コナンはゆっくりと話し始めた。

「俺が居た時代は、2006年だったんだ。つまり、この時代の700年後って事になる。

どうしてこんな事になったのか分からないが、気がついたらこっちに来てたんだ」

「……それで？」

眉を顰めて返した新一を一瞥し、話を続ける。

「こっちの世界に来て、700年の差云々よりも、一番不可解な事が一つ。

何故かこっちには、俺が居た世界で俺の知り合いだった人達がたくさん居て……

つまりお前も蘭も、彼女の両親の毛利小五郎も妃英理も……

蘭姫にさっき紹介された阿笠博士も、俺の時代にちゃんと存在するんだ」

「……………んで？」

信じているのかいないのか……。

新一は呆れた顔でコナンを見ていた。

「……俺は、本当は十七歳の工藤新一だったんだ」

「……どう見ても童にしか見えねえよ」

話を遮って素早く突っ込みを入れる新一に、コナンは”当たり前だよなあ。”と心の中で呟いた。

最初の、タイムスリップだの、別世界だのという話からして、恐らく信じがたいだろうが、

たとえば元の世界だったとしても、体が縮んだなんて事恐らくは普通信じない。

コナンは、自分が高校生探偵だった事や、APT4869の事……そして黒の組織の事等を事細かに説明した。

『高校生』や『探偵』という単語はこの世界では存在しないものだったのだ

話を進めるのにかなり時間がかかったが、さすが新一は頭の回転が速いようで、

一度説明した事は二度と聞き返して来る事もなく、思ったよりもずつとスムーズに進んだ。

話が終わると、新一はコナンをじっと見てため息を零した。

「……つまり、お前は700年後の俺で、高校生探偵をやってたけど妙な事件に首を突っ込んで、

その黒尽くめの男とやらの薬を飲まされてそんな童の体になっちゃまった………と？」

「ああ」

新一が要約して纏めた内容に、コナンは至極真面目な顔で呟いた。じーっと、真顔でコナンを見つめた新一は、呟いた。

「……で？ その話、信じろってのか？」

予想通りの言葉。ふっと自嘲的な笑みを零したコナンは、ため息まじりに答えた。

「信じろって方が無理な話だろうな。これは蘭にも話してない。お前だから話したんだ」

自嘲的な台詞を吐きつつ、新一を見つめる。

確かに、もし自分が新一の方だったらこんな話信じられないだろう。目の前にいるのは間違いなく自分なのだから、考えることくらい分かる。

もちろん、それは分かるのだ。

……けれど。

ずっと取り戻したかった体が目の前にある……

ならば、ここに居る自分は何なのだろう。

その『本当の自分』の筈の彼に信じてもらえないという事は、自分の存在を否定されるという事だ。

それは……とても怖い事で。

この世界では、この世界の自分は、新一として生きている……

本当の自分を失う事なく。蘭を悲しませることもなく。

悲しいような、悔しいような……けれど嬉しいような複雑な気持ちだった。

自分は、ちゃんと存在している。この世に同じ人間は、二人もいないのだ。

新一はじつとコナンを観察していた。

いくらそんな話を聞いたところで、まるで信じられないという顔で、コナンをしばらく眺めていた彼だが、その後、重々しくため息をついた。

「……お前は嘘はついてない」

彼の口から出た意外な言葉に、今度はコナンが驚く番だった。目を見開かせ、新一を見上げる。

「信じてくれるのか!!?」

「……信じたくはねえけどな」

新一は苦笑して、コナンの瞳を一瞥した。

「目を見れば……嘘ついてるかどうかわからなうんだよ。ましてや……俺の目だからな」

それに、こんな似た顔でそんな事言われたら、信じるしかねえだろう？と、新一はコナンの頬を軽くつねって複雑そうに微笑んだ。コナンも、嬉しそうに柔らかく微笑んだ。

「ありがとう、な………」 新一」

「……何か不思議な気分だな、自分にそう呼ばれるの」

「ああ、俺もだよ。どっちかってーと、新一兄ちゃんの方が慣れるかもな」

「じゃあ、そう呼べよ」

「やだね。年下みてーで気に食わねーんだよ」

どちらからともなく、笑いが零れた。二人でしばらく大声で笑いあう。

鏡でもない、自分が目の前で笑っているというのは不思議な感じが、そこがまたおかしかった。

散々笑いつくすと、新一は真面目な顔でコナンに言った。

「協力するぜ。お前の世界では”お前の蘭”が心配して待ってる筈だからな」

「あ、ああ」

コナンは僅かに赤くなりながら頷いた。

”お前の” 蘭というフレーズは、まるで恋人のようで。

そんなもう一人の自分を、新一は愛い者をみるような目で見つめた。
「お前はまだウブだな」などと言いながら、いたずらっぽい顔で頬をつついてくる。

真面目な(?) 話を終えた後、やっと冷静に戻ったコナンは、「うん?」と首を傾げた。

ずっと目の前に自分が出てきたという事実混乱していて、そこまですぐに頭が回らず、忘れていた違和感がよみがえる。

ついさっき、彼と自分達が会った時の事から、今までを思い出す。

「そっ……そう言えば、お前さっき、蘭にキスしたよな?」
「ああ」

新一は幸せそうに微笑む。

自然過ぎるその反応に少したじろぎながら、続けた。

「……そ、その後に俺を見て……『お前いつの間に俺との間に子を作ったんだ?』って……」

「ああ。言ったなあ、そんな事」

さらっと肯定する新一に、コナンの顔がどんどん赤く染まっていた。

「お前等……、こっちでは”そういう関係”なのか?」
「……ん?」

真っ赤になって言ったコナンに、新一はわざととぼけて首を傾げた。
そして、今にも吹き出しそうな顔でコナンの次の言葉を待っている。
コナンはそんな彼に腹を立てながらも、俯いて小声で言った。

「…………だっ、だからその……恋人同士っていうか……………」

ぼそぼそとした声で喋るコナンに、ついに我慢しきれなくなって彼は吹き出した。

豪快に笑われて、コナンは恨めしそうにもう一人の自分を睨む。

新一は笑い転げながら、違う違う……という風に手をぱたぱた振った。

そして、笑い涙を拭いながら言った。

「俺と蘭は、未来の夫婦だ」
めおと

……………め、お、と？

一瞬意味が分からず混乱する。

何度も何度もその単語が頭の中を通り過ぎた。

『めおと』っていうのは……つまり、何？

めおと 夫婦茶碗……とかなわけはなくて……

めおと……？ 蘭と、俺が？ 未来の……？

ちよっと待て、恋人同士っていうのを否定してそう言ったんだよな？

つまり……………恋人以上！！？

混乱して、アホな考えも浮かんだが、やっと理解出来たとき、そんな恥ずかしい事をあっさり言ったこっちの世界での”自分”に、コナンは更に赤くなった。

その反応を楽しみながら、新一は付け加える。

「正確には、親が決めた許婚同士なんだけどな。

でも、俺は妃にするなら蘭しか考えられないし……蘭だって同じ筈だ」

「いっ……許婚？」

「ああ」

最初、その話を聞いたときは嫌だったんだぜ？等と笑っている新一。

許婚、確かにこの位の時代ではよくあったかも知れないけれど。

コナンは顔を顰めた。恐らく、彼の親もあの二人……あの二人なら、そのくらいの事はやりかねない。

「お前の親って……やっぱり？」

「工藤優作と有希子だ」

コナンが顔を引きつらせている理由が分かるのか、新一も渋い顔で答えた。

「……いるのか？ この城に」

コナンは嫌そうに言った。

いや……恐らく優作がいればかなりの力になってくれるだろうが、もしこんな状況であつたら絶対に遊ばれてからかわれるだろう。

新一は同情するような目でコナンを見つめ、こくりと頷いた。

そして「頑張れよ」と言いながらポンとその小さな肩に手を乗せた。お互い、同じ親を持つ同士として、その辺では言葉を交わさずともきっちりとお互いの気持ちが伝わっていた。

とにかく、こっちの世界での自分が協力してくれるという事は、とても心強い。

この出会いが、また新たな手がかりへと繋がっていくだろう、コナンは、そう確信した。

こうして、江戸川コナンは工藤新一と出会った。

こちらの世界での、もう一人の自分……

コナンは、小さくなる事なく過ごしている幸せな彼に会って……嬉しくて、でもほんの少しだけ悔しくて……そして羨ましく感じたのだ。

其三：出会い／1、東の国の王子／（後書き）

☆作者より

どうも、朧月です！

今回もお読みいただけて嬉しいですV

それは夢か現実か……、第三話でございます。

今回は、ずっと夢見ていた新一とコナンの共演が一番のメインテーマで。

同一人物なので原作では絶対に一緒に存在する事ない彼らだけれど、原作の設定を崩して完全なパラレルとして作るのは嫌で。

なので、原作設定のままのコナンと、異世界の新一、という組み合わせで。

これから、この世界でコナンは色々な人に遭遇していきます。

どうぞ、是非次話もお読みいただければ、と思いますすへへ

感想などなど、いつでもお待ちしておりますV
それでは。第三話でした。

其の四：出会い② 父と母

コナンは、この世界に来て以来最も気を張りつめていた。

これから会う人物達に、いかに今の状況を説明したらよいのか……その後の反応が恐ろしい。

あの異様なテンションで熱烈な大歓迎を受けた後……

三度の飯より息子をからかう事が好きな性質の二人にしばらくの間遊ばれるであろう。

「……やっぱり俺、会うのよそうかな」

数分後の未来にの事を想像して、コナンは顔を顰めた。

新一はその様子を眺め、苦笑する。

新一としても、コナンのその気持ちは充分過ぎるほど分かるのだ。

「何言ってるんだよ。そりゃ最初は派手な歓迎を受けるだろうけど、きつと力になってくれると思うぜ？」

お前は分かっていると思うけどあの二人：特に父さんほど強力な助っ人は居ないからな」

悔しいけどな……と付け加えた新一を、コナンが見つめた。

やっぱり結局どこに行っても俺はあの父さんに勝てねえのかよ……そう感じて小さくため息をついて見せると、新一も同じようにため息をついた。

さすがは同じ人間である。

コナンと新一は、今優作&有希子が居る部屋に向かっていた。

城の中に二人がいると聞いた時、最初逃げようとしたコナンを新一

が何とか説得し、今に至るといいうわけだ。

「でもよ、父さん達って一応王と王妃なんだろう？
だったら最初は敬語で型どおりの挨拶した方がいいのかな？」

コナンが新一に尋ねる。

あの親にそんな真面目な挨拶をするのは気が引けるけどなどと考えながら、その様子を想像して顔を引きつらせた。

新一はその問いに笑いながら答えた。

「いない、いない……そんなの気にする人達じゃないから。まあ、それはお前も分かってるんだろうけどな……」
「じゃあいつも通りでいくぞ？ いいんだな？」

コナンが念を押すように言うと、新一は少し不機嫌そうに言った。

「お前、俺だって王子だぞ。あの二人への態度で悩むなら、俺への言葉遣いと態度改めたらどうなんだよ」

「……自分相手に敬語使えってのか？ 冗談じゃねえ」

コナンはふいっとそっぽを向くと、新一はつまらなそうにそれを眺めた。

確かに、自分が逆の立場だったら絶対に嫌だ……嫌だけれど……
見た目年下にしか見えない彼に、王子である筈の自分がこんな態度を取られるのは、どうであろうか……何だか気に入らない。

「……それにしても、お前随分話し方が現代風だな。
蘭だって俺から見れば昔の言葉を喋ってるようだけど、この時代の姫の言葉って事考えるとやっぱ変だし」

コナンが首を傾げて言った。

確かに蘭は自分の事をわらわなどと言っていたりするが、それにし
たって言葉が素直に通じ過ぎている。

本当のこの時代の言葉だとしたら、もっと違和感を感じるだろう。
新一は不思議そうな顔で考え込むコナンを見つめた。

「何言ってるんだ？　これで普通だろ。どうおかしいってんだ」

「いや……そもそも『俺』とか言ってる時点でおかしいだろ」

「お前だって自分の事『俺』って言ってるじゃねえか」

何を当たり前なことを言っているんだという顔で、彼はあっさり
と言った。

自分が知っている昔の世界とは少し違っているのだろうかと考えた。
大体、蘭の喋り方は違和感がありすぎだ。

完璧なお姫様言葉か、完璧な現代娘言葉かどっちかならいいのだが
……

『わらわ』だの言ってる割にコナンの事は『コナン君』……全くも
って、妙である。

そうこう言っているうちに、優作達がいる部屋へ到着してしまっ
た。

きてしまったものは仕方がない。ため息をついたコナンは、覚悟
を決めて、中に入ろうとその戸に手を伸ばした。
すると、突然勢いよくそれが開いた。

コナンが驚いていると、中から出てきた女もまた驚いた顔でコナン
を見つめた。

「し……新一？」

「げっ……！！」

突然すぎたため、コナンはついそう言ってしまった。
しかし、彼女は目を丸くしてコナンを見つめている。
そして、次の瞬間……

「優作く！ ちょっと来て。新一が縮んでるわよ!!」

言葉の内容の割に嬉しそうな顔。

そして、部屋から出てきたもう一人の男。
言うまでもなく、工藤優作である。

「本当だ。これは驚いたな。でも有希子、新一ならそこに居るよ?」

そう言って、ふすまの陰になっていて有希子からは死角だった場所に立っていた新一を指差した。

彼女はその新一を見て、「あら本当」とどけた声を出し、もう一度コナンに視線を戻した。

「じゃあ、この子は誰なの?」

有希子は困ったような顔で優作に言った。

優作はじっとコナンを観察した。

「確かに……子供の頃の新一にそっくりだな」

ふむ……と考え込む姿勢をとった優作に、これ以上妙な誤解をされたらたまらない、

と、コナンは慌てて自分の正体を明かした。

「俺は2006年の人間で、工藤新一が変な薬を飲まされて身体を縮められた姿なんだ」という所から始まり、

蘭の家に居候している事や小学校で少年探偵団等というものを結成

しているのだという事……

そして、黒の組織の奴らの事や灰原哀の事など、実に細かく説明した。

二人は真面目にその話を聞いていた。

こういう話を真剣に聞いてくれるのは、まあこの両親のいい所……なんだろうが。

話が終わった後、有希子は歓喜した顔で、コナンを大げさに抱擁した。

「ちよっ……突然何する!!！」

こうなるであろう事は充分予想していたけれど、一応抵抗してみる。しかし、有希子は放すどころか余計きつく抱きしめて頬ずりをした。

「だって、あなたはもう一人の新ちゃんって事でしょ？ 息子が増えたみたいで嬉しいじゃない」

「やめろ！ 放せ!!！ この時代でもやっぱこういう性格なのかよ!!！」

いくらじたばたしても、子供の力で有希子には叶わない。

新一は苦笑しながらその様子を眺めている。

それを微笑ましげに見ながら、優作はからかうような笑みを浮かべ、二人を傍観していた新一に言った。

「それにしても新一、そんなドジを踏むとはまだまだ甘いな」

「ドジ踏んだのは俺じゃねえ!!！」

新一は思いつきり不機嫌な顔で、あいつだ!と有希子に絞め殺されそうなコナンを指差した。

けれど、それが通じる人ではない。優作は楽しそうに笑いながら、言葉を返す。

「しかし、『あれ』は間違いなく別の世界のお前なのだろう。だったら同じような事じゃないか」

そう言って、コナンにもその笑顔を向ける。

コナンはむっとしながらも、有希子の腕から逃れようと必死だった。

一通り大歓迎を受けた後、ぜえぜえと言っているコナンに優作は言った。

「事情は分かった。それでお前はどうするんだ？」

「……どうって？」

コナンが首を傾げると、優作はふっと柔らかく笑って言った。

「このままここで帰る方法が見つかるまで、一緒に暮らそうと言いたい所だが」

「……え？」

コナンは優作と有希子を交互に見つめた。有希子も嬉しそうに頷いている。

「新一は元々私たちの息子なんだから、この城に住むのが自然だと思っわよ」

「あ……でも……………」

「蘭姫の所を離れたくない気持ちも分かるが、蘭姫にならいつでも会える」

コナンは困惑した瞳で二人を見た。

確かに、それがもつとも自然な事だ。

蘭は帰る方法が見つかるまで居てもいいとは言ってくれたが、本来ならばここが自分が住むべき場所なのだ。

自分の世界では両親が住んでいた所がロスだったから、あそこまで日本に残ると言い張ったが、今は全く状況が違う。

「……分かった。俺もここに住むよ」

蘭が居ない所で勝手に決めてしまったが、これが自然なことなのだ。蘭にも事情を話さなければならなくなってしまい、既に三回目のそれに疲れきったコナンは重々しくため息をついた。そこで見ていた新一は、コナンを哀れむような目で見た後言った。

「……お気の毒に」

その言葉が何となく楽しそうに聞こえた為、コナンは僅かに腹を立てた。

「では、コナン君は新一だったのか？」

全てを話すと、蘭は驚いた顔でコナンを見つめた。

コナンは黙って頷いた。

どうしても驚きを隠せないようではあったが、「だからそんなに似ているのか」と納得したように笑っていた。

「だから、こいつはこっちで引き取る事にしたんだ」

新一が隣で蘭に言った。

少し残念そうにしていた蘭だが、やはりそれが自然だなと微笑んだ。

「ごめんね、蘭ちゃん……いつでも遊びに来ていいからね」

『どちらに会いに』とは敢えて言わなかった有希子の言葉に、蘭は笑顔で頷いた。

「分かっております。……コナン君もいつでも遊びに来てくれるな？」

「もちろんだよ」

コナンは元気よく頷いた。

そんなコナンを見て、にっこりと微笑んだ蘭に、コナンも微笑み返した。

彼女を見送った後、コナンは優作に呼び出された。

優作の部屋に入ると、そこには有希子も居て、二人ともいつになく真剣な顔をしていた。

その真剣な顔に、コナンも思わず姿勢を正していた。

「何だよ？」

そう言うと、優作は笑顔で話し始めた。

「お前は、オレたちの息子だ」

「……ああ、ただし別の世界で、だけどな」

突然真面目な顔でそんな事を言われて一瞬驚いたが、コナンはそ

う付け加えた。

そうだな、と返した優作の顔は、やはり真剣だった。

そんなに改まって、一体何を言うつもりなのだろうと考えた。

優作は、言った。

「そしてお前の世界では違っていたようだが……オレはここの国の王だ」

「……分かってるけど」

「何を言おうとしているか……分かるか？」

その問いに、コナンは首を傾げるしかなかった。

優作はまだ青いなど言いながら次の言葉を言った。

「つまり、お前には正当な王位継承権があるという事だ」

「……………え？」

予想も出来なかった言葉に、コナンは驚いた。

それは、コナンが一国の主になりうる資格を持っているという事。

一体何を考えているのだろうか、優作の考えが読めず、コナンはその表情を伺った。

優作は続けた。

「どうせならな。お前の事は、第二王子として迎えたいと思っている」

「……………第二……………王子？」

呆然と、優作の言った言葉を繰り返す。

「自分が？」と、何と表現していいのか分からない気持ちになった。

「正式に、国民にお前の事を発表すれば、ここの国民は皆認めてく

れる筈だがね」

つまり優作が言うのは、コナンの正体を国民に教えて、王子として新一と同じ地位につけさせるという事だった。

「その方が、情報も集まりやすいし……もし帰れなかったとしても、王子としてここで暮らせるんだ」

”もし帰れなかったとしても……”、というのはともかく……。

コナンはその場で悩んだ。優作はじつとその姿を見つめた。

その様子は、確かめられているかのようにも感じた。

優作は「だが……」と付け加える。

「もちろん、決めるのはお前次第だが。”王子”というのが嫌だというなら無理には言わない。

しかし、そうすれば周りに不審がられることなく親子で居られるんだよ」

「そうよ、新一。皆に協力してもらった方がきっかけも見つかるかも知れないわよ」

二人とも優しく笑っている。

あくまで、コナンの答えで、全てが決まる事ではあるが、新しい息子を迎え入れる態勢はもう充分整っているようで、コナンの部屋ももう決まっていると言う。

「けど、俺は元々王子じゃないから……」

「案ずる事はないのよ。王子なんて位、形だけなんだから。

それに、帰る時はみんなに事情を話して帰ればいいの。皆喜んで送りだしてくれると思うわ」

この国の人たちは、皆優しい人ばかりだから。と言って有希子は微笑んだ。

有希子としては、その方が嬉しいのであろう。そうなる事とても勧めているように思った。

そんな二人の思いに、コナンは真剣にじっと考え込んだ。

確かに、その方が色々な手間が省けるかも知れない。

けれども、王子になったら色々とおちろこちら動き回る事も出来なくなるだろう。

「俺は……一刻も早く元の世界に帰りたいと思っているんだ。だから、王子にはならない。

そんなに突然王子が誕生したり居なくなったりしたら、皆混乱するだろう」

「でも、新ちゃん……」

「有希子」

反論しようとした有希子を止めた優作は、コナンの瞳をじっと見つめた。

「本当にそれでいいんだな？」

「ああ」

うなずいたコナンの強い瞳を見ると、優作はふっと笑った。

それがコナンが出した答え。

「お前なら、そう言うだろうと思っていたよ」

「……新一、王子にはなくても、私たちのことは父さん、母さんって呼んでいいからね」

有希子も少し悲しそうな、優しい顔で微笑んでいる。

コナンはゆつくりと二人に笑って見せた。

「ああ、ありがとう」

結局、王子になる事は拒んだが、二人の息子として育ててもらえる事になった。

ただ、その事を城の中の人が知らない筈はなく……

それを知った人達に、あくまで城の中でだけ、彼は王子として扱われる事になる。

コナンのものとしてあてがわれた部屋はとても広く、隣の新一の部屋の様子と殆ど変わらなかった。

いつ用意するほどの時間があったのか知らないが、ちょうどコナンの体のサイズの着物までその部屋にはたくさん置かれていた。

一般国民にしては豪華すぎるそれが、『新一王子』が幼少時代に着ていた服だという事が判明した時、コナンはとても渋い顔をした。

こっちでも結局、『自分』のお古なのか……

そう言って少しの間拗ねていたという。

欲しいものがあつたら何でも言えと言われたが、その部屋にはすでに充分すぎるほど揃っていたので、新たに何かが欲しいという事はなかった。

与えられた部屋でくつろいでいると、突然新一が中に入ってきた。

「よお、もうその部屋慣れたか？」

にこやかに挨拶して、ずかずかと入ってくる。

コナンが「何しに来たんだよ」と聞くと、新一は目を輝かせて言った。

「お前高校生探偵だったんだろ？ お前が今まで解決した事件の話、聞かせてくれよ」

コナンは僅かに驚いたが、やっぱりこれは自分なのだと再度納得した。

コナンは「ふう……」とため息を零し、その後色々話した。

工藤新一として、そして江戸川コナンとして解決した事件の事を。わざと事件の状況のみを話してやると、新一は犯人やトリックを次々と言いつつ当てた。やはり育ちが違っても、推理力は少なくともコナンと同等なものがあるようだ。

二人はその後夜遅くまで、ずっと事件の話をし合っていた。部屋に帰る時の新一は実に満足げで。

上機嫌な顔つきで部屋に戻っていった。弟のような存在が突然現れて、しかもいい話し相手にもなって。これからは全く退屈しなさそうだと、思っていた。

こうして、コナンは城に住むもう一つの家族に出会った。

この世界でも相変わらずマイペースな両親達だったが、会えてよかったと思った。

もうすぐ、この世界に来てから二日目の夜が過ぎようとしている。まだ二日目。この頃はまだ、きつとすぐに帰れるだろうと思っていた。

帰れる宛もまだないけれど、きつとすぐに見つかる筈だ、と。

けれどまさかこれからずっと長い間、ここに居る事になるとは、
全く考えていなかった。

其の四：出会いゝ2. 父と母（後書き）

えっと、どうもこんにちは！

朧月でございますっ！

第四話め。

こっちの世界での優作さん、有紀子さんとの出会いです。ちょっと最後の部分の会話変えようかと思いましたが、あまり変えず。

そして、次は幕間となります（^^v

シリアスラヴァーなお方、お待たせいたしました！
気になる現代編！！

ちよっと元祖よりボリュームアップさせたい次話。

頑張ります＞＜；

それでは、今回も読んでいただきましてありがとうございます！

感想などなど、いつでもお待ちしておりますv

次回も是非、お楽しみを^^

其の五：幕間1、Heiji（絶対）

こちらは、元の世界。現代の、本来コナンがあるべき世界の病室の中である。

「ねえ、目を覚まして」

ベッドの脇で、姉ちゃんはまだ工藤の手を握っとる。ほんで和葉は、今にも泣き出しそうに姉ちゃんを励ましとって、ホンマに辛そうや。

……なあ、工藤。お前このままでええんか？

あん時、俺はちゃんと気付いとったんや。せやのに、助けられへんかった。

一コマ一コマが頭にこびりついて離れへんねん。

丸一日経つちゅうのに、誰も工藤から離れようとせえへん。まあ、面会時間無視しとるから可能なんやけど、病院長が”眠りの小五郎”の大ファンやから特別や、て。……たまにはおっちゃんも役に立つんやな。

ベッドを囲んどる皆は、工藤の身体を、暗い顔して見つめとった。呼吸かて、機械で酸素を送られへんと出来へんねん。痛々しいて

しやーないやろ？　まるで、工藤の魂はもうそこにあらへんのに、機械が無理やり命を繋ぎ留めとるみたいや。

こんなん、工藤やない。別人見とるみたいで、腹立つんじゃ。ここに居る全員辛そうなんやで？　姉ちゃんなんか今にも倒れそうや。なあ工藤！　何で起きへんねん。いつもみたいに子供のふりして、姉ちゃん安心させよったらええやんけ！

「スマンけど、俺、ちょお、着替えてくるわ」

和葉だけがこっち見て、小さく頷いた。病室を出て、ガラス越しに見えよる工藤を睨む。

どないしてくれんねん！　アホ。お前を抱き上げた時に俺の気に入った服が台無しや。青い服がべっとり真っ赤になってしもて、クリーニング出しても落ちへんやろ！

いつもやったら、悪い悪いとか言うて苦笑交じりな返事が返って来る筈やんけ。何で黙ったままなんや。

病院の屋上へ向こて、階段を上った。屋上やったら、何やっても聞こえないやろ？　せやから、思い切り壁に拳を打ち付けたんや。

「……アホ」

呟いても、工藤には届かへんのやろな。

「なあ、俺はお前に何か言いたくても言えへんのやぞ？」

せや。ぶつけたい言葉はいっぱいあんねん。絶対死ねへんて言う

とったやろ？ お前死んだら姉ちゃんどうなるんや。早よ目え開けろボケ！ 見てみ、思いつくだけでもこんなに出てきてしもたやんけ。

それやのに……アホ！！！！

飛び降り防止に張られとるフェンスめがけて、走った。ガシャーン、っちゅう激しい音が響いて揺れた金網に、俺の拳から出た血いもついとるけど。痛ないわこんなん。……痛いっちゅうねん！ どっちや、俺。

「あー。何でこないな事になってしもたんや……」

ホンマやったら、今頃楽しいイベントの最中やろ。皆で力合わせて優勝して、優待券と賞金手に入れて喜んどる筈やったんやないか。

せやのに、皆台無しや！

しばらくしゃがんどったけど、何や馬鹿馬鹿しくなってきた。ふ、と一息ついて、立ち上がる。

「……そろそろ、病室に戻らんな」

アカン、服が血まみれのまんまや。

「……着替えてくる言うて病室出たんやったな」

向き直って、外に着替えを買いに行ったんや。洋服屋まで、病院からそない歩かんかった。

にしても。あのオバハンも、店員も、この不審者を見る目、やめてくれへんかなあ。まあ、こないな血まみれの服着とったら、しゃーないんやろな。とりあえず何でもええわ。さっさと買うてしまお。手前の緑色しとる服を手にとって、会計を済ませた後トイレで着替えさしてもろた。元の服は、店で貰った紙袋ん中や。

病室は、さっきと随分イメージが変わった。いや、工藤が回復しとるわけやないねんけど、皆のイメージがちゅう意味や。

こっち見て微笑んだ和葉が病室に一人居るだけで、他には誰も居らへんみたいや。

「二人はどないしてん？」

「蘭ちゃんは、電話しに。博士やコナン君の両親にもこの事教えなきて言うて……。おっちゃんは、ウサ晴らしに煙草吸いに行っしもた」

「そうか……」

和葉の声に、いつもの元気があらへん。何か言わへんと、思っとなら、和葉の目が潤みだしよった。眠っとる工藤を見ながら、震えて消えてしまいそうな声を出す。

「……平次、コナン君ホンマにもう助からないんやろか」

「アホ、そんなわけあるかい！！　こいつは姉ちゃん残して死んだりせえへん」

何て事言いよるんやこの女。つい声張り上げてしもたわ。一瞬息が止まりそうになったやんけ。そないなきよんとした間抜け面で見てるなや、アホ。

「そやな。コナン君、蘭ちゃんの事いっつも励ましとったから。…でもお医者さんが、もう駄目やて……」

ちょ、待つ……あ、アホ。泣きよったこいつ。まあ、確かに割り切れへんっちゅー気持ちも、判らんわけやない。

……結局、俺がしっかりせんとアカンか。

「……俺達に出来るのは、こいつを信じる事だけやで。大丈夫や、現に、いつ死ぬか分からへんて言われながら、ちゃんと一日しっかり生きたやんか。信じとれば、必ず戻ってくるやろ」

「……平次ってホンマ、コナン君のお兄さんみたいやね」

根拠はあらへんけど、俺はそう信じとる。それにほれ、和葉かて涙拭ってまたちゃんと笑えたやんか。吹っ切れたんやろ？　今はいつも通りの瞳に戻れたやんか。

「平次。アタシも、コナン君の事信じとるよ」

和葉の笑顔見たら、なんやほっとしたわ。俺の顔も、また綻ぶ。俺もさっきまで、あの暗い雰囲気だしとったんか？　なんや、新鮮な空気吸ったら随分冷静になれたみたいや。

「お前も、ずっと病室に居ると気が滅入ってしまうで。外の空気で

も吸って来いや。ここには俺がついといたるから」

「うん、ありがとな……平次」

病室から出てく和葉の後姿は、少し元気そうやって、安心した。

よし、もう和葉は居らへんな？ 外を確認したら、和葉の姿はもう小さなっとなった。これでやっと俺と工藤の二人きりや。今やったら、やっと言いたい事言うてすっきり出来るで！

「なあ？ 歯がゆい気持ち分かってるんか？ 自分」

和葉がさっきまで座とった席に腰掛けて、怪我してへん部分を軽く小突いた。

「……和葉に言うた事、間違っへんのやろ？ お前、こんな事でくたばるような奴とちゃうやろ？ お前も負けへんて頑張っとする所やて、信じとるからな！」

怒鳴りつけたろ、て思ったん、いざ口を開くと、ダメやな。

緩い言葉ばかりや。

反応せえへん工藤に、むっとした。

「なあ……お前言うてたやろ？ ホンマの身体取り戻して姉ちゃんのとこに帰るまでは死ねへんて……。その言葉、嘘やないやろ！？」

届いんのか届いてへんのか判らんけど、聞こえてないとは言わさへんぞ！ 無機質な機械の音に、何の変化もあらへんけど、それでも構わへん。

「お前が死んだら、どないな事になると思う？ 姉ちゃんは一気に

工藤とコナン……二人とも失う事になるんやで。それだけやない。工藤の事は死んだなんて知らずにずっと永遠に待ちつづける事になるんや。お前そんなん嫌やろ」

それが一番最悪の結末や。俺は、探偵がそういうもんやて判つてるから、ある程度平気やと思うけど。姉ちゃんは、可哀想やんけ。姉ちゃんの心ん中、殆ど工藤とコナンで構成されとるんやないか。ちゅー位、その話ばかりしとるやんか。それが二ついつぺんに失つてみい、考えるだけで痛々しいてアカンやんけ。

あー、それにしてもじれったいったらあらへんやろ、これだけ言うても、何の反応もせえへんのやで？ 聞こえとんのやったら、せめてこの機械音だけでも少し乱れてもバチはあたらへんやろ。

ずっと鳴り響とる心電図の音と、人口器からの呼吸の音。とつたら、死んでしまふんやろな、そんなに弱弱い姿やけど。

「それでも、俺は信じとるからな……！ 絶対、大丈夫やて……！ 目え覚ますて信じとるからな！ 裏切りよったら、承知せえへんぞ……工藤……！」

段々、声のボリュームも上がってきよった。言葉に力がこもってしまふんも、ちよつとずつ俺の理性が消えてつとる証拠やねんな。

「目え開けろ！ ほんでいつもの憎たらしい声で『誰が死ぬかよ、バーロ』とか言うてみ……！」

あの生意気な顔で『余計な心配してんじゃねえよ』とか言うてみろや……！」

アカン、危うく胸倉つかんでまうところやったわ。これだけ活入

れたんやから、ホンマに目え覚まさんと承知せえへんぞ？

俺は、工藤が目え覚ましよるまで、大阪には帰らへんて決めた。納得出来へんやろ、せめてあの犯人捕まえて、敵とらな。それに、俺しかコナン越しやない工藤に、直接呼びかけてやれへんしな。

しばらくして戻って来た姉ちゃんは、さっきより顔色もよくなっ
とった。

電話したucciゅうてたからな、人の声聞くと落ち着けるもんやろ。
こっち見るなり、軽く微笑んどる。

「戻ってたのね、服部君」

ちゃんと俺に気付いたのも、さっきとは偉い違いや。さっきはま
るで工藤しか見えてへんかったみたいやからな。
笑い返して、応える。

「姉ちゃんも、電話終わったみたいやな」

「うん。博士がコナン君の両親に伝えといてくれるって」

声に元気がないのは、落ち込んでるucciゅうより病院やから気遣
つとるucciゅう雰囲気やな。

「あのジイさん、驚いottaやろ」

「そりやそうよ。コナン君は元々博士の親戚の子だったんだから。
哀ちゃんも連れて、仕度できたらすぐ来るって言った」

隣に座った姉ちゃんが、今度はじつと工藤を見つめた。

「コナン君の様子、どう？」

「大丈夫や。ちゃんと頑張っとなるみたいやで」

少しでも元気付けたろ、てめっちゃ明るい笑顔見せたつもりやねんけど、姉ちゃんは相変わらず微笑んで、静かな声で応えよる。

「私なら大丈夫よ、服部君。コナン君はきつと、またあの無邪気な笑顔を見せてくれる。また『蘭姉ちゃん』って私のこと呼んでくれる。だって、だって私ね……………」

何や？ 不思議に思ったんやけど、工藤の頭を撫でる姉ちゃんが言う続きを、黙って待った。愛しくて仕方ないっっちゃう目で、じっと工藤の事見とる姉ちゃんは、ほんまに聞こえ辛い小さい声で呟いた。

「約束したのよ、待ってるって……………」

姉ちゃんの口元に注意してへんかったら、機械音に消されて聞こえなかったかも知れへん言葉や。思わず、姉ちゃんを見る目を閉じる事を忘れてしもた。

待っとなるっちゃう約束は、確かホンマの工藤が姉ちゃんに交わした約束やったやろ？

まさか……………」

「だから、私何があっても、信じて待ってなきゃいけないの」

「ね、姉ちゃん……………あんた、こいつの事……………」

「ねえ、服部君。真実は、いつも一つでしょ？ ……この人ね、嘘が大っ嫌いなよ」

笑っとなる姉ちゃんの顔が、めっちゃ強く見えとる。絶対に裏切ら

へんて、心から信じとる強さ、や。

気付いとるんか？ 工藤の事、全部。そういえば、あん時の工藤も確かそんな事言うて……

聞きたいと思たんは事実やけど、聞いたり出来へんかった。俺が聞いたら、肯定してしめたのと同じやからな。けど工藤、覚悟しとき。元気になったら、姉ちゃんに詰問されるかも知れへんぞ？

「けど、安心したわ。姉ちゃん思ったより元気やな」

「……そうね、昔から決めてたから。いつも強いこの子が、壊れかけて苦しくなっちゃった時は、私が力を分けてあげるのよ。そうすればきつと、また元気になってくれるから」

「……何や、俺も姉ちゃんに力分けられたみたいや」

強い姉ちゃんやな、さすが工藤が惚れるだけあるんやな。オレもちょっと見習わせてもらわんと、負けてられへんやんけ。

何やクスクス笑つとる姉ちゃんに、眉をしかめて見せる。

「だって、服部君は私が言う前からコナン君の事信じてたんでしょ？」

「……まあ、そらちよつとはな」

「ううん。病室でコナン君と二人っきりの時、絶対目を開けるって信じてた顔だった。本当は私、服部君のおかげで信じようって思えるようになったんだよ」

ありがとうなんて、感謝されてもなあ。こっちこそ、ありがとうや。工藤の女としか思ってたへんかった姉ちゃんに、こないな敬意を感じるっちゅうんは思わなかったで。

おっちゃんや和葉が帰って来たのは、それから十五分位経った頃やった。

興味なさそうにしながらも、工藤をちらちら気にするおっちゃんには、少し笑いを堪えた。……相変わらず、素直やないおっちゃんや。

和葉は、病室に入っすぐ姉ちゃんに寄り添った。女同士の友情っちゅうんも、悪いもんやあらへんな。

工藤……お前幸せやな。

こんなに皆お前の事大切に思われとって、これで万が一でも死んだりしてみ、承知せえへんからな。

お前は絶対生きるんや！ 何があっても、絶対また目え覚ますんや！！ それまで、何べんもお前に活いたるわ。

信じとるから、負けるんやないぞ………工藤！！

「こいつは、絶対に……大丈夫や！」

病室に居る皆を元氣付けたらと思って、自分を奮い立たせる意味も込めて言うた言葉や。でっかい声を出しすぎたやろか、こっち見る目が痛いんやけど。

数秒の沈黙があったあとに、面倒くさそうな声をあげたんは、おっちゃんやった。

「んなこた分かってんだよ。こいつは見かけより随分しぶといからな」

「あたしも信じてんで！」

「絶対大丈夫だよね……服部君」

明るく頷いた和葉と、静かに芯の強い微笑を浮かべた姉ちゃんと、皆で信じて待つとるからな。

絶対に、大丈夫や。

其の五：幕間1、Heiji（絶対に）（後書き）

はい、お待たせしました現代編。

元祖の方で、色々感想聞いた所だと、現代編が好きって言う方と、別世界編が好きっていう方と結構均等で（笑）

幕間、という形で挟ませていただいている現代編。

一度改訂した当初は、平次の言動行動が元のまま、色々私的な違和感満載の平次でした（^|^-）；

元の文が三人称なのも気にして、思いきった人称崩しが出来なかったのも、ちょっぴり嫌な部分で。

でもさあ、幕間はそもそも各キャラ視点からの番外編だもんね。がたつと雰囲気壊しても、それはそれでその方がいいんじゃないかという結論に達しました。

さて、今回の主役はもちろん見て分かるとおり、平次です。

この現代編では、『幕間』という形で、異世界編で話が進んでいく中、まあ……3話につき1話ぐらいづつかな？

その辺は気まぐれですけど、それぞれ別の主人公を置いて、その人視点から展開していく話となっております。

幕間を挟む事で、まあ……現代のコナン君がどんな状況か、異世界編ですっかり忘れてしまわれるであろう事を、思い出していただければなあ、と思っております。

さて、というわけで。今回も読んでいただきありがとうございます！

是非、次話も見捨てずお願いいたします^^

次回は、再び異世界編です（^^v

それでは、感想などなど、いつでもお待ちしております。^^

其の六：暗雲く西からの情報く

パカラッパカラッ……

馬蹄の音が響く。

馬上に居る彼は慣れた様子で馬を乗りこなしていた。

彼は顔に不敵な笑みを浮かべ、目的の場所へ向かっていく……

目的の場所へと。

そして、舞台が変わるが、所は新一達の城……

城の入り口から入って奥の方にある大きな部屋。

そこが、元からあった新一の部屋と、コナンにあてがわれた居場所である。

起きぬけで伸びをして、ふと気になった隣の部屋の住人を訪ねるべく、部屋を出た。

「よう……って、何やってんだよ、お前」

挨拶の為に部屋へやって来た新一は、何やらそこら中着物で散らかった部屋を見て、顔を顰めた。

そしてその部屋の主は、何やら散々に散らかった着物を、更にこそごそとあさっている。

その意味不明な行動は、育ちのいい新一にとって、行儀が悪い以外

の何物でもないものだ。

顔を引きつらせ尋ねた新一に、コナンはただ黙々と” 事に夢中になりながら、そちらを振り向こうともせず”に答えた。

「ないんだよ、眼鏡が。あれがないと……」

困ったように頭を掻き耂り、着物の中をまさぐる。

一瞬理解に苦しみ、少し考え込んだ新一が答えた。

「めがね……？ ああ、お前が変装用につけてたってあれか」

「ああ」

コナンが返事をする、新一は呆れた顔戸のすぐ横の壁によりかかり、面倒くさそうに言った。

「あんなもん無くてもいいだろ。むしろある方が不自然だったの」

ここではそんなの存在しないからな。とやる気がなさそうなくびを一つ。

しかし、コナンは眼鏡を探すのをやめようとはしない。

そのあまりにも必死な様子に、興味がなさそうにしていた新一もさすがに気になって

「そんなに大切なものだったのか？」とコナンを覗き込んだ。

コナンは大量の着物に埋もれながら、答えた。

「あれ、ただの眼鏡じゃねえんだ。言っただろ？ 阿笠博士の……」

「ああ、聞いた。お前の世界の博士が作ったものなんだろう？」

それは確かに、状況説明の中でしっかりと聞いたけれども、

「だからって……」と、彼は部屋中を見渡した。

「何でこんな着物をばら撒いて探さなきゃいけないーんだよ」

あちこちに散乱している着物を摘み上げながら、コナンをジト目で睨む。

その視線に気付き、顔を上げたコナンも、自分に対して呆れているのか、半眼で答えた。

「しゃーねえだろ？ 昨日着物しまった時に眼鏡も一緒にしまったままだったみてえなんだよ。

寝ぼけてたから、こんな大量の着物の中に無造作に紛れ込ませちゃったんだ」

はあく……と重々しくため息を付いたコナンを、やはり呆れた顔で見つめる新一。

ふっと呆れたため息が漏れる。

「お前……ドジなあゝ。本当に俺の来世なのかよ？」

「うるせーっ……俺だってまだ混乱してんだよ。こんな訳分らない所に突然来ちゃって。

大体、妙なんだよな……この時代。そもそも何でお前が”王子”なんだよ？」

「……何だよ、似合わないってのか？」

新一はむっとして、不満げに答えた。

しかし、コナンは「そんな事は言っていない」と首を振る。

至って真面目で静かな返答をしたコナンに、彼は眉を顰め、怪訝な表情を浮かべた。

「俺が妙って言いたいのは……その”王子”って呼び方だよ。そりゃ、外国ならそう呼応もすると思うけど、普通この時代、日本だったら殿とか若とか言うだろ？」

それが何で王だの王子だのって……皆言葉遣いも変だしよ」

納得が行かない表情を浮かべて話すコナンだが、それを聞いた新一は、心外だと言いたげな顔でそんな彼を見た。

「……なに言ってるんだ。殿と若も王と王子も同じ意味じゃねえか。俺の世界では皆自分に似合った言い方で呼んでるぞ。

俺も父さんも、殿とか若とかより王と王子の方が似合ってるだろ？」
「そうかあ？」

常識だとしても言うかのように自信満々な顔で笑った彼に、顔を顰めて答える。

これが本っ当に自分なのだろうか、コナンは苦い顔で小さくため息をついた。

そんな彼にお構いなしで、新一は話を続ける。

「それに、言葉遣いって言ったよな？」

”変”とか言いやがったけど、俺に言わせればこれが普通の喋り方なんだ」

「あっ……そう」

コナンは納得が出来ないまま呆れた返事を返した。
このまま待っていても暇なだけ。

仕方がないから手伝ってやろうと、ふと足元の着物を持ち上げた新一は、着物にぶら下がったそれを見つけた。

耳にかけるモダンの部分が着物の衿の部分に引っかかってしまっていたようだ。

すい、とそれを取り上げ、自分の記憶にある”眼鏡”というものと照合する。

「おい……あつたぞ」

「これだろ？」と、彼はそれをコナンの前に突きつけた。

後から来た『自分』に先に見つけられたのが僅かに悔しくて、コナンは渋い顔で礼を言った。

眼鏡を受け取り、着物の胸元にしまう彼を見ながら、新一は言った。

「それより、早く食事に行こうぜ」

待っている間、腹が減って仕方がなかったんだ。

そんな本音はとりあえず自分の胸の中にしまい、新一はコナンの手を引いてそこへ向かった。

長い廊下を新一の後について歩きながら、コナンはふと思った事を彼に尋ねた。

「なあ、確かさっき自分に似合った言い方で呼んでるって言ってたよな。じゃあ、小五郎のおっちゃんは？」

「……小五郎のおっちゃん？」

先に歩く新一は、ぴたりと足を止めてコナンを振り向いた。

一瞬、誰の事が分らなかったようで、思い出したかのように「ああ、蘭の父さんか」と答える。

その反応に、あまりこちらでは親しい間柄にないのだろうか？と考える。

「あれは、自称ダンディな王様だけだな……皆からはバカ殿って影で呼ばれてるよ」

コナンは想像して吹きだした。

バカ殿……

あの小五郎を想像するたび、なんてぴったりのニュアンスなんだろうと笑いが止まらなくなる。

実はこの時代の人たちは素晴らしいセンスを持っているのではないだろうか……

等と小五郎に対してとても失礼な事を考えてながら、腹部を抱え、苦しそうに爆笑している。

「おい、いくらなんでも笑いすぎだぞ」

新一は苦笑しながらコナンに言った。

さすがに、許婚の親を笑いのネタにする事は気が引けるのだ。

しかし、コナンはしばらくの間、それを止める事は出来ず、笑い続けていた。

朝食は豪勢なメニューだった。

朝とは思えないほどの贅沢な料理……それを、家族で囲んで食す。

昨日の食事でもそうだが、会話のネタにあがるのは、殆どがコナンの話。

やはり、その存在は珍しいのであろう。

色々な質問に答えるのに疲れながら、それでもコナンは自分の事情を、細かく伝えた。

朝食を済ませた後、二人は庭に向かった。

新一の話による所では、毎日素振りをすることがこの王子の日課らしい。

その辺は自分とは違う所だな……と思いつながら、コナンも後に付い

ていった。

一緒に庭に出ると、新一はコナンに脇差を渡した。手にとった瞬間、ずしりと来る感触。

真剣とは結構重いもので、例え脇差であっても普段鍛えていない子供の体にはかなり重い。

コナンが新一を睨むと、彼は言った。

「お前もここにいて間くらい素振りしてろ。いざって時、刀が使える方がいい。」

って言っても、お前はまだ脇差ぐらいしか振れないだろうけどな」

言いながら、新一は大刀で素振りを始めた。

立派な日本刀。「こうやんだよ」と見本を見せるように、彼は形どおりの素振りを繰り返した。

コナンはそんな彼を、じっと観察して、尋ねる。

「こっちの世界じゃ……俺って強いのか？」

「当たり前だろ。弱くて王子が務まるものか。小さい頃でも命だつて狙われる立場なんだからな。」

王子として生まれたら、子供の頃から鍛えられるんだ」

そう言っている間にも、もう十五回ほど振っている。

コナンは感心した顔でそれを眺めた。

そして、自分も負けじと脇差で構えを取る。

横で素振りをしている新一の様子を真似ながら、刀を振りあげ、そして下ろす。

その重さによろけながらも、元々運動神経は抜群なので、筋はいいようだ。

それでも、隣で既に200～300回は軽く振っている新一の、半分にも満たないほどの所で、疲れて座り込んだ。

はあはあと苦しげな呼吸がその場に響く。

「体力ねえな、お前」

新一が呆れた顔で言うと、コナンもすかさず言い返した。

「……い、いつもやってるお前とは違うんだよ」

体力に自信がないわけじゃない……

サッカーをやっていた頃なんかは、試合になれば長時間グラウンドを走り回る体力が必要だ。

けれども小学一年生の体で、初めて持つ脇差で、初めての素振りですんなに何十回も何百回も触れるほど毎日筋力トレーニングでもしてるわけではないし。

それだけ出来ればいい方なのではなからうか。

息を切らせながら文句を言うコナンから脇差を奪い取った新一は、それを腰に差した。

そして、先程まで自分が振っていた刀も鞘に納めた。

そんな彼の呼吸は全く乱れていない。

「いつもやってるって言っても、俺より強い奴はいくらでも居るんだ。

そこまで突然上達するのは無理だろうけど、せめて俺と同じくらい振れるようじゃないとダメだ」

「へえ……王子様も大変だねえ……」

興味無さそうに言ったコナンに、新一は何か言いたそうに口を開いた。

……と、その時である。

「工藤ー!!!!」

その信じられないほどでかい声に、新一はぴくっと反応して腰の刀に手をかけた。

その隣で座り込んでいたコナンは、思いつき聞き覚えのあるその声に、嫌な予感がしてそちらを見た。

視線の先に居たのは、見覚えのある超ハイテンションな色黒男。その彼が、何故か刀を手にして新一に向かって突っ込んでくる。

……やっぱり、あいつもいるのか……………

コナンは思いつき顔を引きつらせて、その人物を見つめた。

彼の瞳には、『新一』しか映っていないようで、自分に気付いている様子は全くない。

この世界では、自分の事を彼が知るはずがないのだから、無理はないが。

しかも、何で”新一”に向かって刀振り上げてんだよ、あいつ。

新一も負けじと親指でクイと刀の鰐を持ち上げ、頭に振り下ろされる刀目掛けて抜刀した。

そしてその流れのまま構えを取る。相手の彼も口元に笑みを浮かべ

て、同じように構えを取った。

そして、また新一目掛けて突っ込んでくる。

キーン！！キーン！！と鋭い音を立て、切っ先同士が何度も交差しあった。

コナンは眼を大きく開き、それを見つめた。

強い……確かに、元の世界でも剣道をやっていた彼ではあるが、先ほど、とてもなれた様子で刀を振っていた新一が完全におされている。

防戦一方ではあるが、その怒濤の攻撃をちゃんと凌いでいる新一もまた凄い。

しかし。

ガンガンと攻めている彼は、ふいにコナンの存在に気付き、一瞬の隙が出来た。

その隙を新一は見逃さずに、彼の刀を振り払い、思いっきり彼に体当たりをかました。

「おわっ」という声を上げてバランスを崩し、倒れた彼の鼻先に、新一の刀が素早く振りおろされる。

彼は苦笑いを浮かべながらムクリと起き上がり、その突きつけられている刀を見て、ふっと笑った。

一方、刀を突きつけている新一も、にっと不敵な笑みを浮かべている。

新一が静かに刀をずらすと、彼は立ち上がった。

「ちょっとは強くなったみたいやな」

彼は振り払われて手放した刀を拾いながら言った。

新一は不敵な笑みを浮かべ、「当たり前だ」と言う。

そんな新一を一瞥して微笑み返し、彼はまっすぐにコナンの方に歩

みよって来た。

コナンに向けて持ち前の人のいい笑みをにっこりと浮かべ、彼はその頭に手を置いた。

「この童、工藤にそっくりやな。いつの間にあの姫孕ませたんや」「誰が孕ませるか！ 大体まだそんな童が出来る歳じゃねえ！！」

僅かに赤くなりながら大声で否定した新一に「冗談や冗談」と笑った彼。

赤い顔でぶつぶつと何か呟く新一の様子を観察しながら、

「何だ、こういう反応も出来るのか……」と思い、「自分らしさ」も少し感じた。

そして、視線を目の前の男の元へ戻す。彼はコナンにニコニコと挨拶をした。

「初めましてやな？ 名前なんて言うんや？」

「……」江戸川コナン”だよ。……服部」

いい加減知り合いのご対面もなれて来たようで、コナンはクールな口調で呟いた。

もう、新一と会った時点で、知り合いに会う覚悟は出来ていたのだから。

しかし、そんなコナンとは正反対に、驚いた顔を浮かべた彼はコナンを見つめた。

「何や！ 俺の名前知ってるんか。そうや、俺は服部平次や」

知名度が高いのは、何だか嬉しいことのように。

彼は機嫌のよい高い声で、「よろしくな！」とコナンの頭を撫でまわした。

こっちの世界でも、こいつはこのテンションなんだな……コナンは苦笑した。

それにしても、彼に頭を撫でまわされるとやけに腹が立つ。

「……いいから、とりあえず頭放せよ。」

お前にそういう事されるの……すげーむかつくから」

そう言って、ご機嫌斜めな表情で、コナンは平次の手を払いのけた。むっとした顔で、彼はコナンを睨む。

払いのけられた手が、自然とコナンの胸元へ向かい、着物をぐっと掴み上げた。

「何や、この童。生意気やなあ！ 俺を誰やと思ってるんや！」

この場で成敗したるか？ 等と言いながら、刀に手をかける。

「お、おい！ 手荒な事はするなよっ！！」

ぼんやりと二人の様子を眺めていた新一だが、本当に斬りかかりかねない雰囲気慌てて止めに入った。

コナンを庇うように二人の間に入りこんで、彼は刀に掛かっている平次の色黒の手を押さえた。

新一が平次を必死で説得している様子を、コナンはじっと眺めていた。

この世界でも、やはり『服部平次』は『工藤新一』とライバル兼友人関係にあるようだ。

そんな二人を見て、コナンの中でも覚悟が決まった。

やはり、平次には言うべきであろう。自分の事を、包み隠さずに。

「何やと!?!? こいつも工藤!!?!?」

コナンが自分の置かれている状況を話し終えると、聞いていた彼はコナンを指差し、驚いた声を上げた。新一が隣でこくりと頷いて見せると、平次は新一とコナンを見比べた。

不思議そうにコナンの頬をぐにぐにとつまむ彼。コナンが嫌そうに「止めろよ!」と言っても、平次はしばらくコナンで遊んでいた。

「けったいな事もあるもんやな〜……」

まじまじとコナンを観察して、平次は呟いた。素直に一発で信じてくれたのは嬉しいのだが……こんなを観察されるのもあまり気分がいいものではない。

「それで? お前はこっちではどんな身分なんだ?」

その過度な観察を逃れるように、コナンは平次をジト目で軽く睨み、尋ねた。

さっき確か『俺を誰やと思ってるんや』だとか言ってたな……等と思いつきながら。

尋ねられた平次は不敵な笑みを浮かべ、コナンに言った。

「俺も工藤と同じ王子やっとなるんや。工藤の一族は東の方で一番で

つかい国やけど、俺の国は、西の方を牛耳ってな。ちなみに俺と工藤の国はずっと昔からの同盟国なんや」

誇らしげに語る平次を、コナンは呆れた顔で見つめた。

一国の主である彼らと立場は違えど、位置関係は同じらしい。

「……東の工藤、西の服部……ね」

「そや!! よー知っとるな。他国からは俺らそう呼ばれてるんや」

明るい顔で嬉しそうに答えた平次に、コナンは渴いた笑みを浮かべた。

「何だ?」と新一が横から覗き込むと、コナンは小さく呟いた。

「いや……俺の世界でもそう呼ばれてたんだ」

「ホンマか!?!」

小さく呟いただけの言葉に素早く反応した平次は、嬉しそうに身を乗り出した。

コナンは仕方が無く、面倒くさそうに頷いた。

「ああ。お前は西の名探偵服部平次……俺は東の名探偵工藤新一」

そこでコナンは言葉を区切り、何か思いついたように笑みを浮かべた。

「……俺とお前の素敵な友情話、聞かせてやろうか?」

平次は嬉しそうにうんうんと頷き、「何でも言うてみ!」と弾んだ声をあげる。

新一も興味無さそうに装いながらも、少し気になるのか、さりげなく耳を傾ける。

コナンは、にやっと笑って話し始めた。

「初めて会ったのは、俺がコナンになってからだったよなあ……

突然『変な男』が毛利探偵事務所に乗り込んできて……

『工藤を出せ』とか言ってたな、小学校から帰ってきた俺が風邪引いてるって知ったら、

親切だか何だか知らねーけど、風邪薬だって言ってパイカルっていう酒をくれたんだよ。

その酒のせいで風邪は酷くなるし、大変だったよな……」

言葉の端々に憎しみがこもる。

最も、あの時のパイカルの事は憎しみだけでもないのだが……

話を聞いていた新一は、「酷い事するなよ、服部。」と平次を軽くジト目で睨んだ。

『変な男』あたり引かかった平次だが、とりあえず何も言わずに続きを促す。

コナンは、話を続けた。

「で、勝手に俺と勝負してる気になって、おまけに熱くなって見事犯人の罠にはまって……

でも偶然俺はお前がくれたパイカルのおかげで元の姿に戻れてな。その後俺が事件の真相を明かして、関係ない人が濡れ衣を着せられずにすんだんだ」

「……なっ!!」

平次もさすがにカチンと来て顔を引きつらせた。

その後も、コナンはこんな調子で、延々平次との『素敵な』友情の歴史を語った。

隣で話を聞きながら、ずっと笑いを堪えて新一だったが、途中で絶えられなくなって吹きだした。

それでも話の間中、ずっと腹を押さえてプルプルと必死で堪えていた。

その長い話が終わった後、新一は大爆笑して平次に言った。

「お前……すげーかっこわりー!!」

ヒーヒー言いながら笑い転げる新一を、平次はじとつと睨んだ。そして、してやったりという顔をしているコナンに掴みかかる。

「ちょー待て! 今の話の何処が素敵な友情話なんや!! 大体、ホンマの話なんやろな!？」

「ああ、もちろん……全て真実だ。輝かしい友情話だっただろ？」

コナンは平次に向かってにっこりと微笑んだ。

いつも遊ばれてる仕返しだよ……

普段、自分の世界では散々弱みを握られて何も出来ないため、何だかとても快感だ。

平次は更に頭に來たようで、コナンをぎっと睨みつける。

「何処がや! 俺のかっこええ所は殆ど省いてるやんか!!!」

「それもちゃんと説明しただろ? いつも協力してくれる心強い味方だっ」

さらりと言ったコナンを、彼は不満げににらんだ。

「その後に、いつも口を滑らせるし、学習能力がないせいで、ばれ

そうになるのも俺のせいやて言うてたやろ!？」

「……だって、それも真実だし」

今のくそ長い……大体一時間ほどの説明の中で、

平次をよく言っている個所が一体何分あったであろうか。

たま〜に話の中にぽろつと感謝をしているような事も言っているが、

そういう話は全体で合計5分あるかわからない。

まあ、平次が怒るのも当然といえば当然だろう。

しかし、そんなちよつと笑える喧嘩ムードな始まりも、最後までそれを引っ張らず。

コナンと平次は、そう掛からないうちに打ち解けた。

それは、平次が元々開けっ広げで友好的な性格なのと、今の話が二人の間の緊張を全くなくした為であろう。

お互いの世界での話をしながら、三人はしばらく楽しそうに笑いあっていた。

そして、その後急に真面目な顔になった平次は、その話を切り出した。

「実はな……今他国で不穏な動きが見えるんや」

「不穏な動き？」

新一とコナンが声を揃えて聞き返す。

平次が真剣な目で二人を見つめ、深く頷いた。

急に先ほどまでおどけていた彼が真面目な顔に変わったため、二人

共緊張した面持ちで続きを待った。

そんな様子を確かめながら、平次は口を開く。

「今日来たのは、それを話そうと思ったんや。よお分からんけど、小国がどんどん変な集団に占領されとるみたいや」

「占領だど!？」

新一は顔色を変えて思わず叫んだ。平次はまた真剣な表情で頷いた。あちらの世界で、推理をしている時のような、そんな表情の二人。コナンも、なにやら深刻な雰囲気、目を細めて聞き入る。

占領……別にこちらの世界の小国なんて関係のない話ではあるが、穏やかではない。

「まだ、詳しい情報は入って来てへんのやけど……俺の西の領域で、小国が少しずつやられとる」

「……間違いないのか？」

コナンが聞くと、真面目な顔ですつと視線を向けた平次の代わりに、新一が答えた。

「服部の国は、情報網が優れてるんだ。だからこいつがそう言うなら、間違いない」

平次は話を続ける。

「俺らみたいな大国はまだ被害を受けてへんのやけど……」

小国は少しずつ占領されとる。今はまだ俺らの所まで手えつけられへんみたいやけど、

このまま行けば、いずれ俺らの国にも来ると思う」

「そうか……とりあえずこっちには何の情報が入ってない」

新一は眉を顰めた。

一層警護を強めて、自分達の所にその魔の手が伸びないようにしない……

そんな考えを浮かべてていた新一だが、次に平次が鋭い顔で言った言葉によって、

自分が今考えた事が、甘い事であると知った。

「氣いつけろや。奴等、西だけやのうて東の小国にも手え出しとる」
「なに!!?」

新一はぎりっと歯を噛み締めた。

不意に、蘭の事も心配になってくる。

蘭の国は小さくはないが、しつかり者の妃にも逃げられ、王のはずの小五郎はだらしがない。

新一と蘭が婚儀を挙げ、両国が合体すれば強くなるだろうが、今の弱まっている状態ならきつと何かあった時抵抗できないだろう。

「……俺、やっぱり蘭のところにいた方が良かったんじゃない……」

コナンが呟いたが、新一は彼を一瞥しただけだった。

無言のまま首を振る。

「蘭の国の争いごとには特に、俺の国の睨みを利かせている。今のところは安全な筈だ」

平次は新一に言った。

「同盟を結んどる小国を守ってやるんは、俺たち大国の役目や。
奴等がこれ以上力を付けへんためにも、対策を打っておかなあか

ん」

「そうだな。いくら俺たちの国でも、突然力を溜めて責められたら対抗できない。情報、感謝するよ」

そう言って新一が微笑むと、平次も同じような笑みを返した。

「今はまだ大丈夫やけど、油断するなや」

「ああ、分かってる」

そんな二人を、コナンはじっと見つめていた。

普段はからかいあったりしつつも、固く結ばれた信頼関係……

それを、この二人に強く感じた。

平次は自分達をただ見つめるコナンにも、言った。

「お前も、いい時に現れたもんやな。工藤が二人居るのは百人力や。俺はもちろんお前の協力もしたるけど……こっちの力にもなってくれるんやろ？」

そう言われて、力にならないわけにはいかない。

何より、元の世界ではいつも協力してくれる親友からの頼みだ。

その真剣な頼み、断われるはずがあるうか……

コナンは力強い笑顔で答えた。

「ああ。ただし、元の世界に戻るまでの間な」

こうして、事情を知ったコナンも、二人の力になる事を決めた。この世界で生きていく間の、自分への目標が出来た気がする。

無事に平和を取り戻したこの世界での大切な知人達を見て、帰れればいい。

そう思いながら、元の世界に居た皆の事も、頭に浮かべた。

西へ帰る時、平次は出迎える二人に言った。

「近いうち、また対策会議を練ろうて思っとる。場合によっては、東西の一時的な合併もあるやろ」

「そうだろうな。この話は父さんにも伝えておくよ。」

俺らの国が……東と西が手を組んだら、怖いものはないって奴等に教えてやろうぜ」

「当然や。俺らには逆らえないっちゅう事をよく肝に銘じさせんと」

二人は不敵な笑みを浮かべ、がっしりと手を取り合った。

そんな様子を見て、コナンの顔に柔らかく微笑みが浮かぶ。

ああ、やっぱりこっちの世界でも俺達はこの関係なんだな……

元の世界で信頼していた仲間がこちらでは敵になっている可能性も、なくはないのだ。

けれども変わらない人間関係が、とても嬉しかった。

平次は城から出て馬にまたがると、

もう一度二人に軽く挨拶をしてから馬を走らせた。

少しずつ、この世界の歯車も、音をたてて動き出した。

不穏な動きを見せる者達の影が、近づいてくる。

今はまだ平和な日常……

しかし、こちらの世界でも大きな黒い影は少しずつ勢力を増やしていた。

暗雲。その日の夜は、城の奥にまで大きく響く程の、雷が鳴り響いた。

まるでこれから起こる出来事を予期するかのように。
まるでこれから起こる出来事を暗示するかのように。

既にすぐ側に忍び寄っている魔の手を、恐れているかのように……

其の六：暗雲く西からの情報く（後書き）

えー、どうもこんにちは！作者の朧月で御座います。

今回は、第六話という事でね。

今回も、加筆修正バージョンで御座います。

お待たせいたしました。やっと、彼を出させていただきました。

私の中で、平次は関西弁じゃないと平次ではなくて。

でも、昔風の関西弁なんて全く全然分らないので、

それなら、と普通の話し方させております。

今回は帰ってしまいましたが、これから、ね。

平次君にはたくさん活躍していただくつもりですので。ご期待ください。

さてと。まあ、少しずつ少しずつシリアスじみて来たところで……

次回も新キャラ登場です。

さあ、どうぞ是非次回にも皆さんとお会いできますよう。楽しみにしつつ、頑張りますので。

どうぞ、次話もよろしくお願い致します。

それでは、今回はお読みいただき、ありがとうございました。よろしければ、感想などお待ちしております。

其の七：闇よりの逃亡者

不穏な動きが見える、と西から来た彼に教えられ、それまでの平和な雰囲気とは一転、張り詰めて緊張感の漂う雰囲気が、東の国を覆っていた。

それ以来、コナンは新一によって猛特訓をさせられていた。

いつか来るべき時、戦力は少しでも多くしておかなければならない。彼曰く、「お前が強くなれば、凄い戦力になるんだ」と言う事らしい。

そんな訓練を受ける間にも、元に戻る手がかりを探したい気持ちもあったのだが、まあ宛も無いので仕方が無い。

自分がそこに居る事で、この世界における大切な友人達の手助けになるのなら、苦でもない。

しばらくはここに滞在する事になるのかとため息をつきながら、彼は特訓を続ていた。

はあはあはあ……

ばしゃばしゃと水溜りを蹴りながら、その少女は必死で走っていた。所々、傷つきながら……ぼろぼろになりながら。

後ろから少女を追う追っ手の影は、その彼女の小さな体に、近づいては離れ、近づいては離れ。

そして時折、追っ手から放たれた弓が少女を襲った。

少女は何度も捕まりそうになりながら、それでも走った。

あの日、平次が帰った後、新一はすぐさま優作にその事態を伝え

た。

それを聞いて、すぐに緊急で信用できる家臣を集めた優作は、新一とコナンも同席させ、

緊急事態にそなえての臨時会議を行った。

少数の、家臣たちがざわめく様子を見つめながら、優作と新一は、平次から聞いた状況をそこで説明した。

緊急の会議を終えた後、彼らに命じて、東で起こっている被害の状況を調査させた。

そして出てきた事実は、かなり深刻なものであった。

西から来た情報を耳にするまで、全く考えていなかった小国の侵略は、既に5つ6つにも達していた。

予想以上の深刻さに、それを知った者達は皆愕然とした。

それには優作も新一も、何故これまでその事態を気付けなかったのだろうと、齒を噛み締めた。

繰り返し行われていた会議は、最後に、攻められた時の為の対策を立てて、終了した。

全ての事実を把握した後、優作は東の国全体に注意を呼びかけた。少しのほころびでも、見逃すわけには行かない……「何かあったらすぐに報告するように」と伝えた。

そう。小さくて力のない国を守るのは、大国の役目である。

その為に、東には工藤の家があって、西には服部家があるのだから。国で平和な暮らしを送っていた人々は、いずれ来るであろう戦いの日にそなえて体を鍛えた。

全く、それとは無縁な町人達をも。全て少しでも多くの戦力に、と自発的に始めた事だ。

そんな緊迫ムードから、今に至る。

工藤家の庭……と言うと別にそれほどまで広いイメージでも無いかも知れないが、

ここは東全域を束ねる城の中の庭だ。

城の門を入って、100メートル程の所で、刀同士がぶつかり合っ
て音を立てていた。

芝が一面敷かれていた場所、今彼らが立っている、茶色の土が一面
に広がっている場所。

どちらもとても広く、暴れまわるにはうってつけであろう。

知らない人が見れば不思議な光景である。

城の主である17歳の少年王子と、ずっと小さい7歳の幼い少年が、
互いに剣を振り回しているのだから。

無論、体の小さなコナンと新一では、正直お互いに戦い辛くて仕
方無いのだが、二人共にまだ怪我の一つもしていなかった。

一方的に攻めているのは、当然の事ではあるが、昔からずっと鍛
えてきた新一。

しかしコナンも負けては居らず、その攻撃全てを、持ち前の身軽さ
でひょいひょいとかわしていた。

「避けるのは随分上手いな!!」

全く当たらない自分の攻撃に、少し面白さを感じながら、新一は
言った。

その言葉の間にも、コナンに向けて振り下ろされる刀は、3回、4
回、5回と鋭く空を切る。

それを避けながら、コナンも不敵な笑みを浮かべた。

「探偵として、相手の攻撃を避けられないようじゃまずいんだよ。
銃を持ってる奴、刃物で切りかかってくる奴、色々居るからな」
「なるほど?」

それでも、やはり勝っているのは新一で……。

コナンは反撃する事が出来ずにそれを避けつづけた。

いくら刃のない刀で戦っているとしても、当たればかすり傷では済まされない。

自分の間合いに新一が入りもしない時に攻撃する事に気を回したら、その瞬間に、彼の持つ大刀は容赦なく自分の骨を砕くであろう。

避ける事に集中して、初めて避けられるほどの攻撃である。

自分自身も運動神経には自信があったのだが、彼のそれはさすがと言った所だろうか。

「避けてばかりじゃなくて攻撃しろ！」

刀を振るスピードを緩める事無く、彼は強い口調で言った。

「うるせえ。分かってるんだよ!!」

答えつつも、また避ける。

体の小ささは、不利な事だけではない。

体が小さいから、避けると同時に懐に入り込めばそれだけチャンスは巡るのだから。

だから、ずっとその機会を狙ってはいるのだが、そんな事は当然新一だって分かっている。

だから新一は懐に入らせようとはしなかった。

その隙を与えない完璧な攻撃だ……

そう。重要なのは、その攻撃をどう潜り抜けて懐に入り、反撃するか。

それが出来るようになった時、戦いの中でも、十分立派な一戦士となるのだ。

そのまま、中々懐に入りこめずに時だけが過ぎた。

相手の攻撃を避けながらも刀を振り回すというのは、数分でもかなりの体力を消耗するもので、馴れている新一の乱れの無い顔色や動きとは裏腹。

コナンの顔からは大量の汗が滴り、呼吸も自然と荒くなっていた。

そう、そんな時である。

「助けてー！！！」

突然、城外から女の子の悲鳴が聞えてきた。

その瞬間に、二人は図ったような同じタイミングで戦いをぴたりと止め、コナンは条件反射、そして新一は本能で、悲鳴が聞こえた方へ走って行った。

城の門まで来た二人の目に、必死で走る少女の姿が映った。

そして、その後ろには複数の影。

まだ、コナンと新一からその距離は遠く、詳細は分からなかったが唯一つ。

少女が、何者かに襲われている。

瞬間的に、それを見抜いた。

そのまだ幼く見える少女は、後ろから間髪いれずに弓を何本も射ってくる男達から必死で逃げていた。

近づいてくる彼女のその顔を見て、コナンは目を丸くして何かぼそりと呟いた。

隣にいた新一にも聞こえないほどの小さな声。

と、それもほんの一瞬の事だ。

城に向かって逃げてくる少女の足に弓矢が掠めて転んだのを見て、二人の顔は緊迫したそれに変わった。

「やばい！」

新一とコナンは二人同時に叫び、少女の元へ駆け寄った。倒れた少女目掛けて、何本もの弓が容赦なく飛んでくる。

「きゃあぁー！！！」

少女はもう駄目だと判断したのか、きゅっとその目を閉じた。

と、しかし少女の身に次に起こった事は、弓に射られる苦痛ではなく、優しく抱きしめられる感触だった。とても暖かい、安心する感覚。

恐る恐る目を開けると、自分を抱きしめていたのは自分と同じ位の歳の少年で。

そして、更に自分達の前には頼もしく力強い大きな後姿。その前に立った頼もしい彼が、ゆっくりと振り向いた。

「大丈夫か？」

そう言って、二人の無事を確認する彼。

コナンは、少女の様子を確認して深く頷いた。

彼女も、自分も大丈夫だ、と。

その返事に小さく安堵した様子を見せた新一は、前に迫る男達に刀を構えた。

「何だてめえ」

「邪魔するな！！」

男達は口々に乱暴な言葉を飛ばし、弓を放った。

新一は冷静にそれを持っている刀で打ち落とす。

そして後ろにいるコナンと少女にちらりと目線を移し、告げた。

「お前達は、城に入ってる」

その台詞を最後に、新一の意識は完全に男達へと向かい、彼らを目掛けて地面を蹴り、走った。

コナンはその後姿に心の中でエールを送り、その様子を呆然と眺めている少女を、安心させるように微笑んだ。

「大丈夫だ。城の中なら安全だから」

「……ええ」

少女は、クールで可愛らしい声で答えた。

それはあまりに年相応ではない口調。

とても聞き覚えのある声と口調に、コナンは苦笑した。

そして少女の手をとり、頼もしい笑みを浮かべた。

「行こう」

手を繋ぎ、二人は城の中に入って行った。

その間も全く弓矢が飛んでこないのは、新一の凄い所。

城内に入ったところで、少女はやっと安堵したように微笑んだ。

しかし、彼女はその後暫くの間、城の外を不安げに見つめていた。無言で、眉を顰めながら、先ほど自分が城へ入ってきた道の方を眺めていた彼女は、そこから全て終らせた新一が無傷のまま帰ってくるのを見るなり、心底からほっとした顔をしたのだ。

コナンは、そんな少女の様子に再び苦笑した。

「お前、こっちでも追われてるんだな」

少女は不思議そうに首を傾げた。

まあ、何を言っているのか、分からないのも仕方が無いだろう。

「こっちでも」のこっちが、どこと繋がっているのかなんて。

そーいや初めましてだったよな、と思い、コナンは笑顔で彼女に言った。

「いきなりごめん。俺、江戸川コナンっていうんだ。よろしくな」

「私は……」

自分の名前を名乗ろうと口を開いた少女の言葉を、コナンは遮った。その笑顔のまま、ゆっくりと一言。

「知ってるよ。灰原哀……だろ？ いや。それとも宮野志保かな？」

少し驚かせてみようかと。

クールな顔しか殆ど見た事のない彼女の、珍しいそんな反応が見れるかも知れない。

そう思ってた言葉だったが、聞いた少女はさっと顔色を変え、目を見開かせた。

それは、「驚き」というほど、簡単な言葉で表せる表情ではない。

「どうして、それを……!!」

過剰な反応に首を傾げながらも、コナンは少女の問いに、もう何度目かになる言葉を返した。

「俺、こっちの世界の人間じゃないんだ」

その言葉を聞いた途端に、少女の顔が警戒したものに変わった。まあ、そんな事を突然話されたら、それも仕方の無いこと。

まして、よく知っている自分の世界での彼女の性格から考えれば。何か言いたそうに口を開いた少女の警戒を解こうと、コナンは穏やかに微笑んだ。

だが、その微笑をどうとらえたのか、少女は更に蒼くなった。

不思議に思い、わけを聞こうとしたその時に、敵たちを退けてきた新一が軽い運動であったかのように息を切らすことも無く、そこへ現れた。

「外の連中は片付けたから、心配なくていいぞ」

彼はにっこりと笑みを浮かべ、少女の頭を優しく撫でた。

そして、その後気持ちを入れ替えるように、自己紹介をした。

「俺は、この国の王子の工藤新一ってんだ。お前は？」

少女は彼を見上げ、慌てて答えた。

「あっ、あの……私、灰原哀。危ないところを助けてくれてありがとう」

「で、あいつらはなんなんだ？」

コナンの問いに、哀は恐れた顔で言った。

彼女は、かたかたと小刻みに震えながら、俯き、それを話した。

「あの人たちは……悪人なのよ。私の国は、小さかったけど平和な国だったの。」

でもそこに、あの人たちが突然攻めて来て……。

私は何とか逃げてきたけれど追っ手に見つかって……。他に逃げ

た人は皆殺されてしまったの」

という事は、何者かに占領された小国のどこかに住んでいたのだろうか。

コナンはぼそつと呟いた。

「……何だ、お前あいつ等の仲間じゃなかったのか」

自分の知っている灰原哀を思い出す。組織を裏切って追われる羽目になった哀。

ここは殆どの人が同じような境遇だから、てっきり彼女もそうなのかと思った。

何者か悪人達の中に居た彼女が、何らかの理由でそれを裏切り、そこから逃げて来たと。

しかし、コナンがそれを言った途端に、哀の顔色はさっと変わった。

むっとする反応なら、言われた言葉的に当然のものかも知れないが、彼女の顔色は酷く警戒しているような、困惑しているような、怯えているような。

そんな困った顔で、コナンを見つめた。

その反応に首をかしげたコナンをしばらく見つめていた彼女だが、やがて、思い出したように新一を見上げた。

「あの……お願いがあるんだけど」

「何だ？ 何でも言ってみろ」という風に、軽く首を傾げた新一に、彼女は言いにくそうに、震える声で話し始めた。

「私を、お城にかくまって欲しいの。」

追っ手は私の事を探しているし……皆殺されてしまったから行く宛もないの。

ここから出されたら、私は数日のうちに殺されてしまうわ。

お城の中なら、安全なんでしょ？ ……お願い」

今にも泣きそうな雰囲気で、声を震わせ言った少女の言葉を断わる事が出来る筈も無く、新一はOKした。

哀は、安堵した顔で「ありがとう」と言った。

じつとその様子を眺めているコナンを、そわそわと横目で窺いながら……

コナンは先ほどの異常な哀の態度に、考え込んだ。

最初は小さい姿を見たから灰原哀という名前が出てきたが……よく考えてみるとおかしい事だ。

この世界で、本来ならいない筈の存在の灰原哀が存在するとは。

工藤新一も、毛利蘭も、服部平次も、阿笠博士も、優作や有紀子も知り合い皆が同じ名、同じ姿をしているこの世界で、そんな事はあり得るだろうか。

しかし、少女は宮野志保ではなく灰原哀と名乗っている。

姿かたちも、薬で縮んだ自分の世界の彼女そのもの。

今まで、こんな事は無かった。

「ねえ、君歳はいくつ？」

「……見れば大体分かるでしょ？ あなたと同じくらいじゃない？ 7歳よ」

あっさりと返って来た返答。

「本当に？」

「ええ」

聞き返しても、彼女はその答えを変える事は無く、それを肯定した。コナンは、違和感を頭の中に引っ掛けたまま、そんな哀をじっと観察していた。

その後、優作や有希子との顔合わせも経て決定した、哀にあてがわれた部屋は何故かコナンと同室であった。

つまり、彼女と寝食を同じ部屋で共にしろと言う意味で。

灰原哀のイメージが自分の世界のものが強いコナンとしては、ある意味とんでもない事である。

「一人の部屋も用意できるだろ!？」と文句を言ったが、

「追われている少女を一人の部屋に入れるつもりか？」

「誰かと一緒にいたほうが安心するでしょ？」

等と言われて、渋々了解した。

その決定については、コナンを警戒している哀自身も、微かに顔を濁らせた。

しかし、とりあえずでも置いてもらえる道を選んだらしい。

一見、嬉しそうな笑顔を見せ、彼らに「ありがとうございます」と伝えた。

部屋に入るなり、哀は無言のまま隅に置かれている荷物を眺めた。唯一持つ、元の世界の痕跡。

阿笠博士の発明したそれらは、元の世界でも一瞬見たら首をひねるものばかりで。

ここでは珍しいであろう追跡眼鏡や、その他の発明道具などが入っている荷物である。

もちろん、単身この世界に来たコナンが持ち込んだものは、普段から身につけていたもののみ。
通常では持ち運びをしていないスケボーなど、ある筈もないもの以外ではあるが。

彼女は、見慣れないその眼鏡を手にとった。

ひっくり返したり、横から眺めたりと、何とも不思議そうな様子で。先日新一との会話によると、この世界では眼鏡というものは無いらしい。

眼鏡が日本に伝わったのは、確か16世紀頃。今は確か1306年……ならば妥当か。

ぼんやりとそんな事を頭の隅の方で考えていたコナンだが、怪訝な顔でそれを見つめる彼女の様子に気付き、慌てて説明した。

「それ、犯人追跡眼鏡っていうんだ。変わったものがいっぱいあるだろう？」

少女は眼鏡から視線を移し、数秒無言でコナンを見つめた後、その他の荷物の方をちらりと見た。

そっちのは何？説明して。という心の声が聞こえた気がして、コナンは話を続けた。

「それは腕時計型麻醉銃……で、そっちのはキック力増強シューズ。それからその赤いリボンは蝶ネクタイ型変声機っていうんだ」

聞きなれない名前。

もちろんだが、全てがこの世に存在するはずの無いもの。

指差しながらそれを話すコナンの単語を頭に入れようと聞き取りながら、

少女はそれらを物珍しげに眺めた。

そして、一通り説明を終えたコナンに尋ねた。

「……あなた、何者なの？ さっきこっちの世界の人間じゃないって言ってたわよね？」

あれ、どういう意味？ 一体何処まで知ってるの？」

警戒しながらそう尋ねた哀。

彼女は、身体に似合わず鋭い視線でコナンを眺めた。

彼女のそういう視線は、元の世界での始めて会った時だ。

APTXが自分が作った薬であると言った時の、彼女の表情。それを、思い出させるものだった。

じっと、離れようとしなない二つの瞳。

その言葉の内容には僅かに引かかるものを感じながら、コナンはそれに気付かないフリをして自分の事を話し始めた。

「俺、本当は2006年から来たんだ。年数的に言うとか、ここより700年後の未来。」

でも、ここは俺の世界の過去とはちょっと違うみたいだけだな」

「……………嘘……………」

彼女は、信じられないと言いたげな目でコナンを見つめた。

まあ、突然そんなことを言われて、何の抵抗も無く信じられる方がおかしいだろう。

彼女の反応を見ながら、コナンは話を続ける。

「こう見えても、俺17歳なんだよ。」

さっきの工藤新一って王子位だろ？ あれがこっちの世界での俺なんだ。

俺は体が縮められて命を狙われる事になって、江戸川コナンって偽名を名乗ってる。

こっちの世界では必要ないけど、まあ、こっちにも俺がいるし。それなら、呼び方は別々の方が都合がいいからな」

哀はただじっとコナンを見つめ、話を聞いた。信じているのか居ないのか、ただ無言で眉を顰めながら。

「お前も……灰原哀も俺の世界では存在する。と言っても、お前も俺のように体が縮んで、偽名で名乗ってるんだけだな。

彼女の本名は、宮野志保だ」

その名前が出た瞬間、今まで眉を顰めていただけの厳しい顔をしていた彼女の顔が、びくっと引きつった。

コナンはその反応を黙って見つめ、続きを話す。

「彼女は、俺の身体を小さくした組織の仲間だな。

けど、組織の手で姉を殺されて、組織を裏切ったんだ。

そのせいで追われて命を狙われる事になった」

「姉を殺された」という所で、彼女の顔色が今度は真っ青に染まった。

明らかに動揺しているようで、その黒目が不安定に揺れている。

コナンはそれを見ながら、ゆっくりと言った。

「……なあ、お前は本当に『灰原哀』なのか？」

その問は実に静かな響きだけれど、だからこそ、その問は哀の心に鋭く突き刺さった。

哀は小刻みに震えながら、おびえた眼で彼を見つめた。
そんな彼女を、コナンは真剣な目で射抜く。

慧眼……全て本質を見透かしてしまう、探偵の瞳。
それを見ると、嘘をつく事すらも無意味に感じてしまう。
哀は眉を顰め、震えるような小さな声で言った。

「どう……して？」

「……え？」

言葉の意図する事がつかめずに、コナンは首を傾げた。
顔を上げた彼女の泣きそうな顔に、

元の世界で、彼女が始めて見せた涙が頭をよぎった。

まさか、泣く？

そう思い、微かに動揺したコナンだったが、彼女の瞳から涙が零れる事は無かった。

揺れる瞳は、ただ酷く悲しい色を移していた。

「どうして、私にそんな話を話すの？ あなた私のこと、信用してるわけじゃないんでしょ？」

コナンは少し考えてからゆっくりと頷いた。

何をとって考えても、哀の言葉を信じるとなると、あまりにも不自然な点がありすぎる。

「……こっちに来て分かったこと。俺の世界とこっちの世界では、殆ど境遇が皆同じなんだ。

だから、お前だけ違うって言うのは、悪いけど信用できない」

その返答に、哀は怯えた顔で俯いた。

その様子を確認しながら、コナンは「けど……」と付け加えた。

ゆつくりと、彼の顔に微笑が浮かぶ。

「俺の世界でのお前は、クールだけど本当は凄く優しい奴だったよ。育ってきた環境で、外に出てくる表情は冷たい感じはしたけどな。必死で解毒剤の研究をして……哀しみは自分の中に押し込めて……」

性格も、俺の世界とこっちとでは皆同じみたいだからな。

俺の世界で優しい奴だったなら、お前も優しい奴だって事だろ」

そう言うてにっと笑ったコナンを、彼女は悲しい瞳で見つめた。

先ほどと変わらず、今にも泣き出しそうな揺れる瞳でコナンを見つめながら、哀は何かを考え込んだ。

しばらく、自分の頭の中で考えていた哀だが、耐え切れなくなつて俯いた。

「そんな事ない。私は、優しくなんかないわ。だって……だって私は……」

俯いて発した言葉を、コナンは真剣な顔で聞いた。

しかし、哀はそれっきり黙ったまま。自分の正体も何も、明かす事はなかった。

しばらく待った後、コナンはふうとため息をついて、哀に言った。

「いいよ、今は。言いたくないなら。俺はお前を……信じてるからな」

哀は俯いたまま、それっきり何も言う事はなかった。

コナンは信じていた。哀の本当の心を。

こっちの世界でも変わらないはずの哀の優しさを。

今は無理でも、いつか本当の事を打ち明けてくれると信じていた。

それからは、コナンが話しかけても哀は何も言わなかった。

新一が様子を見に来て、哀は俯いたままだった。

新一も哀に何か感じる事があつたらしい。

怯えている様子に深くは追及しなかったが、哀の言葉の全てを信じていたわけではなかった。

ただ、彼女が悪い人間でないという事だけは、彼も信じていた。何かを偽っているとしたら、必ず何らかの事情がある。

彼女が悪人故、隠し偽っているものではない、と。

新一はコナンを部屋の外に連れ出し、周りに聞こえないように小声で彼に尋ねた。

「彼女もお前の世界に居るのか？」

コナンはその言葉に頷いて、自分の世界の灰原哀や宮野志保の事を説明した。

自分の身体を縮めた黒の組織の元一員。

そしてその薬を作った張本人であるという事。

彼女の姉が殺されて彼女が組織を裏切った事。

彼女が自分と同じ薬を飲んだ事。そして、組織に命を狙われている事。

コナンが全ての説明を終えた後、新一は彼に念を押した。

「あいつには気をつけろよ」と。

しかし、コナンは大丈夫だと言わなかった。

哀は確かに嘘をついているけれど、悪い奴ではない。

二人は、そう信じる事にした。

そして夜、外はすっかり暗くなり、大抵の人は眠りにつく時間……。哀は徐に布団から起き上がり、隣で眠るコナンの顔を眺めた。暗がりでは昼ほどはつきり物が見えるわけではないけれど、近くにいる彼の顔くらいは見るのに難はない。

「江戸川……コナン」

そっと呟いて悲しく目を伏せた。ずっと、この一つの世界しか知らない自分は、考えたこともなかった。

まさか、こんな存在がいるなんて。この世界ではない、2006年から来た少年。

2006年なんて、どんなものか想像もつかない。けれど、彼が話した世界によると、どの道自分が自由ではない事に変わりは無いらしい。

彼女は、じっとその寝顔を見つめた。

先ほどまでは、眼を合わせるのが怖くて、まともに顔など見られなかったから。

凄く怖い存在だったけれども、今そこに眠る彼は、全くそんなイメージはない。

とてもあどけない寝顔。

とても幸せそうな寝顔……。

じっと彼を見つめていると、彼の言った言葉を思い出し、哀は辛そうに顔を顰めた。

『姉を殺されて組織を裏切ったんだ』と。その言葉が、頭から離れない。

心が、締め付けられる。

「お姉ちゃん……………」

少女の頬を、一筋の涙がつたった。

泣いている自分に気づき、哀は自分の布団にもぐりこんだ。ちらりと、横目で再び彼の寝顔を確認する。

江戸川コナン…………初対面で、しかもこんなに怪しい私に、自分の事を全て話した。

私の嘘に気付いていながら、深くは追求しなかった。

どうして？

どうして、なの？

別の世界での、私自身も知らない私を知っているひと。
私の…………正体に勘付いているひと。

『姉を殺されて、組織を裏切った…………』

その言葉を思い出すだけでまた瞳から涙が零れ落ちた。

どうして…………どうして…………どうして…………！！！！

湧き上がる感情が止められず、

結局、哀がようやく寝付く事が出来たのは、深夜だった。

大丈夫…………。

ちゃんと城に忍び込めたのよ。

ちゃんとこの城の中に入れたのよ。

仕方が無いのよ……やるしかないのよ……。

いくら何を言われたって、自分の仕事を忘れちゃだめよ！

私はこの仕事を失敗するわけにはいかないのよ！！

絶対に、やり遂げてみせるわ。

信じるしかないもの。あの彼らの言葉を。

その小さな間者は、堅く決意して眠りについた。

二人とも、寝静まった部屋の中。

その夢に見るのは誰の顔か……。

二人は、それぞれの大切な人と夢で再会した。

コナンはもちろん、自分の世界で待っているであろう蘭と。

そして哀は、どうしても救い出したい大切な人と。

現れた小さな間者は、闇からの使者である。

既に少しずつ少しずつ動きゆく運命の歯車の中に。

それぞれが、それぞれの大切な人を想い、そして段々と迫る悲しいとき……

その時に向かって刻まれていく時計の針を、止めることが出来ぬまま………

この冷たく錆びた歯車の回転に巻き込まれた少年達や少女達は、

今はまだ待ち受ける先の結末を知ることはなく、

幸せな夢を見て、この不気味なほど静かな夜に眠る。

其の七：闇よりの逃亡者（後書き）

こんにちは、朧月で御座います。

さて、今回も再びお会いできて嬉しく思います。

今回もお読みいただきまして、ありがとうございます御座います。

さあ、現れました少女。

哀ちゃん……彼女を書くのはとても好きなのですが、
一体、彼女は何を隠しているのか……

そこは、今はまだ、皆さんの推理にお任せしましょう。

とりあえず、この異世界の彼らは次回はまた休ませて、次話では幕間に入ると致しましょう。

誰が出てくるかは、お楽しみ……

おっと、知っているあなた、今はまだ、秘密ですよ。

それでは、また次話でも会えることを……

ありがとうございました。

其の八：幕間2、Ai く信じる強さく

先ほどまで忙しくパソコンのキーボードの上を動き回っていた手は、段々とその動きを緩め、ついには停止した。

「んっ」と小さく呻き両腕を挙げて伸びをして、その流れに動くまま、上げたうちの片方の右手を、開けた口の前に持って行き、欠伸をした。

長時間パソコンと向き合っているのも少し疲れる。

そろそろ一息休憩をしようかと、彼女は徐に立ち上がり、部屋を出て1階へと続く階段を上がっていった。

☆☆☆

その連絡が届いたのは、ちょうど私が地下の研究室で解毒剤の研究を一段落終えた時だった。

そう毎日進展があるものでもないが、せめて一日少しの時間はと、日課になっていたその研究。

一息ついて、軽く疲れた目のマッサージをして。

上でコーヒーでも飲んでリラックスしようと、階段を上っている途中に、博士のとても慌てた声が聞えてきた。

「な、何じゃとー！！？」

私は何事かと不思議に思い、階段を上る足を速めた。何故だか、ドキドキと博士の元に行くのが怖いような、そんな気になった。

いい事があったような声ではない。
自然と、眉間の中央をしわが刻んだ。

「博士、どうし……」

声をかけようとした私の目に、左手に持った受話器を耳に押し当てる博士の姿があった。

電話の相手と、何かを話しながら、あいている利き手で何やらメモを取っている。

心なしか、その手が震えているように見えた。

誰との通話だかはわからないけれど、博士のその顔はとても深刻だった。

（博士……？）

ただ事ではない様子の博士に、何か大変な事が起こっている事がわかる。

いやな予感——何だか、先ほどから胸がざわついている。
こんな時は、いい事があった例はない。

「分かった、わしもすぐそっちに向かうから、しっかりするんじゃないよ」

いつもの博士らしくなく、慌てた声で電話を乱暴に切った。
そして無駄にわたわたと動きながら、青い顔で手元のメモを束からビリリと破いた。

人間は、突然の事態に気が動転すると、普段その人からは考えられないような、挙動不審な行動を取るものである。

つまり、電話はそれほどの重大な事。

「博士、どうしたの。電話だれから？」

後ろから、気遣いながらそつと声をかけた。

けれど、その声が微かに震えている事に気付いて、内心で小さく苦笑した。

（……私も、動転してるのね）

何が起こっているか全くわかっていないくせに。

その博士の緊張が、うつされてしまったようで。

博士ははつとして、いきおいよくこちらを振り返り、揺れる瞳で私を見た。

その表情にも、いつもと違ってとても切迫した様子が見える。

今起きていることを理解していない私には、そんな態度で不安が募るばかり。

でも、むやみに動転している様子は見せたくないわ。

「あ、哀君……大変なんじゃ!!」

「一体何があったの」

クールに対応しなければ、と思った。

そして思うままいつも通り冷めた顔を作って返すと、博士はそれでも興奮したままの様子で私に言った。

「とにかく今からわしと一緒に横浜に行くんじゃ!!」

「何があったの」という問いへの答えにはなっていない。

何らかの情報を期待して尋ねた言葉だが、全く意味が分からなかつ

た。

まず、どうして横浜なのだろう。横浜に何かがあるというのだろう。私は今気分転換にコーヒーを飲みに来たのに、何故今から行かなければならないのだろう。

横浜に行く事よりも、横浜に何かあったのか、聞きたかった。

(……今の博士から聞きだすのは、難しいのかしら。)

私は、先ず彼を落ち着かせようと試みた。

「落ち着いて、博士。順序だてて説明して」

「落ち着いとるよ！ とにかく早く支度をするんじゃない！」

……………ダメね、これは。

全く落ち着いているとは思えないわ。

私に何の説明もしないまま、彼はばたばたと、出かける為の洋服をとりに向かった。

今は何を言っても無駄みたいだし、私も一度だけため息をついてから出かける支度を始めた。

動転しきった博士を見たら、先ほど偽りだった冷静さも、段々と取り戻してきた。

ウーロン茶を一杯飲んで、着替えて、適当に髪をとかして……。

終わった頃には既に、比較的いつも準備が遅い筈の博士が待っていた。

「遅いぞ、哀君！ 急ぐんじゃない！」

博士は私の腕を取って大急ぎで車に乗り込んだ。

私は、何が何だか分からないまま、されるがままの状態だった。そんな私にはお構いなく、車は猛スピードで発進した。

「ちょっと、博士？ 人を無理矢理連れてきたんだから、そろそろ何があったのかちゃんと説明してよ。」

博士は隣に座る私を一瞥した。

本当によっぽどの事があったのだろう。いつもよりかなりスピードを出している。

事故でも起こすのではないかと思うほど、窓の景色が流れるのは異様に早かった。

ようやく少しだけ落ち着いたのか、博士は小さく息をついて話し始めた。

「……さっき、蘭君から電話があつてな」

毛利蘭——私はあの明るい笑顔を思い浮かべた。

工藤君が命をかけても大好きな……あの可愛い彼女の事を。どこか、お姉ちゃんと似た所があるように思う、あの彼女。

「ええ、それで？」

私が尋ね返すと、博士は辛そうな顔をした。

「今横浜の病院にいて言っておった」

「……病院？」

再び、胸をかき乱すような不安に襲われた。

意図的に、「彼」の事は頭から除外して、「彼女」に何かあったの

かしら……などと考える。

けれど、それならどうして自分まで行かなければならないのだろう。既に決まってしまうている答えを、あえて思考からはじいた。

そんな私に、博士は次の言葉を言った。その言葉に、私の思考は完全にストップした。

「……新一君じゃよ。新一君が事件に巻き込まれて車道に突き飛ばされて、今意識不明の重態なんだそうじゃ」

そう。頭の中が真っ白になった。

必死で、受け入れまいとしていた考えが、いやな予感的中してしまった。

それから、博士は他にも何か言っていたけれど、私の耳にはもう何も入らなかった。

博士の言葉が、何度も何度も頭の中を駆け巡った。受け入れたくない、言葉。理解したくない、言葉。

シンイチクンガ、

ジケンニマキコマレテ

シャドウニツキトバサレテ、

イマイシキフメイノジュウタイ？

……どうして？

今、博士はなんて言ったの？ 誰がどうしたって言ったの？

クドウクンガ、イシキフメイノジュウタイ……………？

何で。何があったの…？

ジケンニマキコマレテ、シャドウニツキトバサレテ……

嘘。嘘でしょ！？ そんなの嫌よ！！！！

どうして受け入れがたい事実は、突然やってくるの。

お姉ちゃんの、時みたいに……。

どうして、なんでもない日常が、突然地獄に変わってしまうの。

工藤君が、車道に突き飛ばされて意識不明の重体……！？

そんなの、嫌よ。折角、ようやく見つけたのに。

お姉ちゃんがいた頃と同じくらい、私の心を占領する人。

一体誰が工藤君を突き飛ばしたの！？

誰が工藤君を撥ねたの！？

どうしてこんな突然、何があったの！！？

身体が小刻みに震えているのは、隣の博士に指摘されるまで気付かなかった。

博士は私の反応を見て冷静になったらしい。

何度も私を呼んだらしいけど、私は病院に辿り着くまで何も聞こえなかった。

全ての感覚を知らず知らずのうちに遮断していた。

私が我に帰ったのは、病院に辿り着いたときだった。

博士に何度も揺さぶられ、肩を何度か叩かれて、やっと私は正気に戻った。

「哀君！ しっかりするんじゃない！！！」

「は……かせ……？」

はっと正氣に戻ると、既に車は止まっていて、左右には見覚えの無い景色があった。

工藤君の事を聞いたときから、横浜に着くまでの記憶が無い。いつの間に、と思いながらも、前を見ると確かに病院があった。

「着いたぞ、哀君」

「……この中に、工藤君が？」

確認するように博士を見ると、博士は頷いた。

私はたまらなくなってシートベルトを外し、いつもの倍以上のスピードで、車から降りた。

走ろうという意識が頭にあるわけでもなく、身体が勝手に動く。

駐車場で周りを見ずに走るのは危ないと、博士が後ろからなだめようとしたけれど、その言葉に従う余裕もなく、私はそれを振り切って病院へ走り出した。

博士は慌てて車の鍵をしめ、後ろからばたばたとついてきた。

病院の中に入ると、近くを歩いた看護婦を呼び止めた。

「あの、江戸川君……江戸川コナンの病室は！？」

聞いているうちに、博士が追いついた。隣で、必死で呼吸を整えている。

看護婦はその様子に困惑しているのか、僅かに表情をゆがめながら、「あっちです。」と指差した。

私達は、そこへ走った。

荒く息を切らせて、そこに立ち尽くす。

目の前には、江戸川コナン様という文字。

その病室は、いつでも医者が駆けつけられるようにという事か、一

番ナースステーションに近い位置にあった。
看護婦はもちろん、ここは医者もよく通る。

それだけ、好待遇の場所に病室を置かれる、という事は、
つまり、それだけ容態がよくないという事だろうか。

恐る恐る、かちやりと音を立てその扉を開いた。

中にいた、蘭さんや服部君、それからもう一人（――確か服部君の
彼女の遠山さんって言ったかしら？）

彼女達は一斉にこちらを見た。

しかし、病室に入った私の瞳に映ったのは、工藤君だけだった。

その場に響く規則正しい機械音、包帯だらけの身体。

きつく閉じられた瞳と、あまりにも痛々しい姿。

ぼろぼろに傷だらけなその体は、私が知っている工藤君とは違う……。

いつも、江戸川コナンの中に高校生としての彼を見ていた。

何があっても、傷だらけでも、犯人に立ち向かっていく心が、とても強い人だったから。

小学生の見た目を、忘れさせるほどに、不敵に見えていた。

けれど目の前にあるのは、まるで死んでいるのではないかと思うほど弱々しくみえる体。

傷だらけで横たわる意識もない彼は、小学一年生の姿をしていた。

「なにが、何があったんじゃ!？」

私の隣で博士が声を上げた。

部屋に居た三人は、「ああ、」と顔を見合わせ、

工藤君のベッドの右側で、推理でもしていたのだろうか、小さなメモ用紙片手に座っていた彼が、徐に立ち上がり、説明を始めた。

「横浜で、俺らはイベントに参加するはずやったんやけど、その主催者が殺されてしもてな。

それで、俺やおっちゃんや、くど……坊主がその事件に首突っ込んでどったんやけど……」

ゆっくり、部屋の中に入る彼女達にも考慮してか、多少脚色を加えたのが分かる一部始終を、彼は教えてくれた。

とても丁寧で詳しい、纏まった説明……だからこそ、とてもリアルな。

その、事故の瞬間も、話す彼は悔しそうに顔をゆがめてはいたが、冷静だった。

私は、呆然とした顔でそれを聞いていた。

その状況が頭の中に浮かんでできてしまっ、とても辛かった。

そう。突然なのよ。大切な人が、目の前から居なくなってしまう時は。

説明を聞き終えた私は工藤君の眠るベッドの前に立ち、彼の顔を見つめた。

まるで既に死んでしまっているように、包帯だらけのその顔はあまりに安らかだった。

ねえ、どうしてよ。

どうしてそんなに傷だらけなの？

どうしてそんなにきつく目を瞑っているの？

どうしてそんなに身体中機械につながれているの？

今ある状況を、頭が理解しようとしていない。
それを拒んで、疑問だけが頭の中をめぐっていた。

「どうして」、「どうして」と。

その理由は全て、先ほど服部君が説明してくれたはずなのに。

もしもこのまま、とそう考えると怖くて、恐ろしくて。

体中、小さく震えているのが自分でよく分かった。

だって、もう失いたくないのに。

少しでも油断をしたら、涙が零れそうだった。

けれど、こんなに人がたくさんいる場所では泣けない。

ねえ、お願いだから目を開けて。

いつものあの明るい笑顔で、たった一言「大丈夫だから」って言うて……

あの何処から来るか分からない自信満々な笑顔で、いつもみたいに、私を安心させて……

あなたらしくないでしょ、こんな所でじっと寝てるのは。

声にならない声で、心の中でささやいた。

全て全て、言葉にすることが出来ない思い。

心の中でしか、話すことの出来ない思い。

医者は目を覚ます希望についてはないものと思わせる事を言ったらしい。

ほぼ絶望的な、見解。

工藤君、死なないで。

あなた、私に言ってくれるじゃない……守ってくれるって。

組織との戦いで、あなたが変わりに生きてくれるなら命を捧げてもいいと思ってる。

お父さんもお母さんも、物心ついた時にはいなかった。

唯一の血縁者だった、お姉ちゃんも、死んでしまってもう二度と会えない。

ねえ、工藤君。この上更に、私から大切な人を奪うの？

あなたが死んだら、どうやって私はこれから先を生きていけばいいの？

あなたが居なくなることが、凄く怖いことなのよ。

ねえ工藤君。

私が変わりにそこに眠るから、あなたは還って来て……………その代わりになるなら、私は何でも捧げるから。

だって……

「もし、あなたまで死んでしまったら、私はもう生きていけないから……………」

声にするつもりはなかった。けれど、ぽつりと呟いてしまった言葉。
葉。

とても小さな声だった筈なのに、彼女——蘭さんが反応した。とても鋭く反応した。

「そんな事、言っちゃダメ!!」

強い口調で、彼女はそう言った。

驚いて彼女を見上げると、キッとまっすぐに、彼女は私の瞳を見つめた。

一瞬だけ、鋭かったその視線に目が離せなくなつて。

けれど、彼女はふっと苦い笑いを零して、そんな私の肩に手を置いて、

私と目線が同じくらいになるようにしゃがみ込んだ。

「そんな事、言っちゃダメだよ、哀ちゃん。コナン君、頑張ってるの。」

だから絶対に死んだりしないわ。信じていてあげて。もしもなんて言わないで。

今だって、必死で頑張ってるのよ。苦しいけど、帰って来ようとしてるの」

強い瞳。強い口調。どうして……？

どうしてあなたもこの人も、いつもそんなに前向きでいられるの？ この人は、部品を変えれば永遠に行き続けられるロボットや人造人間じゃない。

意志が強くても、どんなに今まで死地を掻い潜ったとしても、脆い生身の人間なのよ。

ましてやこんな小さな子供の体で、今のこの人は体力だって大人以下。

人間なんて簡単に死んでしまうのに。

刺されて、撃たれて、病で……事故で。

どんなに強い意志の力を持っても、負った損傷が回復して元気になるわけじゃないのよ？

生きたいと願っても、血をたくさん流したら死んでしまうのよ？
どんなに心が強い人でも、身体が限界を超えてしまったら死んでしまうのよ。

分かっているでしょう、あなただって。

それなのに、どうして……？

「……怖くないの？」

気がついたら、問いかけていた。

こんな状況でも、気を強く持っていられる彼女に。

諦めじゃなく、彼の容態も全て受け止めてそう話しているように見える彼女に。

怖くはないの？ 彼を失う事が……。

確かに、あなたの中での彼は、ずっと待ち続けている” 工藤新一” じゃなくても。

” 江戸川コナン” は、彼とは別な意味で凄く大切な存在だったでしょう？

あなただって、探偵をやっている彼の傍で、人が死ぬ所はたくさんみたでしょう？

そんな彼が死に瀕しているこの状況で、どうしてそんなに強くいられるの？

けれど、そんな私を無言で見つめていた彼女は、柔らかに微笑って見せた。

「私だって怖いわよ、コナン君が死ぬのは。そんな事、考えるだけでもっ。」

正直、まだコナン君がここに運ばれたばかりの時、手術を終えて病室でコナン君と向かい合ってた時、

私も目の前真っ暗で、最悪の事態ばかり考えてしまっていたの。でも……でもね、コナン君見てみて」

そう言って、彼女はベッドに横たわる工藤君を指差した。

私はその指を追うように、彼に視線を移した。

「……ほら、ちゃんと生きてるのよ。お医者さんはいつ亡くなくなってもおかしくないって言ったけど。

多分、あと一日ももたないって思われてたと思うけど、でも、コナン君ちゃんと生きてるの。

安心は出来ない状況だけど、あれからずっと、コナン君ちゃんと生きてるんだよ。

頑張って、闘ってるの。だから、私たちも信じていてあげなきゃ」

私の肩に置かれている手は、震えていた。

震えながらも、怖い思いを必死で抑えながらも、それでも彼女は信じていてあげなきゃだめだと言う。

そんな彼女の思いが、その震える手から伝わってくる。やっぱり、強い人だと思った。

前に、震えながらも私を抱きしめて、銃弾から私を守った時のように。

そうよ。彼女だって怖いに決まってるわね。けれど、その恐怖に負けたらダメなんでしょう？

馬鹿ね。運命から逃げるなって、私に言ってくれたのは彼女だったのに。

恐怖に負けて諦めてしまったら、彼を裏切ることになるのよね。

そう。きつとここにいて誰かが彼の死を恐れていて、

けれど、ここにいて誰かが彼が助かる事を信じている。

無茶だと思うものに立ち向かっていくのは、怖いもの知らずじゃない。

彼も、ここにいてる皆も、怖いけれども立ち向かっていける、怖いけれども信じていける、

そんな強さを持っているのね。

彼が頑張っているから、彼も必死で生きようとして闘っているか

ら。

私達は、信じなければいけなくて、私達も負けるわけにはいかない。工藤君は、待っている彼女がいる限り、私達が信じている限り、まだこんな所で命を落としたりしない。負けてしまったりしない。

彼がこんな大変な時に、私たちが出来ること……。

彼が助かる事を祈る事しか、彼の事を信じる事しか出来ない。

だったら、精一杯祈ればいいのね。心から、信じていればいいのね。

彼の強さと、彼の生還を……

「そうね。私も、自分が出来る精一杯の事をやるわ」

私の台詞に、ここにいる皆が同意した。

それでいいんだと、頷いた。

「そうや、姉ちゃん。工藤をこない目にあわした奴は、俺が絶対捕まえたるから」

大阪の彼が力強く微笑んで言った。工藤君に似た、心強い笑顔。

私が彼に微笑み返すと、遠山さん（って言ったかしら？）が怪訝な顔で彼に言った。

「平次、こんな時まで変な冗談言うのやめ。これは工藤君やのうて、コナン君やろ!？」

「えっ……？ あっ、ああ。そやったな」

彼は苦笑しながら、慌てて訂正した。

……全く、いつもこんな危うい事してるのかしら、この人。ちゃんと場所はわきまえることね。

そう言えば先ほども工藤君の名前を言いかけた彼の言葉を聞き流し

た。

工藤君の事で頭が一杯で、心の中で突っ込みを入れる余裕は無かったから。

病室に来て数分。いつの間に、人に突っ込める余裕が出来たのだらう。

「そ・れ・につ、こんな小さい子に手え出したらあかんよ！」

彼女が怒ったように付け加えと、彼はむっとした様子で言った。

「あほっ！ 俺は変態やない！！！」

負けじとそう返した彼に、「そやったん？ アタシはてつきり……」と呟いた彼女。

それから彼等は、漫才なんだか喧嘩なんだかよく分からない言い合いを始めた。

全く、ここは病室よ。もう少し静かに出来ないのかしら。

けれども、呆れと同時に、そんな彼等を羨ましくも感じた。

こんな時でも明るい彼等の事を。羨ましくて、そうなりたいと思っ

た。

そう。工藤君はきつと、みんなが暗くなることは望まない。

こんな時だから明るくいる事が、本当の強さなのかしらね。

だって私は、何も出来ないわけじゃないわ。工藤君を信じて、待つ事が出来るんだもの。

そう思ったら、自然に微笑みが零れていた。

「……江戸川君、私との約束破ったら承知しないわよ」

眠る彼に、そう告げた。

彼は、言ってたから。「運命から逃げるな」って。

「やばくなったら、俺が何とかしてやる」って。

あなたに、せめてその約束は守ってもらわないと。

そうじゃないと、あなたの解毒剤の研究を必死にやってる私の努力に、帳尻が合わないんだから。

彼女にも、大阪の二人にも感謝しないとね。

私はようやく、信じている強さを持つことが出来た。

お姉ちゃん、工藤君の事助けてあげてね。

もし彼がそっちにふらっと現れたら、追いついてあげて。

彼は最も失いたくない、大切な人だから。

昔お姉ちゃんの事思ってたのと同じくらい、私にとってとても大きな存在だから。

信じてるからね……工藤君。

☆☆☆

彼を信じる彼女たち。

まさか彼の意識が異世界にいるなどという事は知る筈がなく、そして彼もまた、元の世界での自分が危険な状態とは知らず。ただ一刻も早く帰れる術を探しながら、未だそれを見つけられないまま、異世界での時を過ごす。

異世界での、大切な友人達を助ける為に……………

其の八：幕間2、A i 〽信じる強さ〽（後書き）

どうもお久しぶりです、こんにちは、朧月で御座います。

……随分間があいてしまいましたね。

改訂作業というのは、難しいものであります。

さて、今回は再び幕間編です。

哀ちゃん編。書いた当時は平次編同様、結構気に入っていたかなあ。でも、やっぱり恥ずかしくて直すべき所がかなりありまして。

さて、次回からはまた再び異世界編をお楽しみいただきましょうか。

さて。今回も無事お会いできて嬉しく思います。

また再び続く異世界への幕開けを、次回もまたお楽しみ下さいませ。

其の九：哀しみの少女

” いいか、お前の役目は…… ”

暗い部屋の中に、男と二人立っていた。

男は冷たい目で見下ろして来て、その冷たい台詞を口にした。

悲しみに押しつぶされないように、目を細めて男を見上げながら、心の中でぼんやりとそれを反復させる。

私の役目……私の役目は……

受け入れたくないけれど、受け入れなければならないその事実。

何とか、無理やり納得しようとして、何度も何度も、心の中で呟いた。本当は凄く嫌だった。そんな事を実行に移すのは。

けれど、しなければ大切なものを失うことになる。

出来る事なら、抵抗して突っぱねて、逃げてきてしまいたいものだが、

それすらも叶わない。自分のせいで、誰かが傷つくことになったとしても。

どんなにやりたくない任務でも、遂行しないわけにはいかない。

「これが終わったら、私の望みも聞いてくれるのよね？」

男に必死に懇願した。

男は、口元に静かな冷笑を浮かべた。

この望みをかなえるためなら、例えば自分がしている事がどれだけ酷い事であっても。

” どうしてこんな事をしなければならないの？ ”

本当は、そんな気持ちだけが溢れてきているけれど。でもどうしようもない事だってある。

小さい頃思い浮かべた未来の姿とは、大分外れてしまった。まっすぐ歩いていたつもりだったのに、道がいつの間にかずれてしまっていたように。

一体どこで、標識を見間違えてしまったのだろう。

本当は凄く嫌で。けれど、それでも逃げる事なんてできない。いっそ自害してしまいたい気分にもなったが、そうするわけにはいかない。

呪われた運命を嘆いても、そこから抜け出すことはできない。逆らう事すらできない自分……。

哀しくて、悔しい……

もし刃向かったら。

もしも彼等を裏切ってしまったら………

考えただけで、恐ろしい結末が待っているのだ。思い浮かべてしまったその結末に、思わず息が出来なくなった。絶対避けたい結末。

哀しくて辛すぎる、その結末。

動揺して、苦しくて、恐ろしさに体が震えた。

ドキドキ、恐怖でうるさく脈打つ心臓が苦しい。

冗談じゃないわ。そんな事絶対に……

強引に、思考を完結させる。

けれど、哀しみを完結させる事は出来ず、それどころか視界化してしまったその結末に、更に動揺が深まった。

誰か、助けて……！

本当はこんな事やりたくないの。
それなのに。

叫びたくても、声が出なかった。

気がついたら、その部屋に一人しかいなかった。

暗い部屋に一人きり。そんな状態があっていると思うし、ただ怖かった。

誰にも助けなんて求められない……辛くて、怖い。

「おい……ばら！？」

暗闇の中で、誰かの声が聞こえた。

どこから響いているのか分からず辺りを見回したけれど、声の主は中々見つからなかった。

誰、なの？

探しても見つからない声の主に呼ばれて、
けれどその声はどこか、温かくて……

「おい！ ……朝だぞ。」

揺さぶられて、哀はようやく目を覚ました。

明るい光が目に入って来て、思わず目を細めて、もう一度ゆっくりと目を開ける。

視界に映ったのは、少年の顔だった。

昨日出会った、”灰原哀”を知っているという少年。

自称17歳だけれど、7歳ほどにしか見えない。

けれど、嘘をついているワケではないと思う理由は、自分自身も……。

考え込む哀を、コナンは心配そうな顔で覗き込んだ。

「魘されてたけど……大丈夫か？」

気遣わしげに、柔らかい声でそう言った彼。

そうだ。私は、この人と同じ部屋で住む事になったんだ……

ようやく、今までの事が夢だと理解して苦笑した。

未だ、心臓の鼓動は収まらないけれど、夢だという事実心底ほっとした。

ほっと安心したのが半分、けれど全て夢でもない事に落胆したのが半分。

彼の言葉が、温かく心に沁みていく。

その温かさが、逆に自分を追い詰めていくように感じた。

罪悪感と、哀しい気持ちで心の中がいっぱいになっていくように。

温かい声と、台詞と。そして優しい顔と。

全てを投げ出したくなる。全てを話したくなる。

絶対に、そんな事起きては行けない事なのに……それでも、とまらなくなる。

哀は悲しげな顔でコナンを見つめた。

首を傾げて哀を見つめ返す彼を目の前にして、哀は胸が張り裂けそうだった。

お願いだから、そんな優しくしないで。

あなたが優しくしてくれるほど、私は辛くなる……。

優しさを受けるほど、泣きたくなってしまう。

汗をびっしょりとかいた髪をかきあげた。

湿った毛に触れる手が気持ち悪い。

思わず顔をしかめたが、突然額に自分のものではない手の感触を感じて、哀は驚いて後ずさった。

「……な、何!？」

額に触れているのは、彼の手だった。

真剣そうな視線ともろにあってしまい、動揺して目を逸らす。

「風邪とかじゃねえだろ……? やっぱり夢見が悪かったのか。一体どんな夢見たんだよ?」

「……さあ。覚えてないわ」

肩を竦めてそう答えるのは、精一杯の強がり。

出会ったばかりのこの少年への、必死の強がり。

だって話しかけてくるその声が、あまりに優しい声だから。

全てではないにせよ薄々何かに気付いているその少年の存在は、任務遂行の上での脅威だから。

「困った事があるなら言えよ?」

言いたい。

言えるものなら言ってしまいたいと、そう思った。

けれど、それが叶う事はない。

そう考えて、哀は暴露してしまいたい感情を押し殺し、顔に小さな笑みを作った。

「何でもないわよ。起こしてくれてありがとう」

「まあ、それならいいけどよ」

コナンはそう言うのと、軽い調子で笑った。

既に着替え終えていた彼は半分緩みかけていた帯を調えながら、昨日有希子から渡された哀用の着物を彼女に渡した。

「すぐ朝飯の呼びに来ると思うから」と言いながら、別室へ出て戸を閉める。

早く着替えろよ、と言付け加えて哀を一人部屋に残した。

部屋に残された哀は、じっと両手に乗せている着物を見つめた。各国の姫が着るものとなんら変わらぬその着物は、豪華で、華やかで。

それを着ただけで、高貴な気持ちにさせられるようなイメージだ。じっと見つめて、目を細めた。こんなものを、着せられるなんてという想いが胸をよぎる。

刹那、哀の頭の中をふっと懐かしいような光景がよぎったが、それが一体どこから来る記憶なのか、彼女には分からなかった。

「……おねえ、ちゃん」

呟いて、俯きながら着物に腕を通した。

子供の頃から、いつも着物の着替えを手助けしてくれていた存在は、ここに居ない。

「嫌でもなんでも、必ずやり遂げて見せるわ」

辛そうにそう呟きながら、哀はその着物を着込んだ。

目を伏せて俯きながら、ただ黙々と、帯を巻いて整えた。

着替え終わった哀の姿を見て、コナンはつい驚きの表情を浮かべた。

彼は丸く大きく見開いた目で哀を見つめ、僅かに頬を赤く染めた。口を半開きにしてじっと凝視する彼に、哀もほんの僅かだけ恥ずかしさを感じ、それを誤魔化すように、ぶっきら棒な声で呟いた。

「何よ？」

尋ねられてコナンは我に返ったように、「いや」と苦笑した。

「どうせだから」と哀の為だけに用意された着物は、とても綺麗な着物だった。

元々綺麗な彼女の外見が、更に美しく、まるで本当の姫様のようにさえ見える。

昨日有希子が大喜びで調達したそれは、繊細で哀のイメージによくあった着物だった。

「お前、随分似合ってるじゃねえか」

呟かずにはいられなかった。

最初会った時の服装は、町娘のナリだった。

城の中で一夜過ごした彼女は、少女の服が間に合わずとりあえず元の服で済ませていた。

そんな彼女のその姿は、一瞬コナンがドキッとしてしまうのも無理は無い。

本当に、その着物は哀だけの為に存在していると思わざるを得ない程に似合っていて、

彼女をよりいっそう美しく引き立てていたのだから。

哀はやはり少し恥ずかしそうに頬を染め、「ありがと」と短く答えた。

そしてゆっくりその場に腰を下ろしたその座り方も、とても優雅なものだった。

「どこで身につけたんだ？」と彼が尋ねると、

「別に特に何か変わった事はしてないわ」と哀は応えた。

程なくして、迎えに来た新一も哀の姿に目を丸くした。

「……なんだ、随分似合ってるじゃねーか。母さんってそんなセンスよかったっけ？」

驚きの声をあげずにはいられない。

最後に見た時『町娘』だった彼女が、今はまるで『姫』だ。

新一の脳裏に、有希子が前日「絶対似合うのばかり用意したからね」等と

凄く嬉しそうに言っていたのが蘇った。

もちろん、大きな国だからどんな着物も調達するのはワケない話だ。

だからと言ってそんな中からコレほどまで似合う着物を見つける、というのは。

恐らくその着物だけでもかなりの値が張るのではないだろうか。

値段など、庶民には考えただけで恐ろしいほどに。

その後三人は朝食をとりに向かい、そして食事を終えたら恒例の稽古。

新一とコナンが刀を交えている様を、哀はクールに眺めていた。

新一は余裕でコナンに攻撃を続け、コナンは必死の形相でそれを交

わし、新一の持つそれよりも短い刀で攻撃へと繋げていた。
しばらくその様子を見つめながら、哀は目を細めた。

一生懸命なのね。国の為に、国民の為に。

みんなを守ろうと必死なのね。

でも、私にも守りたい者はある……。

だから、どうしてもこれだけは譲れないの……。

哀は寂しい顔で二人の稽古をじっと見つめた。

振り回される刀の行方をじっと目で追った。

数分後、新一とコナンは稽古を止め、汗を拭きながらその場に座り込んだ。

そよそよと吹く風が、二人の髪を揺らした。

とても気持ちよさそうに笑う二人は、まるで兄弟のように見える。

「……どうだ？ 大分強くなっただろうが」

はあはあと息を切らせながら、コナンは苦しげに呟いた。

汗が何度も何度も頬を伝って滴り落ちても、その顔に浮かぶ表情はさすががしかった。

新一も僅かに息を切らし、乱れた髪をかきあげる。

「当たり前だろ、俺が稽古つけてやってんだから。強くなってくれなきゃ困るんだよ」

そう。そんな会話もまるで兄弟のようで。

顔も似ているせいでその感じは余計に増長する。

兄弟みtainな二人。並んで座って仲良く笑っている二人。

誰にも妨害される事無く、自由に生きている二人……。

自分とは、大違いだ。と思う。

そして、そんな二人がとてもとても羨ましい。

自分にはいつかそんな光景が戻ってくるのかと考えると、切なかった。

「……あなた達、仲いいわね」

微かな笑みを浮かべて二人にそう言った哀を、コナンと新一は怪訝な顔で見つめた。

二人は少しだけ考え込んだ後、ぽつりと呟いた。

「仲いいも何も、同一人物だしな。争ったって仕方ねーし」

「そりゃ、気はあうんじゃないか？　べつたりくつついた仲良しってのとは違うけど。」

お互いの目的を果たすために手を組んだ戦友だからな」

きょとんとした顔で二人はそんな事を言いながら、お互いに顔を見つめ合わせた。

首を僅かに傾げて、お互い「なあ？」と確認し合う。

その様子はやはりまるで本当の兄弟のように見える。

まるで昔を思い出すような、その光景は……

哀は再び、昨夜のコナンの言葉を思い出した。

”姉を殺されて組織を裏切った……”

”姉を、殺されて……”

油断をすると、昨日の夜のように涙が零れそうだった。そして、再び今朝見たあの嫌な映像が頭の中に流れた。

いや。いやよ!! そんなの、絶対に…………

心の中で悲鳴を上げ、ぎゅっと目を閉じた。

考えてはいけない、と自分に必死で言い聞かせる。

考えたら心が壊れてしまう。考えたら、実際にそうになってしまいそうな気がして。

「どうした? 灰原…………」

怪訝に覗き込んだきたコナンの声に、はっと我に帰る。

瞑った瞳をびくりと開いたその視界の先に映ったのは、吸い込まれそうな綺麗な蒼だった。

大きくて綺麗な彼の双眼が、自分を心配そうに見つめていた。

一瞬、つつい全を話しそうになつて僅かに開けた口を慌ててつむいだ。

まるで全を見透かされそうで、その優しい瞳が怖かった。

つつい、そこからすつと目をそらす。

「な、何でも、ないわ」

頭の中で警鐘が鳴った。

彼の目を見てはいけない…………私の決意が、揺らいでしまう。

揺らがされるわけにはいけない決意が…………ぐらぐらと揺らいでしまう。

自分に言い聞かせた言葉を、何度も胸の中で反復させた。

しかし、コナンはそんな彼女にふっと笑って言った。

「そうか？ でも……何かあったら言えよ。いつでもお前の味方してやつから」

まるであっさりした口調で、当たり前のように言う。
するとその後ろで、新一も哀に言った。

「ああ、そうだな。俺も何かあったら守ってやつから。一人で心細いんじゃないか？

先のことばかり心配するよりも、今出来る事を力いっぱいやった方がいいだろ？」

同じ顔をして、優しく響く声。

何故、彼等はこれほどまで強さを持っているのだらうと思う。
信じているわけではないはずなのに、そんな自分に向ける優しさ。

それは確かに心に暖かいものとして響くけれど、だからこそ。
あまり優しくされ過ぎると、目的を果たせなくなりそうだった。
絶対に、果たさなければならぬのに。

辛そうに顔をしかめた哀はしばし俯いたが、やがてコナンに言った。

「あなたの世界の私って……たった一人で、どうやって生きてるの？」

哀しい顔と声でそう言った。

どの道、どっちの世界でも一人という事実には変わりはない。
両親も失い、姉も失い、18になるまで育った場所すらもなくなり。
ずっと歳の離れた、住む世界の違う子供たちの中でどうやって。
そんな中で、別の世界の自分はどうかやって生きているのだらうと。

そう考えて尋ねた言葉だが、コナンは少しだけ考えた後、力強く微笑んだ。

「……心配すんな。俺の世界のお前は、一人なんかじゃねえよ。まあ、最初は確かにそうだったかもしれねーけど。今は俺も含むたくさん仲間に関まれて、みんなと一緒に生きてるんだ」

組織から出てきた哀は最初、確かに凄く不幸だったかもしれないが。

もう今は周りの皆としっかり打ち解けて、ずっと強くなったのだと。前よりずっと穏やかな顔もするし、笑うようになったんだと。

コナンの言葉を聴きながら、哀は目を大きく見開かせ、顔を上げた。

そんな視界に、コナンの力強くも優しい笑みが映った。

お父さんもお母さんも、そしてお姉ちゃんまでもが死んで、私は一人じゃないの？

たくさん仲間に囲まれて、みんなと一緒に……。そんな生活が出来たら、私は……………

考えると、少しだけ寂しかった。

大切な人をおいて手に入れる幸せが。

けれども、別世界での自分はそれで幸せに向かっていくという。

「そう、安心したわ。あなたの世界の私は幸せなのね」

別に、いい。そっちはそっちで幸せならば幸せなまま。

そう思って哀が微かな笑いと共に呟くと、コナンは小さく笑った。

「こっちの世界でも、お前は幸せになれるよ」

コナンの言葉に、哀は更に目を大きくして彼を見つめた。
大きくした瞳を揺らしながら見開いて10秒。

哀はどこか複雑そうな笑みを浮かべて軽く首を傾げ、皮肉げな声で彼に言った。

「……どうかしら？」

はつきり言って、彼女の中には1ミリもそうなる未来は映っていなかった。
けれど。

「絶対だ」

コナンと新一の声が見事にハモった事に、彼等はお互いに驚いた顔で見詰め合った。

そして同じように哀も、目を丸くして彼等を見つめた。

きよとん、と顔を見合わせる三人の中から、自然に笑いが零れた。
コナンだったか、新一だったか。ほぼ同時に彼らは笑い出した。

「やっぱり同一人物なんだな。」と。

二人で言い合いながら彼等はおかしそうに声を立てて笑った。

目の前にずっと手に入れたかった光景があった。哀は目を細め、その様子を見つめていた。

凄く羨ましくて、自分もそうだったらよかったのにと、二人の笑顔を見つめていた。

多分、それはもう帰ってこない幸せだから。

しばらくはそのままの空気が三人の間に流れていた。

「あっ、そうだ……灰原!!」

空気を切ったのはコナンだった。

ふいに、何かを思い出した様子で彼は哀に話を振った。

「え?」と首を傾げてコナンを見た彼女に、彼はやはり優しい顔で言った。

「忘れてたけど、お前は会っておかなきゃいけない人がいるんだ!」

その言葉に、新一と哀は不思議そうにコナンを見つめた。

そんな哀の不思議そうな視線をそのまま見返したコナンは、にっと笑ってその手を掴んだ。

悪戯っぽい笑顔を呆然と見つめる哀の身体をぐっと引き寄せて、「行こう!」と言った。

そして、困惑しながらついていく哀の腕を、ぐいぐいと引っ張った。

「ねえ、ちよっ……行くってどこに?」

哀は眉をひそめて引きずられた。そして新一も不思議そうに後についていく。

コナンはくると振り向いて彼女に言った。緩やかな微笑を浮かべながら。

「これから、お前の大切な人に会いに行くんだ」

「大切な人!!?」

「ああ、会わなきゃいけない、大切な絆にな」

そう言って不適に微笑んだコナンに、哀は眉を顰めた。

だって大切な人など……自分には一人しかないのだ。そう、たった一人しか……。

頭に浮かんだその顔に、哀は微かに目を細めた。

手を引いて前を走る彼の後ろ髪がふわふわ揺れていた。

哀はその様子をぼんやりと見つめていた。

そのまま城を出るコナンと哀の後に付いて行く新一は、微かに不機嫌だった。

確かに身分的に上の立場である筈の自分が、ワケも分からず行動させられて、

子供二人の後を追ってワケも分からず城の外へ。

「おい、一体どこに行くつもりだよ!？」

前を走るコナンに彼が尋ねると、コナンは振り向きもせずに「行けば分かるさ。」と応えた。

いっそ、そんな彼らをほっぽって勝手にさせてしまおうとも考えた新一だが、

そのまま何も分からずに疑問をスルー出来るほど、彼は器用な性分ではなかった。

哀も新一も一体どこに連れて行くつもりなのだろうと、必死で考えた。

辿り着いた場所を二人はぼんやりと見つめた。

行けば分かる、と言ったコナンの言葉の意味が少しは分かる。

確かに、よく知っている。小さい頃から、よく遊んでもらっていた人の家なのだから。

……けれど。

「……ここに？」

数秒間の沈黙の後、怪訝な顔の新一がコナンに尋ねると、コナンはこくりと頷いた。

新一は顔をしかめて首を傾げた。
そして、それは哀も同じ事で。

「ちよつと、ここに誰がいるっていうの？」

じつとその家を見つめながら怪訝な顔で呟いた哀は、そのジト目を彼に向けた。

彼女にとっては、見覚えもない家だった。一見個性的にも見える家ではあったが、そこにどんな絆が存在するというのはか、コナンの意図がその時の彼女には理解できなかった。

哀と新一二人分の視線を浴びたコナンは、「いいから。」と一言二人に声をかけ、
その家の戸を二回ほど軽くノックして、中から返事が返ってくる前に戸を開けた。

随分と勝手に強引な行為に啞然とする二人。

新一も「おい」と一言彼につっこみたくなったが、それは自分もいつもやっている事である。
その家の主とはずっと子供の頃から親しいからこその行為ではあるが。

二人は、仕方なく後に続いた。

「おや、コナン君……おお、それに新一王子もか。」

二人とも今日は何の用じゃ？ 新一君、久しぶりに遊びに来たの

か？」

中から出てきた老人と思われる人は、二人を見てご機嫌な顔を浮かべた。

傍から見ている哀に分かるのは、その老人と彼らが実に親しい関係であるという事だ。

勝手にぞろぞろ入って来られて怒るところかご機嫌になるのだから、余程親しいのであろう。

「よく来たのお」と歓迎の言葉を嬉しそうに口にしながら、その老人は周りを見回した。

「何じゃ、今日は蘭君は一緒ではないのか？」

「ああ、俺……その。コイツの城に住む事になったんだ」

”コイツ”と言いながら、親指を新一に向けて立てる。

その態度にむっとした表情を浮かべた新一がコナンにじと目を向ける様を見て彼は呟いた。

「ほう……まるで兄弟みたいじゃな」

彼はまるでほほえましいものを見るような目で二人を見比べて言った。

そして、その後コナンの後ろでクールな表情で立っていた哀に視線を送る。

その気のよさそうな視線にぴくりと哀は肩を揺らしたが、彼はやはり嬉しそうに尋ねた。

「おや、コナン君の新しい仲間かのお？」

「あ、こいつ灰原って言ってさ、俺の世界でこいつは博士んちに居候してたんだ。」

いや、だから何だって感じだけど、絶対相性は合うと思うんだ、こっちでも。

本当の孫……じゃなくて親子みたいに仲良かったんだぜ」

孫と言いかけて、慌てて訂正する。

そんな事言おうものなら、折角機嫌がいい所に水をさす事になってしまう。

何といっても、阿笠はこう見えて実はまだ若いのだ。老人扱いはタブーである。

けれど、言いやめた筈のコナンの言葉に、阿笠はぴくりと反応した。

「今、孫とか言いかけなかったかの？」

「……気のせいだろ？」

コナンは苦笑して答えた。

哀はじつと博士とコナンのそんなやり取りを眺めていた。

彼の話を聞いた限りでは、なるほど彼の世界で組織から出た後の自分を匿っているのが、

この目の前にいる彼という事か。と思いながら目の前の老人を見つめた。

すると彼は嬉しそうに、哀に名を名乗った。

新しい知り合いが増えた事への喜びを顔いっぱいに表示しながら。そんな彼の様子に、哀も静かに微笑して答える。

「初めまして、灰原哀よ」

落ち着いた声でそう呟きながら、彼女はその小さな手を差し出した。

阿笠もその手を握りながら、純粹に哀との出会いを喜んだ。

そして、哀の方はどこか冷めた顔で。

この挨拶が、こちらの世界での哀と博士の初めての出会いだった。

本当は彼女の心の中では、極力城の中以外の出会いは避けたかった。

情が移ってしまっただけは困るから。

けれどそんな哀の思惑とは反対に、少しずつたくさんの人と知り合ってしまう。

これ以上優しくされたくはないというのに。

これ以上、目的の実行を妨げられたくないというのに。

目の前の気のいい老人との自己紹介を進めながら、哀の頭にはそんな考えが巡っていた。

目を閉じて、思う。失いたくない、大切な自分の全てを。

そう。私は、任務を失敗するわけにはいかないのよ……。

それは、小さな胸に何度も言い聞かせて決意した事。

たとえば嫌でも、やらざるを得ない事。

それは彼女なりに、大切な人を救うために……。

大切な絆を、守るために。

私はこれだけは、絶対に失敗するわけにはいかないの。

彼女はその小さなこぶしを、ぎゅっと固く握り締めた。
先に続く悲しみを、その小さな手のひらで全て握り込んでしまう事
を誓いながら。

其の九：哀しみの少女（後書き）

☆作者より

えー朧月です、こんにちは。

そしてあけておめでとう御座います。

年が明けてしまいました、いかがお過ごしでしょうか？本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

さて、9話投稿随分遅くなってすみません＜＜
改訂作業に相当な時間をかけてしまつて。

実は、一度改訂し終えた9話でしたが、ヒューズが飛んだ事により一からやり直し^^；

保存しようとしたところだったのにね。その瞬間にぶつりと。

そういう事があると、しばらくヤル気が出せなくて。先日終わった託されたモノの合間にちまちまっただけしか進められませんでした。そしてやっとな9話改訂終了です。

長くなりましたね。

異世界哀の本質に迫る9話です。

随分長くなつてしまいましたが、彼女は守る為に必死なのです。

そして彼女は、その為にならなんでもする覚悟でコナンたちの前に現れました。

文頭のストーリーを入れた事も合つて随分長くなつてしまった今回のお話では御座いますが、お楽しみいただけただけようであれば幸いです。

10話、お待たせするかどうかは改訂作業と、全く新しい未だ誰も見ぬ、このCNR時代からずっと止まっていた部分の15話解禁へ

の道の進み具合によって（笑）

出来るだけ早い所出せるように頑張りますので。

それでは、ご覧下さいました読者様、ありがとうございます。御座います。次話
もどうぞ是非見捨てずお読みいただければと思います。

それでは、よろしければいつでも感想等御座いましたらお待ちし
ておりますので（^^）

それでは、第9話。哀しみの少女でした。

其の十…更なる出会い…変わらぬ恋心…

博士の家で数十分間、随分と哀と博士も馴染んで来たようで。

緊張した表情ばかり浮かべていた哀も、前よりも穏やかな雰囲気に見えた。

そもそも相性が合わないはずなどないと、コナンはそんな二人の様子に笑顔を向けた。

ただ、博士の家に来たのは、哀と彼を合わせるためだけでもない。幼い頃から、何かあった時に相談する相手として、どこか頭の中にインプットされていた。

心配されているだろう意識だっただけだったコナンは、色々と現在ある状況を話しあった。

国の事……侵略者の影。そして、コナン自身の手がかりは全く進展がないという事も。

博士は、真面目で神妙な面持ちで、その話を聞いていた。

「大変な事になっているようじゃのお……」

呟いた博士に、コナンの横でじっと話を聞いていた新一が「ああ」と頷く。

今は取り合えず、元の世界に帰るどころのものではない。

この世界の問題を早く何とかしてから帰ると、コナンの心は決まっていた。

心配そうに視線を送った博士に、ふっと苦い笑いを零して、コナンは答えた。

「さっさと片付けてやらねーとな。帰るに帰れねーから」

「コナン君の時代でも、皆心配してるんじゃないのかのお？」

「でも……こっちの蘭たちの事も、放ってはおけねーから」

そう答えたコナンに、隣に座った新一はふっと悲しげな笑みを浮かべた。

申し訳なさそうな表情を浮かべた彼をクールに横目で一瞥した哀もまた、哀しげで小さな笑みを浮かべた。

そんな深刻な話を終えた後、帰ろうと立ち上がった時に、見慣れた声がざわざわと戸の外に聞こえてきた。

「遊びに来たよーっ！」

「何か面白いおもちゃ作ってくれたか？」

「おじゃまします!!」

とても聞き覚えのある元気な子供の声が三人分。

女の子一人と、男の子二人。

そのフレーズにも、頭の中で覚えがある。

「……あれっ？ お客さんですか？」

がやがやと家に入ってくる三人の中の一人……少々大人びた敬語を使う少年の声はやはり見覚えがあった。

やっばりいるのかと心の中で呟いたコナンに構わず、その三人を見た新一は、振り向きにこやかに笑って挨拶をした。

「よお！ お前等に会うのも久しぶりだな」

三人の子供達は座っている新一に気づいて、ぱっと顔を明るくした。

そしてあの三人にしては珍しく礼儀よく、新一に向かってぺこりと頭を下げた。

「新一王子!! お久しぶりです」

「オメー、最近みんなの前に顔出してねえよな」

「私も、新一王子に会いたかったんだよ!!」

三人共口々に、親しげにそう言った。

彼らに、苦笑しながらも「悪い悪い」と宥めていた。

民に好かれる王子様。まあいい事だろうと感じながら、大体その三人組が予想できて。

振り向きたくも無かったが、コナンもゆっくりと顔をそちらに向けた。

「……やっぱり」

呆れた顔で呟いて、ため息を一つ。

予想の通り、やっぱりというか何と言うかやはり彼らだけ居ないというのもおかしいものだ。

結局うるさい子供達のお守りもしなければならぬ、と肩をすくめながらも、

きょとんとした顔で自分を見つめた彼らに、苦い笑みを零した。

当然とばかり、子供達は新一の隣に並んで座るコナンと哀の二人に興味を持った。

「ねえ! あなた達だれ? 名前なんて言うの?」

真っ先に声をかけてきたのは、三人のうちの一人……瞳の大きい女の子だった。

ぱたぱたと駆け寄ってきて、まず最初に哀に視線を送り、手を握り締めた。

僅かに顔をしかめながら、哀は無愛想に短く答えた。

「……………灰原哀よ」

彼女の返事を聞いて、今度はコナンに視線を送った子供達の視線の意味が、彼にはすぐ読めた。
そして、哀のそっけない言葉に苦笑いをもらしつつ、答える。

「俺は、江戸川コナンって言うんだ」

”江戸川コナン”元もそうだが、この時代では相当ありえない名前であろう。

コナンの言葉を聴いた途端に、子供達はきょとした顔で三人揃ってコナンを見つめた。

「えどがわ、コナン？」

三人は声をハモらせて、怪訝な顔でその名前を復唱した。

本当にそれであっているのか？とでも聞きたそうな顔で見つめる三人に、

コナンは苦い笑みを浮かべつつ「ああ」と頷いた。

「変な名前だな、お前！」

「異国の人ですか？」

帝丹小学校に転校した時に散々聞いたお決まりの意見。

眉をしかめて呟いた二人は、顔をコナンの間近まで近づけて、まじまじと見つめた。

そして、歩美はそんな二人の頭の上からコナンを覗き込み、じっと見つめ、きょとした顔で数秒間。

段々と輝いた目になった彼女は、嬉しそうに一言。

「でも、かっこいいっ！」

そう、その前までは呆れた顔を浮かべていた彼等だったが、その少女の一言でピシッと顔色を変えた。

「な……っ！ 何処がですか!？」

「俺のがかっこいいだろ!!？」

動揺し、慌てた口調で少女に詰め寄る二人の姿は、自分の知ってる彼らを鮮明に思い出させる。

歩美の事が好きな、元太に光彦。

やはりそれはこの時代でも変わるものではないのだ。それにしても全く、勝手な事を言ってくれる。

俺のがかっこいいだろ、と自分を指差した少年は、7歳そこそこの年齢にそぐわぬ40キロのでっぷり男。

顔の形はおにぎり型、頭には十円はげ……。

（アイツ、今すげー自然に言いやがった。）

それに、何処がというのもいささか失礼だ。

工藤新一時代、どれだけのファンレターを貰っていたか教えてやりたい。

当然、顔だけの問題とはコナン自身思っではないが、それでもそこそこの自信はあるのだから。

「あんな、お前等……」

小さくため息をついて言いかけた言葉が本題に入る前に、目の前の少女はぎゅっとコナンの右手を包み込んだ。

「歩美は、コナン君の方がカッコいいと思うよ」

「あ、歩美ちゃん？」

「歩美ー」

頬を赤く染め、彼女はにこっと可愛らしい笑みを浮かべた。

じっと覗き込んでくる純粹で一途な瞳は、きらきら輝いている。

「コナン君、初めまして！ 私、吉田歩美だよっ」

「お、おう」

幸せそうな顔を浮かべる歩美の純粹な瞳は、少し苦手だった。

なんだか、凄く酷い事をしている気分になってくる。

嘘をついているという事が、申し訳なくなってきた。

元の時代に居ても、彼女の気持ちに応える事など永遠に叶わないのだと。

それを知っていて、きっぱり振る事すら出来ないで居るのだ。

申し訳なく感じながら小さく笑みを浮かべてやると、宜しくねと言った彼女は、今度は哀の元へ駆け寄った。

「初めまして！ えっと……灰原哀ちゃんだよね。哀ちゃんって、呼んでいい？」

その無邪気な瞳を一瞥した哀は、一拍置いて小さく息をついた。

「別に、いいわよ」

「ホント？ じゃあ、私のことも歩美って呼んでね！！」

「……歩美ちゃん、でいいの？」

聞き返した哀の、どこか冷ややかな視線も気づくことなく受け流しながら、

歩美は弾むように頷いた。

「うん！　なんか嬉しいな。歩美ね、いつもこの二人と一緒にだったから、女の子の友達欲しかったの。」

でも、もちろん二人と居るのは楽しいんだけど、それとは違うもん」

「ええ、確かにそうでしょうね」

「でも、今度から哀ちゃんとお友達だよ！　よろしくねっっ！！」

凄く嬉しげにと哀の手を握り締めぶんぶん振る歩美に、哀はされるがまま、その手を預けていた。

ただ、純粹に喜んでゐる少女の笑顔と温度差に次第に耐えられなくなった哀は、

静かな微笑みを浮かべ、「よろしくね」と短く言った。

そんな言葉にまた、歩美の笑みは深まった。

意図せずな出会いではあったけれども、二人の間にある空気にもまた懐かしさを覚えて、ふっと笑みを浮かべた。

「まんざらでもねーな」

「え？」

呟いた言葉にきょとんと反応した歩美に、「いや」と小さく肩をすくめた。

世話を焼く事になろうとも、可愛い弟妹達と接するような気持ちは変わらない。

しばらく不思議そうな顔を浮かべていた彼女は、はっと隣の二人に視線を移した。

哀をぽーっと見つめている光彦と、元太。

ここでも変わらず色ボケっぷりな光彦に、思わず苦笑が浮かぶ。

歩美は少しむっとした顔を浮かべた。

「……ちよつと、二人とも自己紹介しなきゃ！」

歩美の言葉で我に返った二人は、慌てて哀の前に乗り出し、揃って名を名乗った。

「お、俺は小嶋元太ってんだ！ 酒屋商人の家の息子だ!!」

「僕……っ僕は円谷光彦です。これからよろしくお願いします」

頬を紅潮させながら話す二人を、哀はクールな眸で見つめた。

「……よろしく」

無感情に呟き興味なさげにふいと目を逸らした彼女を、二人は啞然とした様子で眺め、ぽっかり口をあけた。

「お、おいっ、何だよあいつ、つんつんしてよ!!」

「……う、うーん……人見知りでしょうか？」

哀の態度に、少し気を悪くした様子の元太と戸惑い交じりの光彦の様子は、やはり元の世界での昔の彼らと彼女の邂逅を思い出す。困った顔でコソコソやりとりする姿に、思わず苦笑した。

だが、たった一言でもよろしくと呟いた彼女は、元の世界よりマシだろう。

元世界では、彼らは完全に素通りされていたのだから。

とりあえず、歩美や光彦や元太達と打ち解けるのは早かった。

彼らの性格もやはり変わらない。

博士が出したお菓子に真っ先に手を出した元太は、口に放り込みがてら既にもう一つのお菓子にも手をつける。

隣の光彦は、歩美と哀に交互に視線をやって、頬を赤らめている。全くもって、ませている事この上ない。……そして、歩美はと言う

と。

「ねえねえ、コナン君ってどこに住んでるの？　もしかして、新一王子の親戚？」

似てるよね、と大きな眸をくりくりと輝かせて、隣にべったりとくっついた。

反対側に居た新一は最初驚いた顔をしていたが、その後はくっついた二人を交互に眺めていた。

歩美は腕を絡めて、ムダに顔を近づけてくる。

「ま、まあ。親戚っつーか。似たようなものだよ」

苦い顔して曖昧に答えると、歩美はそれを怪訝に思ったのか少し顔をしかめた。

「じ……じゃあ、新一王子の隠し子？」

「ちげーよっ」

とんでもない爆弾発言に、コナンは思わず慌ててつつこみを入れた。

別に事情を話しても構わない気はしたが、幼い彼女達は上手く理解できないだろう。

むしろ逆に混乱させてしまうかもしれない。

自分が、別世界の……未来の工藤新一で、しかも体を縮められてしまっていて。

理由はわからないが此方の世界に来てしまったなんて。

ややこしい話を聞いて頭をこんがらがせるか、喜んで大騒ぎするかどちらかであろう。

こんなにべったりとくっついてくる彼女は、俗に言う”一目ぼれ”

という現象に陥っている。

「あの……ちょっとくつつきすぎてませんか？ えーと、コナン君？」

「いや、くつついてるのはオレじゃな……」

「オメー、歩美の事どう思ってたんだ？」

二人して突っかかってくる彼らに少したじろぐ。

「……あなた、人気者ね」

くすつと微笑んだ哀に、むつつり「うるせー」と応えた。

そんな自分に向ける、二人の（あまりモテない）男児の視線がどうにも痛い。

コナンは横に殺気を感じながら、歩美と向き合っていた。

「それで、二人ともどこに住んでるの？ この国？」

そんな複雑な気持ちなど知らず、歩美は嬉しそうに質問を繰り返す。

とりあえずスルーしたいが、キラキラな彼女の瞳がそうはさせてくれない。

頭をかいて苦笑いを浮かべ、ため息を一つ零した。

「城に居候してるよ。オレも、こいつも」

応えて、親指で自分と哀を交互にさした。

一瞬ぽかんとした三人だが、我に返った彼女は、尚更目を輝かせた。

「ホントっ！？」 お城に住んでるの？ じゃあ歩美も、将来お城に

住めるんだあ」

「……………は？」

呆けた顔で聞き返す。夢見る少女とはこんなものなのだろうか。キラキラした瞳で、両手を合わせ、上目遣いに将来の自分の妄想に浸る。

「あ、歩美ちゃん？」

「歩美……………何考えてんだ？？」

二人の少年達も、彼女の仕草に顔を引きつらせた。

彼らには恐らく、大体彼女の考えている事がわかつているのだろう。そんな二人の気持ちもお構いなしに、思い立ったら即行動と、歩美はぐっと顔を近づけてきた。

「ねえっ！ コナン君はさ……………許婚、とかいないよね？」

「……………へ？ ああ、まあ。」

突然の質問に、微かに動揺を覚えながら応える。

すると、彼女は心底から嬉しそうなほぐれた笑顔を浮かべた。

「よかったあーっ、じゃあ歩美がお嫁さんになっても問題ないですよっ？」

その意味を理解するより前、その会話を聞いていた元太と光彦の二人が真っ先にこの言葉に反応し、すさまじい視線を送った。

怒りと、嫉妬と、色々な感情が入り混じった二つの視線に睨まれながら、どうしていいのかと困惑した。

その三つの視線を浴びるコナンとて、元の世界に居た頃から、彼女の気持ちは知っているつもりだった……………けれど。

「い、いや……っ、それは……………」

ついつい顔が歪んだ。とてもストレートな彼女の言葉に。

あまりにも幸せそうな顔で、逆プロポーズをする七歳の女の子。凄まじい愛の展開にたじろぐ、十七歳の男。

キラキラ瞳を輝かせる彼女に見つめられて、問題あると言えるものだろうか……。

いうしかない！と自分に言い聞かせても、言葉が出てこない。

じれったそうに、隣でどつきを入れてきた新一が、耳元で小声で囁いた。

「おい、オメー……言えればいいだろ？ 問題ありありだって」

あまりにも簡単にあっさり呟かれた言葉に、「こっちの気も知らないで」と思う。

元の世界でも、彼女は自分を好いていて、その気持ちに応えられない事は上手く告げられない。

そんな自分の葛藤を、たった一言「問題があるから」と断れと言うのか。

「あのなあ、そんな簡単に言えたら苦労しねえよ」

見上げる彼に言葉を返した。

彼は小さくため息をついた後、呆れた様子で頭を二、三度掻いた。

「……優柔不断はいいけどよ。お前、歩美のこと泣かせたら承知しねえぞ？」

判ってる、と返しかけたコナンだが、その言葉にひっかかりを覚

えた。

新一の自分と彼らとの共通点はなかったけれども、まるで知っている口ぶりだ。

さっきといい、今といい、面識がなければ出てこない台詞ではなからうか？

子供の彼らと、工藤新一のままの自分が。

「お前、あいつらに会った事あるのか？」

唐突な問いに、彼は一瞬答えを迷って頷いた。

楽しい思い出を懐かしむような顔で、自然と顔の筋肉が緩んでいる。

「俺は、小さい頃からよく博士の家に遊びに来てたからな。

博士の家で知り合ったんだ。あいつらとも」

あくまで小声で耳打ちする新一に、さほど興味を感じなかった。

ただ、新一と彼らが知り合い、というのは自分にとっては新鮮で、それだけ。

また一つ見つけた自分の世界との相違点だが、大した事もない。

まあ、こっちはこっちで皆生きているのだから、それは当然なのかもしれない。

「意志や行動までシンクロしてたらもっと怖いしな」

似ている境遇は、趣味や思考などが同じだからこそ偶然似てしまったのだろう。

ただ判らないのは、それにしてもあまりに似すぎている事と、続々と現れる元世界の知り合いと。

ここに来てから何度も考えた疑問に、まだ答えは出せていない。

「ほら、まあ俺は元々この国の王子だからな……国民に知り合いがたくさんいるのはいい事だろう？」

考え込んでいた最中に耳に入ったその言葉に、コナンは我に返り再び顔を上げた。

ぽかんとした顔で見上げた新一はジト目で、隣の彼女は返事を待たされたままずっと首を傾げている。

そんな彼女に、一言「もうちょっとお互いの事知ってから考えようか？」と話を保留にして、新一に視線を戻した。

あまり話を上の空状態で聞かれる事は慣れていないのだろう。

あからさまに不機嫌モードに突入しているらしい彼の様子に、コナンは思わず苦笑した。

「おい。お前、ちゃんと俺の話聞いてたのかよ？」

「あ、ああ。ちゃんと聞いてたぜ？そんな怒るなよ」

慌てて言葉を返すと、数秒間だけ不機嫌なジト目で見つめていた新一の口からため息が漏れた。

「……別に、怒ってねえけどよ」

そして、彼は三人の子供達へと視線を移した。

頬を染めてコナンを見つめる歩美や、無言のままその様子を眺めている哀に意味深な視線を送る光彦。

そして何を考えているのか何も考えていないのか、口の中に菓子を頬張りつつづけている元太。

彼らはいずれこの国を支えていく、小さくも大切な国民だ。

「オレはな、何があっても、あいつらの事を守ってやるのが仕事なんだ。」

例えどんな奴等が力を蓄えていようと、この国の民の笑顔は必ず守ってやる。

誰一人、大切な国民を殺させやしねーから」

新一の膝に置かれているその拳に力が込められた。

爪が肉に食い込むほど力が入っている事に彼は気づいていない。

そんな些細な事どうでもいいかのように真剣な顔で、とても強い瞳で、彼は子供達を見つめていた。

そんな新一を見上げながら、この世界での自分にあたる人物が彼であることに誇りを感じた。

どうやら『自分』はこの国の民にとって、充分尊敬できるほどの王子であってくれたらしい。

その事を嬉しく感じたコナンは、目を閉じてふっと笑い彼に言った。

「ああ。オレも同じさ。こいつらが死ぬ所は見たくねえよ。協力してやるよ……絶対、こいつ等の事は死なせない」

そんなコナンの言葉に、新一も柔らかく微笑んだ。

「……ありがとな」

たった一言礼を言った彼は、もう一度探偵団達を見つめた。

そう、大切な国民。昔から自分を慕ってくれている子供達も、

そして王子としてではなく一人の人間として、息子のように自分を可愛がってくれている阿笠も。

彼等を絶対に不幸にしない事……それが王子である自分の出来る恩返しなのだ。

そんな思いを、ずっと持ち続けてきた。

「……ねえ、どうしたの？ 新一王子？」

見つめられた歩美が、怪訝な顔で新一を見上げた。
尋ねられた彼は、普通の人が見たら悩殺されるであろう笑みを顔に浮かべた。

つい、歩美の頬もぽっと赤らむ。

「なんでもないよ。何があっても、俺が必ず何とかするからな」

一瞬何の事か分からないという顔をした彼女だが、
次の瞬間にはその顔に満面の笑みを浮かべて元氣よく頷いていた。

「うんっ、分かってるよ。新一王子は何があっても私たちの事守ってくれるもん」

嬉しそうに応えた彼女は、くっついているコナンに再び視線を戻して、腕を引き寄せた。

コナンの頬と彼女の唇が、重なる瞬間の元太と光彦の大きく開いた口は多分一生忘れられない。

ちゅっという可愛い音と共に押し当てられた唇は、小さくて柔らかい感触を残した。

ついつい丸く見開く瞳が閉じる前に、彼女は言った。

「……コナン君も、守ってくれるよねっ!!」

嬉しそうな声を呆然と聞きながら、元の世界のフラッシュバックに襲われた。

不意打ちに驚いているコナンの鼓動が収まる前に、それを見ていた元太と光彦が我に返り、猛講義した。

「ちょっと！ まだ会ってそんなに経たない内に……歩美ちゃんをたぶらかさないで下さい！」

「そうだぞ！ 歩美のキス貰ったからって調子に乗んなよな！！」

別にたぶらかしてもいいし、調子に乗ってもいいのだが……そう返したくて、けれど言葉を飲み込むしかないコナンは、前途多難なこの世界での生活を思いため息をついた。

やっぱり自分はこうなる運命なのかと思いながら、自然と顔に苦笑が浮かぶ。

クールにそんなやりとりを見つめていた哀は、クスッとシニカルな笑みを口元に浮かべた。

これが、この世界での少年探偵団との出会いだった。

此方の世界にコナンがやってきて、まだ日も浅い中だが、沢山の人との出会いがあった。

今まで出てきた蘭、小五郎、博士、優作、有希子、服部平次、哀、少年探偵団、そして新一自身。

元の世界に存在する知り合いはやはり此方でも存在しているのだろうか。

このまま行くと、他の知り合いにも会う確立は高い。

例えば、まだ出会っていないジンやウォッカやベルモット達……こっちの世界の、黒の組織。

もしも、それが実在するとしたら……

多分これから此方の世界でも、大変な事が待ち受けているだろう。

その鍵を握る少女が、既に傍に居るという事も、コナンは薄々感づいている。

もしも黒の組織が、この世界に存在したとしたら。
一体、これからどんな恐怖が待ち受けているのだろうか。

体を締められるどころでは済まされない、そんな予感を煽るこの世界とのほんの僅かなズレ。

もっと凶悪かもしれない、もっと強大かも知れない、組織がここにもあるとしたら。

そう。もしも、この世界の黒の組織が。

もう既に、自分達のすぐ側で動き始めているとしたら……

其の十：更なる出会い／変わらぬ恋心（後書き）

☆作者より

随分遅くなりまして、申し訳御座いません！

改訂作業、大変だ／＼＜／＼むしろゼロから書き直した方がいいのではな状態です。

というわけで、今回もお読みいただきまして有難う御座います！

少年探偵団……彼らは操りやすいのか辛いのか。

上手く動いてくれずに四苦八苦です。

自分の古い文にも四苦八苦です（苦笑）

やっとなんとか十話も改訂終了です／＼

ええと、結局待たせてしまったことにとりあえず土下座っ！申し訳御座いません／＼。

そして、次は朗報です！

CNR時代からずっと待っていたいただいて、15話。

何とか書き上がりまして、16話目の執筆を改訂作業と同時進行させております／＼

追いつく頃には2／＼3話のストックを、と言った事は何とか出来るようにしたいと思っています！

暖かい応援のお陰です！有難う御座いましたっ！！

さて、それでは今回もお読みいただきまして有難う御座います（／＼）

次話でも是非是非、まだ見捨てずに読んでやって下さいませV
もしも反応いただいた際には、また執筆の力にさせていたかどうかと
思っておりますV

其の十一：幕間3、Yukikoと交わした約束

「これは俺の事件だ！　俺が解く！！　父さん達は手を出すな！！」

日本に残りたいと主張する彼が声を張り上げて叫んだ台詞を、彼女は胸の中で反復させていた。

何度も、何度も浮かぶ愛しい息子の姿は、複雑に自分の思考の中を行き来する。

この世に生まれて史上最悪のように思えるその事実を知った時、受話器から聞かされたそれから現実逃避したくなった。

度胸には自信があった。全国に生放送されるトーク番組でも、全く物怖じなどしなかったものだ。

ドラマもこなし、沢山の人が集まるサイン会もこなし、そんな中でも楽しさを感じられる程落ち着いていた。

そんな自分の明るさと、前向き思考なポジティブさ加減は、自他共に認める最大の武器だった。

けれども、ほんの些細な真実で、随分と追い詰められてしまうものだ実感する。

混乱、そして困惑。失う事への恐怖や不安、起きた事実への怒りと悲哀に打ちひしがれ、更に思考を覆う後悔。

飛行機の中で、ただ救いは暖かく力強く自分を抱き寄せる、隣の彼のみ。

窓からこぼれる光をぼんやりと眺めながら、感覚よりも随分と遠い日本への道を急いだ。

大切な、愛しい息子の無事を……ただそれだけを祈って。

☆☆☆

外は少しだけ薄暗くなりかけた、夕方よりの午後。

先ほどまで、女優時代から親友だったとあるハリウッドスターとの食事を済ませて、帰宅して一息ついた所だった。

優作は仕事で原稿のチェックに行くと言って居たから、時間的にもうすぐ帰ってくる頃だろうと、エアコンのスイッチを入れた。

着替えを終えて、少し乱れたその綺麗な茶髪のカールを鏡の前で整えながら、コーヒーマーカーがコーヒートを沸かす音を聞いていた。その音にあわせながら鼻歌を歌うほど、その日はいつも以上に上機嫌だった。

久しぶりに会う友人との楽しいランチは、まるで若返ったような懐かしさを感じる。

鏡の中に映る笑顔も、心なしかいつもより表情豊かに思えて、一人自画自賛してみたりもした。

ただ、そんな美しい午後のひとときというのは、あまりに簡単に崩れ落ちるものなのだ。

そう、彼女のそんな午後も、隣の部屋から響いた一本の電話によって一転してしまいう事になるのだから。

「はいはい！ もっつ。セールスだったらお断りよ？」

鳴り響く電話の音に、そんな事を呟きながらも口元に笑みが浮かぶ。

セールスだったらお断り。だが、今は機嫌がいいからそんな相手でも楽しく世間話が出来そうだ。

そんな気楽な考えを浮かべながら、彼女は鏡の前から立ち上がり、小走りで部屋を移動した。

「Hello♪」

彼女の独特の明るい声。そうでなくてもテンションは高めな彼女なのだから、相手には好印象を与える。

話やすさがあるから、かけてきている相手も自然と明るい話題を提供してくる。

けれど、その電話にはそんな事全くなんの意味も持たなかった。

次に、電話をかけて来た主が伝えた言葉によって、彼女自身も一転して地獄に突き落とされた。

受話器を持ち上げていた左腕は力を失いぶらんと重力に従うままに下ろされて、完全に握力を奪われたその手の中から、受話器が滑り落ちた。

フロアリングと受話器が触れた瞬間、カシャーンと大きい音が、室内に響いた。

けれども、それを落とした彼女はその音にすら全く気づいていなかった。

『新一君が……車道に突き飛ばされて意識不明の危篤状態なんじゃ』

落ち着いてくれと語頭につけての台詞だから、あまりいい話でも

ないかも知れないと覚悟はしたのだが。

受話器から響いたあまりに落ち着いたその声は、まるで死刑宣告でも下されたかのように彼女の心を支配した。

電話の相手にも落ちた受話器の衝撃は伝わったのだろう。必死で彼女の名を呼んでいたが、有希子の耳にはその声は届かなかった。

受話器から響く気さくな老人の声も、外で近所の子供が遊ぶ声も、部屋に響く時計の音も。

全ての音が、彼女の耳に届かなかった。聞こえていたのは唯一つ。そこには居ない息子の声。

想い出の中で、笑ったり怒ったり、真剣になっていたり、時に落ち込んだりもしている息子の声。

「新ちゃん……が？」

判っていた。いつかこんな日も充分起こりうる事なのだと。

息子が、探偵になると言い出したその時から、そういう危険な世界に首をつっこむものなのだと判っていたから。

普通の親よりも、そう言った意味での覚悟は出来ていたと思う。

ただ、本当に突然すぎるその報せに、彼女の頭は真っ暗になり、深いショックに襲われた。

親ばかりになる事も覚悟で息子について述べろというなら、幼い頃

から本当に聡明な息子だった。

もっと物心もついているか判らない赤ちゃんの頃、テープに残された声を見事に推理した時から既に、その才能の片鱗を見せていた。生まれ持った父親譲りの推理力と、有希子自身からも受け継がれたかも知れない好奇心。

それに加えて、推理小説に興味を持った年齢もまた随分と幼い頃からだった。

天才は1パーセントの才能と99パーセントの努力、なんて誰かが言っただけかも知れないが。

随分と大きな1パーセントの上に上乗せされた99パーセントの努力は、確実にその一本の夢へと繋がっていたのだ。

「母さん、オレ……おっきくなったら探偵になるよ！」

前後の会話はよく覚えていないけれども、恐らく他愛ない会話でふっと漏れた一言だった。

にと嬉しそうな笑みを浮かべながら、けれど瞳はまっすぐ輝いていた。

「ふうん。新ちゃんはホームズが好きだしね」

なんて、軽い口調で笑顔で返しても明るく頷く息子の言葉を、本当に軽く受け止めていたのだ。

深くなんて考えなかった。小さい頃は、夢なんて沢山持っても当たり前前。

まして、そんなヒーローのような名探偵を知ってしまったら、それになりたいと思う事も至極当然の事。

いずれ少しずつその夢への目的意識は変わり、せいぜい持ち前の推理力を生かした、父親と同じ推理作家か。

もしくは、警察官として地道にやって行くのだろうか、なんて事を

考えたりもしていた。

けれど、新一の夢は探偵にしかなかったようで。月日が変わって年月が移ろいでも変わらない固い意志に、不安を覚えたりもした。

だって、彼になりたいと言っているのがどういふものか彼女には判っていたから。

どこにでもいる浮気調査等が主な探偵ならいい。

しかし、彼になりたいのは、常に凶悪犯や知能犯と闘い、そのトリックを暴く。

その為なら潜入操作まがいの事も厭わずするであろう事。

常に命を狙われるような存在。そうなりたいと言う息子が心から本気だと知った時は反対した。

「新ちゃん、どんなに危険な仕事かわかって言ってる？ 場合によつては命だって……」

ずっと、何でも好きにやらせてきたのだけでも。

皆からは騒がれる頭脳を持っていたとしても、彼女にとってはただ可愛い息子以外の何者でもなかった。

特別なヒーローになる必要はなかった。ただ無邪気に傍で笑っていたならそれでよかったというのに。

「絶対安全な仕事なんてないよ。でも、オレは探偵がしたいんだ。探偵にしかなりたくない。危険な事は判ってるけど、それでも夢から逃げたくないよ」

そう力強く話す少年は、まだ学校の授業で足し算引き算の勉強も終わらない年齢だと言うのに。

幼い顔に映った歳相応の無邪気な笑顔と反対に強い意志は、とてもそんな小さな子供には見えなかった。

どんなに説得を試みた所で、彼は結局探偵の道を貫いた。それほど

までに、堅い意志。

それならば、口を出さずに暖かく見守ってやろうかと、彼女が折れたのはいつだったか。

意味不明な組織に体を縮められたと聞いた時も凄く心配した。

だからこそ、夫と博士とあんな芝居を打って、どれだけ危険か教えようとしたのだ。

アメリカに連れ帰り、目の届く位置に置いておきたいと思った。

それでも協力を拒みアメリカに行かないと突っぱねる息子はやはり何処までも探偵だった。

心の底まで彼は探偵なのだと、何度も何度も思い知らされてきた。

彼には、幼い頃から両極端の闇と光を見せてきた。

思えば沢山辛い思いをさせたものだと、こういう時にはマイナーな事を考えてしまう。

事件に関わった加害者や被害者の闇を見せ付けられる事はあるものだ。後味の悪い事件は沢山あった。

思い出すと気分が悪くなるような事件も沢山あった。

新一がまだ言葉すらも操り始めたばかりの頃、まだ探偵になるとも言っていなかった頃に優作が解いた事件。

たまたま偶然、家族で出かけた時に鉢合わせた事件だから、有希子も幼い新一も関わる事になった。

あまりに空しくて残酷で、母親としては胸をえぐられる気分になる事件だった。

被害者は、新一と同じ位の年齢の若い少年。そして犯人は、被害者の少年の母親。

自分の子供を絞め殺して、死体を遺棄した。金銭面でも借金を抱え、子供に掛かる費用が惜しく育てていけなくなったと言う。

優作はすぐに母親に目をつけて子供を見つけ出し、そしてその罪を暴いた。

恐らく事件の細かい内容までは理解していなかっただろう新一は、終始大きな目を開ききよんとしていたが。

厳しい顔で推理する優作の顔と、追い詰められてやっと白状し泣き崩れた少年の母親をただじっと見つめていた。

殺したけれど愛していたんだ、あの子を本当に愛していたんだと何度も繰り返す母親の姿を、ただ見つめていた。

「ねえ、母さん」

警察に連れて行かれる女の後姿を見つめながら、抱いていた新一の小さな手が襟元を引っ張った。

それに気づいて「何？」と尋ねるのと同時に、嫌な事件だったよねと語りかける。

まだ幼い彼が次に言った言葉は、あの時とても印象的だった。胸が締め付けられるような疑問を、彼は投げかけた。

「愛してたのにどうしてころしたの？」

「え……？」

「あの人、泣いてたのはどうしてなんだろう。何がなしかったの？」

台詞の内容は皮肉にも感じるけれども、見上げてくる瞳があまりに純粹で、それに困惑させられた。

まだ、皮肉や嫌味も知らない幼い息子の、とても純粹な質問。

「し、新ちゃん、それはね……」

「犯人って言われたことがかなしかったのかな。子供が死んだことがかなしかったのかな」

素朴な疑問をぶつけているつもりかもしれないが、答えなければいけない質問のような気がした。

けれども、答えられない自分が齒がゆかった、そんな記憶が残っている。

「愛していても、じゃまになったらころせるの？」

こんなに幼い子供が言う台詞なのかと思った。そんなに小さな頃から、人の気持ちには凄く敏感な所があった。

いい意味でも悪い意味でも、人の心を見透かす力も持った子だったのだ。

だから、何度も事件に関わっていくうち、どうしても理解できなかった犯人の心も頭で読めてしまうようになって。

だから尚更、それなのにどうして殺してしまうしかなかったのだ、と言う気持ちがうまれた。

平和に生きれば、人の闇に傷つけられる事など全くなかっただろうに。

気づけば、新一の行く先行く先では殺人や誘拐、奇妙な事件が起こり、後味の悪いものも沢山見て育った。

その罪を許せなくなったのだ。人を殺そうとする人の心が納得できなくなったのだ。

被害者だけではない。彼はいつでも、犯人の気持ちも救いたかった。

難解な謎を推理するスリルに快感を感じてはいても、事件を楽しん

でなごいなかったというのに。

探偵を始めた頃はヒーローと仰がれる一方、一部の記者には叩かれたりもしていた。

興味本位で人の心を見透かして引っ掻き回す存在のような言われ方も幾度となくあった。

そのたび、思ったものだ。どうして、頑張っているあの子を判ってくれないのだと。

何故、いつも酷い目にばかりあってしまうのだろうか。

どうして、傷だらけになって命の危険と隣り合わせになりながらも、助けを求めてくれないのかと。

いつも息子が危険な目にあったと後から知らされる、親の気持ち。いくら放任主義でも、齒がゆくて悔しくて仕方がなかった。

どうしていつも、そんな血塗れた中にその身を置くのかと、何度思った事か。

部屋の中には、時計の音ばかりかちかち響いていた。

先ほどまで受話器で何度も彼女の名を叫んでいた声は、諦めたのか既に途絶え、受話器からは電子音が一定のリズムで響く。

数秒前、ただいまと玄関で響いた声にも、そこに座り込む彼女は何の反応も示さずぼんやりと息子を思っていた。

幼い頃の息子の事、今の事。色々な考えをめぐらせている彼女の思

考は、完全に外界との間に壁を作っていた。

「……………子。……有希子!？」

突然、強い声で呼ばれ強く肩をゆすられ、ようやく彼女は我に返った。

長い間聞こえなかった音や景色が蘇り、彼女は驚いた表情で彼を見上げた。

「ゆうさく……?」

心配そうに自分を見下ろす夫の姿に、少しだけ気持ちちが落ち着いたかも知れない。

呆然としたままゆっくり部屋の時計に目を移すと、それは自分の記憶から短い針が一つ分ずれて……つまり長針が一周した後だった。一時間も自分がそこで座り込んで居た事に気づき、さすがに苦笑のため息が漏れる。

もし、彼が声をかけなければもっと長い時間その場でそうしていた事だろう。

何があったんだ、と覗き込む優作に、彼女は暗い顔で答えた。

「博士から、連絡があったの。新ちゃんが重体で危篤状態だって」

「新一が……?」

眉を顰めた優作に、有希子は悲しく頷いた。

「いつもみたいに事件に巻き込まれて、その犯人に車道に突き飛ばされたんだって。かなり危険な状態みたいなの」

「そうか、仕事も一区切りしてる事だし、すぐ日本行きの飛行機を探そう」

彼の言葉に頷き、すたすた出かける準備を始めた有希子だが、すぐに優作に止められた。

「有希子、忘れているだろう……オレ達は新一でなくコナン君の両親として行くんだよ？」

その言葉に、カバンを持ち今にも出かけようとしていた有希子はハッとした。

そう、行くのはあくまで新一の両親の有希子と優作でなく、江戸川コナンの両親の文代と父親。

それにも気づかないなんて、自分が余程動揺していると、彼女は苦笑した。

「辛いわね、こんな時でも変装して、偽者で居るなんて」

「まあ、仕方ないさ。アイツの為だしな。たまには息子孝行してやるのもいいぞ」

そう言って冗談交じりに笑う顔はいつも通り落ち着いたものではあったけれども。

ただ、いつもよりも悲しそうに見えたのは、長年付き添っている有希子だからこそ。

有希子はその事には触れず、疑問に思った事を一つ口にした。

「あなたの名前……どうするの？」

「ああ、それなら。そうだな、コナンの父親で江戸川バロンなんてのはどうだ？」

ハハハ、と笑って見せた優作を、有希子は乾いた瞳で見つめた。いくらなんでも江戸川バロンというのはと、すっかり白けた有希子

はジト目で呟いた。

「……新ちゃんのネーミングセンス、絶対あなた譲りね」

呆れた顔でため息をつきながらも、いつの間にやら完全に平常心を取り戻している自分に気づいた。

有希子も判っていた。仮にも小説を書いている人間がそんなにネーミングセンスが悪くてたまるものか。

そう、優作がそんな事を言ったのは、すっかり動揺してしまっている自分を落ち着ける為だ。

ただ、名前を決めるのに苦労することになった一番の責任はコナンにある。

”江戸川”などと言う後に続きにくい苗字を決めるから、ややこしい事になってしまうのだ。

そう、有希子とて江戸川文代とマッチする名前を選ぶのにどれだけ苦労したことか。

そんな他愛もない話に思考を持っていけるくらい余裕が出来たのも優作のお陰と、改めて夫に感謝した。

「ありがとね、優作」

有希子は柔らかに微笑み、優作に軽く口付けした。

普段憎まれ口を叩いても夫婦喧嘩しても、こういう時夫の存在にはありがたみを感じる。

「じゃあ、行きましょう。新一のいる日本に」

「ああ」

いつも通り、明るい彼女の性格がにじみ出たような笑顔に、優作は微笑んだ。

そして、重体だと聞く息子の顔を思い浮かべた。
そのまま、一番早い日本行きの手ケットを買い、それに乗って大空へ旅立った。

「でも辛いわよね、優作。励ましたくても、あの子のこと新一って呼べないのよ」

「それでも、きっと判ってくれるさ」

そんな会話を交わしながら、窓越しの大空に視線をやった。

いい天気だった。まるで娯楽の旅行に出かける気分させるような。目指す場所は、日本の病院に眠る息子の元へ。

時差の影響と空で過ごした十時間程度の時間によって、日本の空域に入る頃には、空は明るくなっていた。

白い雲と晴れ渡ったライトブルーの空が、昔の元気な息子の姿を頭に浮かべせた。

先ほどまでとは、また違う考えで当時の新一とのやり取りを思い出していた。

昔のあの瞬間も、こんな晴れた空の下で、彼は笑顔でそれを告げたのだ。

果てしなく透き通るブルーと同じ位、濁りのない瞳で見上げながら。

「オレ、絶対探偵になるよ!」

父親の勇姿を見た後だったから、尚更憧れが強まっていたのだろ

う。

けれども、その口調と瞳はとても力強く、意志の強さを物語っていた。

「……前にも言ったと思うけど新ちゃん……探偵はね」

「聞いたの覚えてるよ！ 危険だって言いたいんでしょ？ でももう決めてるんだ」

そう答える彼に、それはもう決められたことなのだと悟った。だから、あの時彼に相談を持ちかけた。

「じゃあ、一つだけ。一つだけ、私と約束してくれる？」
「え？」

大きな瞳が、不思議そうに見上げてくるのを、見つめ返した。なるほど、幼い頃から彼の瞳は真実を映す力を持っていた。だから、彼が探偵になりたいというのは天職とも思った。

「危険な目にあうかもしれないけど。どんな事になっても絶対に生きて帰って来て」

それだけ凄く心配な事だったのだが、まだ幼いはずの新一は一瞬だけきよとした表情を作った。

しかし、その言葉を察してすぐ力強く笑みを浮かべて頷いた。

「安心していいよ。絶対、何があっても死なないから！」

そう言って、新一は無邪気な顔でその小さな小指を突き出した。約束だよ、と有希子の指にその小指を絡め、指きりをしたその思い出。

たった一つだけの約束を守る指切りを、何よりも信じている。
あの力強く約束した言葉を守れない程出来の悪い息子ではなかった
筈だと思う。

「優作、もうすぐ日本の空港ね」

「ああ。オレもどう変装するか考えておかないとならないな」

もうすぐ空港に着いたら、手土産でも買って病院に向かおうなど
と話した。

そう、こんなに気持ちのいい天気の日、悲しい気分は似合わない。

大丈夫よね、新一……。

其の十一：幕間3、Yukikoと交わした約束（後書き）

☆作者より。

えー、こんにちは。第十一話の改訂バージョンです！
今回もまたお読みいただけた事を嬉しく思います。

幕間有希子さん編というのは、元々の改訂前が本人凄く納得行かない箇所が多々あったため（その当時技術不足でなおせませんでした）今回は、記憶のみをベースに新しく書き上げました。

記憶からなので、勿論前の名残はあるかと思いますが、大分変わっているかと思われます（^^）

と、さて。話は変わりました、評価や感想コメント、沢山いただけて嬉しいです！！

いつも、レスをお待たせしてしまって申し訳御座いません＞＜：レスの時は考え込んでしまう節があり^^；

何とか、今週中ないし、来週中にはお返ししたいと思っています。ただ、お返事が遅くなっただけでも、いつも凄く励みに読ませていただいておりますv

実際、沢山お言葉頂いてヤル気むんむん、この十一話が捗った感じもありますv

なので、本当に感謝の気持ちばかりです。いつも、有難う御座います（^^*）

また、是非次話でもお会いできましたら幸いです！
それでは、今回もまた有難う御座いました！

其の十二：幕間4、Yusaku（それでも必ず）

書き上げたばかりの原稿を編集部に届けて家に帰ると、電話機の前で有希子が呆然と立ち尽くしていた。

彼女の足元に落ちている受話器は、既にツーツと、無機質な音を流している。当然、その異様な雰囲気は普通ではない事は一瞬で理解した。

「有希子、帰ったよ」

声をかけても、彼女は口元にある手を僅かに震わせながら、じつとその場で動かないままだ。

フム、心ここにあらず……という感じだろうか？ 受話器を落としてそのまま放心せざるを得ない状態というのは……
あるとしたら、新一関係の電話、かな？

「有希子……有希子!？」

少々荒っぽいかも知れないが、彼女の肩を掴み強く揺さぶる。

これだけ声のボリュームをあげても反応しない有希子は、やっと我に返ってオレを見た。

オレを見上げる、その不安定に揺れる瞳が、彼女の動揺を如実に物語る。

「博士から、連絡があったの。新ちゃんが重体で危篤状態だって」
「新一が……？」

彼女として、まだ現実を受け入れきれない事実なのだろう。話す声が小さく震えている。

オレもまた、さすがに一瞬硬直させられてしまった程の事だ。

「いつもみたいに事件に巻き込まれて、その犯人に車道に突き飛ばされたんだって。かなり危険な状態みたいなの」

ああ、やはりそうか。経緯は大体想像出来たが。何とも痛々しい嫌な事件だな。

そもそも、アイツが探偵をやる決めていた頃から、それは予想のついた事だったんだろうが。

「そうか、仕事も一区切りしてる事だし、すぐ日本行きの飛行機を探そう」

そうね、と答えた有希子が、一見冷静に支度を始める。彼女が着る服を用意して、新一の友達に会うのにどれがいいかなど聞いている。

……ああ、そうだ。冷静で居られる筈がないな、息子が重体と聞いた母親の心理というものは。

「有希子、忘れているだろう……オレ達は新一でなくコナン君の両親として行くんだよ?」

だから、変装の道具も準備して、あくまで摩り替わりやすい格好をしなくてはいけない。

はっとして振り向いた有希子の苦笑している裏に映る、悲しい心境がひしひし伝わる。

「ねえ、優作? こんな時でも変装するしかないって、辛いわね」

有希子の声は、小さく今にも泣き出しそうにか細い。お前らしく

ないだろう？ そんな顔も声も。

「……まあ、仕方ないさ。アイツの為だしな。たまには息子孝行してやるのもいいぞ」

わざと語尾を冗談めかして見せた。こういう時、オレは取り乱さない決めている。敢えて、冷静に。

オレとて、本当なら本来あるべき姿で、新一、と呼びかけてやりたいさ。あいつはいくら放任状態でも、大切な息子だ。

それは、絶対叶わない事ではあるのだが。

段々と落ち着きを取り戻してゆく有希子に、オレも少し安心した。江戸川バロンなんてふざけた冗談にも、呆れ顔で反応できる程に。

まあ、名前については日本到着次第、適当に思いついた名前を名乗るか。

「ありがとね、優作」

いつものように明るい声で、オレに向かって微笑んで軽く口付けた。そんな有希子が、妙に愛しい。

飛行機の中で、オレは今までを振り返っていた。

アイツが、ああも探偵に拘るようになったのは、そもそも全てオレが元凶だ。

新一とはずっと、離れてアメリカで暮らしてきた。折角オレ達が

一芝居まで打って連れ帰そうとしても、奴は強い意志で突っぱねたんだ。

なあ、死ぬために日本に残ったわけじゃないだろう？ 生きて、自分の手で決着をつけて、蘭君の元に戻る為だっただろう？

そうだろう？ 新一。

小さい頃から、アイツは事件に引き寄せられる体質だったのかも知れない。

まだ物心がつく前、オレとアイツが二人きりの時に事件に遭遇してしまったのが最初だったか。

仕方ないだろう？ まだ言葉すら上手く発する事も出来ない息子を、どこかに放り出すわけに行かないのだから。

最初から、アイツのさりげない行動がとんでもないヒントに結びつく事は多々あった。

新一は、探偵になるべくして生まれて来た。その考えが、オレの中で定着するのに時間はかからなかった。

あるいは、有希子は新一を、オレと同じような作家の道に歩ませたかったのかも知れない。それはまさに、サラブレッドとして天才推理作家と呼ばれる事件も沢山生み出した事だろう。

ただ、アイツは根っから探偵に向いていた。まるでこの世に生を授かったその時から、なるべくして生まれたように。

オレの楽しみは、アイツに作ってやった暗号を、キラキラ輝いている目でわかったと解いてくる新一を見る事だった。

子供向けに作ってあるとは言え、得意げに、違わぬ答えを見つけ出してくる。そんな彼が成長することに、段々難しい暗号も解けるようになって、オレの書いた小説も読めるようになった。それが、

楽しみで仕方がなかった。

次は、どんな暗号を解かせてみようか。どんなトリックを見せてやろうか。

そればかり楽しみで、楽しくて。本業の推理小説まで疎かになった事すらあるくらいだ。

もし、オレがあんな風に育てなければ、アイツには、探偵以外の道もあつただろう。

才能があるサッカーを伸ばして選手になる事も、または全く別の道を選ぶ事も。探偵と言う道を教え導いたのは、誰でもないオレだ。危険な目に合う事も、勿論判っていたというのに。だが、アイツは、結局自分の意志で探偵を選んだ。

探偵として、一度関わった事件を未解決に終わらせるのは嫌だろう？ 新一。

こんな所で死んで、蘭君を一生待たせたまま終わる。そんな情けない奴じゃないだろう？

飛行機が空港に到着してから、変装してタクシーで一時間。やっとオレ達は新一の病院へ辿り着いた。

江戸川コナンの父親役は始めてか。妙な気分だが、仕方がないな。

「優作、ところで本気で江戸川バロンにするつもりなの？」

「いや、いくらなんでも不自然だろう。適当に……そうだな。江戸川俊作とかどうだ？」

「……ま、いいんじゃない？」

おどけて答えた、我ながらナイスな案だと思ったが、有希子は呆れ顔で言った。江戸川バロンなんて言う妙な名前よりはマシだと有

希子の小声が聞こえた気がしたが、気にしないでおう。

「すみませんが、江戸川コナンの病室は？」

病院の受付の女性は、にこやかに対応してくれた。案内された病室は、思っていたよりも大勢の人が集まっている。

蘭君、小五郎君、阿笠博士……あとは会った事はないが恐らく話に聞いていた哀君と、平次君と……もう一人の少女は彼の彼女かな？動揺しているのかも知れないと思っていたより、皆落ち着いている印象を受ける。まだ此方に気づいている様子のない彼らは、何か話し合っているようだ。

有希子が、ドアの取っ手を震える手で掴んだ。随分、緊張しているようだね。そっと、その上にオレの手も重ねてやると、有希子は柔らかに微笑み、二人一緒に戸を開けた。

彼らの視線が、一斉にオレ達を射抜く。

蘭君はほっとした顔で、小五郎君はどこか怒っているように見える。全てを知っている博士は、オレ達の正体にすぐ気づいたようだ。ふっと微笑んで迎えた。哀君……と、思われる少女は、クールな目で此方を見つめている。

ただ二人、色黒の彼とポニーテルの少女だけは、警戒しているのだろう。訝しげな顔でオレ達を観察している。

「あんたら、誰や？」

色黒の彼は、低くてドスの利いた声を出した。まあ、突然知らない人が入ってきたら、警戒するのは当然か。

「初めまして、江戸川コナンの父親の、江戸川俊作です」

「母親の、文代です。息子がお世話になってます」

とりあえず有希子もオレも、微笑みながら自己紹介する。彼は納得してくれたようで、ああ、と呟いた。だが、その彼女は怒った瞳で此方を睨みつけている。

「俺は服部平次や」

「……アタシ、遠山和葉」

低い声で挨拶した彼女の他に、相当怒った顔をしているのはもう一人。

「……おい、今こいつの両親って言ったな？」

久しぶりに会う小五郎君は、いつになく苛立っている様子で、ベツドの上の新一を指差した。

「ええ」

有希子が答えられる状態でないのを悟って、オレが静かに頷いた。途端、小五郎君が勢いよく胸倉に掴みかかってくる。

「てめえら、息子がこんな事になってる時に……っ！ どうしてもっと早く帰って来れなかった!？」

「お、お父さん!？」

凄まじい剣幕でオレ達を怒鳴りつける彼を、蘭君は必死で止めようとしている。だが、小五郎君はそんな彼女の制止を無視した。

「人にてめえの子供^{ガキ}を預けてのうのと海外で暮らしてやがって……その間、どれだけこいつが死にそうなほど危ない目にあっと思ってるんだ！」

私の知っている彼が、こんな風にガンガン声を荒げる様子というのはかなり珍しい。随分、心に突き刺さる言葉だ。その通り、紛れもない事実だとわかってるからこそ、痛い。

確かに、危険な事は新一が選んだ事……だが、こうやって新一が危篤状態に陥ったとしても、海外に居る限りすぐに側に来てやる事は出来ないのだから……。

「……部外者で悪いんやけど、アタシも今腹たってんねん」

先程”和葉”君と名乗った少女は、小五郎君の言葉に続けるように、低く高圧的な声で言った。蘭君と平次君が驚いた顔で、彼女を見る。

「こんな小さい子ほっぽって、あんたら何してるん？ 何で……何で、ついててあげへんの!？」

「お、おい、和……」

「平次は黙っとって！ こんな大変な時に、普通は親やったら一緒に居たるもんやろ!？」

小五郎君より声が高い分、彼女の声は耳にキーンと響く。いや、確かにその通りだ。彼らの言う事が正論という事位判っているさ。しかし、蘭君は悲しい声で二人に言った。

「ダメだよ、お父さんも和葉ちゃんも……。コナン君のご両親だって辛いんだから。本当は、ずっと側についていてあげたい筈なんだから。そうでしょ？ ね、おじ様におば様……」

……おや？　落ち着き払った声だが、意外な言葉だね。その優しい微笑は、全てを悟ったような顔をしている。

「けどっ、蘭ちゃん！」

「和葉ちゃん、二人とも本当だったらコナン君のベッドの近くに行つて、何か話したいこともある筈よ？　でも、ここにこうやって突っ立って……親子だけにしてあげよう？」

声を張り上げて、納得がいかない様子の和葉君を宥めるように静止する様も。全てを知った上での言葉に聞こえる。

まさか、知っているのか？　新一の正体も、我々の事も。わざわざ心配する全員を人払いする事の大きな意味は、それ位しか浮かばない。

「そやな。家族水入らずに俺らが邪魔したらあかんやろ……おっちゃんも、おばちゃんも、そいつに色々言いたい事あるんやろ？」

彼女の言葉に、平次君も溜め息交じりにそう言った。強引に全員部屋の外へ押し出しながら、オレ達を見て小さく笑みを浮かべ、頷く。彼なりの気遣いだ。感謝しなければならぬ。

病室のドアが閉まった途端に、有希子は新一の隣にひざまずく。

「新ちゃん！　新ちゃん！？　……分かる？　私よ！」

喉が裂けてしまうのではないかと必死で叫ぶ声も、聞こえているのかいないのか。新一は全く動こうとしない。血の気の失せた顔色に、ガーゼや包帯が痛々しい。

「新一……」

有希子の声でかき消されながらも、ぽつりと呟いたが、やはり変わらぬ瞳を堅く閉じている。正直、この状況は辛い。

有希子は、少しずつ涙を溜めていた。自然に声も、弱弱い涙声に変わってゆく。

「新ちゃん……、ごめんね。もっと早く来てあげられなくて、ごめんね」

ポタッ、ポタッ……と彼女の涙が新一の頬に零れ落ち、そのまま、滑り落ちていく。

先程の言葉を随分気にしているようだな。確かに、的を射ていたしオレ自身痛かった。だが。

「仕方ないさ……新一もちゃんと、分かってくれてる」

日本にいる事も、探偵になる事も、選んで決めたのは新一自身だ。オレ達が今更、自分達を責めた所で、仕方が無い事だろう。

「でも、どうしていつも……」

しゃくりながらの台詞には、今回だけではなく子供の頃からの事が浮かんでいる。

思い起こせば、いつも大怪我をしたりして心配をかけさせられた。親として当然心配だが、それがこいつの選んだ道だ。

「……それを覚悟で、こいつは探偵をやってるんだ。大丈夫さ、こいつはそんなに親不孝者じゃない」

目に一杯の涙を溜めてオレを見つめる有希子に、今作れる限りの優しい顔を向ける。

「安心しろ、有希子。新一はそんなにヤワじゃないさ。ちゃんとそのうち目を開ける。オレ達は親として、それを信じていてやろう」

すると更に大きく見開いた濡れた瞳は、少しだけ希望を映す。

「……私ね、昔この子が探偵になりたいって言った時、約束したの。どんな事になっても、絶対に生きて帰って来てって。新ちゃん、その時なんて言ったと思う………?」

悲しい泣き顔が、段々と優しい笑顔に変わってゆく。有希子は、新一をじっと見つめ、包帯だらけの頭をそっと撫でた。

「新一ね、『絶対、なにがあっても死なないから』って。『安心していいよ』って。まだ新ちゃんが、言葉を喋れるようになったばかりの頃よ……? 無邪気に笑いながら、小さい小指を私の前に突き出してきて……『やくそくだよ』って、そう言ったの。だから、私はあの言葉を信じたい」

今日で一番強さのある言葉だ。そんな約束は初耳だが、それを話す有希子が、優しさが溢れる母親の顔を浮かべている。それだけで充分だ。

「優作……私だって、新ちゃんの事は信じてるのよ? だから二人で、せめて新ちゃんが目を覚ますまで、これからは側で見守っていてあげましょ」

そう言って微笑んだその顔は、例え江戸川文代の顔だとは言え…

…いや、とても美しく見えた。

ああ。お前はそんなにヤワじゃない……そうだろう？　少なくとも、オレ達はお前を強い息子に育てた筈だ……。

お前はこんな事で、こんな所で、歩みを止めてしまう奴じゃないだろう？　早く目を覚まして、またオレ達にたてついて来てみる………みんな、お前の生還を信じて待っているぞ。

今日は、一つだけ嬉しい事があった。何だか判るか？　新一。

お前を大切に思う仲間が……信じてくれている仲間が……あれだけたくさん居たという事。

だからこそ、お前はまだ死ぬわけにいかない筈だろう。

信じて、待っている人がいるから……お前はきつとそれを裏切らない。

オレも有希子も、お前の強さを信じていける……。

お前が目を覚ます日を、信じて待っていられるんだ。

だから、負けるなよ………新一。

其の十二：幕間4、Yusaku（それでも必ず）（後書き）

作者より

遅くなってすみません！><

幕間優作、ちょっととまるごと外そうか迷いましたが、やっぱり再会シーンは大切ですね。というわけで、そのまま変わらずいれました。

というわけで、今回もまたたっぷり改訂しました！><削った分が多
いかな？多分。

優作さんのキャラは、本当に勉強あるのみですね！><頭がいいダン
ディな人の分難しい。

ではでは、今回もお読みいただきまして有難う御座いました！また
是非是非、次回もお会いできると嬉しいです！V

其の十三：蘭姫と哀・小五郎と新一

「おい、コナン！ 早く支度しろ」

「うるせーな……なんで俺まで行かなきゃならねえんだよ」

その日、コナンと哀は、新一に連れられて蘭姫の国へ行く事になっていた。

新しく入った情報などを伝え、不穏な動きを一刻も早く制圧し、両国の安全を保障するために……というのは単なる建前だ。それを理由にして、新一と蘭の婚儀を速めるのが話し合いの中心にある議題だった。

朝から不機嫌だったコナンだが、更に隣に居る彼女は怒ったような瞳でむっつりと、新一を睨んでいた。

「ねえ、どうして私まで連れてかれなきゃいけないの？」

新一に無理やり着物を着せられた哀は、コナンが準備を終えるまで待たされていた。

そんな気持ちも察してか、新一の顔に申し訳なさに笑みが浮かぶ。

「まあ、いいじゃねえか二人とも。蘭がコナンや灰原に会いたいて言ってるんだよ」

「そりゃ俺も、会いたくないわけじゃねえけど」

「私は、会いたくないわ」

困った顔で応えたコナンとは対照的に、哀はきっぱりと言い放った。頬を膨らませ、腕をくむ姿は、彼女の心情を素直に表している。彼女にとって、話に聞いていた蘭は少し苦手意識を感じる相手だ

った。自分とはあまりに対極過ぎるから。

「それに私、彼女とは面識ないのよ」

哀は文句を付け加えたが、結局コナンが支度を終わると、新一によって護衛に囲まれた馬に乗せられた。

道中無言の哀とコナンだが、誤解を受けないように付け加えておこう。その不機嫌の理由は、決して同じではない事を。

コナンは、勿論蘭に会いたくないというわけではなく、問題は今回の論点にある。例え相手がこの世界の自分で、彼女が愛している存在とは別だとしても。自分以外の男との婚儀を進められるのは、あまり気分がいいものではない。

哀は馬に揺られながらも、自身の気持ちを必死で否定した。会った事もない蘭に会う事を、恐れる気持ちが彼女を蝕んでいた。

「着いたぞ」

新一の声をかけられた二人は、顔を上げた。目の前に、そこそこ立派な城が建っている。

観念して一息つき、馬から降りたコナンは、馬に乗ったまま暗い顔で城を見上げる哀に手を伸ばした。

「灰原、ホラ……さっさと行くぞ」

「ええ」

気の進まない様子で降りようとした哀の身体が、突然ふわりと宙に浮く。彼女が目を見開いたのも束の間、その足は優しく地面に降ろされた。

哀がきょとん、と顔を上げると、そこに居た新一は、悪戯っぽく笑む。

「降りる時、怪我したら危ねえだろ？」

そんな彼を数秒無表情に見つめた哀は、その後視線を逸らして小さく呟いた。

「……一応、お礼だけは言っておくわ」

クールできわめて抑揚のない口調に、新一は苦虫を噛み潰したような顔を見せた。

「こいつ、可愛くねえ……」

呟いた新一を見たコナンもまた、元居た世界の自分と彼女を思い出して苦笑した。

「新一、コナン君！ 久しぶ……っ!？」

城に入り、出迎えに来た蘭を見つけるなり、新一は不意打ちのようなキスをした。

「な、何す……っ!」

「挨拶だよ、悪いか？」

真っ赤になって頬を抑える蘭に、新一はしてやったり、と笑う。

彼女はそんな新一を恨めしそうに睨みながら、クールな表情で立っていた哀に人懐こい笑みを見せた。

「あなたが哀ちゃん？　初めまして、わらわはこの城の姫で、毛利蘭じゃ」

自己紹介して、握手にと手を伸ばすが、哀はふいっと顔を逸らした。笑顔から一転、蘭の顔が悲しみに変わる。

「なんだか、嫌われてしまったみたいだな」

しゅんと元気を失った姿に、コナンは苦笑した。何とかフォローをいれようと、腕を組んだままそっぽを向く哀の耳元で囁く。

「オメー、挨拶くらいしろって！」

「無理矢理連れて来られたのよ？　……私、挨拶なんてする義務はないわ」

「お前なあ……」

呆れ顔で溜め息をついたコナンは、自分の世界での哀を思い出す。蘭を何かと避けていた本来の世界。ひねくれた性格は、どちらにせよ変わらない。

半分はその原因が自分にあると知らずに、コナンは今度は蘭と向き直る。

「あ、あのさ！　こいつ、元々こういうヤツだから、気にすることないよ」

「そ、そうだぞ蘭。俺にもコナンにもいつもこんな態度取ってんだ」

同じように苦笑を浮かべフォローする新一とコナンを、蘭は交互

に見つめた。二人の気持ちが、彼女にはとても嬉しく思えたのだ。
哀に向けて、彼女は再び微笑んで見せた。

「聞いた話では、敵に追われておったのであろう？ 初対面のわらわ
におびえるのも無理は無いではないか」

「……」

無言のまま蘭を見つめる哀に、蘭は終始笑顔を壊さなかった。

結局、その場で哀と蘭が和解する事はなく、数名の臣下達と小五郎の居る部屋へと向かった。

「父様、新一達が到着しました」

「ああ、入れ」

小五郎は不機嫌な口調で応えた。大勢入って来る中の、蘭とより
そう新一を見ると、更にその顔が青筋立つ。

そんな小五郎の気持ちを知りつつも、新一は敢えて柔らかな笑み
を作った。

「お久しぶりです、父さん」

言った途端に、小五郎はぎっと新一を睨みつけた。

「俺はまだお前の父親じゃないぞ」

「……けれど、今日はその事を進めるための話し合いに来たつもり
です」

穏やかに毅然とした口調で返した新一に対して、機嫌が直る事は
ない。小五郎は眉間に皺を寄せて再び応える。

「今回の話し合いは、西国東国の侵略の件だった筈だろう？」

「はい、ですからそのためにも、一刻も早く俺と蘭との婚儀を行うべきだと……」

ぴりぴりとした険悪な空気がその場を包み、蘭は不安そうな目で二人を見つめた。コナンもまた、苦笑を零す。

親同士が決めた許婚、と話に聞いていたが、やっぱりこんな関係なのか。と半分落胆した考えを頭に浮かべた彼は、項垂れた。

「大体、俺はお前と蘭の婚儀には反対だったんだ」

小五郎は、視線を外し面倒くさそうな口調で呟いた。

そもそも、両国は元々仲がよく、国王世代もとても深い交流があった。特に、両国の妃同士は親友で、優作や小五郎もまた、四人親しい仲だった。

そして蘭姫が生まれ、新一王子が生まれ、英理と有希子はお互いの和子を将来結ばせようと取り計らった。優作はむしろ賛成の立場だったが、小五郎は最後まで嫌がっていた。

そこにいたる経緯を、新一も蘭もよく知っている。

しかし、この期に及んであまりに煮え切らない態度に、蘭はむっと頬を膨らませた。

「そこまで言うなら、誰との婚儀ならよいのだ？」

「だ、誰ならいいって話じゃない。まだ早いつて言ってるんだ！」

娘の態度に少したじろいだ小五郎だが、蘭は更に口調を荒げた。

「早い？ 何を言うか！ この間も、国で十五の娘が祝言をあげたと聞いたぞ。わらわはもう十七じゃ。むしろ遅いくらいである！」

それに、いつになっても、わらわは新一の事しか……」

そこまで言いかけて、蘭は顔を真っ赤に染め俯いた。新一や、聞いていたコナンもまた、頬を染める。

「……それに、最初に縁談を決めたのは、父上達である？」

泣きそうに呟いた蘭に、小五郎もついに言葉を詰まらせた。数秒考えた彼は、頭をかいて姿勢を直す。

「……とにかく、さっさと話始めるぞ」

そこからは、侵略に対する対策や、それに伴う武力の強化を真剣に話し合った。

話が変わった途端、先ほどまでヤル気なさげだった哀は、必死な眼差しでそれを聞いた。

「急に態度かえるんだな」

コナンが耳打ちすると、哀はさりとした口調で交わした。しかし、その複雑そうな顔が何を意味しているのかなんて、コナンにはまだ分からなかった。

順調に進んだ会議では、沢山の情報が行き交い、沢山の作戦が行き交った。

新一と蘭の婚約話推進はともかく、侵略関係の話には、コナンも加わりの確な指摘をつきながら進められた。

其の十三：蘭姫と哀・小五郎と新一（後書き）

あ、結局アップするんだ私（笑）

というわけで、明けましておめでとう御座いますーっVを言うのは今日二回目です♪

十四話とつなげようかとも思ったけど、やめた☆

次回でついに、ずっと止まっていた場所に追いつくのですねVお待ちたせいたしました^^

今の所、次話を除いて、まだ未発表の話が二話分ストックしてあります♪

というわけで、今回。多分かなり修正した箇所が多い話かと思えます（元の話が嫌で仕方なかったので^^;）

でも、うーん。前よりは展開よくなってるといいな。

というか、私何回書いても、蘭姫の口調にどうしても違和感あるよ><

蘭ちゃんが喋ってるんだなって思うと、どうしてもどうしてもっ！当時、書き始めだった頃に、隣で母が昔のお姫様口調じゃないとおかしいおかしいおかしいと連呼するものですから、こうしてしまったのですが。

かなり後悔（涙）やっぱり再投稿した際にお姫様口調やめちゃえばよかった……

でも、もうこうなったらコレで突き進んじゃいます><ごめんなさい！

それでは、本年もどうぞよろしくお願い致します。

頑張りますっ。頑張りますーっ><

次話もまた、お読みいただければ嬉しいですV

其の十四：東の願い、西の異変

大好きな人のためやったら、命だって惜しくない。だから、あたしは必死で……必死で走った。

必死で……。後ろから追って来る変な男らを、必死で、振り切りながら。

第14話、東の願い、西の異変……

話し合いを終え、城から出る頃、新一は一度伸びをして、蘭に口付けた。

「ちょ……何をするっ！ 二人の見てる前で……」

言葉尻をもごもご口ごもりながら、顔を真紅に染めた蘭を見て、彼は愛しいものを見る笑みを向けた。

コナンが一瞬むっと顔を顰めて新一を睨んだが、二人とも全くそれには気づかなかった。そして、新一は軽口で蘭に話す。

「さよならのキスだよ。次はいつ会えるか分からねえから」

「い、い、いつだって会えるであろ！ 隣同士で……新一とわらわの国は同じ国同然なのだから！」

「……どうかな。お互いにこれから忙しくなるから、もしかしたら婚儀までずっと会えねえかも知れねえぞ？」

「……え？」

応える新一の神妙な面持ちに、蘭は不安を覚え聞きなおした。が、そんな蘭を数秒見つめた新一は、緊張が解けた笑みを浮かべ、彼女の頭に優しく手を乗せた。

不安げに自分を見つめてくる彼女に、新一はふっと笑い、彼女の頭に優しく手を乗せた。

「冗談だよ。んな深刻な顔すんなんて」

「し、新一く……！」

頬を膨らませて赤い顔でうねりながら、蘭は二度三度と彼に正拳突きを仕掛けるものの、さらりと交わされる。

バカッフル顔負けの仲睦まじい二人に、コナンは目を細めた。

「……やきもち？」

不意に、コナンの耳元でクールな声が響き、彼はむくれながら振り向いた。どこか白けた目をする哀と視線が合って、顔を顰める。

「あなた、彼女の事が好きなのね。妬いてるんでしょ？ 彼に……」

「お、俺は別に……蘭姫は、俺のもんじゃねえからな」

微かに動揺した口調で返したコナンを見て、哀はくすり、と笑っ

た。

「どうかしら？　頭で理解出来ても、心では納得しきれてないんじゃない？　あなた言ってたじゃない。『彼』は『自分』だって。あなたのものだった、彼女も居たんでしょう？」

「……いるにはいたけど、別にまだ俺のものだったわけじゃ……」

”まだ”ね。と小さく呟いた哀に、コナンは頬を赤らめた。

「いくら、彼女と仲良くしているのが『自分』でも、いくら彼女が自分の世界の彼女ではなくても、嫌なんじゃない？」

「べ、別に……幸せなんだからいいんじゃないか」

視線を哀から逸らしながら応えると、再び彼女の口元にシニカルな笑みが浮かぶ。

「随分、割り切ってるのね」

「……さあな」

返って来た曖昧な答えに、哀は怪訝な表情を浮かべた。

コナンの中で、割り切れているわけではない。

ただ、自分の世界で待たせて泣かせてばかりいる彼女と、こちらで上手く彼女を幸せそうにさせている自分とのギャップが、比べずに居られない。

「……ただ、思うのはそれだけだよ」

彼がぼそっと呟いた言葉の意味は哀に伝わらなかったのだろう。彼女は顔をしかめ、聞き返した。

「いや、こっちの話だ。気にすんな」

「何よ、一人で納得しないでくれる？」

ふっと静かに笑ったコナンを、哀はジト目で軽く睨んだ。

「いや、お前の言う通りかも知れねーって事だよ」

「……じゃあ、やっぱり彼に妬いてるのね？」

「どうだろな。俺は……蘭に心配かけてばっかだし、いつも悲しい
想いしかさせてやれねえからな」

俯きそう呟いたきり、コナンは何も言わなくなった。哀もまた、
それ以上何も尋ねる事なく、哀しげな瞳で見つめた。

「コナン、灰原。帰るぞ」

シリアスモードを漂わせているコナンと哀に、上から声がかけら
れた。

コナン達が見上げると、先ほどまで蘭と別れを惜しんでいちゃつ
いていた筈の彼が、馬の手綱を片手に、二人を見下ろしていた。

「二人共、またいつでも遊びに来て」

柔らかに微笑み、しゃがみ込んだ蘭が二人を交互に見つめる。

「うん」

哀が蘭から目を逸らしたのを横目に見て苦笑しつつ、コナンは自
分だけでも、と明るく笑った。

きょんとした表情を浮かべた蘭を見ると、コナンは力強く微笑

んで見せた。

「君は、僕が知ってる大切な人とは別人だけど……君の事は、どこの世界でも守りたい存在に変わりはないから。だから、これからもよろしく……蘭姫」

「ありがとう。……コナン君」

いつの間にやら、姫様から蘭姫に呼び方が代わっていた。それはいい意味で、これからも親しくありたいと願う気持ちだ。

「蘭、その辺でいいだろ。……早く来いよ、コナン！」

既に新一と馬に乗った哀を抱え、新一は未だ馬に乗ろうとしないコナンに言った。

蘭に別れを告げたコナンは、馬の背をまたぎ、手綱を握った。新一は、帰路へ振り向きながら、蘭に優しく言った。

「じゃあな、蘭。次会う時まで元気でな」

「新一も」

砂埃を立てながら、帰っていった彼らを、蘭はずっと優しく見つめていた。

「……絶対に、最後まで皆無事でいよう」

彼女は祈るように、呟いた。

同時刻、西の国の某所にて。

「さあ、もう走れないだろう。……最初20人はいた我々をここま
で減らしたのは、賞賛に値するがな」

「いやや！ ……一体、何が起きてるんっ！！？」

息を切らせながら、彼女は叫んだ。先ほどから動き辛い衣装で走
り続けた脚は、既にボロボロだった。心臓が、とんでもないスピー
ドで鼓動する。

震える手には、想い人と共通のお守りであるそれが握り締められ
ている。

彼女は前方から歩み寄る男達に、溜まらず後ずさるうちに、がつ、
と何かにぶつかった。はっとして後ろを見て、彼女はもう後ずさる
事が出来ないと気づいた。壁に背をつけ、彼らと向き合う。

「あ。そんな……」

前方には、刀を持った男が、左から数えて三……四……五、
六人。絶望的な状況に、額には汗が浮かび、目には薄っすら涙が浮
かんだ。

「さあ、もう逃げ場はないぞ。観念しろ……」

軍団の一人は、薄っすらと嫌な笑みを浮かべ、腰元の刀に手をか
けた。

その身を包む大層な着物の裾を、ゆっくりとめくり上げ、覚悟を

決めるしかない、と男を睨みつけた。

男の腰元から、勢いよく銀光りした刀が抜かれるのを見て、彼女は息を呑んだ。鞘を走るスピードのままに斬りかかって来る刀を、真剣に見極めた。紙一重の動きで交わし、突進力を利用して男を地に伏せた。

「ぐおっ」

男の叫びを耳に聞きながら、再び襲い掛かってくる事のないように、男の関節を痛めつけてやる。

彼女は地に刺さった男の刀を抜くなり、残った男達に向けた。

「あたしかて、多少は剣術のイロハも知ってるんやからな！」

そう叫んだ彼女は、男達の誰にも隙をつかせないよう構え、真剣な眼差しで彼らを睨んだ。

本来なら、彼女は武器や剣を使うものより、素手の戦いの方が長けていた。が、しかし剣を使った戦いも、彼女にとって慣れないものでもない。

幼馴染である隣国の王子は、とても強い剣術の使い手だった。そして、彼女自身も幼い頃、武術を習うと共に、彼に『武器対武器』を習っていた。

迫り来る男達を、体に身につけた武術の動きと、かじった剣術の動きによって、攻撃を避けながら倒していく。

あと五人、四人……

その光景は、彼女の特殊な事情を知らないものが見たら、九割がた驚きに腰を抜かす。

大層綺麗で高価な着物を纏った彼女が、沢山居る男達を一人一人なぎ払ってゆく図なのだから。

「ど、どないしたん……？　たいした事ないやん」

あと三人……

必死な彼女に、集中力が高まる。こんな所で、やられとうない！
やられるわけにはいかへんねん、と。

あと、ふた………！？

最後の二人のうち、一人を地に伏せた彼女の肩から、地が噴いた。
その綺麗な肩を裂いた刀から、紅い液体が流れる。

突然襲われた痛みに、彼女は顔をしかめ、奪っていた刀を地に落とした。空いた無事な手で、受けた傷をぎゅっと抑える。

「やるじゃないか、お姫さん……だが、」

血に濡れた刀を持ち、そこに立つ男はにやりと笑った。脚をついた彼女の首元には、冷たい刀が突きつけられる。

「惜しかったなあ。後一人だったのになあ……クク」

低く笑ったその男は、余裕の表情を浮かべつつ、言葉を続ける。

「あんたが今倒した奴らは、全員我々の中でも下っ端連中だからな。
まあ悪いが捨て駒になってもらった」

「あ、あたしを……あたしを殺す気なん？」

精神だけは負けへん、と彼女は男を睨みつけた。揺れながら、強い瞳が男を射抜く。

彼はふっと笑った。

「殺す？ 誰がそんな事を言ったんだ。最初に言っただろう？ 俺の任務は、あんたを捕まえて幽閉するためだ」

「あたしを幽閉してどないする気！？ お金なんか出えへんよ」

叫んだ彼女に、男はなおも笑う。

「……金じゃあないさ」

首元に突きつけられた男の刀によって、彼女の顎が持ち上がる。男の瞳に、自分がぶれることなく移っている姿を、彼女は呆然と見つめていた。

「あんたには、特殊な価値があるんでな。我々の計画を邪魔しそうな奴らにとっての弱点は、あんただ。そうだろう？ 遠山の国の一人娘の……和葉姫」

「あ、あんたら、やっぱりあたしの身分を知っとって！」

名前を出されて、彼女の顔色が変わった。幼馴染や父親から、得たいの知れない集団が妙な動きをしているようだから気をつけろと言われてはいたが。

今日は、隣国の幼馴染に会う都合があったため、彼女は偶然城から出たのだ。

「……あたしが弱点って、どういう事なん？」

「フ、今一察しが悪いな。つまりだ。西国の多くを統括する、大きく優れた遠山家の一人娘にして、隣のさらに大きな大国である服部家の殿や跡継ぎとも親しいあんたは、我々にとって最高の人質というわけさ」

「ま、まさか……！ あんたら東にもっ？」

男の言葉に、彼女にはピンと来るものがあつた。自分と同等の立場に居る少女の姿……東国の工藤家を侵したければ、真っ先に浮かぶ人質だ。

国は遠くも、友好国としてたまに会う親友であつた彼女が、急に心配になった。

「どうなん！？ あんたらが責めてんのが、西国だけやないって、ちゃんと情報は伝わってんねん！」

「……さあな。俺はこちらを任されてるから知らないが、東にもそんな輩がいる事は聞いているぜ。有名だからなあ、工藤家の王と王子殿は」

「あ、あつちにまで手え出したら、あたしあんたらの事許さへん！」

叫んだ和葉だが、男の高笑いに圧倒された。

「こんな状況で、何を許さないって？ ……大人しくついてくれば手荒な真似はしなかったが、まあ仕方ない。……生きていれば、人質の価値はあるからなあ」

首元に構えられていた刀が、すっと動く。同時に、彼女の背には悪寒が広がった。振り上げた刀と、男の冷徹な目が、彼女の視界に映る。

「……心配するな。これ以上暴れないように、動けなくするだけだ。

殺しはしないさ。」

振り下ろされる刀と、その場から動けない体。……アカン、絶対
絶命や！

彼女には、全てがスロー画像のように映った。彼女は抑えていた
手を外し、胸元にある大切なお守りを、きつく握り締めた。

こんな所で、捕まってられへん。平次の足かせになるなんて、絶
対、いやや！

頭に浮かんだ考えも、握り締めたお守りの効力にすぎるしか意味
もなせない。彼女のぎゅっと閉じた瞳からは、涙が零れた。

刀が、勢いよく振り下ろされる。そして……

「ぐっ……」

息が潰されたような、苦しげなうめき声が、場に響いた。

其の十四：東の願い、西の異変（後書き）

どうも、こんばんはこんばんはーっ☆

追いついた……やっと追いついた（涙）

待たせ続けて、もう何年？ 二、三年くらい経つよね。

ああ、長かった……（＞へく。）

というわけで、前フリも長いですが、嬉しいお知らせ♪

コナン小説リングでの既出部分は、ここまでですV V

次話以降は、コナン小説リング時代からやきもきされていたであろう方も、お楽しみいただける場面になる事でしょう♪

てか、本当にこんなにかかっちゃってゴメンネ。

皆が皆、一話から読み直して下さったわけではないと思うので、掲示板とかで追いつきましたな報告した方が親切かな？

ただ、ストック実はそんなにたまってなかったりします（へーへ；
次話は、もうちょびつとだけストックに余裕が出たら、出そうと思います♪

ホント、長らくお待たせしておりましたーっ＞く

さて、話の方では、影の存在が段々と姿を現しつつある今回！

登場と同時に、ピンチに見舞われている彼女！

そして、東でもまた一つ、蘭の運命やいかに、ですね。

もう、これは真打に期待するしかない！

というわけで、本当に、本っ当に長々長々お待たせしました！！
未出部分だった次話以降でも、またどうぞよろしくお願い致します

!

其の十五…遅れて現れた救世主

もう、だめかと思った。

絶対に捕りたくないと思いながらも、もう抵抗できる力など残っていないかった。肩に斬りつけられた傷から、じわりじわりと血が滲んでくる。痛くて、気も遠くなってきた。

振り上げられた刀を避ける気力なんて、これっぽっちも残っていないかった。

そのまま敵の手に落ちて、平次の足かせになるくらいなら、人質としてとられるくらいなのであれば、今舌を噛み切って、死んでやろうと思った。

ごめん、平次！

心の中でそう唱えて、恐々歯の間に滑り込ませた舌を噛む力をぐっと強めようとしたその時。

「ぐっ……」

男のうめき声が、その場に響いた。同時に、刀が地面に落ちる音と、誰かが倒れるような音が和葉の耳に届いた。

其の十五…遅れて現れた救世主

恐る恐る、睨った目を開けた。その光景に、息が止まるほど驚いた。

頭の中で、今起こっている状況を整理しようとしたものの、驚きのあまり完全に停止した思考回路では、それは不可能だ。

ただ「どうして？」という疑問符だけが、頭の中をぐるぐると巡り、占領していた。

「へ、平次……」

声が震えた。そして、視界がゆらゆらと、揺れ始めていた。溜まった涙が、一粒二粒と頬を伝う。それらが、驚きから来たものか、恐怖から解放された安堵から来たものかは分からない。けれど、目の前にあるのがあの世でない事は、確かだった。

「……泣くなや、アホ。間に合ったのに泣かれたら感じ悪いわ」
「うん」

目の前にいる彼は、彼女を見て苦笑い交じりにそう言った。
先ほど平次が倒した男は、和葉の隣に泡を吹いて倒れていた。

——先ほど、一瞬の出来事である。

振り上げられた刀の峰が和葉の意識を奪わんとするその寸前。そう。もう一人、隣に居た男の瞳に、後ろに現れたその姿が一瞬だけ映っていた。色黒の肌の、たくましいその姿が。

男が声を出すよりも早く、既に平次の間合いに捕えられていた男の右肩から、左に向けて斜めに鋭い剣先が通った。

「貴様、服部平次……」

その手に持っている刀の切っ先を平次に向け、男は叫んだ。平次は男をきつく睨み、手に持っていた剣を構えた。

「平次！」

呼びかけると、平次は一瞬だけ彼女の方を、彼女の肩に視線を移した。しかしすぐに自分に剣を向けている男へと視線を戻しながら、横に座り込む和葉に、氣遣うように言った。

「……和葉、肩の傷酷いか？」

「う、ううん。ざっくりやられてしもたけど、生け捕りにする気みたいやったから……」

「命にはかわらへんっちゅうわけやな。……我慢できるか？」

氣遣いながらも、その声は低かった。彼が今怒りを感じている証
拠。

一人の女に、大勢で斬りかかって刀傷を負わせた男達への怒りと、助けに来るのが後一步早ければ恐らく傷を負わせる事は無かった事に関する、自分への怒り。それが彼女にも伝わる。

和葉は答えた。

「うん、平気や。アタシの事は気にせんと、勝って！」

「おう、任しとき。すぐ終らせたるから、それまで待っとけよ」

それだけ和葉に伝えて、彼は男に怒りの目を向けながら言った。

「随分、手荒な真似してくれたやんけ。その落とし前、今からきっちりつけさせたる。西の王子怒らせたんが、運のツキやったなあて、呪って自分のした事思い知れや」

その横顔に、和葉はふわりと微笑み、エールを送った。彼女の中に、何の心配も無かった。剣の腕において彼の右に出る者を、彼女は知らない。いや、居たとしたら彼の父にしてこの西の国を大小纏めて仕切る服部平蔵くらいのももの。その彼には、平次もさすがにまだ叶わない状態ではあるが。

東の工藤、西の服部と呼ばれ、諸国の羨望を集め比べられていた二人の王子だ。

お互い文武共に達者で、頭脳でも剣の腕でも他から群を抜いている。ただ、比較的相手の心を読むような戦いや、心理的な駆け引きなどが得意なのが東の王子。そして、生まれながらに持つ才能とまさしく最強だった父の教育を受けた彼は、生粋の剣士だった。

「くそ、こうなったら計画変更だ。遠山の姫もろとも、西の王子を殺して引き返す」

いくら剣の腕に覚えがあっても、先ほど恐らく実力伯仲であっただろう男を、一瞬にして斬り捨てた平次と対決して、勝てるわけがない事は明らかであった。

平次の刀が男の胴元に入るか否かを見届けながら、安心して気が抜けきった和葉はゆっくりと地面に倒れた。

「……ずはっ！ 和葉！！」

強く体をゆすられて、初めて彼女の意識は回復した。力なく目を開けて目の前に映った彼の顔は、必死な表情をしていた。

抱きかかえている彼女の目が開いたのを見るなり、そんな彼の表情は緩んだ。安堵の溜息が漏れる。

「氣いついたか。辛かったんならそう言え、アホ」

「へいじ……もう、終わったん？」

出血のせいであろうか。ふわふわとはっきりしない意識のまま、彼に尋ねた。

「ああ、この通りや」

そう言っ、彼は片手に持っていた縄を引き寄せた。うめき声を上げた男が、縄につながれたままこちらへ引きずられてくる。

「わっ。……生きてんのん？」

「当たり前や。俺がこいつら倒した時、血が噴き出さんかったん見たたやろ？ こいつらにはぎょーさん聞きたい事もあるしなあ」

咄嗟に峰打ちに切り替えたらしいその腕はお見事と言ったところか。

平次の見せた不敵な笑みに、和葉はぽつと頬を紅く染めた。しかしそれも一瞬の事だ。彼女はすぐ、意地を張るように視線をそらした。

「た、助けに来てくれるんやったら、もっと早よ来てくれへん？」

「何や、命の恩人に向こて」

つまらなそうに言った平次に再び視線を戻す。彼女は更に頬を染めて呟いた。

「感謝してへんとは言っていないやん。あ、ありがとな、平次」
「そや。お前かて、もう一応立派な姫やからな。素直にならなあかんで？」

平次の言葉に、和葉は微かに頬を膨らませた。
助けられたのは嬉しい……感謝もしている。けれどそれとこれとは、別だ。そっけない態度しか取れない彼には、微かな不満を感じた。

「余計なお世話や！ 平次のアホ」

「何やなあ、ホンマに可愛げないやつちゃ」

そう言って、つんとそっぽを向いた和葉に、平次もまた小声で不満げに零した。ただ、それは口調だけ。彼は頬を赤らめながら、和葉に手を差し出す。この手に掴まって立ち上がれの無言の合図だ。

和葉は恥ずかしそうに俯いて、真っ赤になりながらその手を取った。怪我をしていない方の肩で。

「あ、ありがとう、平次」

ぐっと引かれて、その力を借りて立ち上がった。辛そうに肩の傷を抑える和葉を、彼は数秒観察して答えた。

「判ればええんや。自分で歩けるやろ？ こいつら運ばなアカンから、おぶってはやれへんけど」

「そんな位なら、大丈夫や」

「まあ、もし辛いようやったら、肩位は貸したるから」

そう呟いて、平次は男を抱え上げ、残った肩に手を置くように命じた。

ええよ！ と赤くなりながらも、結局説得させられて、和葉はそこに手を添える。先ほどまで、男達に追われていた時の事が嘘みたいに安心していた。

襲われた時以上に、彼女の胸はときどきうるさく激しい鼓動を刻んでいた。

「平次……一体何が起こってるん？ この人たちの事も、侵略の事も」

和葉は不安を感じながら言う。事態は、自分達の思うよりずっと大きくなっているのではないかと。

「そない心配すんなや、和葉。オレも居るし……工藤っちゅう強力な助っ人もおるからなあ」

「けど、蘭ちゃん無事やろか。アタシ達位のある程度大きさ持った国が狙われる事なんて今までなかったやん……アイツ等、蘭ちゃんも狙ろてるみたいやねん」

男達との会話を思い出しながら、和葉はぼつりと呟いた。平次はそんな彼女を一瞥し、ふっと穏やかな笑みを浮かべる。

「東の姫は心配いらへんやろ。何かあったら工藤が黙っとくワケないしな」

「そやね……間違いあらへんよね？」

「東の方にも使いのもん向かわせたるから、和葉は自分の怪我の事だけ考えとき」

昔から、普段は喧嘩したりからかわれたり憎まれ口を叩かれたり、そんな事ばかりだったけれど、怪我をしたりした時には妙に優しくった。

そんな彼だからこそ、いつの間に好きになってしまっていた。

「そやね、蘭ちゃんにも居る筈やもん。ピンチの時頼りになる人」
「ああ、せやろ？」

和葉を安心させるように笑いかけながら呟きつつ、平次は遠く離れた東にいる二人を想った。

其の十五…遅れて現れた救世主（後書き）

ああああ……（ホロリ）

先日引き続き、とつてもじーんとしております。

ついに未出部分出せたよ！＞＜

というわけで、本当に長らくお待たせいたしました！

こんにちは、朧月です！ CNR時代から、待たせた方にはかなり待たせただろう第十五話です。

むしろ、その頃読んで下さった方に見放されてる可能性もありましたが＞＜

そして、前回ラストの「ぐっ」というあの声。

こういうオチでしたー☆という♪

今日もストック頑張ってます。もうちょっと溜めようと思っていたのですが。

十五話は本当に、人によってはかなりの間待たせてしまっているで、出来る限り早く出すのが誠意かなと。

改訂して出したこの話ですが、今でも昔を見ると欠点だらけで泣きたくります＞＜それを日々進歩してる証と思ってくれ！（苦笑）

話としては、平和をでーんと出したかった今回。

和葉姫の登場がこんなに遅くなるうとは！ でも、やっと異世界版

平和シーンを出す事が出来ました＞＜

実は、そんなに書くの得意じゃないCPだったりしますが……大好きな事は大好きなのでv v

平和至上主義的な方にも通用してるといいな。

さあ、今回もお楽しみいただけましたでしょうか？

次話もまた、どうかお読みいただければ幸いです V

其の十六…幕間5、Kazuha（違和感）

コナン君が目え覚めへんようになって、もう一週間や。

蘭ちゃんは、面会時間ギリギリまでコナン君に付き添う事が多くて、平次は事件の捜査を再会させながら、一日に一回はコナン君に会いに行ってる。平次が面会する時は、何やよわからへんけど、二人きりになりたがるみたいやから、そんな時はアタシと蘭ちゃんが気い利かせて外に出とる。

どっか楽しそうにも見えるコナン君との”会話”は、ホンマに兄弟みたいやなあって思う。

「あ、平次！ どや、事件の進み具合は」

まだ生々しい記憶の残るあの事故現場で、平次はめっちゃ真剣な顔で座り込んでる。あの事件の経緯については、大体判ってるんやて。けど、証拠がないんやて言うてた。

話しかけて顔をあげた平次に、あたしは買ってきたばかりの差し入れを渡した。コンビニの袋に入った、カレーパンとチョココロネ。袋の中身を見た平次が顔をしかめたのを見て、ちよっとむっとした。

「つて、コレ昼食のつもりなんか？」

「なんや、なんか文句あんの？ もうお昼の時間やんか。折角、一緒に食べたろてあたしの分とあんたの分買ってきたたんやん」

「まあ、ええわ。ほんならそっちの公園でも食うか」

面倒くさそうに小指で耳ほじりながら立ち上がる平次に、少しむっとした。……むっとしとる筈やのに、先を歩いてく平次についてくあたしもあたしやん……アホ。

ベンチに座つとる平次と、パンを分け合う。あたしはまずチョココロネを、平次はカレーパンを取って二人で口にほおばった。あ、何や上手いやんこのコロネ。思わず口が綻んでもたあたしの隣で、平次が啜えたカレーパンをぶっと吹き出した。

「なんやの！？ 汚いなあ！」

「……このカレーパン、甘すぎなんやないか？」

「そ、そんな筈ないやん！ 甘いカレーパンでなんやの？」

人が折角買ってきたったちゅうのに、めっちゃテンション低い声で文句言うもんなん？ フツ。大体、カレーパンが甘いわけないやん。カレーやで？ 辛いからカレーっちゅうもんや！ ほら、ここにちゃーんと書いてあるやん”ベリーカラカラスパイスカレーパン”で。

コロネの残りを口に全部ほおべて、袋に残ったあたしの分のカレーパンを掴んで、口の中に……口……………

「甘っ、なんやのコレ！」

「そう言うてるやろ。あー、もうええわ。コロネで味直しさせてもろたら、元の捜査に戻るで」

何故か顔をしかめながらも完食しよった平次が、今度はコロネをめっちゃ味わいながら食うとる。あああ、あたしのコロネ、もう全部食べてしもたやん。このプリンみたいな味のカレーパンが口ん中残って……う。あかん。

「へ、平次。コロネ一口分けてくれへん？」

「アホ。お前自分の分食うたやんけ」

あたしが懇願すると、平次は呆れ声で応えた。

「これ以上食べると、豚娘になってまうで？」

「も、もうええよ！ ジュース、買ってくる」

からかう平次に、強引にあたしの荷物を押し付けた。公園の端に自販機が見えたから、これで味直しや。

えーと、お茶とオレンジ、どっちがええかな。

お金を入れながら、光るボタンを見て考える。けど、口直しやったら味がきついもんの方が効果あるやろ。

「オレンジやな、ここは」

ガタン、て音立てて出てきた缶ジュースを、あたしは一気に飲み干してそこに捨てた。ほっとくと平次に置いてかれそうやったから、小走りで元居たベンチに戻る。

あたしを迎えたんは、平次の半眼はんまなこやった。

「お前、飲むのめっちゃ早いなあ……」

「悪かったなあ。……ほんで、事件てどの位進展あったん？」

事件の言葉を出した途端に、平次の呆れた顔が真面目な顔に変わった。

平次は、あんまりあたしに事件の事を話してくれたりせえへん。せやから、どんなに気になっても、平次のキラキラした顔が見れるまでは待つしかあらへんのや。けど、今回は知り合いの子があ

んな目に合わされてしもた事件やもん、気になるに決まってるやん。

「……せやな。あん時くど……やのうて、ボウズが持っとったもんが、大事な証拠やった筈なんやけど、それがあのボウズの身体の何処探しても、道路の何処見ても、全然見つからへんねん」

平次の、語尾に力がこもる口調は、何やめっちゃ悔しそうや。事故の後、しばらくあたしも平次や蘭ちゃん達も、呆然としとったから。そんなもんの事、全然気づかへんかったんや。ほんで、そういえば平次、あとから蘭ちゃんにしつこく聞いとったなあ。

「けど、なんでコナン君がそんなもん、事故直前に持っとったん？ あの子、平次と同じ探偵みたいやん」

「あ、まあそれは……ホラ、俺の弟子みたいなもんや！ ガキやけどええとこ気が付いて、将来有望やないか？ アイツ」

……何慌ててんの？ いつも思うんやけど。コナン君の話題出した時、平次が決まって声も裏返ってしまうほど動揺すんのかあたしにはさっぱりわからへん。やっぱり、コナン君てなんかあるんやう？

「まあ、ええやんけ。それは気にせんでも。そや。結論的に、犯人の事、実は誰かわかってんねん。ただ、問題は物的証拠やなあ。しかも、たち悪く、工藤の事でごたごたしとる最中に、そいつ逃げてしもたみたいやし」

「工藤？」

「あ、いや。ほら、えーと……聞き間違いちゃうか？ 和葉」

ホラ、怪しい。いっつも、コナン君の事工藤工藤で。

え、まさかコナン君が……？ って、そんなワケないやん。あた

しのアホ！

ふう。平次とコナン君の事考えると、いっつも変な想像してまう。溜め息をついたあたしは、少しだけ、真面目な事に考えを向ける。

「平次があの子の事、なんて呼んどつてもええよ。けど、蘭ちゃんの事変に傷つけるんはやめたって。気丈に振舞つとるけど、コナン君の事でただでさえ蘭ちゃん……」

「判つとるて。姉ちゃんの前では控えるようにすればええんやろ？ 任しとき、犯人も俺が必ず捕まえたるし、ボウズも絶対目え覚ます。俺らには、ハッピーエンドしか待ち受けてへんのやからな！」

平次は、熱のこもった説得力のある声であたしに言うた。根拠があるわけでもないっちゅうのに、平次の頼もしい不敵な笑顔見とつたら、なんか、あたしも勇気が沸いてくる。

「ありがとう、平次。そやね、あたしらの未来は、絶対ハッピーエンドや！ あたしは、平次の事信じとるから。きつと、コナン君をあんな風にしよった奴捕まえてくれるて」

「当然や。警察にも尽力あげて探してもろてんねん。俺らは俺らの出来る事やって、ほつとして大阪帰ろうやないか」

力強く言ってベンチから立ち上がった平次の後を追って、あたしも立ち上がる。そこから見える時計は、二時を回つとった。

「あかん、もうこんな時間や。そろそろ病院いこか、和葉。今日はあいつに早めの報告や」

「あ、待って平次！」

両ポケットに手をつつこんで、公園を出て行く平次の後姿が、めっちゃ大きく見えた。

あたしは、そこに向けてまっすぐに駆けた。

病室で眠っとるコナン君の容態は、一応安定しとる。けど、それでもいつ何があるか判らへん状態やて聞いた。現にもう一週間経っても、全然目え覚ます様子もないんやから。

平次が病室の戸を開けて、その後ろにあたしも続く。

「コナン君、今日も来たで。早よ目え覚ましてな」

周りを見回してみたけど、蘭ちゃんはどこにも居らへん。珍しいなあ、蘭ちゃんが来てへんて。まあ、どのみちあたしは外に出て待っただけやけど。

「蘭ちゃん、まだみたいやな。ほんなら、あたし……」

「ああ、居たいんやったら居ってええで」

軽口で応えた平次の言葉が、何やめっちゃ珍しい。いつもやったら、何かと理由つけて追い出すやん、あたしも蘭ちゃんも。

「ええよ、あたしどうせ、蘭ちゃんが来たらくさん病室に居られるし」

「ほんならすぐ終わらすから、待っとなんてくれや」

「うん」

笑顔を作って頷いて、平次だけ部屋に残して、あたしは外に出た。で、出たところで何もする事ないあたしは、戸の前に座って、平次

が呼びに来るのを待つとるだけや。

たまに、部屋から声が漏れて聞こえたりもする。どんな話をしとるんやろって、聞き耳立てたりも。

「あん時お前、持ってたもんどこやったんや。重要な証拠やったんやろ。それさえあれば、とりあえずあの男、犯人として手配も出来るんやで？ ……ああ、せや。犯人はもう一人に絞りんんでんねん。昨日もちよつと話したやろ。逃亡中やけど、あちこち写真まわして検問しとるから、多分遠くには逃げられへんと思うで」

聞こえてくる平次の声は、真面目な話やった。いつもの事やけど、コナン君相手にそないな真面目な話、人払いしてまでする必要あるんやろか……？

気づけば、不思議に思いながら聞いとったあたしの身体を覆うみたいに、影が出来とった。

「和葉ちゃん、今日は早かったんだね」

「あ、蘭ちゃん」

しゃがんどったあたしに話しかけたのは、蘭ちゃんや。あたしは立ち上がって、お尻をはたく。蘭ちゃんは微笑みながら、柔らかな声であたしに尋ねた。

「コナン君、どう？」

「あ、まだ……目は覚めてへんみたいや。今、平次が中で話しとる」
「そっか、入ってもいいかな？ 薔薇の花買って来たから」

ちよつとした、違和感や。入ってもええかなんて、今まで聞かれた事なかった筈やのに。

多分、あたしの顔が不思議そうにしわよせてたんやと思う。蘭ちゃん、きょとんとして首を傾げた。

「あ、ゴメン。うん、ええと思うで。ノックすれば」
「ありがとう」

……やっぱり、何か変な感じがするんやけどな。蘭ちゃん、いつもよりちよつとだけ余裕もある感じやし。

その時疑問に思ったアタシの違和感なんて、あってないようなもんやて、自分で言い聞かせた。けど、病室の中に入ってく、蘭ちゃんの後ろ姿も、ほんの少しだけ、雰囲気がいつもと違う気がしたんや。

其の十六：幕間5、Kazuha（違和感）（後書き）

こんにちはV今回もまた、懲りずに読んで下さって有難う御座います＞＜

十六話について何か語る前に、読者の方に一つ切実な質問が＞＜
・・・・蘭の中途半端なお姫様口調、戻しちゃダメ？（涙）
書けないというわけじゃないのですが、異世界蘭ちゃん出すごとに、
書いてる私が違和感満載感じてしまったりして＞＜蘭姫書きたくない病が・・・

基本的に、一度あげたモンについて、文法以外に重要な部分変えるのは、あんまりあっていい事だとは思ってないんです。だから、前の部分を改訂する時も、元を読んだ方が続きで違和感を感じられなように直してるつもりで。でもコレはね、凄く重要な事だと思うから、変えるわけには行かないと思ってたのですよ。今でも思ってる……のです、が。

新一Ⅱ普通の口調、平和Ⅱ普通に関西弁、蘭だけが浮いてる気がして気がして＞＜気に入ってくださってるようなら、うん、変えませんが。変えてもいいとか、変えた方がいい意見多数だったら、考えたいな（涙）蘭姫登場シーンだけ、改稿する事になりますが。すぐにどうこうというつもりもないので、気が向いたら意見いただければと思いますー＞＜

さて、というわけで、この十六話。

幕間和葉は、いれようか最後まで迷ってた部分であります。でも、基本的に幕間更新は、異世界編でのキャラ登場シーンを意識して入ってるんですよ。優有以外皆そうなってるでしょ。

だから、和葉をもしココで入れなければ、幕間で和葉の出番は永遠に訪れない事に（へーへ；

なのでどうしようかと考えた結果、伏線を孕ませての幕間にすれば、和葉編も意味のあるモノになるのではないかと。と。

書いた後も散々（一ヶ月以上かな？へへ；）悩みましたが、和葉ファンに申し訳がないので、出す決意に至りましたv

関西弁、相変わらずヘタでゴメンネ＜

カレーパンネタは、私自身が感じたことあるモノです。辛くなくても、ちょっぴりしょっぱい系の味がついてるもんじゃないですか？普通。

そのカレーパン、本当にプリンに砂糖加えたような味がして。二度と食いたくない！と思った経験が（へへ；横浜のお話なので、地元であったネタを抵抗なく使えていいですね♪（他県だと、味付けも変わるでしょうし。ちなみに私は基本的に、そこそこ辛いカレーパンが好きです・笑）

下らない話になってしまいましたが、さて、一体和葉の感じたものの正体は！ 次回の幕間まで、推理してみてくださいねv

それでは、次話でもまたお会いできたら幸いですv

お返事遅くなってしまうと思いますが、時間見て感想レスお返ししますねvそして、またいつでも気が向かれましたら、反応残してやって下さいませv凄い力になってます。本当に有難う御座います！

其の十七..それは静かに音もなく

飛んでいく鳩を見送る気分は、どうにも沈んで仕方がなかった。けれども、これは自分に課せられた任務。逆らうわけにはいかない大切な事。

「ごめんなさい、私にはどうする事もできないの」

振り向くと、未だ眠っている彼が居た。会わなければもしかしたらもっと辛い思いをしなくて済んだかもしれないなんて、安易な考えも浮かぶ。

せめて、何も知らずに飛んでいくあの鳩のように、自由の身になれたら幸せだった。

「どちらが真でどちらが虚ということはなく、そのどちらもちやんと実在する世界なのだ。私がそれを知ったのは、私が実際に向こう側の世界から来た者だからである……か」

新一が国の用事で出ていたため、彼の稽古は軽い素振りのみで終えた。胡坐をかいて座ったコナンは、巻物をじっと見つめた。

「式があれば、多分もっと核心に触れた事も書いてあるだろうになる」

呟いたコナンに、哀は静かに視線をやった。暫く巻物を見つめて

いたコナンは、頭を抱え、項垂れる。

後ろで、哀が目を細めて、その一挙手一投足を、眺めている。

「……なあ、灰原。お前も一緒に考えろよ。いいだろ？ そんな位の協力は」

「私、あなたの事情はよくわからないから。余計な口出ししたら、逆に混乱させるのがオチよ」

クールで淡々とした口調で応えると、コナンは更に肩を落とす。渋い顔をして巻物を一瞥した後、彼は半眼で哀に告げた。

「だったら、別の事してくれねーか？ 無言でじっと見つめられてる視線が気になって、集中できねーんだよ」

「あら、ごめんなさい」

一言だけ謝った哀が、クス、と小さな笑みを浮かべた。一瞬口を尖らせたコナンは、再び巻物に視線を戻す。哀はコナンの隣に座り、再び口元に笑みを浮かべた。

「どうせ考えても、それ以上の答えなんて浮かんでこないわ。だから……ちよつとその辺散歩するのに付き合ってくれないかしら」

「あん？ お前狙われてんだろ、あんまり無闇に出歩かない方がいいんじゃないか？」

「でも、やっぱり知りたいもの。私が居る国の事くらい」

そう呟いた哀の表情に、悲しみが映る。首を傾げたコナンからは、いいけど……と返事が返った。

哀は不自然に口角を持ち上げ、暗い顔で笑った。

「決まりね、行きましょう。今日は……そうね、城内と外を色々案

内して欲しいわ」

「俺より、新一おうじの方が詳しいんじゃないか？」

「あなたでいいわ。彼は忙しそうだから」

そう答えた哀の雰囲気、どこか普通と違う様子を感じながらも、コナンは立ち上がる。そして、哀に手の平を差し出した。

「ホラ……」

「え？」

「こんな城ではぐれたら大変だろ、ちゃんと離すんじゃないぞ？」

ぶっきら棒に話すコナンとその手を見つめ、哀は頬を染めた。少し動揺し、戸惑いながらもその手に自分の手の平を重ねる。

「あ、ありがとう」

「お？ 素直じゃねーか。俺の世界にいるお前には一度、シカトされたけどな」

からかうようにそう言われて、少しむっとした表情を返す。

哀は、その世界の自分はどんなものなのか全く知らない。だからある意味当然の事だ。

「悪かったわね、素直じゃなくて」

部屋から出た廊下は、少し暗かった。中に行けば行くほど、明りが利いていない。哀の科白は聞こえないほど小さな呟きだったが、ちらりと振り向いたコナンがフツと笑う。

「素直じゃねーのは、俺の世界にいるお前だっつってんだろ？ 怖いとか、辛いとか、悲しいとか、そんな境遇で本当は押しつぶされ

そんな時でも、強がってつつぱねやがるし。クールな奴かと思えば、姉さんの事になると涙もろくなるんだよな」

道を進みながら話すコナンの言葉を聞きながら、哀は段々と俯いた。その瞳が、悲しみに支配されてゆく。

「殺された、んだったわよね、彼女の姉」

哀がぼそりと語りかけると、コナンは後ろを一瞥し、少しだけ考えてから肯定の返事を返した。

そのまま歩調を緩めないコナンに、腕を引かれてゆく。気づけば、彼の手を握り返す力が強まった。

「……確かに、姉さんは死んじまったけど。あいつはその代わりに新しい世界を見つけたんだ。オレの世界のおめーは、強いけど脆くて弱い部分が危なっかしくて、周りの為に自分の命も軽視しちまうような奴なんだ。……いい奴だよ、姉さん思いの」

優しい声が、哀の胸に沁みる。全てを打ち明けてしまいたくなつて口を開きかけて、けれどもやはり出来ない。空しくなって、哀の口元には切ない笑みが零れた。

俯いた哀は、聞こえるかも判らない声で小さく呟く。

「そこまで言うなら、判ってくれるわよね？ 彼女がきっと、大切なものの為に、最悪の選択肢をまっすぐ進んでいても」

「……あん？」

コナンは怪訝な顔で振り向く。哀は、頭にその暖かった日々を浮かべながら、言い方を変えて再び小さく口を開く。

「もし、彼女が自ら汚れる道を選んだとしても、それが彼女の意思じゃないって……判ってくれるわよね？　そうするしかなかった、って。例えばその大切だった姉との何かを助ける為に、彼女が大きな罪を犯しても」

例え話のように言いながらも、哀の手は震えた。変に握り締める力が入り、彼に不審がられないかとドキドキする。コナンが数秒黙り込んで訪れた気まずい空気に、哀は息を呑んだが、前から小さく息をつく声が聞こえて、顔を上げた。

「……いや、ぜってーそうはさせねえな。そうするしかないなんて事は許さねーよ」
「どうして!？」

追い詰められ、切迫した声が城の廊下に響く。響いた声が完全に消える頃、今度は強い意志の籠る声が響いた。

「もし、それが姉さんを助ける為なら、あいつが手を汚す前に俺が必ず最善の道で助けてやる。おめーの事もおめーの姉さんの事も知らなかったあの時とは違うんだ。だから、今度は絶対、必ずな!」

力強い言葉の後、震えていた手を握り返された哀は、眼を見開いた。耐え切れず、その開いた瞳から涙が溢れてくる。薄暗いその廊下に感謝した。

せめて、溜まった涙が零れ落ちないようにと、下唇をかみ締める。けれども瞬きと同時に、ついに雫は頬を伝った。

体が硬直したように固まる。多分彼に泣いている事が伝わっている。けれども、彼は振り向く素振りを見せない。

「……なあ、俺の事信じてくれねーか？ 絶対、悪いようにはしねーからよ」

震える手が、彼の力強い手のひらに包まれきつく握られた。その体温に、彼の意志が伝わってくる。びくりと反応した哀は、けれども同時に悲しみも感じた。

「そうね。もし、全てをアナタに託すことが出来てしまえばどんなに楽か。でも、アナタはいつ居なくなるか判らない人……そうでしょ？ 異世界の住人さん？」

応える声が震えるのを感じながらも、最後まで詰まらず言い切れた自分を、哀は心の中で密かに褒めた。だが、彼は間を空ける事なく、続けた。

「いつか戻るとしても、おめーらの事が解決してから元に戻りてえんだ。……段々判ってきたよ、おめーがどんな立場で居るか。俺は……元の世界と同じ過ちを繰り返したくねえんだ」

哀の耳に伝わるのは、とても真剣な響きの声だった。哀は涙を拭いて、再び顔を上げた。口元に小さな笑みが浮かぶ。

「バカね……」

「あ？」

「でも、ありがとう」

暗いから、彼が振り向いた所で、絶対に見られる事はない。だが、柔らかな微笑みが、哀の顔一面に浮かんでいた。

胸の奥から湧き上がる、ぽかぽかした感情が何なのか。初めてそれを味わう彼女には、判るような判らないような、そんな不思議な

感覚だった。

ふくろうの声が響く、夜深く。

工藤家の城よりも西よりの服部家に近くなるその場所に、大きき的には中の上程度、比較的何処にでもありそうな城が建っている。屋根などの装飾物が全体的に黒で覆われている事以外は、きわめて普通の城だ。

その城内の長い廊下を、一人の男が歩いていた。一番奥の部屋の戸を静かに開ける。

「ああ、貴様か。どうした？」

「遠山の姫は無能共が見事失敗したようだが、毛利の国へ部下を忍ばす事に成功致した事を報告しに参りました。そして、例の少女からの伝令も……」

「ほお、なんと？」

偉そうに部屋の中央壁沿いに腰掛けていた男は、例の少女という単語に興味を見せた。

尋ねられた男は冷笑を零す。

「やっかいな小童が居るそうで、名を江戸川コナンとか。真か嘘か、こことは別の世界の工藤新一本人だとか抜かしております。……武は工藤家王子に劣るものの、身のこなしもよく、頭脳面は王子以上のものがあるという報告です」

「……………我等の邪魔になろう芽は摘んでおけ。いくら賢かろうと

たかが小童だろう、奴で充分仕留められる筈だ」

「承知いたしました」

答えた男は、口元を歪ませ嘲笑する。部屋を出て、走り書きしたメモを持たせ、鳥を飛ばした。

「あばよ、王子二号」

眠る少年は未だ知らない。音も無く忍び寄る影が、既に自分のすぐ後ろにまで来ている事を……

夜風に当たる少女は知っていた。自分が既に影に絡みとられている事を……

ただ、今は時満つるまで、ほんの束の間の暖かさを心に抱き、目を閉じる。

其の十七..それは静かに音もなく(後書き)

皆さんこんにちは：というかお久しぶりです(滝汗)

ちよっと思うところがあって、創作意欲が落ちてたのも重なって、創作も水面下作業が殆どだったり、P Cが壊れて一ヶ月使えなかったり、データが消えたり、H Pの周期記念があったりと……言うのは4月からの事で、それ以前の言い訳にもならないのですが(汗)また随分間が空いてしまつて申し訳ございません><

その間レスを頂いた分については、出来る限り早くお返しさせていただきますので。今日は遅いですが、明日明後日ぐらいまでにでも、レス作業をと。

せめてレスぐらいはもう少しすばやく出来るように心がけます……これからは><

本当に申し訳ございません。

と、謝罪はとりあえずこの辺にして。

今回もまたこんな奴と、こんなお話を、見捨てないで下さって、ありがとうございました(感涙)

今回のお話もまた、出していいものか相当迷いました。……なんだか、いつも思うけど更新が遅れば遅れるほど、次の話のハードルがあがつてく><

待たせておいてがっかりさせるのは大いなる問題が……(X₁ ;

でも、今回だけは重要な伏線がたっぷりなので、外せませんでした。異世界哀ちゃんとコナン君の掛け合いは、書いてて凄く楽しいのですが。それ故ワンパターンには気をつけないと><

異世界哀ちゃんは、その境遇も考えて、性格と行動を決定しており

ます。

基調というか、主軸として原作の哀ちゃんが居て。そこに異世界哀ちゃんならではの要素を追加してます。

元の世界の哀ちゃんより、この子はひねくれ具合が増しております。コナンたちへの警戒心も。

更に、元の世界の哀ちゃんよりも、素直でその分感情が不安定というか。

次の十七話は、ついに事件が起こる・・・かも知れない(笑) 出てくるものをそのまま出せばね、結構な事件が起きるのですが、ちよっぴりそれを綺麗に收拾させられるかがまだ自信ないので。
とりあえずはストック溜めるの頑張ります！

楽しくお読みいただけましたでしょうか？(^^)

それでは、また次話でもお会いできたら幸いですV

其の十八…突然の消失

「早馬の報せが御座ります！　王子、王子はおられるか！？」

明け方早々、騒がしさに目を覚ました。耳に届くのは、馬蹄の音と緊迫感漂う怒鳴り声。

不思議に感じて外を見ると、そこにはわらわらと人が集まっていた。話を聞く新一の顔から、血の気が引いていくのが見える。

「何があったんだ……？」

呟いたコナンの後ろから、哀もまた顔を覗かせた。外の様子を見るなり、彼女も隣で顔をしかめた。

「あつたみたいね。王子のあんな顔なんて、よっぽどの事でしょ……例えば、国の事とか、隣国のお姫様の事かしら？」

口元に深みのある笑みを浮かべた哀の言葉に、コナンもまた血の気が引く感覚を受けた。気付けば彼女の胸倉を、責めるように掴む。

「蘭の事って、何だよ！」

「想像つくんじゃない？　今この世界で起きてる事を考えてみれば」

あくまで冷静な口調が、コナンを更に腹立たせた。浮かべたくな想像が、頭の中を巡る。

「オメー、まさか何か知ってんのか！？」

つつい声を荒げてしまった事は後悔した。哀の顔が明らかに不

愉快なものに変わる。

「あ、いや……」

「私の事、疑ってるのね。彼女の身に何かが起きて、それに私が関わってると思う？ 私が言ったのはただの推測よ、関わってるわけではないじゃない」

「わりい、今のは確かにありえねー早とちりだ」

棘のある返しに、失言だったと反省した。頭を下げたコナンだが、それはそれとして、結局何が起きたのか気になってならない。下に居る新一もまた、動揺を隠せない様子で怒鳴っているのだ。

「灰原、俺悪いけどちょっと、様子確かめてくるよ」

「……なら、私も行くわ」

走って行く後ろから、彼女もついてきた。コナンの脳裏に、新たな事件の予感がよぎる。それを振り切るように、彼は必死で走った。

辿り着いた場所で、突然新一が地面に向けて思い切り拳を振り下ろした。相当苛立ちが隠せないようで、珍しく表情に余裕がない。声をかけ辛い状況だが、コナンは思い切って尋ねた。

「一体何があったんだ……？」

振り返った新一は、齒をきつく食い締めていた。

「昨日の夜から明け方にかけて、蘭が突然姿を消したそうだ……っ！」

やはり、と思う気持ちと、どうしても思う気持ちの両方が、コナンの中に交錯した。

「大丈夫だったんじゃないのかよ！」

「……ああ、当然俺の部下を選びすぐって護衛として送っていたんだ。異常があったら、逐一報告するようにつつてな。昨日蘭はいつも通り就寝前の挨拶をして床についた。朝……異常がないか部屋を覗いたら、寝床はもぬけの殻、蘭は……」

「居なくなってた……ってワケか！　くそっ！」

コナンもまた、先程の新一と同様に壁に手をうちつけた。哀は目を細め、その様を見つめていた。

馬に乗って、その場所に急いでいた。聞いた手際は、明らかにそれらを生業としている人物の所業であろう事が判る。

「江戸川君……」

コナンを後ろから抱きしめるようにして馬に乗っていた哀が、耳元で囁いた。目線だけでちら見すると、彼女は再び小声を発した。

「無事だといいわね、彼女。私だって一応、そう願ってるのよ？」

「……ああ、そうだな。判ってる」

最後に会った時の、蘭姫の笑顔を浮かべたコナンは、前を見据えて呟く。クールだが、優しく気遣いのある後ろの少女に、ほんの僅かほっとした。

程なくして、蘭の城に辿り着いた。城内で、ざわめきが起きている。新一の姿を見ると皆が少し安堵した顔を見せるといふ事は、余程の信頼なのだろう。

「王子、蘭姫が……」

「探したのですが、城内、いずこにもおられません！」

馬から下りた彼には、すぎるように城の人間が周りを囲った。そんな人々をかき分けるようにして姿を見せたのが、青筋立てた小五郎である。

「あ、バカ殿……」

呟きかけて、ぐっと口をつぐんだ。コナンの方を一瞬睨んだ小五郎だが、あまりよく聞こえてなかったらしい。すぐに新一に向きなおすと、彼の胸倉を掴みあげた。

「おいコラ、どういう事か説明しろ、新一！」

「いえ、僕もまだ報せを聞いて急いで来たばかりで、状況が……蘭の部屋を調べさせてくれませんか？」

冷静に応えた新一には、さすがと安堵したコナンだが、小五郎は更に怒った様子で怒鳴る。

「ざけんじゃねえーっ！ オメー何をしらばっくれた事を！」

「……お義父さん、しらばっくれるって、何をです」

「まだおめーの父さんじゃねーつつてんだろ！俺は知ってんだ！おめーが、深夜に蘭の部屋に行った事をなあ！」

小五郎の言葉に、目を大きく見開いたのは新一だけではない。コナンもまた、開きかけた口がふさがらずに、顔を赤くして怒る小五郎を眺めた。

「……ちょ、ちょっと待ってくださいよ。僕は、昨日国事で朝から出かけてましたけど、夕焼けが出てきた頃には、城に戻ってた筈です！どうしてそう思うんですか」

当然の弁論だ、とコナンも思う。確かに、昨日夕方に新一は帰って来て、寝るのに別れた時もしっかり覚えている。抜け出したのなら、さすがに気付く。

「嘘つくんじゃ……」

「おじさん、本当だよ！新一王子は確かにお城に居たし、一歩も外に出てない筈だもの。どうして新一王子だと思ったの？」

きっぱりそう言い放ってまっすぐに見上げてくる視線に、小五郎もさすがに言葉に詰まってしまったのであろう。コナンと数秒目を合わせ、小さく息をつく。

「俺だって、何かの間違いだと思ったよ！昨日夜に、廊下に見えた人影が気になってふすまから覗いたんだよ。そしたら、新一！オメーの後姿が蘭の部屋に向かって……」

彼は未だ疑っているようで、細めた目でじっと新一を射抜く。慌てた新一は、二度三度首を振った。

「それ、絶対僕じゃありません。……顔は見なかったんですか？」

「暗がりだが、蘭の部屋に入ってく横顔がちらっと見えたよ。確かにあれはおめーの……」

「なら、考えられる答えは一つしかないよね？ 新一王子に変装した”誰か”が、蘭姫を攫った……」

コナンが真剣な面持ちで意味深に囁いた言葉に、その場の空気はぴんと張り詰めた。隣で無言のまま話を聞いていた哀の眉がぴくりと動く。

「……じゃあ、彼女を油断させる程上手く変装して、連れ出したって事よね？」

「多分。……何か思い当たる節でもあんのか？」

「……いえ、ないわ」

素早く呟いた哀は、コナンから思い切り視線を逸らし俯いた。それもまた、意味ありげな態度であったと思う。コナンは何かを感じ取りながら、深く詮索するのが無駄な事であるとも感じていた。

「くそっ、夜に新一の格好で現れて、何かの理由つけて、静かに外に誘い出されたら……あいつ自ら城を抜け出すだろうな！」

元居た世界での蘭も、昔から自分の言う事を全て信じている様子があつた。静かに一緒に外に出る事が、何か意味があるものと悟ったならばそうするであろうと。

新一は、蘭の部屋がある方角を睨むように見つめている。彼の口元から歯の軋む音が、コナンの耳にも伝わった。握り締めた拳からは、血も微かに滲んでいたようだった。

「らん……っ、無事でいろ！」

押し出すような声が、新一の口から漏れている。それを眺めるコナンは、自身の苛立ちを閉じ込めるように、一度深い呼吸をした。

「大丈夫だよ、殺すつもりなら、んなまどろっこしい事はしねーさ。俺も協力して、オメーの元に蘭を連れ戻してやつから、今は取り乱さずにいようぜ」

きょんとした顔で見下ろした新一だが、次第にその口角は持ち上がり、不敵な笑みに変わってゆく。

「ああ、そうだな。蘭は無傷で取り返す。蘭に手え出しやがった事、死ぬより重い罪で後悔させてやろうじゃねーか！」

コナンは力強く、深く頷いた。それこそが、探偵として自分達が彼女に出来るたった一つの事なのだ。

目を細め、コナンや新一や小五郎達をじっと見つめていた哀が、ごく小さな声で呟いた名前を、そこに居る全員が聞き逃していた。

「ついに、始まってしまったのね……地獄が」

其の十八…突然の消失（後書き）

さて。どうもこんばんはVまたしても見捨てずお読みくださって、ありがとうございます。

もう少し待とうと思っていた十八話の投稿ですが、執筆を終えたばかりの二十話目の進み具合を見て、展開が変わる事はなかうと判断して、出しちゃった☆

あ、レスはこないだと同じく今日中か明日中には。最近レス頑張るぞ期間中です（笑）

さてさて、予言どおり、この異世界にて起きる二大事件の一つを出させていただきました♪

その一つが、変態夜這い男くどー、蘭姫を攫う！

じゃなくて（笑）

蘭姫失踪デス。……別に、書きたくないから消したわけじゃないですよ、断じて！ 私一応蘭ちゃん大好きだし。

事件というとね、後ろにもっとずっと大きなものが控えておりますが……事件があらうとなかろうと、とにかく楽しさとドキドキは感じさせるお話が続けられるといいなV

推理小説系は全くもって書けないので（だから最初の事件もあんなしようもないもんだったのですが）その分私は私に出来る頭脳&アクティブ戦を皆様に展開できればなうと考えてます♪

さてさて、一体蘭姫はどこに消えてしまったのか。そして、哀ちゃんの意味深な態度やいかに！

・・・そして、おっちゃんとコナン&新一の搜索はいかに（笑）

また次以降も、お楽しみいただけたら幸いですV

それでは、今回もまた貴重な時間をありがとうございましたV
また今回もお楽しみ……いただけましたでしょうか？（^^）

其の十九…少女からの誘い

蘭が居なくなった部屋は、城の奥にあった。先ほど冷静にと言いつつ合った筈ではあるが、部屋の前に行くなり、新一は齒軋りをして部屋に飛び込んだ。何でもいい、何か痕跡が残されていないかと探す新一の必死な姿を横目で見やりながら、コナンは廊下で小五郎や部下達の話に耳を傾けていた。

「なるほど、つまり皆普通どおりに王子と話をしたりもしたんだね」「何者かの変装だといけませんし。けど、話した感じも王子そのもので、姫に秘密のプレゼントを持っていたそうで。……その、初めての事ではなかったのだから」

頬をかきながら、目を逸らし苦笑した部下の言葉に、コナンもまた思わず頭を抱えた。じと目で、必死な様子の新一をちら見する。

「……アイツ、何やってんだ一体」

呟いたコナンの隣で、小五郎は青筋立てて齒を食いしぼり、こぶしを握り締めている。

「初めてじゃないだとお？ あのアホ王子、ぶっ殺す！ お前ら、離せええっ！！」

こぶしを振り上げ、今にも王子に殴りかかろうと足を一分分出しかけた小五郎を、その部下達が必死で抑えた。暴れる小五郎を呆れ眼で眺めるコナンは、小さく息をついた。

「まったく、娘が居なくなっただってのにこのおっさん……」

「ああ？　なんか言ったかこのくそわっぱ！」

「べ、別になに……もっ」

言いかけたコナンの頭に、大きな拳骨が降った。こぶの出来た頭をさすりながら、コナンは頬を膨らませ、小五郎を見上げた。小五郎はふん、と鼻で笑った。

「おめー、あのくそ王子と同一人物らしいしな、これでちょっとは気が晴れるってもんだ」

高笑いする小五郎をむつつりと見上げる。

「……俺が何したってんだよ、バカ殿」

「何いー!?」

ぼそっと口の中で呟いた言葉に、敏感に反応した小五郎はもう一発コナンの頭に勢いよく拳を落とした。

「いってー!」

「誰がバカ殿だ、誰が!」

「そ、そんな事より、蘭姫を探さなくちゃいけないんじゃないの?」

胸倉を掴まれて、足をばたつかせながら、コナンは必死で話題を転換させた。

「ふん!」と吐き出すのと同時に、小五郎はコナンを床に放り投げる。コナンは床に思い切り尻を打ちつけた。

「って!」

短い叫びを漏らし、コナンは尻を押さえた。不満をたっぷり込め

た視線を送ったコナンだが、当の小五郎はがくりと項垂れた。

「蘭……どこ行っちゃったんだ、一体」

「おっちゃん……」

突然しんみりした空気が漂い、コナンもまた微かに俯いた。自分がそれほど取り乱さずに冷静で居られるのはきつと、ここが異世界だからだ。現実、もし元の世界で、蘭が原因不明の失踪をしたら、コナンもまるで正気で居られなかった筈だ。コナンは小さく息をついた。そして、苦笑しながら、右手で頭を二度三度と掻く。

「それでも、結構動揺してっけどな」

それでも、視線の先に居る新一の動揺ぶりは自分の比ではない。そして、普段滅多に見ない真剣な顔の小五郎もまた蘭以外のものを考えられないようだ。

「……蘭」

小さく呟いたコナンは、ゆっくりと部屋に歩み入った。そこにいる新一は、最後に蘭が寝ていた筈の布団に座り込み、じっと見つめていた。

「何か、判ったか？」

コナンが尋ねると、眉を寄せた難しい顔のまま、彼は顔を上げた。

「何も。特にいつもと変わった、犯人の痕跡は残されて居ねーみてーだな」

悔しげに齒を食いしめた新一は、頭をかきむしる。そんな様子を眺めて、コナンもまた嘆息を漏らした。コナンはあごに手を持って行き、考え込むポーズをとった。

「よっぽど抜け目のない奴なんだろうな。俺も聞き込んだ限りじゃあんまたいた事は判らなかったけど……」

「けど……、なんだよ」

新一の鋭い目が、コナンを射抜いた。コナンは静かに目を閉じて、答える。

「プロ並みの奴で、よっぽど変装が得意な奴って言ったら、それが可能な奴も限られてるだろ。顔作りも然り、声まで同じに出来るなんて、俺の居た世界でも心当たりは限られて」

「誰だ、それ！」

「は？」

話の途中で、新一は突然声を荒げた。けれど、コナンにはその意味がわからずに呆けた返事を返す。新一はじれったそうにコナンに詰め寄った。

「だから、おめーの世界でいう心当たりってやつだよ！ わかんねーのか？ こっちの世界では、おめーの世界での知り合いが存在してるっつってたじゃねーか！」

「そ、そうか。いや、けどそうになると蘭をさらう理由がわからねー……まさか、こっちの世界の組織って」

早口でまくし立てる新一の言葉に、少したじろぎながらコナンは答えた。

「組織？ それって、あれか？ おめーの身体を小さくした、確かジンだかウォッカだかって言う」

「ああ」

コナンは深く頷き、深刻な表情を浮かべた。

コナンの後ろにゆっくりついてきていた哀は、目を細めた。そのまま震える手を腰にあて、拳に小さな紙を握り締める。周りの死角になる場所から、彼女はそっとその紙を開き、下唇を噛み締めながら見つめた。彼女は何かを吹っ切るようにきつく目を瞑り、そっとコナンの肩に手をかけた。

振り向いたコナンに、哀はクールな眩きを零した。

「金髪碧眼の、異国の女。名前はシャロン……とか言うんじゃないの？ あなたの頭に浮かんだ人」

「お前、やっぱり何か知って……」

コナンが尋ね返すと、哀は目を細めて薄ら笑いする。そして、コナンの耳元に程小さい声でささやく。

「子供の姿のあなたなら、怪しまれずに近づけるかも知れないわ。その心当たりの人物に」

「何っ？」

「……私と二人で乗り込まない？ 勿論、新一王子やあのバカ殿さんには気づかれないように。彼らに言ったら、怪しまれるって説明しても絶対自分が行くって言い出す筈だもの」

彼女の言葉に、コナンは数秒考え込んだ。じっと哀を見つめて、新一や小五郎にも視線を送った。そして、コナンは息を吐く。

「確かにな。おっちゃんは娘の事になると見境ないし、新一おうじの考え

る事ぐらいは、俺が一番よく理解してる」

「でしょ？ 私達子供なら、なんとか出来る。あなた、王子の元に彼女を帰してあげたいんでしょ？」

彼女がふつと笑って見せた顔に、どこか釈然としないものを感じながらも、コナンは頷いた。再び、新一達に一瞬だけ目配せすると、小さく息をついたコナンは哀へと向き直った。

「判った。場所は把握してんだな？」

「ええ、勿論。じゃあ、彼らが探索に集中している間に……行きましようか」

ずっと差し出された哀の手を、ゆっくりと握り返した。部屋を出る際に一度だけ新一の視線がコナンを捉えたが、二人は気づかないフリをして、そのまま城を出た。

城の入り口で兵士達に声をかけられ、近くを聞きまわる、と適当にあしらう。そして、城から少し離れた場所に来て、ようやく本来の目的についてコナンは口を開いた。

「遠いのか？ その場所って」

尋ねられた言葉に、形式的な笑みを浮かべた哀はゆっくり首を振った。

「安心して。国は出るけど、馬を使わなければ行き来できない程は

離れてないわ」

「ならいいけど。……どのぐらいかかる？」

「そうね、……二刻と少しくらいぐらいあれば」

「へえ」

説明しながら、哀は足元の長い草をうざったそうに踏みつけた。進む道は、どうにも道とは言えないもので、まるで人が通れるものとは程遠い。だが、そんなぼうぼうの茂みの中を、哀はこっちだ、と案内する。

さすがに、数十メートルも進んだ頃には、コナンは首を捻った。

「なあ、本当に道あってんのか？　蘭を攫った奴が通った道なら、あらかじめその足跡とかが残ってんじゃないか」

「……ここは通らなかったって事じゃない？　裏道なのよ、完全に表からでも当然行けるけど、子供二人で目立ちたくないでしょ？　こっちのが近いしね」

さらりと抑揚のない口調で返されて、納得が行かない気持ちを無理やり抑えつけられる。本当に二刻でどこかに着くのかすら定かではない程、周りは不定期に生えた草だらけだ。

先頭を切って進む彼女は、コナンが何も言わない限り、口を開こうとはしない。ただ、繋がれた手は、僅かに普段よりも握力が強く感じられる。

「なあ……、お前なんで急に俺に協力するような事言い出したんだ？」

尋ねた問いに、彼女の手が震えたのが伝わった。振り向いた彼女の瞳はとても切なげで、揺れているそれに見つめられて、一瞬息が止まる。

「は、灰原……？」

困惑しつつも彼女の名を呟くと、目を伏せた彼女は唇を噛み、再び進行方向に首を戻した。

「信じたいのよ。あなたの事を」

彼女の口から、漏れ出すように呟かれた言葉は、とても小さな声だった。コナンは一瞬はっと目を見開き、彼女の言葉に耳を傾ける。

「最善の道って言うの……見つけ出してくれるんでしょ？」

「あ、ああ。お前が俺を信じて全て託してくれんなら、俺も全力で、必ず救ってやる」

「……そう。ありがと」

ずっと俯いたままごく小さな声で呟く哀に、コナンが何の違和感も感じなかったわけではない。しかし、特にしつこい追及はせずに、彼はただ哀の手を強く握り締め返した。一瞬、足を止めた哀が目を大きく開いて振り向く。そして、端を僅かに持ち上げながら、ゆっくりと口を開く。

「……ふ。あなたって生粋の女たらしでしょ？」

「ああ？ 唐突に何言うかと思ったら！」

「いいの？ その気にしても」

立ち止まり、コナンを見つめたままクスクス笑う哀に、反論しかけたコナンの言葉が止まる。眉間にしわを寄せながら眉尻を下げた彼は、その態度に困惑を隠せずに居た。

「ふふ。そんな顔しなくても判ってるわ。でも……はつきり言って、あなたが誰を好きでも……私は、」

二人の間に吹いた風が、彼女の言いかけた言葉を遮った。哀は風に流された髪を、耳にかけ直した。その仕草を、これ以上ない程に見開かれた目が見つめる。すっかり放心しきった彼の瞳には、その後哀が目を細めたのも映りはしなかった。

「あれ？　哀ちゃんとコナン君？」

突然、横からかけられた声に、二人は目を丸くした。現実を引き戻されたコナンは、手に数本の花を持って、笑顔でそこに立つ幼い少女を視界に入れる。

「あ、歩美ちゃん！」

「あなた、確かあの人の良いおじいさんの家であった……」

「吉田歩美だよ。酷いよ哀ちゃん……折角友達になって、また遊ぼうねって言ったのに全然顔見せてくれないんだもん。コナン君も！」

驚き、声を震わせる哀に、歩美は口を膨らませながら答えた。

「わ、悪いな。色々そこどころじゃなくってよ」

「それより、あなたどうしてここに？」

眉をひそめて尋ねる哀に、歩美は再び明るく笑って答えた。

「探検ごっこの最中だったんだけど、ちょっと迷子になっちゃって。でもここたくさんお花が咲いてたから、誰かがお迎えに来てくれるまで遊んでたの」

「の、呑気だな随分」

「でも、だから二人に会えたんだよ！ 二人は何してるの？ 一緒に遊んでくれるよね？」

呆れ眼のコナンにも、元気な回答が返った。しかし、頬に一筋の汗を這わせた哀は、首を落とし、強く口を噛み締め、目を細めた。その態度に、歩美は首を傾げる。

顔を上げた哀の顔には、一瞬前とは別の柔らかな微笑が張り付いていた。

「迷ったって言ったわよね」

「うん」

頷いた歩美に、哀はゆっくりと息をつき、右斜め前方を指差した。

「帰るならあっち。私の指差す方向にまっすぐ歩いていけば、国に出れるわ。悪いけど、今は遊んであげられないの。私も、彼も」

「そっかぁ……」

「ああ、悪いな」

がくりと肩を落とした歩美に、コナンもまた苦笑し謝った。哀は歩美の身体を、進行方向に向け、背を軽く押した。進行方向に一歩出た代わりに、歩美は無邪気な笑顔で振り向いた。

「ねえ。また遊べるよね？ 哀ちゃんも、コナン君も！」

「ああ、またな」

問いに即答したコナンの隣で、哀はきょとんとしたまま頬を赤らめた。一瞬、困った顔でコナンに視線を送った哀だが、その顔にはすぐ、温かみのある、深い笑顔が浮かんだ。

「私もいつか、一緒に花を摘む日を楽しみにしているわ」

嬉しそうに「約束だよ!」と笑った歩美は、手を振って走った。その後姿を見送りながら、二人もまた、小さく手を振った。

コナンは、ちらりと横を見た。歩美が遠ざかる程に、段々と表情がかげり、俯く哀の姿に、何度目かの首捻りをする。

「おい、どうした? 俺らも目的の場所に行くんだろ?」

「……ええ、早く助けないとね」

コナンが声をかけると、哀は沈んだ表情のまま、ゆっくりと顔を上げた。そして、再びコナンの手を掴み、ゆっくりとその場所へ誘導を始めた。

何も知らない、彼の手をきつく握り締めながら。

其の十九..少女からの誘い（後書き）

一人で勝手に興奮しております、こんばんは朧月です〜V V
今回も見捨てずお読み下さった事、感謝感激です♪

ああ、何が興奮かって、やっとココまで来たよって所だね！ 私的にホントいつになるかと思ったよ。哀ちゃんシーンの数々にちりばめては放置し、出すごとに異世界哀ちゃんの扱いに困り……

そんなのともようやくおさらばだーい☆

さて。このお話も基本的に何の回答もなく、謎提起ですV
こうやって、話に謎だらけな伏線を多数組み込むのって私大好き♪
楽しいったらないよ♪

って、書いてる側がこんな一方的に楽しんでても、読んで下さった方がどう思えるかが全てなのですけどね^^;

でも、今回はもうたくさん込みましたよー。

とりあえず、意味深に言っておこう。

今回は特にトラップだらけですので、ミスリードにはお気をつけ下さいませ〜♪

巻物の言葉とちよっぴり似てますが、どれが嘘でどれが真か。どこまでが本当の真実で、どこまでが歪められた真実か。それを見極めながら読んでいただけると、少しお楽しみが増える・・・かーも知れません♪

本当は二十話で出す予定だった今回のお話ですが、一話置きの間はちよっとアレだったので（^^;）とりあえず十八話に引き続いた

十九話になりました♪

さて、皆様の心の中で、謎は少し核心に近づきましたでしょうか？
パズルのピースをはめるように、この面倒くさいお話をお楽しみ頂
けているならば幸いですV

それでは、また次話でもお会いできますようにV

其の二十…幕間6、もう一人のフェイク

「お、姉ちゃん。今日は遅かったんやな」

明るい関西弁に迎えられて、彼女も微笑を返した。後ろ手に持っていた大げさな花束を出して、花瓶を手に取りながら平次に言う。

「ちょっとね、お花屋さんで手間取っちゃって。それより、コナン君どう？ 変わないい？」

「せやな。どんな夢見てんのか知らんけど、気持ちよさそうにおねんねしてんで」

「そっか、良かった」

応えた蘭は、花を差し替えた花瓶をコナンのベッドの隣にある棚に置いた。水を吸ったカラフルな花がきらきら輝くと、この生気の薄い病室も幾分生き生きしてくる。

既に座っていた平次の真向かいに腰掛けた蘭は、眠るコナンに顔を近づけた。

「コナン君、綺麗なお花買ってきたから、早く目覚ましてね」

少し声のボリュームを上げてみたものの、やはり何の反応もない。ほんの僅かに悲しげな表情を浮かべた蘭は、まだ包帯の巻かれたコナンの痛々しい頭をそっと撫でた。

「こんなに傷だらけになっちゃって。目を覚まさなかったら、承知しないからね」

話しかける蘭は、おもむろに体を起こし、閉まっていたカーテン

を全開にした。そして、平次に斜め後姿を見せたまま、外を覗き、視線だけを下に落とした。口元に一瞬だけ、小さな笑みを浮かべる。

「……ちよつと、ジュース買って来るね。服部君ものど渴いたでしよ？」

「あ、ほんならオレが行くで。来たばかりなんやから、姉ちゃんはいいつにゆっくりついててやった方が」

「ううん、大丈夫よ。他にも目に付くものがあったら買いたいし」

立ち上がった蘭が、意味深にもう一度窓の外をちら見して口端を持ち上げた。わざわざ自分で開けたばかりのカーテンを閉める。その仕草に平次が首を捻るのをお構いなしに、彼女は軽い足取りで病室を出て行った。

「けつたいな事しよるなあ。なんなんや？」

残された平次は小さく呟き、頭を掻いた。

病室から出た蘭は、入り口で立ち往生していた和葉に声をかけた。

「ずっとそこに居たの？ 私と一緒に病室入ればよかったのに」

俯き、あごに手を当てて何かを考え込んだ和葉の肩がびくりと震える。顔を上げた和葉は気まずい笑顔を作りながら、焦った様子で応えた。

「ちゃうねん、何やさつきからひっかかっとして、それ考えてたら入る機会逃してしもて」

「ふーん。……引っかかってたって、何に？」

「な、何でもあらへんよ。ただ蘭ちゃんの態度がいつもと微妙に違とったから、何かあったんかなあって……変やね、アタシ」

苦笑いをして後頭部を二三度撫でた和葉を見て、蘭の口元にうっすらとした笑みが浮かんだ。和葉が目を丸くして首を傾げると、蘭は低く静かな声で答えた。

「和葉ちゃんは全然変じゃないよ。鋭いと思う」

「え？　ほんなら、やっぱり何かあったん？」

「うん、でも心配しないで。変な事じゃないから……じゃあ、そろそろ私行くね。ジュース買いに行くって言ってあるし、服部君待たせ過ぎちゃうといけないから。和葉ちゃんも病室で待ってたら？」

「あ、そやね」

穏やかな笑みを浮かべ、手を振りながら、蘭は出口へと続く道を走った。

病院を出たすぐの場所で、二人の長い黒髪がすれ違った。中に入ろうとしていた方の女は、目を丸くし、振り向いた。微かに震える手を口元に持っていた。

「い、今のって……」

声を震わせて呟いたが、振り向いた先に、既にその人物は居なかった。

「気のせい……？　そうだね、私最近コナン君の事で頭いっぱいだから」

手に持った袋に缶ジュース四本程度を入れて、重力に任せて微かに揺らせながら病室へと歩いた。一度時間を気にして、腕時計に視線を移した彼女は、あと十メートルほどの病室へ足を速めた。

江戸川コナン様、と書かれた病室の中を覗くと、既に入っていたらしい大阪二人組の姿が目映った。ベッドの隣の棚には、色鮮やかな花が置かれている。病室に居る人数と、自分が買ってきた缶ジュースの数を見て、小さく肯いてから戸をノックした。

突然、ぎょつとした二人の視線に迎えられて、頭に疑問符を浮かべながら言った。

「ごめんね、今日売店休みの日だったしすぐ近くのコンビニで買ったんだけど、ちょっと混んでて……結構待たせちゃった？」

言いながら買ってきたジュースを取り出して渡す。受け取った二人は目を見開いたまま、蘭とジュースを交互に見つめた。

「こ、混んでた、て姉ちゃん……」

「ら、蘭ちゃん早いなあ」

「え？　そう？　結構遅くなったと思ったんだけど」

ちらりと腕時計を見て、小さく首を傾げる。身を乗り出して外につけられた病院の時計も、指している時刻は変わらない。

「二人とも変なの。そんな事より、コナン君の容態には変わった事ない？」

「そないに一瞬で変化あったら、もっとバタバタしとるやろ」

いつもと変わらない事を聞いたのに、平次に苦笑いで返された。蘭の頭に再びクエスチョンマークが浮かぶ。部屋に入ったときから、どうにも二人と自分の感覚がずれているような気がしてならないのだ。

横たわるコナンが苦しげな様子を見せずに眠っている姿は、変な疑問も吹き飛ばして安堵させた。容態が悪化しない限りは、目を覚ますだけなのだ。

「一分一秒でも長くついててあげたいの。コナン君から離れてる時間、コナン君に何かあったらどうしようって不安で仕方ないから」

小声でそう呟いた蘭は、閉じているカーテンに気づき窓に歩み寄った。カーテンを開けて、窓も開けて、入ってきた風がコナンの髪を微かに揺らしたのを見て微笑する。

「もー、しょっちゅう閉め切ってたら駄目じゃない。中の陰気な空気ばかり吸っちゃって、コナン君いつまでたっても起きれないでしょ？ 今日みたいな良い天気の日、たまには外の新鮮な空気と入れ替えなきゃ」

「せ、せやなあ」

顔を引きつらせ、首を捻りながら答えた平次に、蘭は眉をひそめ

た。

「ねえ、私何か変な事言ってる？」

「いや、説得力はあるかも知れんけど、姉ちゃんさっき自分で」

「さっき……？」

苦笑いしながら答えた平次に、蘭は再び怪訝な表情を浮かべ、首を捻る。その様子に和葉も首を捻ったが、はっとして平次の頭をはたいた。

「な、何すんねん！」

「さっき言うたばかりやん。蘭ちゃんの気持ちの負担になる事はやめたって。蘭ちゃん戸惑ってるやん。コナン君以外の事で蘭ちゃんに氣い遣わせんという」

平次の耳元でひそひそ声で話す声は、蘭の耳に全ては届かなかった。だが、雰囲気で自分を氣遣っての事と感じとった。

「えっと、何のことだか判らないけど、和葉ちゃんと服部君こそ変な氣遣わなくていいからね。二人とも疲れてるんじゃない？ コナン君のために大阪に戻るのずっと先延ばしにしてくれてるんだから」

きよとん、と目と口を丸くした二人が苦笑い交じりに返事する様子を見て、蘭は再度眉をひそめるのだ。いつまでも噛み合わない会話をしているも仕方がない、と判断した蘭は、手に持っていた缶を一口含む。

「そうだ、服部君。事件の進み具合、どう？ 犯人、捕まりそう？」

「ああ、それやな。それは……」

ザ、ザザ……ザー……

ノイズが入って聞き取りづらいイヤホンを、耳に強く押し当てる。聞こえてくる会話に、口の右端を持ち上げて、イヤホンの主は不敵に笑んだ。

「これで、計算どおり」

小さく呟くと、”彼女”はその長い黒髪を耳にかけなおした。

時は動く。

何も知らずに眠る少年を、狂った夢に捉え続けながら……

其の二十：幕間6、もう一人のフェイク（後書き）

というわけで、皆さんまたまたこんばんはーV二十話は、幕間の投稿でございます（^^）

二十話、ついにここまでいったよーVわーい、ありがとうございます！

段々と、佳境に差し掛かろうとして降りますこのお話・・・、無事に終わるのか？ と考えると、ちょっぴり不思議な気分です。

さて、異世界で哀ちゃんが妙な行動に移ってる今、敢えてこのお話です。

幕間として、いろんな意味で法則崩れな今回のお話・・・異世界編でもなく控えている一大事件に行く前のクッション、ですね（^^）

またも伏線だらけではありますが・・・皆様には今話にての違和感、お気づきの事でしょうか？

前回の幕間にて、和葉が蘭に感じた違和感が、今回は皆様に全面的に伝わってもらおうと作為いたしました。

今回の話の違和感について。

どこがどうおかしく、どう不自然なのか正確に感じ取られたお方。

あなたはタイトルの通りフェイクだらけのお話を、よくぞ正しく理解されました！

でも、大体そうだな、6・4ぐらいで、感じ取られた方の方が多いかな？ というのが私の考察です♪実際はどうかしら。

まるで意味が判らず、ただもんもんと引っかかりだけを感じているお方。

あなたは、恐らく最も私の仕掛けた底なし沼トラップにずるずる引

き込まれている事でしよう♪

ある意味、後で事実を知ってもう一度思い返した時に、一番楽しい
思いをするのはあなたかと思われますV（笑）

・・・まあ、ね。何が起きてるか判っちゃったぞーとか、検討もつ
かねーぞーとか、是非是非教えてやって下さい（^^）

ということで、これが推理物の書けない私の、唯一張り巡らせる事
が出来るフェイクとトラップです^^

ある意味精一杯。ホント、このフェイクをうまく活かせるのかどう
か不安ではありますが、頑張ろうじゃありませんか！

まだまだいろいろお話したい気もしますが、今回はこの辺で（^^）
今回もお読みくださってありがとうございますーV

それでは、異世界哀ちゃん大暴走の次話以降異世界編を、どうぞお
楽しみ下さいませV

其の二十一…大切なもの

「志保、いつか必ず元に戻してあげるからね」

脳裏に浮かんだ彼女の顔は、優しく笑っていた。彼女自身が辛い筈だというのに、泣き顔も沈んだ顔も見せずに、笑いかけてくれる。ずっと、変わらずに。

そんな彼女の事が、何より大好きだった。

例え何を犠牲にしても、自分の心が壊れる結末になってしまっても、構わないと思えてしまう程に――。

道を進むごとに、前を歩く哀は言葉を減らした。哀の様子に、コナンは不信感を抱いたが、それについては敢えて尋ねる事もなく、ただ黙々と後ろをついていった。

それにしても、道を歩き始めてもうだいぶ経つ。彼女の言うとおりだとするならば、そろそろそれらしき屋敷が見えてきてもいい筈ではあるのだが。

「なあ、後どのぐらいだ？」

「もう、すぐよ……ホラ、ちょっと先に草が途絶えた場所があるでしょ？　そこを少し進めば、辿り着くわ」

「あれか。なるほど、確かに言われた通りの時間だな」

俯き前に進む哀は、静かに頷いた。

二歩、三歩と足を進める彼女だが、唐突に足を止める。

「ねえ、あそこ着いたら、座ってちょっと一休みしてもいいかしら？
結構疲れたわ」

「あ？ ああ、まあいいけどよ……そんなに時間やれねーぞ？」

「判ってるわよ、万全の体力で行きたいだけ。少し、話もしたいと思ってる」

クス、と笑った彼女は、微かに足を速めた。コナンは少々納得の行かない表情を浮かべながらも、目の前に突然現れた草を、うざったそうに手で払った。

進む哀の空いている左手は、爪が食い込んでしまうのではないかと思うほどに、力の入った拳が握り締められている。後ろを向かない彼女の表情が読めないから、何を考えているかはコナンにはわからなかった。

少し、揺らして反応を見なくなる。

「灰原、間違ってたらごめんな。もしかして、おめーの姉さん、」

「――あなたの世界の私と一緒にしないで」

怒気を孕んだ拒絶の言葉が返ってきて、コナンは眉を潜めた。彼女にとって、一番触れられたくない部分なのだろう。

何を言おうかと迷っているうちに、気づけば草だらけの場所から抜け出ていた。

哀はすぐそこにあった石に腰掛ける。そして、首筋に張り付いている汗ばんだ髪を緩慢な動作でかき分けた。

「暑いわね」

「え、ああ」

突然声を掛けられて、少々困惑を隠せず返事した。彼女は視線を斜め下に逸らし、しばらく黙った後でゆっくり口を開いた。

「私、彼女の事が羨ましいと思ったわ。初めて顔見せしたあの時から。今もこんなに沢山の人に思われて、あなたにも想われて」

「蘭姫の事か？」

「ええ、そう。でも、助けに行くって気持ちに嘘はないつもりよ。彼女みたいな娘は、幸せになればいいと思うわ」

どこか投げやりな言い方ではあったが、本気でそう思っている事は、哀の顔を見ればわかった。コナンも一息つくと、その向かいの石に座る。

「おめーはどうなんだ？　幸せか？」

コナンは、向かい合って座る哀の様子をじっと観察した。彼女はクールなまなざしで見つめ返してくる。

「……私は、一般的に言う”幸せ”とか言う言葉には無縁ね。でも、それは所詮その人の感覚でしょ？　私にとって一番大切な事ぐらい、手に入れてみせるつもりよ」

「じゃあ、話してみる気になったか？　おめーにとっての、その幸せってやつ、オレが力になれる事なら、協力してやるよ」
「――っ！」

哀は眉を寄せ、複雑そうに顔を歪めた。両手に拳を作り、下唇を噛み締めながら視線を逸らす彼女を、コナンはじっと眺めた。

数秒時間が静止していたが、以外にも彼女の口から漏れたため息

が、沈黙を破った。

「もし、あなたがこの世界の人だったら、全てを任せられたのにね」

小さく微笑して告げた哀の呟きに、悲しみが混ざる。目を細めた彼女は、コナンを見つめた。

「私、初めてだったわ。あなたのような人に会うのは。こんなに心を揺らされるのも初めてよ。全て投げ出して、あなたの傍で幸せになれたら、なんて思ってしまったりもしたわ」

「は、灰原……」

「そんな事、無理なんだって判ってるけど……」

哀しげな微笑が、コナンの動きを止める。彼女の口調はいつになく穏やかで、いつもある微かな棘すら感じられない。

「私、それでも元は姫になる筈だったのよ。生まれてすぐ、父と母が殺されてその地位は落とされたけどね」

「こっちでも、苦労してんだな」

コナンの言葉に、微かに逡巡する様子を見せた彼女は、首を振った。

同情されるのはごめんだ、と言いたげに意思の強い表情を浮かべた彼女に、コナンは微笑する。それを見つめながら、哀はゆっくりとした口調で続けた。

「……もし、変わらず姫として育ってこれたなら、国事か何かであの王子と知り合って、あなたとももっとマシな出会いが出来たかも知れないのにね」

「あの出会いは、やっぱり作画的なもんだったのか？」

コナンの問いに、哀は今度こそ黙りこんだ。代わりにどういうわけか、手を腰に巻いた帯に持ってゆき、ほんの一瞬だけ顔を歪めた。目を瞑り、数秒はそのまま固まった哀が、不意に立ち上がりコナンに告げた――今度は、先ほどとは違って、酷く硬い口調で。

「話はおしまいよ。そろそろ、行きましょ。早く立って」

突然変わった雰囲気、彼は戸惑いながら、急かされるがままに立ち上がった。哀は、立ち上がったコナンの耳元で、ごく小さな切ない声で呟いた。

「大好きよ。私……、あなたの事が」
「へ？」

突然の告白に、コナンは目を丸くして固まった。意味を理解するまで十秒以上かかったが、彼女が冗談で言っているわけがない事は、その声色でわかる。

切なくて、どこか儚くて、甘い響きの言葉が、耳から脳へと伝わってゆく。しかし、それはほんの一瞬だけの事だった。彼女は、身に纏っていた暖かな雰囲気を、一瞬にして切り替えた。

そして、冷たく低い声で、続く言葉を告げる。

「――だから、本当はこんな事したくなかったわ。ごめんなさいね」

それと同時に、コナンの視界に何か光ったものが映る。哀が、帯と着物の間から、取り出したものだと思いがつくのにすら、僅かに時間を経た。

「はい、ばら……？」

突然すぎて、それが何か気づいた頃にはもう遅かった。反応が遅れたのも、全ては意表をつかれたせいだ。

ドスっと、強い衝撃がコナンの腹部に走った。正確には、左のわき腹なのだが、どこであろうとさほど大差はない。次いで、コナンの表情が歪む。

「ぐ、うっ」

彼の痛みに噛み締めた歯から、呻きが漏れた。いつからそれを持っていたのか。包丁の柄を握り締めた彼女の右手に、刃越しに血がつたつた。

苦悶の表情を浮かべながら、コナンは自身の腹部を右手で押さえ込んだ。一瞬だけ狼狽した様子で顔を歪めた哀だが、すぐに無表情に戻す。そして、止めとばかりにコナンの腹部に突き刺さっていた刃先を、引き抜いた。

「――くあっ」

腹部から吹き出た血に、コナンは溜まらず短い悲鳴を上げた。哀は努めて冷淡な口調で告げた。

「私は私の大切なものを守らなきゃいけないの。最初は、こんな事までする羽目になるとは思ってなかったけど、下された命令には逆らえないわ。だから、お別れよ……小さな、王子様」

脂汗が滲み、呼吸が苦しい。コナンは何とか乱れる息を抑えながら、哀と向かい合った。

自分の傷が痛いとか、苦しいとか、裏切られたとか――それ以上に、冷たい表情を装う張り裂けそうな目の前の少女が心配だった。

力が、傷口から外に抜けてゆく。コナンの右手は、既に赤い液体に染められていた。

「は……いば、ら……」

搾り出すように、彼女の名前を呼ぶ。もうやり直しは聞かないから、今更何もかもが遅いのかも知れないが。

コナンは、気づいてやれなかった自分自身を、心の中で責めた。

何かあるとは思っていた。哀の態度は、それだけおかしかったから。

何かに追い詰められていた事は判っていた。彼女は何度も、何度もためらい、迷っていたから。

「灰、原……おめーは、姉さんの事を……」

眩しかけた科白に、哀の眉はぴくりと動いた。コナンはその反応を見て更に後悔した。

——もつと早く気づいていれば、この事態はもしかしたら、避けられたのかも知れない。

其の二十一：大切なもの（後書き）

どうもこんにちは！　それ夢もついに二十一話目に突入です♪
CNR時代から、十四話でずっと更新が止まっていた話だもんね、これ。

感慨深いもんがあるねえ（//´O´）|| 3　　フウ

さて、忙しさにまかせて二週間以上も空けてしまつてすみません＞＜
でも、最初からかなりイメージが固まっていたものがある部分だったから、作りやすかったですv

大事件、起こすまでもうちょっと掛かるかなーと、三話前ぐらいまでは思っていました。

このタイミングで起きちゃいました大事件（笑）

わー、哀ちゃんファンの方に恨まれそうな展開だ＞＜

でも、私も哀ちゃん大好きですから。これもまた愛の形ですからっ＞＜

好きだからこそ、こんなに切なくしたわけですし。

コナンとの会話とか、凶刃シーンとか、ちゃんと切なさ伝わったかなあ？

伝えるために、今まで必死で葛藤する哀ちゃんと書いてきたんだけどね。

さて、一体哀ちゃんの置かれている状態は如何なものなのか！

この話を出したからには、それ夢もう折り返し地点なのですわー。
これから、ぐちゃぐちゃに絡まったものを解きながら、ラストに進んでいきます。

哀ちゃんの素性、異世界における明美さんの事、居なくなった蘭の謎、未だ姿を見せない闇の組織、コナンが今ここにいる理由と、巻物の事や、無事帰還できるのか。

更に、元の世界においてのコナンの生死や、ちりばめた謎謎々。

更には、このお話の冒頭部分についても。

回収しなきゃなんない伏線は山ほどありすぎてもーっ（笑）

でも頑張っていきますので、今後ともどうぞ応援よろしくお願い致しますねV

今回もお読み下さってありがとうございますVいつでも構ってやっってくださいましV

其の二十二…零れた涙

「おめーは、姉さん……の……っ！」

一瞬だけ、目の前が歪んだ。白濁した視界に引きずり込まれるように、コナンの上体は大きく傾いた。――やばい、と感じて左手を膝に当て、身体を支える。

視界はすぐに色を取り戻したが、突如襲われた眩暈は治まらない。コナンは、一度傷から手を外し、血のついていない腕側で、額に吹き出た汗を拭う。

力が、抜けてゆく。

「は……いば、ら……！　ぐ、げほっ……ごほがほっ！」

腹部から逆流するように、なんとも表現しがたい味の液体が、口まであがってきた。同時に強く咳き込んだコナンは、口を押さえた手の隙間から、緋色の液体を吐き出した。

堪えきれずにうずくまった勢いで、コナンの膝が地面に着地する。腹部と口から滴る血液もまた、真下にぼたぼたと着地する。

それをじっと眺めていた彼女の瞳から、ようやく涙が零れた。見ていられないという様子で、下唇を噛み俯いた彼女は、散々逡巡した後、ようやく小さく口を動かした。

「江戸川君、私……」

まるで、独り言をささやくように、震えた小さな声だ。

「私、あなたの事を、信じたいと思ってたわ……何度も、何度も、

何度も何度も。……ホントよ？」

降って来た眩きに、コナンは顔を上げた。両手で強く抑える腹からは、じわりじわりと血が着物にしみこんでゆく。見上げた先にいる少女は、涙を流しながらも、無表情だった。

「本当に、全てあなたに任せられたら私はどんなに楽だったかしらね。そう、あなたや、あの気さくな老人博士や、明るく可愛い三人の子供達に出会って、絆も出来た。私、皆に囲まれてる生活が好きだった気持ちに、何の偽りもなかったわ」

「ば、バーロー……おめー、自分で、壊してんじゃねーかよ……」

苦しい息を吐きながらも、コナンの顔には精一杯の微笑が浮かぶ。彼には判っていた。一番苦しいのは、刺された自分よりも、刺した方の彼女だという事が。哀は目を細め、声のトーンを少し落として答える。

「どの道続かない幸せなら、いつそ私がこの手で壊しても支障なんかないわ。だって……」

下唇をかみ締め、黙り込んだ彼女の瞳から、先程よりも大粒の涙が大量に零れ落ちる。無表情から一転、彼女の顔は崩れた。そこからは、激情がはつきりと読み取れる。

「間違ってるなんて言わせないわ！　だって私には、何にも変えられない存在があるから。それを守る為なら……こうして、自分を信じてくれてる人すら、騙して殺せるのよ！」

その、悲鳴にも似た声で叫ぶ言葉は、彼女自身の身を引き裂く言葉に思えた。辛く悲しい思いが、声にこもっている。叫ぶごとに、

彼女の表情が張り裂けそうに歪んでゆく。

昔、すがって泣き叫んだ時の顔を、更に悲痛に崩した表情だ。コナンはただ、彼女が口をつぐむまで、黙って彼女が叫ぶ言葉を聴いていた。

「心が痛まなかったわけじゃないわ。でも、仕方ないじゃない！
こうするしか、私には……………」

語尾は、殆ど聞こえない程小さく弱かった。

「江戸川君……………こんな目にあわせた後で言うのはおかしいかも知れないけど。さっきあなたの耳元で囁いた言葉は本当よ。私、あなたの事が好きだった……………かも、知れないわ」

儚く、簡単に空気に溶けて消えてしまう声。程近くで向かい合っているコナンにも、はっきり聞こえたわけではない。

それきり何も言わなくなった哀は、コナンに背を向け、ゆっくり一步踏み出した。彼女の寂しい後姿が、このままではいけないと教えている気がする。

コナンは、小さく深呼吸をして、ゆっくりと強く、前を見据えた。

「待てよ」

びくっと震えた彼女は、足を止めた。だが、次の言葉を言おうとしたコナンもよろけて、地面に左手をついた。

彼女ははっとした顔で振り向き、今にも駆け寄ってきそうな表情を浮かべていた。けれども、それらを全て押し殺したように見える彼女の口元に、冷笑が浮かんだ。

「何か、文句ある？」

「……い、いや？　ただおめーばかり勝手な理屈を言って、逃げてく気かよと思ってる……俺はまだ、おめーになにも言ってる？」

声を絞り出すのも、傷にとっても響くようだった。再度吐血しそうになるのを、何とか堪え、倒れかけた身体を、右ひじと左手と、意思の力でそこにもたせる。

じっとその仕草を眺めていた彼女から、小さな吐息が漏れる。

「もうフラフラね。それだけの傷、ただでさえ苦しい筈よ。あなたに喋らせないのは、せめてもの慈悲のつもりだったけど」

「じ、慈悲じゃなくて、エゴの間違いじゃねー、か？」

コナンは敢えて、挑発的な笑みと共に強気の言葉を返す。彼女は眉間にしわを寄せ、頬に僅かな空気を含めた。

「……判ったわ。なら、言えがいいじゃない。聞いてあげるわ、私への恨みの言葉でもこの世に残したい？　それとも、あなたのものにはなりえない、あの可愛らしいお姫様に遺言でも残す？」

早口で話す彼女の科白は、彼女なりの精一杯な強がりに聞こえた。応えるために、再度深く息を吸って、長息を吐き、呼吸を落ち着かせる。

「はっ、安心しな。んな執念深くはねーよ……俺、おめーに言っただろ？」

「何をよ」

「わ、忘れてんなら、もう一度言ってやるよ……。なあ、灰原。運命から逃げてちゃ、何も救われねーんだよ。やばくなったら守ってやっから、俺を信じろ……灰原！」

彼女の名を呼ぶ声に、自然と力がこもった。クールな表情を浮かべていた筈の彼女は、明らかに動揺した様子で、目を見開き眉をひそめた。

「……な、何よ。今更……そんなこと、私一度も」

「ああ、これは俺の世界のおめーに言った言葉だっけな。なあ、おめーは騙せてるつもりだったかも知れねーけど……薄々判ってたよ。スパイだって事も、おめーが望んでそれやってねーって事もな。言っただろ？ 俺は、負い目があんだよ。明美さんが殺された時、」
「うるさいわ！」

彼女の右手が、何かを振り払うように空を切る。

「そうよ。あなたは、あなたの世界で、お姉ちゃんをみすみす死なせたんでしょ？ もうちょっと早くあなたが駆けつければ助かった筈のお姉ちゃんを！ そんなあなたの、何を信じて言うの？」

荒ぐ声が、甲高く耳に響いた。初めて会った時から、姉という単語に、彼女は酷く動揺した反応を見せていた。だから、彼女が縛られている理由も、コナンには大体わかっていた。

「だからこそ、だよ。俺は、同じ過ちを、くりかえしたく……ねーんだ。今度こそ助けてやりたい。姉さんの事も、彼女の死によって欠けたおめーの世界も」

哀は、齒をきつく食い締めた。

「冗談じゃないわ！ あなたの世界に居た私もどきは、迂闊だったのよ。自分を救う為に頑張る姉を止められなかった。最後まで、自

分を殺して忠実で居ればお姉ちゃんだって……！」

「ち、違う……！ アイツは抗った。命を賭けて姉さんの思いを叶えたんだ。血なまぐさい研究をさせられている妹を組織から解放したいって言う、姉さんの思いを……、げほっ」

しゃべりすぎたようで、再度コナンは口から血を吹いた。同時に、一瞬視界が真っ暗に変わる。頭を振って意識を持ち直したが、目を開け、見上げた視界は面白いほどにブレていた。哀の姿もまた、分身の術でも使っているように何重にもダブる。

自然と荒くなる呼吸を、必死で抑えようと、彼は再度俯いた。哀の双眸が、じっとその様子を見つめる。

「もう、駄目ね。私もそろそろ行くわ。大丈夫、あなたの犠牲は絶対に無駄にしない」

「待っ——！ ぐっ！」

哀を止めようと手を伸ばしたコナンは、同時にその場に倒れた。目を細めた哀だが、両拳をきつく握り締め、踵を返した。

「さよなら、小さな王子様。……こんな結果になってしまったけれど、それでも、少しの時間でもあなたに会えた私は、幸せだったわ」

告げた少女は、コナンと向かおうとしていた方の道に歩いて行った。後姿は、酷く切なかった。

☆☆☆

コナンから五十メートルほど離れた所まで歩いた彼女は、視界を覆った黒い影に足を止めた。眉を寄せたその表情には、嫌悪が走る。

「ご苦労だったな、灰原哀」

「……ずっと、私を見張っていたのね」

見上げた哀がそう呟いた。その男は、嫌らしく歯を見せて、にやりと笑う。

「裏切られたらたまらないからな。だが、任務はやり遂げたようだな。疑われているお前は、もう潜入などやる必要はない。戻って別の役に立てばいい」

「別の役？」

哀が聞き返すと、男は更ににやける。

「ああ、まずは今まで潜入して知った工藤家の中を細かく教えてもらおうか。そして、その便利な見た目は、更に暗殺に役立ててもらう」

男の要求に、哀は眉を寄せ、唇を噛み締めたまま俯いた。

「……約束は、忘れてないわよね？」

「勿論だが？」

念を押すように尋ねた彼女の言葉を、男は嘲りながらも肯定した。哀は小さく息をつき、何かに気づいたように袖に触れた。

「私はある以上、あなた達に逆らえないわ。……だから先に

行っててくれる？ 落し物したみたいなの。大切な形見の花飾り」

「まあ、構わないぜ。あの方が仰せの通りにあいつを刺した時点で、我々に従順でいる意思の固さは伝わったからな」

「ええ、あなた達は私が最も裏切れない理由を手中に収めているのだから」

男が興味なさげに自身のアジトへと戻って行くのを確認して、哀もまた再度来た道を振り向いた。下唇を噛み、きつと前を見据える。そして、彼女は五十メートルの距離を走った。

元居た場所で、息を切らせながらもそこに倒れるコナンを見つめた。目を瞑ったまま動かない彼に、意識はないらしい。哀の瞳から、再び大粒の涙が零れ落ちた。

先ほどと少し違うのは、その涙を流す顔が”無表情”でも”激昂”しているわけでもなく、ぐしゃぐしゃに崩れた泣き顔である、という事だ。

「江戸川君——っ！」

ぼろぼろと、とめどなく涙は流れた。彼女は崩れるように地べたに跪き、微かに土で汚れた手で、コナンの肩に触れた。

「助けて……」

震える声が、彼女の口からこぼれ出た。

「……お願い。私を、助けて！ どうすればいいの？ 目を開けて、立ち上がって。私を助けて！」

握り締めた彼の肩部分の着物を、哀は片手の力全て込めて揺さぶ

つ
た。

其の二十二：零れた涙（後書き）

夜から頑張ってパソコンカシャカシャしておりました＞＜
間に合った！。

Meet同様、絶対ストックできると思ってたんだけどね。忙しい週だったよん。

そして、Meet同様レス作業明日頑張ります。おまたせしててすみません＞＜

さて、零れた涙。このお話の途中までは、もうずっと昔に書き上げておりました。だから、改稿しつつ新しく加えつつかな？

もう、パソコンが壊れる以上に前だった筈です。半年か、一年か。

というわけで、なんだかんだ言っても、私の考える哀ちゃんは、外面ブラックな内面いい子です（笑）

そして、凄く強いけど、心の内にとっても弱さのある子です。

そういう、外に出る性格と一番根元にある性格って、哀ちゃんの場合対比してると思うのね。

クールな中にある暖かさ、強がる中にある弱さ、無関心の中にある切なさ。

だから、たまにその内側の部分が漏れ出て来る・・・そこが哀ちゃんの魅力だと思うのv

という考えを元に今回のお話ですv

異世界哀の境遇を知ろう、という場面が多いかな。

もう判っているかも知れませんが、皆さんv朧月が何をしたくてこの展開を作っているか。

あ・・・手負いが云々とは関係ないっすよ！？（滝汗）そりゃ、手

負いは描くのが好きだけど、したいってのはそういう意味じゃなくて^^;

切なく、苦しく、哀しく、この子を表現できてたらいいなV

というわけで、今回もお読みいただきましてありがとうございます
たーV

次話もまた、楽しくお読みいただけますようにV

・・・ていうかさ、幕間のアクセス数が他よりぐっと高くなるって
どういう事だろ(^^);
幕間しか読んでない方が結構居るって事よね？ 作者が言っちゃな
んだけど、元の世界での時間経過、そんなに気になります？(^^);
というのも、結構意外だったりします、”その時、元の世界では：
”みたいなブレイクタイム的な意味でやってる幕間なので。まあ、
最近は謎伏線挿入したりもしてるけど、アクセス数が幕間で増える
の前からだし。

うーん・・・;; 何を読むかは見る人の好き好きだけど、どっちか
って言うともしろ異世界編が本編である内はこっち読んで欲しいな
><と、思ってしまう私^^;

パラレルが嫌いなのかなあ・・・?
パラレルって言っても、原作設定コニヤの臨死体験オンザ異世界パ
ラレルワールドって感じだから、駄目な方でも平気かなーと思った
のですが><

と、ここで呟いたのは、ただ単に幕間でこれ後書きに書きちゃうと、
本編読んでよ！って押し付ける形になっちゃうからです(^^);

縛られずに自由に読んでもらえれば、とは思うし。

と、いろいろ疑問点をぶつぶつ呟いてみましたが、今回もお読みいただきましてありがとうございます！

次話でもどうぞよろしくおねがいいたしますV

其の二十三：真実の欠片

「助けて……。でも、私にはそんな資格はないわよね」

哀はコナンの首を抱え上げ、強引に彼の着物に手を突っ込み、自分が刺した傷口を手探りで見つけた。そこを撫でると、コナンは顔を引きつらせ、苦悶の声を上げた。

「ごめんなさい、江戸川君。やっぱり私、どうしても……。あなたに死なれたくない」

彼女は止血すると同時に、刺傷部位に懷から取り出した薬を塗った。そして、彼の口の中にもまた、別の薬を含ませた。

「私には、あなたを助けてあげられないわ。……。けど、せめてこの位は」

呟いた彼女は、コナンの耳元に口を寄せる。

「江戸川君。ここはね、工藤の国の隣……。工藤家とは親戚筋に当たる王族の治める国と隣接してるの。国民は友好的な筈よ。自力で逃げなさい。あなたが死んだら、彼女も助けられないでしょ？」

それだけ囁いた彼女は、唇を噛み立ち上がった。じっと物恋しいものを見るようにコナンを見つめた彼女だが、袖から取り出した花飾りをコナンに握らせた。

ぴくりと眉に力が入り、コナンは瞳を開けた。

「灰、原……。？ おめー、なん、で？」

弱弱しく零れた声に、哀はふっと微笑み、立ち上がって一步分後ろに退いた。

「気付く葉の効果があったようね。その花飾り、母の形見だった大切なものの片割れよ。必ず返して。いつか再会できた時に」

「な、に言って……んだ。今」

「私は、そろそろ行くわ。いい？ 右方向に進んで。そして、生きて。いつか別れるとしても、そんなさよならは、ごめんだから」

「灰原……っ、待てよ」

離れてゆく着物に手を伸ばされたが、掴ませてやる気など、彼女には全くなかった。もう一度微笑した彼女は、袖から出したもう一つの花飾りを、頭の左上部につけた。

「また会いましょう、江戸川君。その時は、今度こそ本当の気持ちで、あなたと」

「灰原！」

もう一度だけ振り向き、哀しく微笑んだ彼女は、コナンに背中を向けた。

歩いていく彼女の後姿は、今まで見たどの記憶よりも大人びて、決意と寂しさを纏っていた。揺れる茶髪を眺めながら、コナンは奥歯を噛み締め花飾りを力強く握った。

「く、そ……っ」

そのまま、暫くは彼に起き上がれる力などなかった。それでも時間をかけて必死で身体を起こすコナンの拳に、力が籠る。

もっと早く気づいてやるべきだった、と、どれだけ後悔しても、今更遅い。

自分の世界にある常識に拘り過ぎて、一番根本にある彼女の真実を見逃していた。

「は、灰原。今は、おめーの言う通り生きるよ。……けど、回復したら、必ず、助けてやつから……」

座っていた石に手をおき、歯を食いしばり、渾身の力を腕に込めた。傷口には鈍痛が走ったが、お構いなしに、よろめきながら立ち上がる。すぐそこに置かれていた自分の刀を手にとると、杖代わりに重心を預けて、一歩二歩と進んだ。

覚束ない足取りで、彼は哀の指した方向へと向かった。

哀は、薄暗い廊下を歩いていた。左手で、頭につけた花飾りに触れ、尚進む。

少し冷えた空気が、身体に吸い付くように纏わりついてくる。哀は目を細めながら、開けた戸の下に続く階段をゆっくりと降りて行った。

下にたどり着いた哀は、俯きながら小さく息をついた。

「江戸川君、あなたはここを見たらなんて言うかしら」

じめじめと湿った冷たい空気が充満している。牢屋の中には、手足を繋がれ身動きもとれない捕虜達がじっと哀を見つめていた。城内にこんな地下牢など、元はなかった筈だった。けれど、昔”あの日”を境にここは変わってしまった。

「あなたの世界とここは違うわ。お姉ちゃんだって」

哀はまっすぐ歩を進めた。一番奥の牢には、特に嚴重な鍵が施されている。

牢への道を一步踏み出した所で、立っていた二人の衛兵に鋭い眼光を向けられた。一人の衛兵は、嘲るように鼻で笑った後、哀に声をかける。

「お帰りか、お姫様」

「その言い方、やめてくれる？ お母さんもお父さんも死んだ時から、私は姫でもなんでもないわ」

「今やあの方の最高傑作。堕ちたものですね」

もう一人も嘲笑混じりに言うと、哀は鋭い目つきで彼を睨んだ。

「あなた達を絶対に許さないわ。私達の人生を滅茶苦茶にした……」

ありったけの憎悪を込めた瞳を、彼女は男達二人に向けた。すると、二人の男はにやけた。

「おやあ？ 反抗ですか、姫君様。一応私達は、あなたの命はとるなどは言われてますけど……」

「よいのだな？ 他が、どうなっても」

男の言葉に肩を震わせた哀は、目を見開いたまま俯いた。握った拳は、小刻みに震える。

「よくないわ……だから、ちゃんとあなた達に従っているじゃない。もういいでしょ？ ここを通して」

男達は顔を見合わせ、にやけ笑いを浮かべながら道を開けた。哀は俯き、唇を噛み締めたまま、震える足を一步踏み出した。一番奥の牢まで、七〇八十メートル程であろうか。薄暗い中では、近くによらなければ何があるかなど判らない。

哀はにじみ出る涙を拭った。そして、一つ深呼吸をして動揺を心に抑え込む。たどり着いた一番奥の牢に立ち止まると、奥で繋がれていた人物は顔を上げた。

目が合うと、哀はゆっくりと微笑みかける。

「ただいま。私ちゃんと、無事に帰って来れたわ」

小さな声で告げると、牢の中からも微笑が返される。

哀は微笑を崩さず、僅かに目を細めながら、言葉が続けた。

「私ね、好きな人が出来たのよ」

そう言って左手をあげ、花飾りに触れる。

「図々しい願い事押し付けてきちゃったけど、きっと彼が何とかしてくれるわ」

哀はそう言って、精一杯の笑顔を浮かべた。

「おい、そろそろ時間だぞー！」

「……ええ、行くわ」

先ほどの男の一人に、大声で呼ばれ、哀は明るく保っていた表情を一変させ、抑揚のない声で答えた。牢の中に一言別れを言って、彼女は踵を返し、元来た道へと歩いた。

道中、彼に凶刃を向けた手を、彼女はきつく握った。コナンを刺した時の嫌な感触が、ほんの短い間に何度よみがえった事だろうか。胸が裂けそうになる嫌な感情の渦は、恐らく一生忘れられない。

ただ、彼が無事であればいいと願う気持ちだけが、彼女の心を支配していた。

刀を杖代わりにして、地面に突き刺しながら、どの位進んだろうか。コナンが吐く息は、段々と荒く変わってきていた。更に、一歩進むごとに刀にかかる重心は増え、腹部を押さえる手には変な力が籠り、数歩手前より猫背になっていた。

ようやく、町の影にまで到達したところだが、そろそろ限界だ。霞み揺れる視界に、自然と足はもつれた。倒れてはいけないという事だけ頭にあった。倒れた途端、恐らくもう二度と立ち上がる事が出来ない。

しかし、もう立っている事自体が限界だった。ほんの一瞬、クラツとして意識が遠のいただけで、バランスが崩れた。身体がよろけ、倒れかけたその時、視界に人の姿が映る。

「あ……」

助けを求めようと手を伸ばしたが、そのまま支えられていた柄から手が外れ、身体は地面に落ちた。その衝撃に、コナンの表情が歪む。

目を細めたせいで狭まった視界に映る彼は、コナンが倒れたのと同時に振り向いた。はっとして、駆け寄ってくる姿を霞む視界に映

しながらも、コナンはゆっくりと目を閉じた。

「お、おい！？ 大丈夫か？」

抱き上げられた事だけは、感覚で判った。霞んだ目で見た為、顔もはっきりしなかったが、声が若い事は判った。しかし、再度瞼を持ち上げる事は出来ずに、力の入らない身体は、されるがまま、その腕に従った。

少年の顔を見た途端、彼は目を丸くし、息をのんだ。

「似てる。オレ……いや、工藤家の縁者か。身なりも武家の子のようだしな。に、しても」

彼は、コナンの腹部に目をやった。着物には血が滲み、すぐ横の地面に突き刺さった脇差の刃先にも、まだ新しい血の痕が残っている。

「こんな幼子に、一体誰が……」

呟いた彼は、一先ずコナンを抱き上げ、大きく建つ城の方角へと走っていった。

「待ってろよ。今、助けてやるからな」

腕に全体重を預けたまま横たわるコナンを励ましながら、彼は只管道を走った。

抱きかかえられながら眠るコナンは、”夢”を見ていた。
そこには、今や遠く離れた現し世があった。

其の二十三：真実の欠片（後書き）

☆作者より。

どうもこんばんは！ 二十三話。ついに哀ちゃんの隠された裏を一部公開（笑）

てか、あれだけ伏線ですよーって書き方したら、判ったと思うけどね。

ここに出た一つ一つが、『異世界哀ちゃん』を構成する、最も重要な部分です。

そして、コニヤはついに力尽き……”誰か”に抱えあげられて、どこぞかに。

ああ、本当に「やっとここまで来たよ」です。なんか、ここ二〜三話あたり、ずっと同じこと言ってる気もしますが（へーへ；

これだけ順調に進んでるの、書き始め以来だよ。今はなんだか、M e t sの方と平行して、あちらの感想にもテンションもらって書ける状態です。反応かえってくるの大好き！ ありがとうございますーV

だから、ペース崩さないで行きたい。何か予定がある時以外は。

というわけで、今回もありがとうございました。

次話でもまたどうぞお楽しみいただけますように。

其の二十四：混ざり合う記憶

息が苦しかった。身体中が痛くて重かった。

刺されたのは腹だった筈なのに、なぜ身体中なのだろう。そんな考えが、ぐるぐると頭に巡っていた。

「……くん……きよ………よ」

どこか遠くから、誰かの声が聞こえてきた。遠すぎて、途切れ途切れにしか耳に届かない。

ただ、知っていた。聞きなれたこの声が誰のものなのか。

蘭の声だ。ただ語りかけるような、そんな声だ。

「……から、……く、……してね」

口調がおかしい。と気づいたのは、すこしずつ声が聞こえてきた時だった。

これは、蘭姫の口調ではない。これは……

——蘭だ。元の世界の彼女が何かを語りかけている。

”早く、目を覚ましてね”

言葉という形を持って、それが耳に届いた時、コナンは鼓動が強まるのを感じた。

激しい動悸に襲われて、呼吸が更に苦しくなる。身体中の痛みも、ズンと増した。頭の中に、覚えのない映像がよぎった。

場所は、横断歩道。そう、何かを伝えたくて、息を切らせてまで走って、向こう側に彼の姿を見つけたんだ。

”服部！ 見つけたぞ、証拠”

事件は、すぐ後に解決する筈だった。道路の向こう側の服部も、笑い返してきて。

突然、彼は驚いたような顔をして、何かを必死で叫んでいた。道路がうるさすぎて、よく聞こえなかったから、首を捻る事しか出来なくて。

その後――そう、背筋を冷たい気配が襲って、振り向くと同時に身体が浮いて。突進してくる車をただ顔を上げて見るしか余裕はなかった。

ドオン！ キキキキーツ！

身体に走った重い衝撃の後で、耳に鼓膜を裂くような音が響いた。「順番逆だろ、フツ―」とか考えながら、地面に不時着させられるほんの微かな時間、意識はまだあった。不安定に揺れる景色を、急速に狭まり霞む視界に納めて。

それもほんの一瞬の事で、すぐ後に頭部を身体中を襲った鈍痛と共に、全てが闇に落ちた。

苦しい。頭と、身体中が、だるくて痛くて熱い。

これは、腹を刺されたせいじゃない。元の身体が感じている、誤魔化せない本体の痛みだ。

「――藤君、ちょっと！　しっかりして！」

また、声が聞こえてきた。今度は少し緊迫した様子の、子供の声だ。段々、言葉がはっきり聞こえるようになってきた。

「――ないしてん？」

今度は、聞きなれた関西弁が耳に届く。

「来てみたら様子がおかしくて、触ったら凄く熱いのよ。ナースコール押してるんだけど、中々来てくれなくて」

「さっき、廊下で医者^{ちじ}とすれ違ったで。呼んで来た^{ちじ}から待ったとき！」

ばたばたと、やけにうるさい足音が聞こえてきたが、それきりまた音が遠くなっていった。

段々と、頭部と身体中に感じていた痛みは薄れて、代わりに腹部が比べ物にならないほど酷く痛み出した。

「う、ぐ……あぁっ」

うめき声がコナンの口から漏れ出た。

当然の事ながら、”ここ”はまだ元の世界程、医療が発展している訳がない。

本当の七百年前とここは違う部分も多々あるようだから、医療もまた、実際少し進歩しているかも知れない。だが、元の時代でちゃんとした手術が施されて、何日か経過した後残った痛みが、これに勝る筈はない。

つまりそう、向こうの方が重症であっただろうが、痛みという点ではまだマシだったという事だ。

「おい、大丈夫か？　しっかりしろよ」

気遣うような声が降ってくる。心当たりがある声……工藤新一のものに近いが、微妙な強弱は少し違う。先ほど、コナンが倒れる前に聞いた声だ。

覚醒していく意識と共に、息苦しさも思い出した。重い瞼を持ち上げると、そこには”工藤新一の顔”があった。だが、髪型も身に着けた服の好みも、実際にはよく似た別人と判る。

ただ、今あるコナンの状態ではツツコミを入れる事すら苦痛で、敢えてそれについては何も言う気になれなかった。

「目が覚めたみてーだな。覚えてるか？　腹刺された所から逃げてきたんだろうが、町に入る所で倒れたんだ。俺が偶然気づいたからよかったけど」

「ああ、うん」

朦朧とする中に聞こえてくる声に、とりあえず短く肯定を返す。目が覚めたというだけで、身体はだるくて動かせそうにはなかった。彼はその場に膝を折り、身体を低くして覗き込んでくる。

「腹、痛むか？」

「……うん、まあ勿論」

「だよな、他には何ともないのか？　何かあったらすぐ医者呼ぶけど」

とりあえず、彼が何者かはコナンにはすぐ判らなかったが、よほど心配してくれている雰囲気だけが伝わっていた。

そんな様子だったから、少し知らない場所で動けずに居る事への緊張は解けた。

「……熱い」

「熱い？」

「……い、痛いのは、腹だけだけど。頭が重くて、熱い」

聞き返す彼に説明すると、眉を寄せた彼は、コナンの額に手を乗せた。

「本当だ。熱が出てきたみてーだな、結構高いぞ」

「や、やっぱり？」

踏んだり蹴ったりな体調に、コナンは乾いた笑みを浮かべた。意識がはっきりしていないのは、恐らくその熱のせいもあるのだろう。

彼の手際はとてもよかった。医師を呼び、自分は水を入れた容器に布を湿らせ、コナンの額に乗せる。

医師が調合した薬を飲まされるコナンの様子を、彼はじっと眺めていた。

処置が終わると、彼は再度コナンの隣に座った。そして、先ほど

額に乗せたばかりのタオルを変えて、彼は再度、コナンに語りかけた。

「話の続きだけど。お前、どこから来たんだ？ 傷は誰にやられた？」

「すぐ近くに茂みがあったでしょ？ そこだよ……傷は、その」

そこまで答えて、コナンは言いよんだ。

事実を言った所で、哀に実害はないかも知れないが、それでも庇いたい気持ちが先頭にあったのだ。

数秒沈黙した後で、向かい合う彼から溜め息が零れる。

「まあ、喋りたくないなら言わなくていいぜ。怪我してんのはお前なんだし」

「ごめん」

形だけ謝って見せると、彼は肩を竦め、「気にするな」と返した。

「あ、そうそう」

突然、何かに気づいたように立ち上がった彼は、ベッドの隣にあったコナンの着物に手を伸ばす。中は血がついていて、とてもまた着られる様子ではないその上に、一つの花飾りが置かれていた。

「これ、大事なものなんだろう？」

「ああ」

コナンは彼の手から花飾りを受け取り、その手を顔の上にかざして眺めた。赤に近いピンク色の花飾りだ。母親の形見と言っていただけあって、かなり古びている。

別れる前に、彼女がつけた方がもう一つの片割れ。恐らく、片方は姉が持っていたものなのだろう。

「灰原……」

「それ、ひょっとして好きな女子の名前か？」

呟いた言葉にちゃちゃを入れられて、コナンは少々むっとした。反論しようと口を開きかけたが、彼が次に口にした言葉の方が若干早い。

「うわ言で、何度も聞いた名前だからな。他にも、『思い出した』とか、『蘭』とか、色々言ってたようだけど」

彼の言葉に、先ほどの幻を思い出す。

どんなに考えても、あの事件がここに来るきっかけとなったに相違ない。更に、あの様子がただの夢でないならば、事故られた身体は病院に寝かされたままという事になる。

「結構のん気にこっちでやってたけど、んな事になってたとはな」

元の世界に居た蘭達の苦労を思うと、頭を抱えなくなる。少しでも早く、帰ってやらなければならない。その為にも、早くこの世界に居る仲間達を救い出さなければ。

自分の世界に入り込んでいたコナンを、怪訝な眼が見つめた。

「よくわかんねーけど、とりあえず不便だし名前聞いていいか？」

あと、住んでた国も」

「あ、悪い。俺は江戸川コナン。一応工藤の城に済ませてもらってるよ」

「……へえ、変わった名だな。やっぱり、工藤の方か。噂では聞い

た事あったよ」

やけに意味深な笑みを浮かべた彼を、今度はコナンがじっと眺めた。

「それで、お兄さんの名前は？　この場所も知りたいんだけど」

尋ねると、不敵な笑みが返された。

「ここは、俺の城だよ。……お前の居た工藤の家とは何代前かの親戚だな。ここは黒羽の国。俺はこの嫡男で、黒羽快斗ってんだ……よろしくな」

「ふーん」

人懐っこくも底の见えない笑みを見せた彼を、コナンはぼんやり眺めていた。

初めて聞く名前だが、どこか、纏う雰囲気は元の世界で知っているような気がしてならない。そんな、不思議な感覚がコナンを包んでいた。

「……ま、いいや。よろしく。動けるようになったらすぐ、出て……く、から」

コナンはそう呟くと、段々霞む視界に逆らわず目を閉じた。

「お、おい！」

少し慌てた声がコナンの耳に届くが、目を開いて返事をする気にはなれずに、代わりに出た咳がその呼びかけに応える形になった。長く話していたせいで、熱が上がってしまったようだ。頭は目が

覚めた時以上に熱く、軽い吐き気と目眩を覚えた身体全体が、だるい。

暖かくなった布が替えられて、冷えた感触を気持ちよく感じながらも、コナンは眠りについたのである。

其の二十四：混ざり合う記憶（後書き）

こんばんは、今回も変わらずお読みいただきましてありがとうございます。

そして、第二十四話。今までとはかなり異色なお話になりました。異世界編として、元の世界と交わる、という。しかも、コナンの聴覚や感覚だけで。

書いてる本人は、難しかったけどちょっぴり楽しかったです（笑）皆さんにも楽しんでいただけたかな～……？

さて、というわけでまさかの彼登場（笑）

元の世界でのコナンと快斗は知り合っていないので、異世界編で出ると思わなかったんじゃないかな？

前回でぴんと来てた方も結構いそうですが。

扱いあんまり上手くないので、慎重に動かしたいキャラです（＾－＾；

彼がまた、後の伏線に繋がってくるとか来ないとかー（笑）

是非是非、また次回もお楽しみいただけたら幸せですv v

・・・てか、彼だして、次回ちゃんと遅れず書けるかな～皆様、来週に続き読みたいですか？

よしっ。来週までにがんばれーって思ってもらえたら頑張るかな！

其の二十五：幕間7、Ai（想うだけのもどかしさ）

「ワシは車の中で待っておるが、哀君。本当に一人で行くのか？」
「ええ、もしもこれを知ったら、彼が飛び起きる可能性もあるわけだし」

手に持ったカプセルを見せたら、博士は苦笑だけ返して来たわ。

——この薬が何か……その答えは説明しなくても伝わるかも知れないけれど。強いて言えば、解毒剤の試作品第五十六号って所かしら。作りすぎなんて事はないわよ、試作品と言っても、人体投与が不可能なものもいれて五十六回目っていう計算だもの。

「ごめんなさいね、博士も彼の容態気になると思うけど。どうしてもこういう時は二人きりで話がしたくて」

そう言った私は、車の戸を閉めて病院の入り口へ歩いたわ。後ろで私の行く道を見守ってる博士の視線を浴びながら、もう通いなれた彼の病室までの道をね。

通いなれたって言うのと、まるで私が何度も面接をしているように思えるかも知れないけど、それは違うわ。博士を車に残しているのも、本当は同じ意味よ。

エレベーターを使って、彼の居る病棟へ行くの。

病室に続く廊下には、ナースや色々な人が人とすれ違ったりもするわ。順調に足を進めた私は、まもなくすぐに——江戸川コナン様って書かれた部屋の前で、いつも足を止めるのよ。右手に持っていた薬をポケットに押し込めて、左手に持っていた花束を下におろしてね。

「やっぱり、彼一人のわけないわよね」

フ、判ってはいたけど。こんな風に小さく溜め息をついて、壁に寄りかかって中を眺める所までで終わるわ。そう、病室の中に居る彼女――毛利蘭――と、鉢合わせたくないから。

一生懸命彼に語りかける彼女を見ると、入っていくだけの勇気がそがれるのよ。それに、既に花束も活けてあるみたいだし、どんな顔して入ればいいんだか。

「私は彼女達みたいにな、強くなれないわ。……工藤君、あなた一体いつになったら」

俯いた私は、持っていた花束をぎゅっと握り締めた。包みがぐちゃぐちゃになったけど、もう今更よ。あの事故から結構経つのに、未だ彼は目を覚まさない……もうずっと、ぐったり目を閉じたまま。

「そうだ、コナン君。今日はね、嬉しいプレゼントがあるのよ。え、気になる？　しょうがないわね。今日は新名香保里の最新作発売日なのだー」

そっと、耳を澄ますと、中の会話も聞こえてくる。よく通る声でそう言った彼女は、推理小説を彼の前に出した。フツ……あのコは、たまに歳不相応に幼いのね。そういう所も少し、お姉ちゃんに似てるかも。

「ホラ、早く読みたいでしょ？　未発表の書き下ろし作品だから、コナン君も読んだことない筈よ。……だから」

私は目を細めたわ。耳に届く、彼女の声のトーンが落ちて震える事に気づいたから。

「だから、早く目を覚ましてね……待ってるだけなのも結構限界だよ、コナン君」

聞こえてくる声に、私は俯く事しか出来なかったわ。そう、お姉ちゃんもいつもそうだった。私の前で気丈に振舞ってるけど、ホントは一人で泣いてたのよ。今彼の手を握って話しかけてる、彼女と同じように。

「今日も、何もせず帰るしかないかしらね」

つつい、口から溜め息が零れたわ。入っていても咎められるものじゃないって判ってるけど、中に入っても、私には何も出来ないもの。

そう、博士には悪いと思ってるわよ。横浜の病院にまでわざわざ送らせて、結局毎回病室に入らずに終わらせてるなんて。ガソリン代も、馬鹿にならないかも知れない……けど。

「また来るわ、工藤君」

私は病室に向けてそれだけ呟いて……帰る方を向いた時に、中から似たような別れの言葉を聴こえて来たの。

「じゃあ、またねコナン君。今度こそ、元気な姿見せてね！」

ちょ、ちょ、ちょっと待って！

彼女が病室を出ようとしていると気づいて、きよろきよろしながら、隠れる場所を探したわ。そ、そう。トイレよ、トイレがすぐ五歩先の向かいに！

バタバタ足音を立てながら、私はトイレに駆け込んだわ。で、彼

女は私に気づかず病室から出ていったの。ドキドキして、とてもじゃないけど暫くは動けそうにないわね。

十分もそのまま隠れてた私は、ようやくそこから出て、また病室の前に立った。

今度こそ、誰も居ないわ。そう、入るとしたら今しかないって事……。静かに深呼吸をして、病室に足を踏み入れる。

「く、工藤君……」

恐る恐る呼びかけてみたけど、やっぱりベッドの上に居る彼は反応なしよ。ベッドの横に立っても、その椅子に座っても、全然気づいてもらえないしね。

以前と変わらない血の気が薄い顔は、やっぱり見るたび心臓が締め付けられるみたいよ。

私は、人間が簡単に死んでしまう事を知ってるわ。どんなに強い意志があっても、強い身体を持っても、限界を超えたら、勝てやしないのよ。

私達がしてあげられるのは、ただ一生懸命呼びかけてあげる事だけ。フツ……思わず苦笑いが漏れる程、役立たずな存在よ。

「無力よね、工藤君」

零れた眩きは、どうせあなたには届いてないでしょうけど。それでも、私達は言葉の力を信じる事しか出来ないわ。

「解毒剤の試作品持ってきたわ……今回は結構試す価値があると思うけど。……あなた、その身体で死にたくないでしょ？ 目を覚ましたら、渡してあげる」

カプセルの先で、彼の頬をつついてみた。けど、ホラ見なさい……やっぱり、何の反応もないでしょ。

溜め息をこぼしながら、彼の頬に触れてた解毒剤を戻したわ。そこで、初めて彼の様子がおかしい事に気づいたんだけど。

「工藤君……？ 顔が赤いわ、どうしたのよ」

一瞬だけ、何が起きているのか判らなかった。けど、紅潮した顔からは今までなかった汗が大量に滲んでいて、呼吸も乱れてる……。

「ちょっと、工藤君！？」

状況を察知した私は、慌てて彼の手に触れたわ。そして、その熱さにぎよつとさせられた。

「な、何これ。凄く熱いじゃない」

動揺しながら、額にも手を当ててみたわ。

——熱つつ。思わず、手を引っ込めてしまったくらい。ちょっと……ナースコールしなきゃ。

慌ててコールする手が、どうしても震えて仕方ないわね。そのま
ま、私は何度も、何度も何度もボタンを押した。今まで見に来た中
で、こんな事なかった筈なのに。

「工藤君……工藤君、ちょっと！ しっかりして！」

このまま動かなくなってしまうたら、とか。そんな否定的な事だ
って、頭をよぎってしまうのよ。

だって……ただでさえ傷だらけで痛々しい姿してるのよ？ 一週間以上経てば、小さい擦り傷はもう治っているようだけど。頭やところどころに巻かれてる包帯は取れてないし、機械に繋がれてる。

ぎゅっと握り締めた拳が痛いけど、こんな状態で、そんな関係ないじゃない。……これだけ呼び出してるのに。何やってるの、いつになったら来てくれるのよ。

「誰か……！」

声が震えてしまう。私が呼びに行けばいいのかも知れないけど、どうしてもここを離れられないのよ。目を離したら、もう二度と会えなくなる気がするから。

——こんなの、違う。工藤君はもつと……もつともつと、いつも活動的で元気で。こんな風に、機械で辛うじて生かされて、ぐったり寝てる人なんて、知らないわ。

突然、ノックと共に戸が空いた。私の心臓も跳ねたわ。振り向いた先に居た色黒の彼は、こっちを見て怪訝そうに首を捻って……。大方、アイコンタクトで事情は伝わったらしいわ。彼の表情も、段々緊迫感をおびていく。

「何や、エライ久しぶりな顔見たと思たら、どないしてん？ ……工藤どうかしたんか？」

「来てみたら様子がおかしくて、触ったら凄く熱いのよ。ナースコール押してるんだけど、中々来てくれなくて」

早口で伝えると、ベッドの前に来た彼も、眉間にしわを寄せながら工藤君の額に触れたわ。

「……あかん、ホンマや。オレ、さっき廊下で医者とすれ違^{ちが}たで。呼んで来たるから待っとき！」

素早く部屋から飛び出して行った彼の後姿を、私は目で追う事しか出来なかった。

「早よ診たってくれへんか！ 急に高熱出したみたいやねん」

怒鳴るような言葉の後で、彼に連れられた医者が部屋に入ってきた。彼が部屋から出てって、ほんの十秒足らずよ。

何も出来ずに居る私は、ただ壁に寄りかかって処置される様子を眺めているだけ。お医者さんが来てからは、看護婦さん達が駆け込んで来るのもすぐだったわ。

「そないな顔すんなて、姉ちゃん」

お医者さんと呼びに行く役目を終えて、やっと私の隣に来た彼は、突然頭に手を乗せてきたわ。やめてくれる？ って心の中で呟きながら、その手はすぐ払ったけど。

どこかのお兄さんが妹にするような態度の彼は、状況の割に、明るくて軽い口調だったわ。必死で心配してる私の隣で、少し癪に障るわね。

極力、顔には出していないつもりだったけど。どんな顔してるって言うのよ。工藤君といい、この人といい、余計な事ばかり気づくのね。

「……心配するのは当たり前でしょ、ずっと意識が戻らない重症患者が高熱出して容態悪化してるこの状況で」

「そら当たり前やけど。さっき姉ちゃん、心配通り越して、ナイフ

持った殺人鬼に襲われた直後の被害者みたいな顔しとったで」

「その例え、どうにかならない？」

白けた答えを返してみるけど、確かに心境的にはそうかも知れないわね。そっちの方がずっと落ち着いていられた自信はあるけど、中々的を射た例えよ。

「工藤的に、あのアホなんとかっちゅう薬で伸び縮みすんのと、苦しみ具合は大差ないんとちゃうか？ 高熱出して、胸押さえてハアハア言うてる姿のが、苦しそうに見えるけどな」

「何が言いたいの？」

「せやから。姉ちゃん、そう言う工藤は平気で観察するやんけ。そんなもんやと思て、後は工藤とお医者さんら信じとったらええねん」

私を見下ろしながら、彼は無駄に頼りがいのありそうな顔を浮かべたわ。少し悪戯っぽく、歯をむき出しにした笑顔よ。

フツ、全く。普段暑つくろしい性格してる癖に、こんな時は凄く冷静な状況判断が出来るのね。工藤君もそう。探偵って、羨ましい程面倒くさい人種だわ。

私だって、こんな事がなければ取り乱したりなんかしないわよ。けど、工藤君の苦しんでる姿を見れば見るたび、ぎゅうぎゅう胸を締め付けられる。私が窒息しそうになるのよ。

そうこうしてるうちに、工藤君の治療が終わったようね。肺炎とかの心配もなかったようだし、熱はまだあるようだけど、とりあえず一息って所かしら。

工藤君の隣に二人で座って、私達はその様子を眺めた。さっきよりは幾分、顔色も呼吸も楽そうかしら。ここで、ようやく私も冷静に戻れたわ。

「工藤君の事は、信じてるわよ……でも、あの子供の身体を作ったのは私の薬。彼が工藤新一のままだったら、突き飛ばされてもこんな事にもならなかったかも知れないわよね」

「ちょー待て、それは」

「それに、私は今日も病室に来るつもりはなかったわ。彼女が帰ってから、暫くトイレに隠れてたりしてね。……そう、その間病室で一人ぼっちにならなければ、もっと早く容態の変化に気づいてあげられたでしょうね」

少し慌てた様子で声をあげた彼の言葉への返事にはなっていないでしょうね。けど、敢えて私はその続きを言う暇を与えずに言い切った。工藤君と同程度の慰めなんて、必要ないもの。……そう、私を諭すのは、工藤君だけでいいわ。

「姉ちゃん、結果論で言うたら、オレも立場ないやんけ。あの現場で工藤がヤバイ事気づいて、みすみす突き飛ばさせてしもたんやから」

溜め息交じりな科白が上から降ってきて、私は短く「ええ、そうね」と返したわ。彼は、私を見下ろしながら、ちよっと言葉を詰まらせたようにだけど。

「判ってるわよ。責任を主張しあっても仕方ないって事位。今ある事実は、彼がこうして大怪我をしたまま意識を取り戻せないで居る事だけ。誰のせいかを追求しても、彼が目覚めるわけじゃないもの」

「ああ、一番責められるべき犯人は、オレが捕まえたるし。他は、アイツが目え覚ませば全部解決や」

服部平次……工藤君と同じ。力強い科白と同じ位、表情もたくましくて真剣ね。羨ましいくらいポジティブで、行動的で。

私は知ってるわ。彼が、どれだけ必死でこの事件を追ってるか。

「それで。その犯人、見つかったの？」

「……困ってんのは、工藤があん時持ってた証拠らしい物体がどこに消えたかっちゅう事やねん。目星つけた奴も現場も当然調べたんやけど、どっからも見つからへんし」

彼は、言いながら頭をかきむしったわ。

「ふーん、近くも捜したの？ 工藤君自身の服とかも」

「そんなん、当たり前やんけ。オレを誰やと思っとるんや」

尋ねた言葉にも、ジト目が返って来る。ホント、探偵って人種は……。

「けどな、こないだそいつ突然行方くらましょったんや。ほんで、今は只管そいつの行く先を捜索中やで」

あら、長い溜め息。にしても、警察の人が見張ってたんじゃないのかしら、その男。案外迂闊なものね、日本警察も。

「まあ、頑張って頂戴ね。私も私に出来る事をやるから」

「おう、任しとき！ 姉ちゃんも頑張るや」

「ええ、勿論よ」

頼もしくて図太い彼を見ると、私も少しは気休めになったかしら。

フツ、なんだか、目的が判ったら口の筋肉が綻んでいくわね。そ

う、私は私に出来る事をこなすだけよ。

立ち上がった私は、工藤君のベッドに身を乗り出した。少し苦しうだけど、大丈夫よね？

口を寄せた耳元が少し熱い気がしたわ。熱のせいね。

「……工藤君、今度来るときには目を覚ましていなさい。そうしたら、私が今度こそ元の身体に戻してあげるわ」

工藤君、私は眠ってるあなたになんか興味ないわ。早く起きて。あなたが目を覚まして「心配すんな」って、笑いかけてくれれば、それでいいのよ。

私は、それだけで幸せでいられるんだから。

博士の車に帰ってく道は、行きとは違った晴れた気分で居られたわね。そのまま博士の車に乗り込もうとした私の四〇五十メートルぐらい後ろに居た誰かが、殺気混じりに怪しく笑うまでは、ね。

「——っ！」

だ、誰？ 今の……

振り返った先には、こっちを見てる人なんて誰も居なかったわ。

けど、確かに今、誰かが私の方を見てた。そう、あの威圧感は……彼らの……？

一瞬、息が止まったぐらい鋭い殺気だったわ。ほら、車の中では、博士も心配そうな顔してる。冷静になりなさい、私。……ただの偶然よ。工藤君が居る病院に、彼らの仲間が、なんて。

「哀君？」

「ああ、ごめんなさい博士。すぐ乗るわ」

博士に微笑んで、車に乗り込んだわ。そう、気のせいよ。少し気持ちが動揺してて、敏感になってるだけ。フ、馬鹿みたいね。工藤君が生死の境で頑張ってる時に、私は彼らの幻におびえるなんて。

暗い室内に、懐中電灯の明かりが灯る。片耳につけたイヤホンを押さえ込み、ノイズ交じりの音を聞いていた彼女は、長い髪を持ち上げ、ふっと笑った。その色っぽいルーージュが塗られた唇が、右上がりの弧を描く。

「よかったわね、まだ証拠は見つけられていないそうよ」

ハイヒールの音が響いた。その先で縛られた男は、冷や汗を流しながら彼女を見上げ、唇を噛み締めた。

其の二十五：幕間7、A i ｝想うだけのもどかしさ（後書き）

タイトルのセンスなさに絶望した！（へーへ；

これが一番のもどかしさですヨ。哀ちゃんがもどかしいんじゃない、私のもどかしいんだ！

というわけで、そんな状態の朧月ですこんばんはーV

今回は、異世界哀ちゃんの別れに釣られて出てきた現代哀ちゃんなのですが。

一度、哀ちゃん幕間でやってるわけですよ。でね、タイトルどうしようと思って、色々考えたサブタイを入れて最初につけたのが←

其の二十五：幕間7、A i ｝2. 想うだけのもどかしさ

数字のしつこさに絶望したorz！！

んで、もうこの際いーやと、”2”を外してみた次第です。ハハハへへ；サブタイ考えるのは、いつも本文以上に苦手だ。

信じられる？ この一行分にも満たないサブタイを、私はいつも一週間丸まる考えて、前日には少なくとも半日以上かけて考えるのだよ。

誰かー、上手い人はおらんかね？ コツ伝授キボヌだよっ | s（・へへ・；）ゞ・・

ああ、『雪花』はよかった……タイトルから先に考えた話だけあって、納得行く綺麗なサブタイでまとめられたなあ……（ Ⅱ Ⅱ ）

トオイメ

でも、あれはあれで難しかったけど。

って、過去の栄光にすぎるのはやめだ！　そんなん、見てない皆さんには全く関係ないんだから。

と、ぶつぶつサブタイについて語っちゃいましたが。

今回は久々幕間。最後除いて哀ちゃんの一人称での進行です。

幕間編はね、基本的に一人称か、ワンキヤラ視点の三人称か、どちらかなので。

でも、やっぱり一人称は得意じゃないの私（へーへ；　うん、難しかった。

つまり、こっちの哀ちゃんの切なさもまた感じ取ってくれ！　と言うわけで。

今まで哀ちゃんが滅多に顔出さなかったのも、今回やっと明かせましたねへへ；　ちゃんと、来てはいたんです。ええ。

前回、コニヤがちらっと見た夢の中の現代。それが、今回のお話というわけです。

え、五十六号で何ってか？　ごめん、てきとーにおっちゃんぽく（笑）　ごろーで。中途半端な数字入れたのは、文をスムーズにつなげなかったのよ。

でも、ボツ含めれば結構作ってると思うよ、哀ちゃん。あれだけ地下に籠ってるんだから。

まあ、その数については深く追及しないでくれるとありがたいへへ；

平次と哀ちゃんのやり取り、ややこしー＞＜

いや、原作では是非共演して欲しい二人だけどさ。電話じゃなく、回想シーンの一こまじゃなく！

自然に絡めた後で收拾つけるのが凄く難しかったですへへ；　自然

に見えたならいいなあ・・・（汗）

更に、ラストで出てきたワンシーン。

これがとりあえず、現代編で今起きている色々な事件の根底にあるという事だけほのめかしておこうかな？

それでは、今回も見捨てず読んでくださってありがとうございます
たーっ！

また、次話でもお目にかかれる事を切に願っておりますV

其の二十六：お姫様と奇術師

暫く眠るコナンに付き添っていた快斗は、急に立ち上がると、部屋を出て、奥へ続く廊下を歩いた。奥の部屋にある戸を開けると、彼はふっと笑った。

「お待たせしました、お姫様」

快斗はひざまずき、持ち上げた彼女の右手の甲に口づけをした。彼女は驚いて、手を引いた。距離を取るように身体を仰け反らせた後、乱れた長髪をその手で整えた。

「何す……!!」

「大丈夫、怯えんかって」

彼は、表情を硬くして緊張している彼女の目前に、組んだ両手を突き出した。びくり、と肩を震わせた彼女に、笑いかけながら手を開けた。

ぽん、と音を立てて、そこに綺麗な大輪の花束が出現した。

「きゃっ!?!」

びっくりした声をあげた彼女は、戸惑いがちに快斗と花を見比べた。人懐こそうな笑顔に、徐々に彼女は警戒を解いた。

「き、きれい……」

「だろ? 家臣が取ってきたんだけど。その……オレ、芸にはうるさくてさ。こういうの、よく取ってきてもらうんだ。練習用にな!」

きよとんと目を丸くした彼女に、快斗は出した花を差し出した。紳士的な微笑を浮かべつつ、彼は首を小さく下げた。

「どうぞ。これは少し動揺しがちなお姫様へ」

「あ、りがとう」

受け取った彼女の顔に、ようやく笑顔が浮かんだ。快斗は表情を緩めて立ち上がり、戸の前へと移動した。

「じゃあ、また来ますよ、お姫様。悪いとは思いますが、部屋から出ずにじっとしてて下さいね」

出て行く前に残された言葉に、彼女は苦笑を浮かべた。

快斗が来るまで、この部屋で一人怯えていた。しかし、会話をした彼の人柄に触れて、少し気持ちは落ち着いていたのだ。それでも、結局またこの少し広い部屋に一人だ……。

「でも何故、こんな目に……」

溜め息交じりに、彼女は手にある花を抱きしめた。話した感じでも、その笑顔も、悪い人には見えない。それなのに、一体どうしてこんな事をするのだろうか。

彼女には、わからなかった。自分がなぜ、この状況に置かれているのか。

コナンが寝ている部屋は、先ほど快斗が行った場所とは素直に歩

いても五分程は離れている。迷路のような城内の離れたその一室に、コナンも彼女も、恐らく気づく事はない。

快斗は笑みを浮かべながらも、コナンが眠る部屋の戸を開けた。快斗が部屋に現れた音で、コナンはゆっくりと目を開ける。軽くうめき声を上げながら起き上がって、額から落ちた濡れ布を、彼は呆然と手に取った。

「よお。悪い、起こしちまったか？」

「いや、いつまでも寝てられねーからさ。……えーと、快斗兄ちゃん」

「大人びた童だな。フツー自分が刺されて知らない場所に連れて来られたら、結構ビクつくと思うけどな。……さすが、工藤家の縁者って所か」

少し赤らんだ顔で挨拶したコナンに、快斗は持ち前の明るい笑顔を浮かべて答えた。

「けど、まだ顔赤いな。どうだ？ 気分」

「まだぼーっとするけど、大丈夫だよ。さっきより結構マシだから」「よかったな、葉が効いたか？ まあ、ある程度よくなったら送ってやつから」

コナンの元に歩み寄った快斗は、布をその手から奪い取り、水に浸した。横たわらせたコナンの額に、それを乗せる。

「とりあえず、熱下がるまではじっとしとけよ」

「うん、そうしとくよ」

苦笑しながら再度寝付こうとしたコナンだが、ふっと思い出した様子で目を開けた。

「この近くに、灰原か宮野って家の城はない？」

「……宮野？ あー、確かにあるけど、あの国は近寄らねー方がい
いぜ？ 結構前から、秘密主義で何考えてるか判んねーんだ」

意外と、すぐに反応が返ってきた。

少し驚いているコナンの隣で、快斗は置かれていた花飾りを手に
取り、もてあそぶ。ちらりとその手元を見たコナンは、その手つき
に感嘆しながらも、言った。

「それ、俺のもんじゃねーから、あんまりいじるなよ」

「大丈夫だって。手先は器用なんだよな、昔っからよ。親父譲りで
な」

「親父譲り？」

「ん？ ああ。親父……父王はもう死んじまったけど、芸達者でな。
オレに残してくれた忘れ形見みたいなもんだぜ——ホラ」

ボン！ と音を立て、彼の手にあった花飾りが一瞬にして消えた。
「お？」と快斗の手元に視線を移したコナンだが、途端に表情を歪
めた。

向き合う快斗の口端が、にやりと持ち上がる。その悪戯っぽい笑
みを見ながら、コナンは嫌そうに右側頭部に触れた。そこにあった
花飾りの手触りに、ぞわっと毛が逆立つように感じた。

コナンは、それを剥ぎ取りながら、勢いに任せて身体を起こす。

「……て、めえっ！ 初対面の相手に何しやがる……！」

「オレ流の、親睦の挨拶って所だよ」

心底楽しそうに笑う目の前の男を、コナンは全身の血液が沸騰し
そうな勢いで睨んだ。が、視界が一瞬ぶれて、掌で顔を覆う。次い

で、ぶり返した腹部の激痛に、歯を噛み締めながら倒れ、うずくまる。

「げ、大丈夫か？」

「……ぐ……だ、誰のせい、だよ。あ——、気持ち悪い……」

息苦しそうな声がコナンの口から漏れて、快斗は苦笑いしながらも謝った。

一瞬快斗をきつく睨んだコナンは、バツが悪そうにそっぽを向くと、落ちた水布を額に当てなおした。

「俺くんだりんいちそつくりな顔で、ふざけたギャグかましてんじゃねーよ」

「まあ、いいじゃねーか。可愛かったぜ、コナン」

「……お、女じゃねーっつーんだよ」

面白おかしくからかう快斗に、文句を一つ。すると、やたらと軽い口調で「まあまあ」と宥め諭すような言葉が返ってきた。

「——ったく！」

不機嫌に短く呟いたコナンは、ふと思いついた。そういえば、快斗とは元の世界で一度会ったことがあるかもしれない。それは、ほんの道をすれ違う程度の縁ではあったのだが。

目ごと布で覆ったまま、コナンは小さく息をついた。

「何でその程度の知り合いまで出て来るかねえ」

「何か言ったか？」

「いや、別に」

首を捻った快斗に答えたコナンは、再度眠りに落ちた。

毛利の城では、小五郎と新一が向かい合って座っている。向かう合う姿勢になっているのはただのまぐれだが、二人共同じように眉間に皺を寄せ、深刻な顔で悩みこんでいた。

「だーっ、こんな所でお見合いしててもしょうがねーだろうが！
蘭はどこだ？ お前、自慢の頭脳でなんとかなんねーのかよ！」

「コナンは……あいつは、俺達が知らない情報を持ってた筈ですけど。灰原もろともどっかに消えやがって！」

新一は、床を思い切り拳で叩いた。

何より問題は、哀に対して新一の気持ち半信半疑だった事に始まる。だからこそ、彼女とコナンが消えたとなると、何らかの言葉で誘われた可能性が高い。

「例えば俺なら、蘭を攫った奴の情報とでも言われれば、すぐついてくだろうし」

恐らく、コナンもそのような言葉に釣られたのだろうと、彼は読んでいた。

この事態は、蘭の事に夢中になって、周りが見えなくなっていた自分のせいでもある。そう考えると、新一には悔しくて堪らないのである。

何より、城中がコナンや哀がどこかへ行った事に、気づいていなかったのだという。いつ、城を抜け出したのか。どこへ向かったの

か。それが判らなければどうしようもないだろう。

「蘭を助け出すためには、おめーの協力が必要なんだよ！ コナン」

城内は、更に皆困惑し、騒然とした雰囲気になっていった。

其の二十六：お姫様と奇術師（後書き）

こんばんはーV今回も見捨てずに見に来て下さってありがとうございますーV

うふふ♪私の中では、快斗はこんなノリです（^^）

コニヤにとんでもない親睦の挨拶をしました快斗さん（笑）

親睦というより嫌がらせかも知れませんが、一応快斗なりにコニヤを元氣付けたのカモ♪

やっぱさ、どこだか判らない所に寝かされてたら、結構氣遣うじゃない？

だから、「んな必要はねーぞ」みたいな事を伝えたかったんじゃないかなーなんて♪

コニヤの頭に花飾り（笑）私、女体化や女装はあんまりアレだけど、誰かの陰謀でそんな格好させられてる状態は実は結構好きですV
んで、何しやがる的に怒るコニヤが面白い（↑！

毛利の国もちよびっと出しました。

本当は、この後更にもうワンシーンいれようと思ったけど。まあいーやとやめちゃった。

次にまわさせていただきますー。

そして、出だしシーンですね。

うん、これについては敢えて作者からは今は何も語らないという方法を取らせていただきますましょうか^^

あ、じゃあ一つだけ。快斗の手品は、いつも手品というより魔法にしか見えないのは氣のせいでしょうーか（笑）

と、そんなこんなで次話は……次話はホント来週更新できるか危ういかも^^; 十月一週目は記念日多すぎ、忙しすぎ（汗）

でも、出来たら頑張りますのでーV

あ、レス遅くなつてすみませんでした。頑張つて寝る前には返せたらなと思ってます^^

それでは、また次話も是非見捨てず読んでくださいますようにVそして、またお楽しみいただけますように！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4728a/>

それは夢か現実か……

2010年10月8日14時05分発行